

# モーレツの世界にやっ て来た転生人【修正中】

シャト6

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

アニメ、モーレツの世界にやって来たオリ主。そいつは不思議な道具を使う。果たして、この世界で主人公は上手くやっていけるのか？

# 目次

宇宙海賊!?	1	俺達以外が全員入院!?	237
加藤拓人、ヨット部へ入部	26	そんなこんなで、海賊業務へ	265
いざ演習航海へ	46	文化祭	300
海賊業務…最初は船長訓練?	66	5年ぶりのレースへ	308
今度の仕事は…皇女様!?	81	修学旅行(前編)	342
キャンプに出発	124	修学旅行(後編)	351
いざ、幽霊船捜査へ	149	海賊狩りあらわる	357
遂にご対面、黄金の幽霊船	178	グランドクロスと最終決戦!そして…	395
ジェニー達との約束	199	今度は映画の話へ…	
体育祭開催	215	新たな冒険へ	412
		真打ち登場!?	428
		番外・タイムマシン	

皆で未来の世界へ！

447

皆で未来の世界へ！後編

459

新たな物語りへ

のんびりとした1日？

466

夢を現実に

473

# 宇宙海賊!?

俺の名前は拓人、転生者だ。前世の世界では平凡な人生を送っていた俺は、酔っ払いが運転する車に引かれて死亡した。そしてそのまま天国か地獄に逝くんだろうなと思っていた時に、全てを仕切っている神様と出会った。神様曰く、俺は本来死ぬことはなかったそうだ。俺は啞然としていたが、御詫びに別の世界に転生させてくれるそうだ。その時に色々な能力をつけてくれた。後は見た目を格好よくしてもらった。それでは、モーレツの世界へといきましよう。

拓人「んん〜！」

俺は目を覚ましてベットから起き、朝食の準備をする為に顔を洗い台所に向かう。リビングにはまだ誰もいない。前世の時の記憶はそのままあり、独り暮らしが長かったので、料理はできる。しかし、色んなキャラの料理の腕が追加されたので、その辺の店よりは旨い。

拓人「米は炊けてるし、だし巻きと豆腐の味噌汁にぬか漬けもいい具合に漬かってる

し出すか」

献立も決まり、準備に取り掛かる。その前に、珈琲を用意しておく。もうじきあの人  
が起きてくるからな。

「起きてたのかい拓人」

拓人「おはよう梨理香さん。ほい、目覚めの珈琲」

梨理香「悪いね」

拓人「それは言わない約束でしょ？俺を拾ってくれてここまで育ててくれたんだか  
ら」

梨理香「そつちこそ、それは言わない約束だろ？」

そう、俺はこの世界に転生した時には赤ん坊だった。それを加藤梨理香さん…この世

界での俺の義母だ。そして、その時一緒にいたシュニツツアーっていう名前のサイボーグに拾われた。そして、俺が高校1年の時に梨理香さんが話してくれた。もつとも、記憶があるから全部知ってるんだけどね。

拓人「さて、もうじき朝食も出来るし、アイツを起こしにいくか」

梨理香「いつも悪いね」

拓人「血は繋がってなくても、可愛い妹だ」

義妹の加藤茉莉香。俺の1歳下だ。朝は弱く中々起きてこないの、何時も朝食の準備が終われば起こしにいく。これも日課である。

拓人「茉莉香、そろそろ起きないと遅刻だぞ」

ドアをノックするが返事はない。そのまま俺は、部屋の壁の一部を窓に変える。

拓人「茉莉香、いい加減に起きろ!!」

茉莉香「んく…拓兄く、後5分」

拓人「いつも5分で起きないだろ。ほら、さつさと起きる。今日は俺が朝食作ったんだから」

茉莉香「本当に！急いで起きる!!」ガバツ

拓人「俺は先に行くから、早く顔を洗ってこい」

そのまま茉莉香の部屋を後にして、リビングに戻る。3人分の食事を用意し終わると、慌ただしくリビングに入ってくる茉莉香。

梨理香「おはよう茉莉香。いつも慌ただしいね」

茉莉香「おはよう梨理香さん。布団の中が恋しくて♪」

拓人「まったく、シャキツとしろよな。流石に遅刻は勘弁してくれ」

茉莉香「は〜い」

3人揃い、俺の作った朝食を食べて学校に向かう。俺達は自転車で通学している。俺が茉莉香を後ろに座って俺に抱き付いている状態だ。この光景はもうお馴染みになっており、学校に近づく度に周りから暖かい目で見られるのだった。俺達に通っている白鳳学院。2年前までは女学院だったが、俺が入学する年に共学となった。それでも、女学院だった為か未だに男子生徒の数は少ない。もっとも、白鳳学院は多少頭がよくなければ入学出来ないの、それが理由だと思う。俺のクラスでも男は俺を含めて4人しかない。

拓人「んじゃ、俺は向こうだから」

茉莉香「それじゃあね拓兄♪」

俺は下駄箱で茉莉香と別れる。そして、教室に行き授業を受ける。あつという間に今日の授業が全て終わって俺は家に戻り、部屋に戻ってのんびり横になる。暫くして夕飯の時間が近付いたので、リビングに下り夕食を梨理香さんと一緒に作る。暫くすると、茉莉香がバイトから帰ってきた。

拓人「お帰り茉莉香」

茉莉香「ただいま。クンクン・・・ポトフだ〜♪」

梨理香「もうすぐ出来るからもう少し待ちな」

茉莉香「は〜い」

そう言うのと、茉莉香は自分の部屋に戻り着替えて戻って来た。

茉莉香「そう言えば梨理香さん。今日バイト先で梨理香さんの知り合いって人が来たよ?」

梨理香「知り合い? 誰だい?」

茉莉香「さあ?ただ、宇宙からこの惑星を見てみないかって。宇宙関係の人かな?」

ガチャーン

梨理香さんは皿を落とした。俺は割れた皿の破片を片付ける。

拓人「梨理香さん、怪我無い?」

梨理香「あ、ああ。悪いね」

ピンポーン

玄関のチャイムが鳴る。梨理香さんが出て、一緒に男性と女性を連れて入ってきた。梨理香「紹介するよ。私の昔の知り合いで、名前はミーサだ」

ミーサ「よろしくね♪それにしても久し振りね梨理香。その前に伝えなきゃ。弁天丸船長、ゴンザエモン加藤が亡くなりました」

そう言うと、梨理香さん達はワインをグラスに入れ、口に含んだ。飲み終わると、突然こう言い出した。

梨理香「ろくでなしの船長に!!」

そう言うと、梨理香さんとミーサさんはワイングラスからビールジョッキにワインを入れて飲む。

ミーサ「ホントなら、加藤船長もこんなことしたくなかったでしょうけど」

そう言うと、梨理香さんとミーサさんが茉莉香を見る。

茉莉香「あのく、さつきから言っているゴンサエモンとか船ってなんですか？」

ミーサ「梨理香、あなた何も説明してないの？」

さつきから勝手に言ってるけど、俺にも我慢の限界がある。茉莉香の話も少しは聞きやがれ!!

拓人「少しいいですか？」

ミーサ「どうしたの？」

拓人「さつきからそっちの都合で話を進めますけど、茉莉香の意見を無視するのはどうかと？」

俺は少しだけ殺気を出してそう言う。

「「?」」

茉莉香を除いた3人は、驚きの表情になる。

梨理香「それもそうだね。取り合えずゆっくり考えな」

取り合えずそう決まり、船長の話は茉莉香に委ねて部屋に戻った。翌朝、今日は俺もランプ館に来ている。たまに来るぞ?

茉莉香「いらつしやいませ。って拓兄!」

拓人「よっ♪」

マミ「こんにちは拓人さん」

拓人「久しぶりマミちゃん。所で、今日はえらい客層が濃いな...」

茉莉香「うん…」

マミ「茉莉香のファン？」

そんな話をしていると、眼鏡をかけ黒い制服を着た女子が入ってきた。

「随分余裕ね」

茉莉香「はい？」

「それとも自覚が無いのかしら？」

自覚…恐らくこいつは、海賊関係者だな。

拓人「心配するな」

チアキ「あなたは？」

拓人「茉莉香の兄の加藤拓人だ。君は？」

チアキ「そうですか。私は《チアキ・クリハラ》です。ところで、あなた自分の立場を分かっているの？」

マミ「茉莉香……」

「加藤茉莉香さん……ですね？」

茉莉香「はい」

そんな話をしてると、どこかの制服を着た男が話しかけてきた。

管理者「新奥浜空港の者です。管制官の加藤梨理香さん、お母様から緊急保護の要請が出ています。中継ステーションで問題が。詳しくは車の中で」

チアキ「ふくん……空港のセキュリティが緊急保護？」

拓人「あり得ないな。それなら俺にも緊急保護が出ててもいいはずだぞ? チアキさ  
んって言ったか? 茉莉香を頼む」

偽管理者は、手に何かを出して茉莉香に襲い掛かろうとした。

拓人「おい」

偽管理者「!?!」

俺は、何かを持つてた腕を掴む。

拓人「なんだこれは? 茉莉香を殺すつもりだったのか?」

偽「は、離せ! 私掠船免状さえ手に入れば!!」

拓人「つまり、私掠船免状れさえ手に入れば茉莉香はどうなってもいいと? ワレ舐めと  
んのか?」

『!?!』

俺の言葉に、店にいた全員の表情が変わる。

茉莉香「た、拓兄?」

拓人「ウチの家族に手エ出したんや。それなりの覚悟出来てるって訳やなあ？」

偽「な、なにを…」

拓人「オラッ！」

俺は茉莉香に襲い掛かってきた男を殴る。何度も、何度も。

偽「グッ！ゴハッ！！グヘッ！！」

拓人「おいコラ、誰がオチてええ言うた？コラア！！」

俺は、茉莉香を拐おうとした人物に思い切り蹴りを入れる。それを合図に周りも銃等を撃ち出す。

拓人「さっさと終わらせて茉莉香達を追わなきゃいけないんだ！！」

俺はさっさと片付けて茉莉香達の後を追う。

茉莉香「誘拐!」

チアキ「あいつ、何処の所属か分からないけど、貴方を連れ出す気満々だったでしょ？」

茉莉香「なんで・・・」

拓人「それはな・・・茉莉香が加藤茉莉香だからだ」

チアキ「その通り。恐らくあそこに来ていた連中。軍の情報部、警察の起動部隊に星系軍の特殊部隊、後は宇宙ファイアの機動隊かな？」

拓人「ありや、全員ゴゴボコにしてしまった」

チアキ「……マジで言ってるんですか？」

拓人「ああ」

チアキ「……取り合えずそれは置いて、そろそろお迎えが来たみたいね」

チアキがそう言うと、ケインが凄い勢いで車で走ってきて俺達の前で止まる。

ケイン「無事みたいだな」

茉莉香「なんとか……」

拓人「とにかく・・・兄パンチ!!」

俺はケインを1発ぶん殴った。

拓人「あんたら、ちゃんと茉莉香を守れ!!今回は俺がいたから良かったが!!」

ケイン「・・・悪かった」

拓人「取り合えずあなたにはもうない。後、あの女も殴る」

ケイン「マジかよ・・・」

俺と茉莉香はひとまずランプ館に戻った。ミーサには軽くだが拳骨をしておいた。

ミーサ「酷いわね」

拓人「どつちがだよ!!」

ミーサ「それじゃあ私達は戻るわ」

ケインとミーサは帰り、俺達も戻ろうとする。すると、目の前に梨理香さんがいた。

茉莉香「梨理香さん仕事は？」

梨理香「自分の娘と息子が、街中で銃撃戦に巻き込まれてるって聞けば、余程の事が無い限り早あがりだよ」

拓人「……所でなんでこれで来たんです？」

梨理香「仕方ないだろ？お前達二人とも自転車に通学しているんだから、乗せれるのはこの車しか無いんだよ」

拓人「だからと言って、この車だと茉莉香を俺の膝上に座らせないといけないんです  
けど……」

茉莉香「えへへ／＼／＼」

梨理香「いいじゃないかい。茉莉香も嬉しそうだし」

こうして目的地に到着するまで、茉莉香は俺の膝上に座っていた。目的地に到着すると、梨理香は後ろのトランクを開ける。中には大量の銃やバズーカ砲が入っていた。

茉莉香「あのおのう梨理香さん？これ持っていたら犯罪なんじゃ・・・」

梨理香「軍や警察には、特別に甘く見てもらってるのさ」

茉莉香「それってかなり凄いなんじゃ・・・」

そんな事はお構い無し、梨理香は一丁の銃を持つ。

梨理香「・・・1発目の火花にしちやいいかな？」

梨理香は、その銃を構える。

梨理香「二人ともこれを着けな。目がやられちゃうよ」

渡されたゴーグルを装着する。すると、梨理香は目の前にある柱に目掛けて撃つ。物凄い光に包まれながら、柱は崩壊していく。

梨理香「久々に撃ったけど、かなりの衝撃だったね」

拓人「……………」

俺は梨理香がここまでした事の覚悟を確認し、茉莉香に秘密にしている事を打ち明けようと決心した。

拓人「茉莉香、少し大事な話があるんだ」

茉莉香「どうしたの拓兄？」

梨理香「拓人、あんたまさか……」

俺は梨理香の方を向き、ゆっくりと頷く。それを見た梨理香は、これ以上自分は何も言わないといった顔で見てきた。

拓人「茉莉香、俺とお前は本当の兄妹ではないんだ」

茉莉香「えっ……」

拓人「俺は、茉莉香が生まれる1年前に梨理香さんに拾われたんだ」

茉莉香「本当なの……梨理香さん？」

頭が混乱していると茉莉香だが、徐々に冷静さを取り戻し梨理香に見る。

梨理香「ああ、茉莉香が生まれる1年前に、拓人を拾ったんだよ」

茉莉香「そう・・・なんだ」

拓人「本当は、茉莉香が学院を卒業した時に言うつもりだったんだ。けど、今回の件で少し早いが話してしまおうと思っただ」

茉莉香「・・・・・・・・」

拓人「でも、血は繋がってなくても、俺の大切な妹・・・家族なんだから」

茉莉香「拓兄・・・」

梨理香「・・・・・・・・それがどうしたんだい？あたし達が家族なのは当たり前だろ？」

拓人「梨理香さん・・・」

茉莉香「そうだよ拓兄！梨理香さんの言う通りだよ。それに、自分の気持ちに我慢しなくてよくなったしね」

拓人「自分の気持ち？」

茉莉香「それは、おいおい話すとします」

梨理香「自分で決めたんなら、アタシは何も言わないよ」

茉莉香「うん♪」

拓人「……………」

茉莉香「うん♪それでね拓兄……………」

拓人「なんだ？」

茉莉香が甘えたように話すときは、大抵何かお願いがある時である。

茉莉香「もし私が悩んでたら、一緒に考えてくれる？」

梨理香「それはいい。拓人が側にいれば安心だよ。ミーサにはアタシから伝えとく

よ  
「

俺の意見は聞かれずに、梨理香さんはミーサさんに連絡してました。

茉莉香「駄目・・・かな」

拓人「ま、ゆっくりと考えればいいさ」

茉莉香「うん♪」

これから茉莉香のフォローをすることとなった拓人であった。

## 加藤拓人、ヨット部へ入部

茉莉香に真実を話してから1週間が経った。そして俺は考えた。これから茉莉香を支えていこうと。なので、俺もヨット部に入部する事にした。ヨット部顧問に入部届けを提出するために職員室に向かう。職員室に到着すると、丁度中から先生が出てきた。しかし、そこにいたのは以前家にやって来たケイン・マクドゥガルだった。

ケイン「おや？加藤君じゃないですか。職員室に何か用ですか？」

拓人「・・・ヨット部顧問に入部届けを提出に来たんです」

ケイン「それなら丁度良かったです。本日からヨット部顧問になりましたので、その入部届けは貰っておきましょう。ようこそヨット部へ♪」

俺は開いた口が閉まらなかった。それはそうだろう、つい1週間前に会ったばかりなのに、うちの学院の教師になっていけば流石に驚く。

ケイン「丁度もう一人入部希望者がいますので、一緒に部室に行きましょう」

拓人「俺以外に入部希望者？」

ケインの後ろにいたのは、茉莉香が襲われた時に助けてくれた女子生徒だ。

拓人「確か・・・クリハラさんだったよね？」

チアキ「どうも」

ケイン「ではお二人共、行きますよ」

ケインに声をかけられて俺とクリハラはヨット部部室に向かった

—————

茉莉香「入りまゝす!!」

「お疲れ茉莉香」

茉莉香「ハラマキ、お疲れ様」

ハラマキ「ところで聞いた？今日から新しい顧問が来るんだって」

茉莉香「顧問、ようやく決まったんだ」

「ええ、なんとか夏休み前に見つかってよかったわ」

「そうだな」

茉莉香「お疲れ様ですジェニー部長、リン副部长」

ジェニー「お疲れ様茉莉香さん。そろそろやって来ると思うんだけど・・・」

そう言っていると、部室の扉が開く。

ケイン「今日からヨット部の顧問になりました、ケイン・マクドウガルです」

ジェニー「部長のジェニー・ドリトルです。ケイン先生、よろしくお願いします」

ケイン「よろしくお願いします。それと、今日から二人新しい部員が入ることになりました。それでは入って来て下さい」

ケインに言われて、俺とクリハラは部室に入る。

ケイン「まずは、1年生で先週転校されて来ましたチアキ・クリハラさんです」

チアキ「チアキ・クリハラです。これから宜しくお願いします」

クリハラは素っ気ない感じで挨拶をする。

ケイン「そしてもう一人は、2年生の加藤拓人君です。ヨット部にいる加藤茉莉香さんのお兄さんです」

拓人「今日からお世話になる加藤拓人だ。既に知ってる顔もいるけど、宜しくお願ひするよ」

リン「宜しくな拓人♪まさか一緒の部活に入るとは思わなかったぜ」

茉莉香「リン副部長は、拓兄と知り合い何ですか？」

リン「知り合いもなにも、拓人とは同じクラスメートで隣の席だぞ？」

ジェニー「あらそうだったの？」

拓人「ジェニーさんも、これから宜しくお願ひしますね」

ジェニー「ええ♪けれど、私が部長の間はリン同様にこき使うわよ♪」

拓人「お手柔らかにね」

茉莉香「むく……(何だか面白くない)」

茉莉香は、拓人がリンやジェニーと楽しく話してるのを面白くなさそうに眺めていた。

ハラマキ「おやおや？なにやら不機嫌ですな茉莉香さん♪」

茉莉香「ハラマキ……べ、別にそんなことないよ！」

ハラマキ「ま、そう言うことにしときますか♪」

ケイン「はい、それでは今から・・・」

ジェニー「ケイン先生、私達3年生から提案があるのですが？」

ケイン「何ですか？」

ジェニー「折角新しい部員が入部しましたし、明後日から連休です。そして数日たてば夏休みが始まりますので、ヨット部で練習航海を行いたいのですが」

ケイン「成る程、練習航海ですか。私は構いませんが、皆さんの意見もちゃんと聞いて下さいね」

リン「あたしなら2年生は大丈夫だぞ？なっ!!」

2年生「大丈夫ですよジェニー部長」

茉莉香「私達1年もいいよね？」

ハラマキ「問題なし♪」

1年生「大丈夫ですよ!!」

ジェニー「と言うことですので・・・」

ケイン「分かりました。練習航海を許可します」

ジェニー「それでは、明後日から練習航海で使う艦の整備をしに行きますので、皆さん遅れないようにしてください！」

一同「了解です!!」

ケイン「ただし、三日後から試験が始まりますので、皆さんしっかりと勉強しておいで下さいね♪」

こうして、俺の初の部活は終了した。皆続々と帰宅をする。茉莉香はいつものようにランプ館でのバイトがあるため、先に学院を出ていった。俺も帰ろうとした時、ジェニーさんとリンに呼び止められた。

拓人「どうしたんですか？」

リン「拓人さ、これから暇か？」

ジェニー「よかったら、少し寄り道しない？初めての男性部員ですし、歓迎会とまではいかないけど、顔見知りだしね」

拓人「なら、その辺の喫茶店でいいから行こうか？」

リン「そうだな。行こうぜジェニー!!」

ジェニー「ええ」

こうして、俺とリンとジェニーさんの3人で近くの喫茶店に向かうことにした。

リン「ここでいいか？」

拓人「なら入るか」

喫茶店に入り店員に席に案内される。

店員「ご注文が決まりましたらお呼び下さい」

拓人「何にするかな？」

ジェニー「そうねく・・・」

リン「あたしは、アップルパイにする」

ジェニー「私は・・・このシフォンケーキで」

拓人「俺は、アメリカンコーヒー」

リン「それだけでいいの？」

ジェニー「私達に気をつかわないでいいのよ？」

拓人「大丈夫ですよ。俺珈琲好きなんです」

俺はジェニーさん達の意見を断り注文する。暫くすると、注文した品がやってきて話ながら食べる。そして俺は珈琲を飲み終わり、リン達も自分が注文した品を食べ終わっていた。

リン「悪い拓人、ちよつとトイレに・・・」

ジェニー「わ、私も少し・・・」

拓人「気にせずどうぞ。待ってますから」

二人は少し顔を真っ赤にしながらトイレに向かう。女性は大変だね。男ならあんまり気にしないけど。

拓人「二人が戻ってくる前に会計済ませておくか」

俺は、テーブルに置いてある伝票を持ってレジに向かい支払いを済ませる。

店員「お支払はご一緒で？」

拓人「はい、全て一緒に」

店員「お会計は合計1780円になります」

拓人「2000円からで」

店員「2000円お預りします。お釣りの220円のお返しです」

拓人「御馳走様。連れが来るまで席で待たせてもらいますね」

店員「どうぞ」

店員の許可をもらい、最初に座っていたテーブルでリン達が戻ってくるのを待つ。

リン「お待たせ拓人！」

ジェニー「それじゃあ行きましようか？お会計は・・・」

拓人「もう済ませました。リン、早く行くぞ！ただでさえ無理言つて席で待たせてもらったんだから」

俺はそのまま店を後にする。

ジェニー「もう、今回は拓人の歓迎する為に誘つたのに・・・」

拓人「まあまあ、また今度お願いします♪」

少し不満なジェニーだったが、今度奢ってもらふことで納得してもらった。その時、

リンが前から来た男とぶつかってしまった。

男「いつてくな！ドコ見てんだよ!!」

リン「す、すみません」

男2「すみませんじゃねくだろ!!」

ジェニー「リンが謝ってるじゃない!!それに、そこまでたいした怪我ではないで!!」

男「なんだこの女？舐めた口聞いていると、痛い目にあうぞ?」

リン「うるさい！」ドン

リンが思い切り男に向かって体当たりする。

男2「いつてく!!ふざけんな！オラツ!!」

男はリンに殴りかかる。当然俺がそんなのを許すはずもなく、リンが殴られる前に男を蹴り飛ばす。

拓人「男が女性に殴るなんてサイテーだな。そんなのは、神が許しても俺が許さん!!」

男「お前一人で何が出来るんだ？出てこいお前ら!!」

男が叫ぶと、路地から数名の男達が出てきた。数にして、合計10人。

男「へへっ、お前女がいるからって調子にのつたな。この人数がいるって分かってたらな♪」

拓人「はく……弱い奴は集まらないと行動出来ないのかよ」

男「な、舐めやがって・・・お前ら!!ソイツをやっちまいな!!」  
男達「おおく!!」

男の一声で、残りの連中が俺に襲い掛かる。

ジェニー「危ない拓人!!」

リン「逃げる拓人!!あたし達はどうかなくてもいいから!!」

拓人「反行儀《アンチマナー》キックコース!!」

俺は飛びあがり、二人のチンピラを蹴る。

「ギヤアアア!!」

拓人「三点切分《サンテンデクパージユ》!!」

続いてもう一人蹴り飛ばす。

「グホッ!!」

ジェニー「凄い・・・」

リン「拓人、あんなに強かったんだ」

チンピラを呼び出した男は驚き、リンとジェニーは見とれていた。その間にも拓人は次々と倒していく。そして、残るは最初にいた男二人だけだった。

「く、くそっ!!」

「ど、どうすんだよ!!」

「仕方ねえ!!こっち来い!!!」

ジェニー「キヤア!!」

リン「何しやる!?!」

男達はなんと、リンとジェニーに折り畳みナイフを突き付ける。

「大人しくしな!!」

拓人「……………」

「へへへ……………これで立場は逆転だな」

拓人「くだらねえ。それくらいで俺が降参するとも?」

俺は足元に落ちていた空き缶を相手に蹴飛ばす。

拓人「ジェンガ砲!!」

「ぐあっ!!」

「お、おい!?!大丈夫か!!」

拓人「よそ見とは余裕だな。ほほ肉《ジュ》シユート!!」

「かはっ!!」

こうして、俺は男達+チンピラをやっつけたのであった。

拓人「無事か二人とも?」

リン「大丈夫だ」

ジェニー「しかし驚いたわ。拓人が強いのは知っていたけれど・・・」

拓人「滅多に使わない足技だけだな」

リン「けど助かったぜ♪」

ジェニー「そうね」

拓人「二人とも無事ならよかった」

俺は二人の頭を撫でた。しかし、俺は慌てて二人の頭から手を離れた。

拓人「わ、悪い！いつも茉莉香にする癖で」

リン「べ、別にいい／＼」

ジェニー「ええ／＼」

拓人「ならよかった。時間もそろそろ遅いし、今日はもう帰ろうか」

リン「そうだな」

ジェニー「じゃあ今日は解散しましょう。明後日は泊まり掛けて整備に行きますしね」

拓人「分かった。じゃあ気を付けて帰れよ」

俺はリン達と別れて自宅に帰った。

—————

拓人と別れてリンと一緒に戻る。

ジェニー「ねえリン」

リン「なんだジェニー？」

ジェニー「私……さっき拓人に頭を撫でられて凄くドキドキしたの」

リン「あたしもだ」

ジェニー「……ものは相談なんだけど」

リン「ジェニーが考えてる事は分かるよ」

ジエニー「なら決まりね」

リン「ああ！二人なら大丈夫さ!!」

ジエニー「ええ!!」

拓人といないところで、このような話がされていたのあった。それからあつという間に2日が経ち、ヨット部が使用しているオデットII世の整備を始めるのであった。

拓人「・・・デカイな」

茉莉香「まあね。私も初めて見たときは驚いたけどね」

ハラマキ「茉莉香、ハッチ開けにいくよ」

茉莉香「分かった。じゃあ後でね拓兄♪」

茉莉香と別れて、ジエニー達のもとに向かう。ハッチが開くのを確認すると、ケインは外観を一回りするみたいだ。

拓人「ケイン先生、俺も一緒にいいですか？」

ケイン「そうですね・・・確か拓人君は今回も振り回されていないんですよね？なら一緒に来て下さい」

俺はそのままケインについていく。

ケイン「ゴツいな。何処が高校の演習艦だよ」

拓人「確かに・・・特に外は問題なさそうだけど？」

ケイン「なら、中に入るか」

俺達は少し遅れて中に入る。中に入ると、他に役割を振られてる連中が慌ただしく動いている。

「急いで急いで！」

「了解！！」

ケイン「なんだ？」

「急げ急げ！！」

「急ぐ！！」

拓人「慌ただしいな」

リリイ「先生！生命維持系の循環システム、チェック終了しました」

小林丸「食料庫の冷蔵、正常稼働確認」

ケイン「了解です。引き続きチェックをお願いします」

「はい！」

ケインが的確に指示を出していると、目の前を一人の生徒が通り過ぎた。

ウルスラ「わああああ！！」

ケイン「無重力ですよ！落ち着いて！」

ウルスラ「はくいいいいい・・・」

ケイン「子供かよ」

拓人「いや、子供だよ……」

ケイン「んじや、ブリッジに行くか。何だか嫌な予感がするけど……」

ケインの予想は当たり、ブリッジには警報が鳴り響いていた。けど、それはすぐに茉莉香が切る。

拓人「どうだ茉莉香？」

茉莉香「拓兄♪それに……」

ケイン「こんにちは」

茉莉香「どういうことですか？突然顧問になったり、練習航海を提案したり」

ケイン「練習航海を提案したのは、部長達上級生ですよ？それに、偶々顧問になったヨツト部に、偶々貴方がいたんです♪」

そんな話をしてしていると、ジェニーさんが手を叩き注目させる。

ジェニー「はいはい皆さん、セントラルコンピューターのアップデートが完了しました。ブリッジの電源を一旦全部切って、再立ち上げを行います。まだ準備完了していないのは？」

ミレーネ「こっちは完了」

チアキ「完了してます」

イズミ「ほらそれ」

アスタ「うくん・・・」

イ・ア「いいです!!」

茉莉香「こっちも終了しました」

ジェニー「ブリッジより、C68ポートサイド聞こえてる?」

ジェニーは、ポートサイドにいるリンに通信する。

リン「こちらポートサイド、聞こえてるよ」

ジェニー「メインブリッジの再立ち上げを行います。ブリッジ側、最終点検!!」

そう言うと、全員が手をあげる。

ジェニー「3秒後に不必要の外部電源をカットします!!3・・・2・・・1・・・」

すると、ブリッジの電源が消える。

リン「外部電源カット。消えた?」

ジェニー「外部電源カット確認。10数えたら、もう一度電源を繋いで」

リン『OK♪』

ジェニー「10・・・9・・・」

アスタ「8!」

イズミ「7♪」

茉莉香「6！」

一同「5・・・4・・・3・・・2・・・1・・・」

ジェニー「0!!」

すると電源がつきシステムも復旧する。何故か皆が盛り上がっていたけど・・・

ケイン「皆さん毎回立ち上げる時はこんな感じ何ですか？」

ジェニー「いいえ、今回はバージョンアップも兼ねてますので。練習航海ですし、ちよつとした準備ですよ♪」

ケイン「ちよつとした準備ね・・・」

リリイ「先生、業者の方が来ています」

ケイン「分かりました」

そう言つてケインはブリッジを出ていった。そして、ようやく整備も終わりに近づき、今日はもう休むこととなった。宿直は茉莉香とチアキがすることとなっていた。俺は、練習航海で割り振られてる部屋に入り、ベットに横たわる。

拓人「ん〜！あの後色々荷物運ばされて疲れたな。今日はもう休むか」

俺はそのまま寝ようとした時に、いきなり電気が消えた。

拓人「な、なんだ!？」

俺は慌てて外に出る。すると、ジェニーさんと出会った。

ジェニー「拓人」

拓人「ジェニーさん、いったい何事ですか？」

ジェニー「どうやら、電源が落ちたみたいなの。原因は、茉莉香さんが余計なボタンを押したみたいなの」

拓人「そうですか」

ジェニー「特に問題はなさそうだし、そのまま休んでいいわよ」

俺は、お言葉に甘えて部屋に戻った。

拓人「しかし・・・間違つてボタンを押したつてのが、気になるな」

俺は、先程のジェニーさんの台詞が気になっていた。

拓人「気になったならこれだな。え〜つと・・・あつたあつた、タイムテレビ〜♪  
れで、茉莉香達が宿直してた時を見れば・・・おっ♪」

俺はタイムテレビを見る。そこには、忙しそうに席を行き来してる茉莉香とクリハラの姿があつた。

チアキ『勝手に通信されてる!?!何処に通信して・・・星系軍!?!記録部!?!』

茉莉香『止めないと!!』

チアキが急いで電子戦を行う。茉莉香は何故か応援していた。その時に電源が落ちた。

拓人「成る程・・・これが原因だったか」

俺は、理由を理解出来たので、タイムテレビをしまう。

拓人「ひとまず、なんとかかなったならそれでいいか」

そのまま俺は寝るのであった。こうして、なんとか無事に整備も終わり、家に帰るのであった。

茉莉香「やっと終わったね拓兄」

拓人「だな。でも、今度はテストが待ってるぞ？」

茉莉香「はく・・・憂鬱だよ」

茉莉香は、テストを思いだし途方に暮れるのであった。

## いざ演習航海へ

演習航海の為に整備したオデットII世は、上級生に任せて俺達は期末試験に向けてテスト勉強をする。

拓人「取り敢えず、今日はこの辺か？つと、もうこんな時間か。帰るか」

俺はテストに備えて図書室で勉強をしていた。

拓人「まゝこれで明日からのテストはなんとかなるだろ」

こうして期末試験が始まった。試験期間は1週間。それが終わるといよいよ演習航海が始まる。

拓人「ただいま〜！」

茉莉香「お帰り拓兄♪」

拓人「ただいま茉莉香♪で、テスト勉強は順調か？」

茉莉香「なんとかね」

拓人「なら、明日の為に早く寝るか♪」

茉莉香「うん♪」

夕食をとり、俺と茉莉香はすぐに就寝した。そして翌朝、いよいよテストが始まる。

教師「教科書しまえ〜！」

テストが始まった。そして1週間後

-----

教師「はい、そこまで」

一同「終わった〜!!」

拓人「やつとか〜。さて、部活に行くか」

俺は部室に向かい、皆と合流する。そして、練習航海のプランを説明して解散した。

そして演習航海当日、集合場所は学院前の校門だ。

拓人「皆早いな」

リン「おはよう拓人」

ジェニー「来たわね拓人」

拓人「俺達で最後か？」

ケイン「生徒はこれで全員です。後はドクター殿だな」

ハラマキ「あ！来たみたい!!」

ケイン「では、今回初めて宇宙に出る方もいると思いますが、この数日間の体験はその後的人生にも大きく役立つと思います。それでは行きましようか♪」

一同「おっ!!」

こうして演習航海が始まった。中継ステーションにつきオデットⅡ世に乗り込む。皆それぞれ席に座る。いよいよ出航だ!!

ジェニー「こちらオデットⅡ世。白鳳学院ヨット部部長のジェニー・ドリトルです。オデットⅡ世、ただいまからC68ゲートより出航いたします」

管制員『こちら海明星中継ステーション、了解です』

すると、ゲートが開く。

ジェニー「微速前進」

茉莉香「微速前進！」

リン「海明星中継ステーション、管制空域から離脱確認」

茉莉香「第三宇宙速度突破。座標を海明星からたう星に移行」

出航となると、緊張感が漂う。

ケイン「ふむ．．．もう大丈夫でしょうか？皆さん、ご苦勞様♪」

ケインの一言で、皆が安堵の表情になる。

ジェニー「それでは、航路はこの通りくじら座宮たう星系を1周して、中継ステーションへと戻ってきます」

ケイン「しかし、今回は帆船ですからね」

ジェニー「普通の宇宙船で行けば、半日で往復。しかし、このオデットII世ならば、全工程で使う接近エネルギーは2%で済みます」

リン「色々お得だな」

一同「アハハハ」

ケイン「その代わり、常に船と周りの状況に気を使わねばなりません。これぞまさに部活動です」

ジェニー「それではマストの展開します」

一同「了解!!」

ジェニーの指示でマストを展開する。すると、警報が鳴り響く。

ケイン「どうしました？」

ヘリンダ「はい！それが、メインマストを起す前に、上段のヤードが開いちやつて  
るみたいで、絡んじやつてるみたいで・・・」

ケイン「ふむ・・・それなら、1年生諸君、宇宙遊泳の時間です」

1年生「え〜!？」

こうして、ケインの勝手な提案により、1年生は宇宙に出て直すことになった。

ケイン「後拓人君、私がない間生徒達の事をお願いします♪」

拓人「なんで俺ですか？」

ケイン「男性は、私以外は君しかいませんのでね」

拓人「・・・了解です」

俺にそう言い残して、ブリッジを出ていった。1年生は宇宙服に着替えているそう  
だ。こつちにまで通信が入ってるから、丸聞こえである。

ケイン『こんなの半ダース引き連れて外に出るのかよ・・・』

ジェニー「聞こえてますよ先生」

拓人「ま、気持ちは分かるけど・・・」

ま、あれだけ騒がしい1年と一緒に出るのは、不安が拭えないよな。そして絡んで

いたマストを外し、ようやく通常通りに稼働した。

拓人「やれやれ。ん？・・・これは」

ジェニー「どうしたの拓人？」

拓人「いや・・・トランスポンダーの反応のない宇宙船が三隻反応があった」

ジェニー「・・・ケイン先生、異常事態です。申し訳ありませんが戻ってきてもらえますか？」

ジェニーさんが、ケインを呼び戻す。そして事情を説明する。

ケイン「成る程・・・って!?!これが民間船のレーダーか？なんで敵味方識別する必要があるんだ？」

ミーサ「さすが最古産、オリジナルセブンの生き残りね。」

ケイン「えっと・・・現時点では、トランスポンダー無しの宇宙船は捉えていませんね」

ミーサ「一隻は弁天丸よ」

ケイン「プロが高校生に捕捉されたのかよ・・・」

拓人「あんたら、ホントにプロかよ」

ケイン「そう言われるとなんとも・・・」

苦笑いしながら答えるケインであった。

♪  
ジエニー「では、今日はここまでで、宿直の茉莉香さんとチアキさん、後はお願いね」

茉莉香「分かりました」

チアキ「了解です」

こうして、初日の演習航海は終わった。後は、部屋に戻って寝るか。そして翌日、ジエニー部長から茉莉香が皆に話があると言われて呼び出された。

—————

ジェニー「幽霊船のフリをした敵に狙われてる？」

茉莉香「はい、昨日レーダーに映っていたんですけど、途中で消えてしまったんです。でも、それ以外にも不思議な点があるので、今のところそれが一番有力です。」

ジェニー「たかが高校の演習航海に、悪役まで用意してくれるなんて、随分なサービスね♪」

一同「アハハハ」

茉莉香「それで、狙われる理由なんですけど……」

ジェニー「宇宙海賊船弁天丸、次期船長候補の加藤茉莉香さんと、副船長候補の加藤拓人君♪」

茉莉香「えっ!？」

拓人「やはり気付いていたか……」

ジェニー「部長ですからね♪部員の事情位は把握しています」

茉莉香「それで、出来れば……」

ジェニー「分かっているわ。茉莉香さん♪その幽霊船を退治するんでしょ？」

茉莉香「ありがとうございます!!」

拓人「取り敢えず、続きは茉莉香が朝ごはん食べて起きてからだな」

こうして茉莉香とチアキは朝食をとり部屋に戻った。そして時間と言うお昼・・・

—————

茉莉香「ふんふん♪。ふん♪。入りま〜す♪」

ケイン「やあ」

茉莉香「なんかありました？」

ケイン「以上無しです。もうすぐたう星の反対側に入ります。それでは、私は食事に行ってきます。何かあれば呼び出してください」

ケインはブリッジを出て食事に向かった。茉莉香はジェニー部長と幽霊船について話していた。そしてその夜、いよいよ始まる。

リン「見えた！太陽側70万キロ、ピンポイントみたいな反応だけ・・・」

ジェニー「物はなに？」

リン「この距離でこの大きさだから、正確なスペックなんて分かりはしないけど、多分ステルス仕様の超小型の戦艦だ」

茉莉香「取り敢えず、気付かないフリをしましょう」

そして茉莉香とジェニーさんは、部員に指示を出す。

チアキ「長い夜になりそうですね・・・」

拓人「だな。ま、いざとなれば・・・」

俺の秘密道具で対応するさ。俺は宇宙服を着なくてもすぐに宇宙に出れるからな。けど、もしそうなる時は皆にバレるけど・・・全員を守るためだ。ひとまず、作戦を開始するまではいつも通りなので、俺はブリッジを出て割り振られてる部屋に戻った。

拓人（取り敢えず俺も少ししたら夕食を済ませよう）

夕食を済ませて俺は、その帰りジェニーさんからそろそろ作戦開始なので、ブリッジに集まるように言われる。そして、全員がブリッジに集まる。

リリイ「それじゃあ定期連絡を送ります」

茉莉香「……………」

拓人「大丈夫だ茉莉香、何かあれば俺がなんとかするさ♪」

茉莉香「拓兄？」

そうしていると、敵から電子戦の攻撃が始まった。

拓人「来たか」

リン「軍のマニユアル通りの攻撃だな」

拓人「コピーしたオデットⅡ世にハッキングしてるな」

それぞれゆっくりと対応していく。

チアキ「オデット、50%ハッキングされました」

茉莉香「停戦用意」

ジェニー「他には？」

茉莉香「オデットⅡ世の全システムは正常ですか？」

拓人「航行系以上無し」

サーシャ「主機補機共に正常」

イズミ「搬送系オールグリーン」

ベリンダ「マスト正常」

リン「電子返送もちろん準備OK♪」

茉莉香「忘れてた！船内全隔壁閉鎖。一応お約束ですから」

ジェニー「そうね、何がどうなるか分からないから、やれる事はしておきましょう。船

内全隔壁閉鎖！」

船内にある隔壁を全て閉める。

茉莉香「それではみなさん、準備はいいですか？・・・戦闘開始！」

小林丸「了解、レーダー発信、再開。出ました、砂赤星方向、本船後方に宇宙船トラ

ンスポンダーも発信している」

リリイ「ライトニングブルーから通信!!『発、ライトニングブルー、宛、オデットII世船

長殿。汽船のコントロールは、現在我が管理下にあり。直ちに降伏せよ!』」

ジェニー「公式のメッセージの癖に名乗らないのね。随分と舐められたものね」

拓人「お〜お〜♪こっちの警報を鳴らそうとしてるな♪」

ジェニー「どうするつもり？」

拓人「こんな事態でも起きない連中に、ご丁寧な警報を鳴らして、起こそうとしてる

みたいだな」

リン「ルート設定完了♪追跡機の超高速回線経由で、敵中枢との直接回線を確保した♪電子とか言ってる割にアツチのセキユリティは甘々だ!!」

茉莉香「お待たせしました部長。返事を」

ジェニー「発、オデット二世船長・・・じゃなくて、白鳳女学院ヨット部部长、ジェニー・ドリトル♪宛、ライトニングイレブン船長殿。本文、馬鹿め」 p i p i p i p i p i p i  
茉莉香「えゝ!?!」

ジェニー「本文、馬鹿め・・・もう一度繰り返す?」

茉莉香「い、いえ・・・じゃあ副部长、部長の返信と同時に、本船はライトニング1への電子攻撃を開始します」

リン「了解!!レーダー、通信波に対して妨害電波発信!!」 p i p i p i p i p i

小林丸「了解」

茉莉香「春すぎて、夏来にけらし白妙の、衣ほすてふ天の香具山」

ジェニー「長からむ、心も知らず黒髪の、乱れて今夜は妨害電波」

リン「さつすが素人じゃないね」

茉莉香「敵、回線切断」

リン「でも、こつちの電子返送は色々と充実してる。逃がさないよ♪・・・きた〜♪敵の妨害電波♪」

チアキ「しかし遅い！おまけに弱い。この程度なら、少し出力を上げるだけで……青丹よし、オデット二世は咲く花の、匂うがごとく押しで押しで」

リン「電子の出力だけなら、この船は戦艦並だ……よし、乗っ取った♪」

茉莉香「敵、エンジンダウンさせちゃってください！通信に使える動力を残す程度で」

リン「あいよ、ライトニングの指揮艦艇緊急停止。念のためにバックアップも……ん？空振り？」

リリイ「ライトニングとの通信回線がシャットダウンされました!!」

拓人「いや……向こうはコンピューターの電源を切ったみたいだな」

すると、警報が鳴り響く。

小林丸「エネルギー波接近」

一同「なっ!？」

拓人「素人相手にビーム砲を撃つなよ!!」

小林丸「また来た！」

リン「あの船、どうやってこっちに照準してるんだ？」

チアキ「ターゲットスコープを目で見えてこちらを狙ってるんです」

ジェニー「どうするのよ !!この船はレーダー砲もシールドも無いのよ!？」

拓人「……仕方ない。茉莉香、俺が時間を稼ぐからオデット二世のマストで太陽の

光を向こうにむけろ!!」

茉莉香「時間がかかりすぎるよ!!」

拓人「そこはまかせろ! テキオー灯!! 後は・・・通り抜けフープ!!」

ジェニー「拓人、それは?」

拓人「説明は後だ!! 俺は今から、外に出て敵のビーム砲を防いでくる!!」

チアキ「無茶を言わないで下さい!! 宇宙服も無しに!!!」

拓人「いいから!!」

俺はそのまま通り抜けフープをくぐって外に出る。

拓人「さく! 撃ってきな!! ヒラリマントく!!!」

俺はヒラリマントを出し、敵のビーム砲をヒラリと反らす。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

拓兄が、チアキちゃんの注意を聞かずに不思議な穴に入ってしまった。

ジェニー「リン！外のカメラを繋いで!!」

部長の指示でモニターを出す。

茉莉香「拓兄!!」

チアキ「嘘でしょ!?!本当に宇宙服無しで出てる」

ジェニー「それに・・・何かしらあの布みたいなの?」

その時、また敵からビーム砲が撃たれた。しかも今度は直撃コースだ。けれど、拓兄が持っていた布でビームを反らしていた。

リン「すげ〜」

チアキ「ビーム砲は拓人さんに任せてよさそうね」

茉莉香「なら、急いでマストを動かそう」

茉莉香達は、マストを動かして太陽の光を反射させて敵戦艦にあてる。すると、敵戦艦

からの攻撃が止まった。そして、援軍の弁天丸とバルバルーサがやって来た。

拓人「手当たり次第に撃ちやがって。ま、なんとか援軍も来たみたいだし、俺も戻るか」

再び通り抜けフープを使いブリッジに戻る。

拓人「皆無事か？」

茉莉香「拓兄!!」

ジェニー「拓人!!」

リン「心配したぞ!!」

チアキ「助かりました。ありがとうございます」

拓人「こちらこそ助かったよ。バルバルーサ、船長の娘さん♪」

チアキ「知ってたんですか？」

拓人「まあね」ナデナデ

チアキ「／／／」

拓人「おっと、またやっちゃまったな。悪かったな」

チアキ「い、いえ／／／」

茉莉香「じく…」

ジェニー「じく…」

拓人「な、なんだよ」

茉莉香「別に…」

リン「なんにも」

リリイ「よかったねチアキ。加藤先輩に頭撫でられて♪」

チアキ「なっ!?べ、別にそんなじゃないわよ!!」

サーシャ「でも、加藤先輩って物凄く人気なんだよ?私も撫でられたいな♪」

呑気な会話をしてるな

ジェニー「ところで……先程敵のビーム砲を反らしていた布はなんのな？それに、宇宙服を着ないで宇宙空間に出ていたし……」

拓人「……」

さてと、どう説明したものか。

茉莉香「拓兄……確かに拓兄には色々あるみたいだけど、拓兄は拓兄だよ？」

拓人「茉莉香……」

ジェニー「そうね……今は言えなくても、何時かは教えてね♪」

拓人「ああ」

ヨット部の皆は、俺の事を疑問に思いながらも俺の事を優先してくれた。

拓人（皆……ありがとうな）

こうして俺の初めての演習航海は終了した。空港に戻ると梨理香さんが来ていた。

梨理香「お帰り二人とも」

拓人「ただいま梨理香さん」

茉莉香「……お母さん」

茉莉香が梨理香さんの事をお母さんと呼んだ。どうやら、茉莉香の中でも決心がついたみたいだな。

茉莉香「私なるよ、弁天丸の船長に!!」

梨理香「そうか：： 頑張りな」

拓人「やるならしっかりとな。俺も出来るだけフォローするからさ♪」

茉莉香「うん!!」

こうして茉莉香は弁天丸の船長になることを決めたのであった。

## 海賊業務... 最初は船長訓練?

演習航海も終わり、夏休みを満喫してる俺と茉莉香。茉莉香は今日は、友達のマミちゃんと一緒にプールに行っている。で、俺は久々に料理をしようと買い物に出ている。

拓人「さて、今日は何を作ろうかな♪」

献立を考えていると、目の前に黒服の男達が立っていた。

拓人「なんだ? 悪いけど、通らせてもらおうよ?」

俺はそのまま素通りしようとした。すると、一人の男が俺の肩に手をおく。

拓人「邪魔だつて言ってるだろ!!」

俺はその男を蹴飛ばす。続いて別の男を蹴ろうとした時に、誰かが声をかける。

「待て拓人!!俺だ俺!!」

拓人「その声は... ケイン先生!?!」

黒服の男達の後ろにいたのは!ケインと... 誰だ?

拓人「横の人は誰です?」

ケイン「こいつは百眼、弁天丸のレーダー・センサー系を担当している」

百眼「ども。へく、さっきの鬪い、ケインから聞いた通りだな♪」

ケイン「だろ？茉莉香お嬢様の護衛って感じだろ」

百眼「ああ」

拓人「で、一体なんの用ですか？」

ケイン「今、ミーサが茉莉香お嬢様を連れて、私掠船免除の更新に行ってるんだ。んで、お前も副船長になるなら、一緒に弁天丸まで来てほしいんだ」

拓人「そう言うことか。分かった」

俺は、ケインと百眼と一緒に一足先に弁天丸へと向かった。そして、茉莉香もやって来て船長訓練が始まった。とは言っても、俺はあくまで副船長だから茉莉香よりは、授業は少ない。少ないと言っても、俺に格闘や武器の使い方のレクチャーが必要ないだけだった。

茉莉香「うへく…」

拓人「大丈夫か？」

茉莉香「なんとかく…」

俺達は今、休憩中で昼食を食べている。

拓人「茉莉香は、船長だけあって大変だな。俺の方がまだ余裕あるぞ」

茉莉香「仕方ないよ。自分で決めた事だしね…」

話していると、ケインがやって来た。

ケイン「お疲れ様です二人とも」

拓人「お疲れ〜」

ケイン「次の授業はなんですか？」

茉莉香「この後、電子戦の実習と操舵の授業。で、シュニツターの戦闘授業」

ケイン「それはそれは。僕の授業まではもってくださいよ♪」

茉莉香「努力します」

昼食も終わり、俺達は引き続き授業を受けるのであった。全ての授業も終わり、俺達は部屋に戻り寝るのであった。翌朝、俺は疲れが抜けていない為か、予定より少し遅めに起床した。

拓人「あちやく〜。いつもより遅くに起きてしまったな。急いでブリッジに行かないと」

俺は急いで着替えてブリッジに向かう。すると、なにやらブリッジが騒がしい。覗くと、そこにいたのはクリハラだった。

拓人「なんでクリハラがここにいるんだ？」

ミーサ「折角だし、彼女にも参加してもらおうと思って呼んだのよ♪」

茉莉香「宜しくねチアキちゃん♪」

拓人「頑張ろうな」ナデナデ

チアキ「た、拓人さん／＼／＼」

俺はまた、いつもの癖でチアキを頭を撫でてしまった。

ミーサ「それじゃ、今日も頑張つてね♪」

そしてまた授業が始まった。いつものように授業を受け昼食を食べ、最後は格闘訓練だ。しかし、今日はいつもと違っていた。

シュニツツアー「今日は、手合わせを行ってもらおう」

3人「手合わせ？」

シュニツツアー「そうだ。拓人对茉莉香とクリハラだ」

拓人「へへ」

茉莉香「ええく!! 拓兄と戦うの!？」

チアキ「状況は2対1だけど…」

シュニツツアー「だからこそだ。拓人は格闘については、俺より強い」

拓人「今回は足技は使わないよ。」

茉莉香「だったら…」

チアキ「やるだけやってみましょう」

シュニツツアー「それでは…始め!!」

茉莉香「やあああ!!」

チアキ「はあああ!!」

拓人「おっと・・・」

茉莉香達が、攻撃を仕掛けてくるが、俺はそれを簡単に避ける。

拓人「さてと、何かいい道具はつと・・・」ゴソゴソ

俺は、四次元ポケットもとい、四次元ポーチの中を探る。

拓人「これでいいか。スーパ―手袋!!」

俺は、スーパ―手袋を装着し茉莉香達を相手にする。

茉莉香「手袋?」

チアキ「そんなのじゃ、相手になりませんよ!!」

チアキが、俺に蹴りを繰り出す。けれど、俺は、それを捕まえてチアキを持ち上げる。

チアキ「キヤアア!!」

拓人「はい、クリハラを捕捉。それでは・・・」ゴソゴソ

再びポーチを探る。

拓人「あつたあつた♪くすぐりノミく!!これを・・・」

くすぐりノミをクリハラに振り掛ける。すると・・・

チアキ「くつ・・・ あはははは!!ふふふふ!!」

名前の通り、振り掛けたノミがチアキをくすぐる。

チアキ「ちよっ!! まっ!! あははは!! た、拓人……さん、何を……くふっ……したんですか!!」

拓人「クリハラに、くすぐりノミというのを振り掛けた。それは、どんな相手でもくすぐって笑わせる」

チアキ「くすぐりノミって……あははは!! ひうっ!!」ピクピク

それから暫く、チアキは笑いつばなしだった。ようやく笑いも収まったが……

チアキ「はあ……はあ……んく……」

茉莉香「……」

シユニツツアー「……」

拓人（なんだろう……物凄い罪悪感が。それに……物凄く色っぽい／＼／＼）

チアキ「はあ……んは……／＼／＼」

拓人「その……すまなかった」

俺は、笑いすぎて横たわっているクリハラを持ち上げる。その時……

チアキ「あゝ!!」ビクン

拓人「……」

シユニツツアー「……取り敢えず、今日はここまでだ」

さすがに、この雰囲気には耐えられなかったのであろう、シュニッツァーが解散を言う。シュニッツァーは道場を出ていき、残ったのは俺と茉莉香とクリハラの3人だけとなった。因みに、クリハラは今俺の背中におぶさっている。

拓人「と、取り敢えず俺達も部屋にもどるか！」

茉莉香「じく…。」

拓人「あのく…。茉莉香さん？」

茉莉香「拓兄…。さっきのつてあんなにエツチな攻撃なの?…。」

拓人「…。」

茉莉香の一言に俺は、シヨツクを受けていた。

茉莉香「やるんだったら、私にしてくれればいいのに…。」ブツブツ

茉莉香がそんなことを言っていたが、シヨツクを受けている俺が気が付く筈もなかった。そして、俺が気が付いた時には、既に茉莉香の姿はなかった。

拓人「…。取り敢えずクリハラを部屋に連れていくか」

俺は気絶しているクリハラを背負って部屋に連れて行く。部屋に入ると、取り敢えずクリハラをベットに寝かせる。

拓人「起きるまで待つか」

クリハラが起きるまで、俺は部屋に置いていた雑誌を読む。暫く雑誌に夢中になって

いると、クリハラが目を覚ました。

チアキ「ここは：。」

拓人「気が付いたか？ここは、クリハラに割り当ててる部屋だ」

チアキ「私はいつたい：。」！！」バツ

クリハラは突然布団を自分に押し当てた。

チアキ（この感触：。 そうだ、私は笑いすぎて力が抜けて、拓人さんに触られて：。）

／（

クリハラは布団に潜り込んだ。その時少し見えたけど、顔が凄く真っ赤だった。

拓人「ど、どうした!？」

チアキ「：。 つて下さい」

拓人「悪い、よく聞こえなかったんだが？」

チアキ「責任とってください!! あんなに恥ずかしい目にさせられたんです!!」

拓人「はいく!？」

いきなり責任とて：。 確かに、俺の秘密道具であんなことになったけどさ：。

拓人「と、取り敢えずその話は保留でいいか？」

チアキ「：。」

俺の言葉に納得出来ないみたいだが、これが俺の精一杯な返事だ。

拓人「…」

チアキ「… 分かりました。取り敢えず待ちます」

なんとかこの話を終わらせて俺は部屋を後にした。チアキとの事件から3日後、ミーサから初実戦の仕事があると言われた。内容は豪華客船を襲うという営業だそう。今回は茉莉香だけが行くみたいで、俺とチアキは留守番。因みに、何故チアキと言っているかというと、本人からの希望である。

ミーサ「はい、それじゃあ初のお仕事頑張つてね♪既にケインが乗り込んでるから」  
クーリエ「もうすぐ通信が繋がるよ… 繋がった♪」

茉莉香「へ?もう繋がったの?なに話せばいいの?」

拓人「台本を読め」

茉莉香「ええつと… ホワイトクイーンに乗っている皆さん、こちらは海賊船弁天丸船長の、加藤茉莉香です。既にそちらの船のコントロールを乗っ取りました♪今から海賊が向かいますので、金目の物を用意しておいてください♪がーはっはっはっは!!ゴホゴホ」

チアキ「ノリノリね」

拓人「こういうところは、梨理香さんに似てるんだよな…」

ミーサ「血は争えないわね♪」

そのままのノリで茉莉香は、初の海賊業務を無事に終わらせた。その後にはアキは自分の船に戻っていった。本人から、次に会うときに返事を下さいと言われた。どうしたものか……ま、少しは時間があるし海賊業務も終わったし、夏休みを満喫しますか♪

茉莉香 「拓兄〜こっちこっち♪」

拓人 「慌ててると転ぶぞ〜!!」

茉莉香 「大丈夫だよ!... っとうわ!!」

期待通りに転ぶな...

拓人 「大丈夫か?」

茉莉香 「う、うん... ありがとう//」

拓人 「ホントに、そこは昔から変わらないな♪」

茉莉香 「む」

拓人 「ほら、むくれてないで泳ぐぞ!!」

茉莉香 「待ってよ拓兄く!!」

そんなこんなで、俺達は夏休みを残り10日とした今日、海に来ていた。切っ掛けは、商店街で当たった福引きだ。茉莉香と俺交互にクジを引き、なんと茉莉香が特賞を当てたのであった。

茉莉香 『温泉旅館1泊2日。近くには海もあり、今の季節でもお越しいただけますだつて♪』

拓人 『けどこれ、ペアー宿泊だから、誰か一人は行けないぞ?』

茉莉香 『ええくつ!!』

等とりビングで話していると、梨理香さんから

梨理香『どうせアタシは仕事が入ってて行けないし、アンタ達二人で行ってきな』

拓人『いいんですか？ 梨理香さん』

梨理香『アンタ達は、ほとんどの夏休みを海賊業務で潰しただろ？ 幸い仕事も入っていないみたいだし、アタシに構わず遊んできな♪』

茉莉香『ありがとう梨理香さん♪』

こうして、茉莉香と二人で遊びに来ているのであった。

茉莉香「ふ〜♪遊んだね〜」

拓人「だな。やっと夏休みを堪能した気がするな♪取り敢えず、宿に戻るか」

茉莉香「そうだね」

俺達は着替えて、本日泊まる宿に向かった。

拓人「へ〜、風情ある宿だな」

茉莉香「そうだね。すみませ〜ん!! 予約した加藤ですけど」

女将「ようこそお出でくださいました。こちらで女将をやらせてもらってます山田と申します。ご予約の加藤様ですね。それでは、お部屋へご案内させていただきます」

女将は、俺達が今日泊まる部屋に案内する。

女将「随分とお若いですけど、お二人はカップルですか？」

拓人「いいえ、違いますよ。俺た…」

茉莉香「そうなんですよ!!夏休みも終わりますし、彼と一緒に、旅行にと思ひまして♪」

俺が否定しようとする、茉莉香が言葉を被せて話す。

女将「そうですか。それは良かったですね♪ささ、着きました。こちらがお客様のお部屋です」

部屋に通されて、ようやく一息つける。

女将「お食事は、8時にお持ちいたします。それまでは、当旅館自慢の温泉にでも浸かって下さい」

女将が襖を閉める。

拓人「茉莉香、なんであんなこと言ったんだ？」

茉莉香「...」

俺の問いに黙る茉莉香。

拓人「旅館の人達が勘違いするだろ？」

茉莉香「勘違いじゃないもん!!」

拓人「茉莉香...」

茉莉香「私は...私はずっと拓兄が好きだったの!!お兄ちゃんとしてじゃなく、一人に男性として!!正直嬉しかった。拓兄から話を聞いて、それから拓兄への気持ちが抑え

られなくなったの。最初は、兄弟だからずっと我慢していた。でも…」

拓人「…」

震えながら話す茉莉香を俺は優しく抱き締めた。

拓人「もういい…。よく分かった。お前の気持ちは」

茉莉香「拓兄…」

拓人「けど、今すぐ返事は出来ない」

茉莉香「な、なんで!？」

拓人「実はな、チアキやジェニーさんにリンからも返事を求められてるんだ…」

茉莉香「あ、相変わらずだね拓兄…。返事は今度でいいけど、私も負けないからね!!」

拓人「俺も、きちんと返事を考えるよ」

女将「…失礼します」

「うわっ!？」

突然出てきた女将に驚く俺と茉莉香。

女将「お食事をお持ちしました。お運びしても宜しいですか？」ニコニコ

拓人「お、お願いします／＼／」

女将はニコニコしながら食事を運んできた。食事も終えて、温泉に入り俺達は多少ギクシヤクしながらも眠りにつくのであった。こうして、俺の夏休みは、波瀾万丈かは分

からないが、終わるのであった。

## 今度の仕事は… 皇女様!?

夏休みも終わり二学期が始まった。その間にも海賊業務はちよくちよく入ってくるけど、なんとかやっている。茉莉香はフラフラだけど…

拓人「くあく…」

ジェニー「随分と眠そうね拓人？」

拓人「そら、眠いですよジェニーさん」

ジェニー「いい加減にさん付けや敬語を止めてほしいわね…」

以前からそう言われている。年上だし、流石にそれとは思っていたのだが…

拓人「分かりましたじゃなくて、分かったよジェニー」

ジェニー「宜しい♪」

そんな他愛もない話をしていると、通信が入る。

拓人「呼び出し？今度の営業は来週だろう？」

ジェニー「あら？また仕事？」

拓人「そうみたいだ。悪いなジェニー、折角弁当作ってくれたのに」

ジェニー「何言ってるの？このまま持っていけばいいじゃない♪」

拓人「いや... 流石にそれは」

ジェニー「今のうちに、ライバルに差をつけないとね♪」

拓人（多分、茉莉香とチアキの事を言ってるんだろな...）

取り敢えず、ジェニーから弁当を貰いそのまま空港に行き茉莉香達と合流する。

ミーサ「あら？今日はお弁当なの？」

拓人「ああ、ジェニーからの差し入れなんだ」

茉莉香「!？」

俺の言葉に茉莉香が少し反応する。

ミーサ「あらあら、うちの副船長大人気ね♪でも、うちの船長は面白くなさそうだけどね」

拓人「あはは...」

俺は愛想笑いをしてやり過ぎすしかなかった。

ミーサ「それじゃ、今日の営業内容を伝えるわよ。今回襲うのは、シンフォニー・エンジェルよ。護衛艦が三機いるけど、今回は演習もかねてるからね。その後はいつものようにドッキングしての営業ね」

茉莉香「演習？」

ミーサ「高いお金払ってるんだから、それくらいは付き合えてことじゃない？」

拓人「なるほどねく…」

ミーサ「取り敢えず… 今回も副船長はここでお留守番」

茉莉香「えく!! また拓兄来ないの!!」

ミーサ「仕方ないでしょ? あんまり大人数で行っても邪魔だし。それに、船から船長どころか副船長までいなくなったら、誰が指示を出すの?」

茉莉香「うっ… そうでした」

拓人「ま、仕方ないな。茉莉香、帰ってきたらお前の好きなのを作ってやるよ」

茉莉香「ホントに!? やった」

茉莉香の機嫌も戻り、目的地に向かう。俺は、船内をウロウロしていると放送がかかる。

クーリエ『えく船長と副船長、至急ブリッジまでお越しく下さい』

俺はブリッジから近くにいるので、すぐに向かう。

拓人「呼んだか?」

百眼「早いな」

俺から遅れて茉莉香がやって来る。

茉莉香「遅くなりました」

ケイン「遅い」

茉莉香「だって、この服着にくいんだもん!!」

拓人「それに、ここに来るまでの通路に荷物を置きすぎだ!」

ミーサ「はいはい、その話は後でね。今回のおさらいをするわよ? 今回の獲物は、フレバードラインのメガシップ、シンフォニー・エンジェル。護衛艦が三隻ついているから、対艦戦を交えてからの乗り込み。戦力は問題にならないので、適当にお相手して圧倒してから降伏勧告。」

拓人「先方との打ち合わせは?」

百眼「それは、船長達が来る前にやっておいた。オブションの対艦戦も、こつちから奇襲を仕掛けるパターンで、手順書は航路管制局経由でまわしてある。」

茉莉香「実戦気分の演習をお客さんに御披露目って訳ね。さく皆、お仕事です!!」

ケイン「通常空間に復帰する!!」

通常空間に復帰して目標の船が見える。

百眼「目標確認!! エンジェル級大型客船、及びコーバック級護衛艦三隻」

茉莉香「準備はいい?」

百眼「レーダーセンサー系異常なし」

三代目「推進起動系異常なし。いつでも撃てるぜ」

クーリエ「電子戦、準備完了」

シュニツツアー「火器及び管制系、準備完了」

百眼「コーバツク級から照射確認。こっちの位置とトランスポンダーが向こうにとらえられた」

拓人「こっちの位置も名前も、向こうが確認してくれた。行くぞ！」

ケイン「弁天丸、発進!!」

クーリエ「妨害電波も出すよ♪」*pi*

こちらが動き出すと、相手の船も動き出す。

クーリエ「護衛艦三隻、引つ掛かったわよ」

茉莉香「電子戦の後は、接近しての攻撃。シンフォニー・エンジェルに接近。あちらに乗り込むまで出番は無し。降伏勧告は送っておいてね」

クーリエ「送ってるわ。だから、もうすぐ撃ってくる筈」

百眼「敵艦、エネルギー急上昇。ヤル気満々だな♪」

茉莉香「降伏勧告は無視? どうして皆、なにがなんでも撃ちたがるのかな?」

拓人「折角の実戦だしな。話にあつた高い金払ってるんだから、これ位させろって事  
だろ?」

シュニツツアー「照準データを得た。コーバツク級の射撃開始を待つて応戦する」

百眼「おし!来るぞ♪」

相手敵艦が撃つてくると思ったが、三隻中二隻が左右に広がる。

クーリエ「あれ？あれあれ？コーバツク級がパターンを変えてきたわ」

茉莉香「どういうこと？」

クーリエ「力押しの子電子戦じゃなくて、体制を整えながら広がってる。これは何を意味してるでしょ？はい、加藤茉莉香さん」

茉莉香「えっ!? えゝつと... ネットワークで繋いだセンサーの感覚を広げる事によって、策適性を上げていると思います」

クーリエ「正解」

茉莉香「こつちの現在地、見透かされちゃう？」

クーリエ「量産品の簡裁コンピュータじゃ、速度が足りないから大丈夫。これだけセンサーのデータがバカみたいに増えていくからね。計算だけで手一杯。やまをはってセンサー集中するような真似をしてこない限りは安心よ」モグモグ

てか、お菓子食いながらよくあそこまで話せるな...

百眼「そんな度胸のある奴は海賊になってる」

クーリエ「そうそう」

ルカ「見える...」

一同「えっ？」

茉莉香「何が見えるのルカ？」

ルカ「それは言えないわ」

茉莉香「はいはい」

拓人「相変わらずだな…」

茉莉香「さく、手早く済ませちゃって。明日だって私達、学校があるんだから」

シュニツツアー「敵コーバック、アルファ、ブラボー、チャーリー。起動確保の為射撃データ入力確認、威嚇射撃準備完了！…発射」

百眼「三隻停止した」

茉莉香「よし!!」

拓人「まだだ、まだ電子戦が続いてる」

茉莉香「えっ!？」

百眼「敵艦、エネルギー急上昇、また来る！」

茉莉香「降伏しないの？」

百眼「大丈夫。相変わらず下手つぴだ」

シュニツツアー「同時斉射から波動せい斉射に変わった」

ケイン「変わらないのは、射撃制度ってか？」

茉莉香「ふく、アラーム切ろうか？」

ミーサ「駄目よ!どんなヘボでも攻撃は攻撃。弁天丸を狙って撃ってきてるのにかわりはないわ」

茉莉香「ね〜!ひよつとして降伏勧告聞こえなかったのかな?」

クーリエ「受信確認つきのメッセージよ?通信係がサボってない限り、聞こえてるはず」

シュニツツアー「三隻同時調査が可能だ。実力差を分からせてやる」pipipi

拓人「いいんじゃないか?折角の実戦だし、お客も見てるし、少しサービスしてやれば?」

シュニツツアー「了解!目標コーバック級、アルファ、ブラボー、チャーリー!全砲門、発射する」

拓人「もう一度降伏勧告を出してくれ。次の官報射撃は、シンフォニー・エンジェルへの威嚇になると伝えてくれ」

ミーサ「さすが副船長、素早い判断ね♪でも!本来は船長の仕事よ?早く覚えなさい」茉莉香「うえ...脅迫するの気が引けるな〜」

ミーサ「海賊だもの、怖いくらいがいいのよ♪」

拓人「それに、これは脅迫じゃない... 駆け引きだ」

シュニツツアー「主砲、自弾チャージ中。威嚇目的ならもう撃てる」

クーリエ「返答来たわ。護衛艦じゃなくて、シンフォニー・エンジェルからだけど。降伏勧告を受諾するって」

茉莉香「守られてる客船から降伏？段取りが違うんじゃない？護衛艦が降伏して、客船が白旗じゃ…」

クーリエ「あつ！今護衛艦隊からも降伏受諾が来たわ。えつと…こっちは艦隊指令メールね」

茉莉香「二ヶ所から白旗？手違い？」

ミーサ「手違いなんて、この宇宙の何処でも起きてるわ。でもね、推測なんていくらでも出来るけど、都合のいい解釈ばかりしていると、足下すくわれるわよ？」

拓人「護衛艦はどうだ百眼？」

百眼「戦闘態勢は解除。多少エネルギー反応は高いが…まうその程度はよくあることだ」

クーリエ「シンフォニー・エンジェルの管制系統確保したわよ」

茉莉香「クーリエは電子戦を続行。弁天丸は獲物にドッキング。戦闘班は準備の方宜しく…さ〜海賊の時間だ！後は任せるね拓兄♪」

拓人「任せろ」

茉莉香は、準備の為ドッキングポートにシュニツァーと一緒に向かった。

拓人「さて、今回もモニターから見せてもらおうか♪」

そう言いながら、船長席に座る。モニターに茉莉香が映る。けど、俺はそのモニターを見た瞬間吹き出した。

拓人「な、なんだあの化粧…」

ミーサ「あの子、まだお化粧上手く出来てないのね…」

拓人「…今度、茉莉香に指導してあげて下さい」

ミーサ「分かったわ。クーリエも手伝ってね♪」

クーリエ「あ、アタシも!?!」

拓人「なんでクーリエもなんだ?」

ミーサ「副船長は知らなかったわね。彼女、眼鏡を外すと物凄い美人なのよ♪」

クーリエ「ミーサ…」

拓人「へく…どれどれ?」

俺はクーリエの側に行き、眼鏡を取り上げる。

クーリエ「ちよつと!?!返して!!」

拓人「確かに凄い美人だな。でも、普段のクーリエもいいと思うぞ?」

クーリエ「／／／」

ミーサ「あらあら♪」

取り敢えず、茉莉香の派手な化粧の指導を女性陣に任せた。営業も終わり、ブリッジをミーサ達に任せて俺と茉莉香は船長室に戻った。

拓人「お疲れ茉莉香」

茉莉香「うん♪」

拓人「まゝ取り敢えず…化粧を落とせ」

茉莉香「そうだね」

茉莉香は化粧を落とし、ラフな格好に着替えてベツトにダイブする。すると、船長室に通信が入る。

拓人「俺が出る。もしもし」

百眼『あ、どうも百眼です。お寛ぎのところすみませんが、ちよいとブリッジにおいて願いませんでしょうか?』

拓人「物凄いい言い方だな …何かあったのか?」

百眼『ふ、ふへへへ』

ミーサ『いいから早く来なさい!制服着用!!』

拓人「俺が先に行く。茉莉香は少し休ませてやってくれ」

ミーサ『…分かったわ』

拓人「茉莉香、お前はゆっくりでいいからブリッジに来てくれ。俺ができる範囲は俺

がやる」

茉莉香にことを伝え、俺は先にブリッジに向かう。

拓人「で、どうしたんだ？」

百眼「実は、密航者が乗ってるみたいで...」

拓人「はあ!? 密航者!! 海賊船の癖に、密航者に乗り込まれるって... 素人の俺が言うのもなんだけど、プロだろ? どんな冗談だよ...」

ケイン「いや、本当だから」

拓人「は... っ... いつ乗り込まれたんだ？」

ミーサ「こつちが海賊している間に、シンフォニー・エンジェルから乗り込んだみたいな」

クーリエ「ええつと... シンフォニー・エンジェルと強制ドッキングして、乗っ取りを無線から有線に切り換えた時に、変なノイズがあったとは思ったのよね。こつちのプロフェクトに引つ掛からなかったから安心してただけど... どうやら、その時に弁天丸のセキュリティが一時的に書き換えられたみたいなの」 pipipi

拓人「はあ!？」

クーリエ「あ、ああ... でも今は大丈夫よ! 元に戻ってるし...」

拓人「そうか...」

クーリエ「ドッキング解除する時も確認したけど、カメラにもセンサーにもデータ痕跡も残ってないから…」

拓人「完璧にハッキングくらったな…マジかよ」

クーリエ「うん…」

俺の一言に、クーリエが凹む。俺は船長席からクーリエのところに降り、頭を撫でる。

ルカ「だから言ったでしょう？」

三代目「結局言っていないだろ!!」

ミーサ「んで、来てもらったって訳」

拓人「ま、起きちまったものは仕方ない。クーリエで確認出来ないなら、よつぼどの腕前なんだろう。それより、爆発物とかはないか？」

百眼「危険物センサーには反応していない。その心配はない筈だ。エネルギー反応も金属反応も規定値以下。厄介な物は持ち込まれていないもよう」 p i p i p i

拓人「その密航者は何処にいるんだ？」

クーリエ「ドッキングコントロールに潜り込んで籠城中」

拓人「催涙ガスがあるだろ？」

百眼「いや、そこなんだよ」 p i

百眼が、ドッキングコントロールにいる密航者のサイズを測ったデータを見せる。

拓人「推定身長140cm、体重34kgだと!」

百眼「体の中から、エネルギー反応も電子的機械的ノイズも確認されない。だから、この密航者は生身の子供の可能性が高い」

拓人「なっ?! 生身の子供!! で、その子の要求は?」

クーリエ「ただ立てこもってるだけ。一言だけ、船長と話をさせろって」  
ケイン「で、船長に連絡を」

拓人「なるほど... 茉莉香の前に俺が話してみる」

そういつて俺は通信を入れる。

拓人「こちら弁天丸ブリッジ、ドッキングコントロール聞こえるか?」

「... 船長と話をさせてください。それ以外の方とは交渉いたしません」

拓人「確かに、子供の声だな...」

まさか本当に子供だとは。データミスを期待したんだけど...

拓人「俺はこの船の副船長の加藤拓人だ。君は誰だ?」

「私は、弁天丸の船長、ゴンザエモン船長と話をさせてください!」

一同「...」

前の船長、俺と茉莉香の父親の名前が出た瞬間に、一同が黙る。その時、丁度茉莉香がブリッジにやって来た。

茉莉香「お疲れ〜！緊急の呼び出してなんだったの？」

拓人「弁天丸に密航者がいたんだ。で、今そちらの方と交渉中」

茉莉香「そうなんだ」

拓人「とにかく… 弁天丸船長、ゴンザエモンは死んだ。今は俺が副船長としてやっている。それに丁度今の船長がブリッジに来たから変わる」

「嘘です！ゴンザエモンが… 加藤船長が死んだなんて！酷い嘘を言わないで下さい  
!!」

拓人「弁天丸船長の交代は、ネットに載ってる筈だが？」

「あなた… 誰なの？」

拓人「加藤拓人だ。そして…」

茉莉香「私が船長の加藤茉莉香、娘です」

「…」

その一言を聞いた密航者は黙る。

拓人「クーリエ、向こうに弁天丸船長の交代の情報を見せてやってくれ」

クーリエ「了解〜」 p i p i p i

俺がそう言うと、クーリエがドッキングコントロールに向けて情報を送る。

「…いきなり嘘だなんて言っでごめんなさい。お亡くなりになっていたなんて知らな

かったもので... 私はプリンセス、グリユーエル・セレニティ。セレニティ星王家の、第七正統皇女です」

クーリエ「ほえ？」

百眼「えっ？」

『え〜!?!』

皆驚きを隠せなかった。それはそうだろ？王族だぞ王族!!

茉莉香「えっ？え？... 誰？」

茉莉香だけは分かっていたいなかったみたいだ...

拓人「雲の上の王族様だ。銀河帝国星王家よりは古くないが、信用できる家系で、

00代以上遡れる名門一族だ」

茉莉香「何でそんな人が密航なんか」

ミーサ「誰か、セレニティ王家の最新情報を知っている人は？」

百眼「王族なんて、ニュースのヘッドライン位しか見たことね〜ぞ？」

ケイン「関係ね〜もんな」

ケインが苦笑いしながら言う。確かに、王族の事なんてニュース位しか知らんわ

な...

拓人「情報収集を頼む。茉莉香は引き続き話を」

茉莉香「え〜：〜 コホン！お待たせしました、プリンセスグリューエル・セレニティ。船長の加藤茉莉香です。変ですね、何度も名前ばかり名乗って。茉莉香って呼んでください」

グリューエル「：〜 私も、グリューエルとお呼びください」

茉莉香「え〜つと、宜しければ、そちらのカメラの前にある障害物をどけて頂ければ、貴方の顔を見せてもらってもいいですか？私の顔も見えますし、おあいこかな〜？なんて」

グリューエル「：〜」

グリューエルは暫く黙った後に、カメラの障害物を退かしてくれた。すると、そこに映ったには、確かに皇女と言える姿の女性がいた。

一同「お〜！」

グリューエル「初めまして茉莉香、私がグリューエルです。船長の許可なく乗船したことをお詫びいたします。乗船を許可頂けますか船長？」

茉莉香「あ！ええ、乗船を許可します。ようこそ弁天丸へ」

百眼「本物だ。プリンセスグリューエルセレニティ、王族公表のIDと彼女のデータが一致した」

拓人「正真正銘本物か：〜」

俺と茉莉香が頷く。

茉莉香「それではグリユーエル、只今ご案内の為の自員を向かわせます。え〜つと：あ！シュニツツアー、大至急ドッキングコントロールに行つて、彼女をエスコートして差し上げて」

シュニツツアー「俺が!?!この俺が船内のエスコートつて：：初対面でそれは不味いだろ?」

茉莉香「多少驚くかも知れないけど大丈夫だよ。私だつて平気だつたんだから」

シュニツツアー「いや：：断る!!」

茉莉香「ええ〜：：しようがないな」

シュニツツアーが断る。と言うかシュニツツアー、お前そこまで嫌なのかよ：：

拓人「分かった、俺が迎えに行く。副船長だし問題ないだろ?」

茉莉香「ええ〜！拓兄が行くの!?!」

拓人「仕方ないだろ?と言うか、プリンセスを何処に案内するんだ?こんな船に貴賓室なんてものは無いだろ?」

ミーサ「こんなとは侵害ね。とは言え、確かにそうね」

茉莉香「どうしよ〜！船長室は駄目。食堂は：：もつと駄目!!」

拓人「考えておけよ。取り敢えず、ブリッジに案内するぞ！少しは片付けておけよ、

クーリエに三代目」

三&ク「は〜い…」

俺は、汚している原因の二人に言っておく。ドッキングコントロールに向かいプリンセスを迎える。

拓人「開けますよ？」

ドッキングコントロールの扉を開ける。

グリュエール「ご足労ありがとうございます」

拓人「こちらこそ、汚い船ですがプリンセス？」

グリュエール「拓人様も、私の事をグリュエールとお呼びください」

拓人「分かった。なら、俺の事も拓人と呼んでくれ」

グリュエール「はい♪」

拓人「いい返事だ♪」ナデナデ

グリュエール「／／／」

俺はいつもの癖で、グリュエールの頭を撫でてしまった。

拓人「こ、これは無礼を…」

グリュエール「い、いえ…」

拓人「それでは、エスコートさせて頂きます」

グリユール「は、はい／＼」  
顔を真っ赤にしているグリユール。と言うか拓人よ、また貴方はフラグを立てて回収したのか・・・

拓人「連れてきたぞ？」

茉莉香「お疲れ…様…」

茉莉香は、あらわれた拓人に驚いていた。それはそうだ、拓人と一緒にやって来たグリユーエルが、顔を真っ赤にしながら手を握っていたのだから。

グリユーエル「初めまして。グリユーエル・セレニティです。汽船への密航、お許しください。弁天丸の乗船ありがとうございます」

茉莉香「ほわ…」

茉莉香が、グリユーエルに見とれていた。

ミーサ「おほん」

茉莉香「ああ！改めまして、船内の茉莉香です。プリンセス…じゃなくて、グリユーエルよね？貴方の乗船を歓迎します」

グリユーエル「ありがとうございます船長。認めない訳にはいきませんね。顔立ちがお父上にそっくりです」

茉莉香「そうなんですか？私は父の事を知らなくて。父はどんな人でしたか？」

グリユーエル「…素敵な方でした」

三代目「お…」

百眼「おいおい…」

グリユーエル、物凄い苦笑いだな。

グリユーエル「亡くなられたと知らなくて、失礼をお詫びいたします」

茉莉香「ああ... いえ... この雰囲気苦手だな... そうだ!クルーを紹介しますね」

グリユーエル「はい♪」

茉莉香「まずは... 操舵手のケイン・マクドウガルです」

ケイン「お会い出来て光栄です♪」

ケインは、大袈裟に挨拶する。

茉莉香「あははは... はいはい」

茉莉香は適当にあしらう...

茉莉香「船医のミーサ・グランドウツド」

ミーサ「だいぶストレスが溜まってるわね。痩せすぎよ?」

グリユーエル「よく言われます」

茉莉香「電子戦担当のクーリエ」

クーリエ「ごめんなさい。座ったままで」

グリユーエル「構いません」

茉莉香「戦闘指揮担当のシュニツツアー。サイボーグなの」

シュニツツアー「!?」バツ

シュニツツアーは紹介されると、敬礼をする。

グリユーエル「まく凄い♪」

シュニツツアー「・・・」

シュニツツアー、顔には出てないけど、かなり嬉しいんだな。

茉莉香「航法士のルカ」

ルカ「見える・・・」

拓人「見えなくていい」

茉莉香「リーダー、センサー系担当の百眼」

百眼「初めまして、お姫様」

茉莉香「機関担当の三代目」

三代目「どうも」

茉莉香「私が、船長見習いの加藤茉莉香です。そして・・・」

拓人「さつきも紹介したけど、副船長見習いの加藤拓人だ」

ミーサ「船長！それに副船長も、お客様のいる前で、自分の事を見習いだなんて・・・」

拓人「逆だミーサ、大切なお客様だからこそだ」

茉莉香「それに、その内ばれちゃうしね♪」

ミーサ「はいはい」

茉莉香「以上が、弁天丸の主な乗組員です。重要な事を決めようと思ったら、ここに

いる皆に相談します。」

拓人「安心しろ。皆先代で働いていたプロだ。ま、そのプロが見事にプリンセスにやられてるんだけどな♪」

クーリエ「あう...」

茉莉香「あはは...」

グリユーエル「... 私は、この宇宙で海賊たるあなた達にお願いの義があつて参りました。私掠船免除を持つているあなた方に...」

茉莉香「お願いってなんですか？」

グリユーエル「それは... 幽霊船を... さ迷える黄金の幽霊船を見つけてほしいのです!」

拓人「黄金の幽霊船?」

驚いてる俺を他所に、百眼が話す。

百眼「お話し中に申し訳ない。セレニティ星系王宮政府が、プリンセスグリユーエル・セレニティの行方不明をたつた今発表した。犯罪に巻き込まれた可能性も含めて行方を捜査中」

グリユーエル「そんな... 私は自分の意思でここに来ました!!」

茉莉香「ミーサ、今回の仕事の以来は何処から?」

ミーサ「いつも通りの、ハロルドロイド保険組合からよ」

茉莉香「シンプオニー・エンジェルについてた護衛艦の所属は？」

クーリエ「セレニティ星系防衛軍。護衛艦三隻って言ったらシヨボいけど、王族の護衛艦だったのね」

ミーサ「保険組合のシヨウさんへ通信。事実関係を確認して」

百眼「お姫様の件はどうする？」

ミーサ「聞かれたら答えて。聞かれなかつたら、答えなくていいわ。王宮相手の反逆罪なんてゴメンだわ」

グリユーエル「そんな心配はありません…。この船には…。私自信で意思で乗り込んだのです！反逆罪なんて…。そんな…。」

茉莉香「大丈夫、悪いようにはしないわ。プリンセスグリユーエル。貴方の依頼！ 弁天丸船長の加藤茉莉香が、確かに引き受けました」

茉莉香は一人で勝手に依頼を引き受けていたのであった。

—————

セレニテイ星系皇女が乗り込んでから翌日。ここ白鳳学院は騒いでいた。理由は…

男子生徒「おい拓人!!聞いたか? 中等部に来た皇女の話!!」

拓人「ああ…」

男子生徒「中等部であれだけのオーラ!そこら辺の有名女子達より貴賓があるぞ!!」

拓人「喧しいな陽介… 確かに皇女が来たことには驚くけど、そこまで騒ぐ事か?」

陽介「なんだよその態度。まるでもう話したことがあるような言い方だな?」

拓人「はく…」

なんでコイツは、普段は抜けてる癖にこう言うときは鋭いんだよ思う。その時、放送

が流れる。

放送『高等部、1年雪組の加藤茉莉香さん。高等部2年雪組の加藤拓人さん。至急高等部保健室にお越しください』

陽介「お前呼び出しだぞ？」

拓人「だな。行ってくる」

俺は、保健室に向かった。

拓人「ミーサ入るぞ？」

ミーサ「いらつしやい。もうすぐ船長も来るはずよ？」

茉莉香「お待たせ」

ミーサ「待ってたわ。それにしても、上手く考えたわね♪木を隠すなら森の中って昔から言うけど、隠し場所を相手に公言してしまえば、相手の動きを牽制出来る」

茉莉香「そりゃ考えたけど、その後が早すぎ。昨日の今日で制服って作れるのね。フルオーダーでしょう？」

ミーサから、珈琲を受け取り聞く。

ミーサ「いいじゃない♪船長の迅速な判断に、関係者一同一生懸命答えたんだから♪」  
茉莉香「ふん…で、話って？」

ミーサ「特書よ」

茉莉香「特書？」

ミーサ「裏ルートで、セレニティ王宮政府から海明星政府に届いたの」 p i p i p i  
拓人「いつ届いたんだ？」

ミーサ「聞いたくれると思つたわ♪これよ。通信記録によると... 船長達が海明星に  
帰つてからの発信時刻になつてる」 p i p i

拓人「保険組合に連絡してからか...」

ミーサ「そう。迅速な判断に迅速な実行、計らずも中々の連携プレーじゃない♪」

茉莉香「それにしても、セレニティの対応が早すぎない？なんと言うか... 焦げ臭い  
？」

ミ&拓「「きな臭いよ（だ）、それ言うなら」

茉莉香「ちえく／／／」

俺達二人に突つ込まれて、穂を赤く染める茉莉香。つてか、間違えるか普通...

茉莉香「まさか、そのきな臭いところ、私に直接グリニューエルに聞き出せて... そ  
う言うこと!？」

ミーサ「ご名答♪そこまで考えられる様になつたつてのはいいことね♪花丸をあげる  
わ」

茉莉香「私はテストで花丸がほしいな...」

ミ&拓 「それは無理」

茉莉香 「だよねく……」

俺とミーサのツツコミに愕然とする茉莉香であった……そして翌日、俺達は走っていた

茉莉香 「来週まで無かったんじやないのお仕事！」

ミーサ 「ごめんなさい、急で」

茉莉香 「まだあれから5日もたつてないのよ！」

俺達は車に乗り込む。

ミーサ 「たう星系の中つて話よ。夕食までには帰れるんじやない？」

茉莉香 「ケインは？」

ミーサ 「貴方の担任でしょ？」

茉莉香 「連絡あつたのホームルームの後だったから……あ、来た」

走ってくるケインに向けて車を出すミーサ。ケインも上手く乗り込む。

ケイン 「先回りされると面倒だ！急いでくれ!!」

ミーサ 「遅刻してよく言うわね！」

ケイン 「厄介なのに捕まりかけてたんだ！」

拓人 「厄介？」

ミーサ「!?」

ミーサは突然急ブレーキをかける。

茉莉香「ミーサ運転乱暴!!」

ミーサ「このゲート、いっつも開くの遅いんだから!!... 空港まで跳ばして20分か」

拓人「仕方ない... グレードアップ液!!」

茉莉香「なんなのそれ？」

拓人「まゝ見てな♪」

俺はミーサの車にグレードアップ液を吹き掛ける。すると、その時...

「失礼します」

なんとグリューエルが乗り込んできた。

ケイン「あっちゃや」

ミーサ「どういう事？」

ケイン「知らねくよ! 船長を先に出してから、教室出たら連れてけっってお姫様が...」

グリューエル「緊急のお仕事ですよね? たう星系周辺の不審艦の動向調査。護衛艦隊

司令部経由の依頼。違いますか？」

茉莉香「そうなの？」

ミーサ「仕事内容は移動中に話そうと思ったのに... その通りよ」

グリユーエル「急ぎましょう！詳しい話は移動中に♪」  
そしてゲートが開く。

ミーサ「跳ばすわよ!!」

グレードアップした車を跳ばして、空港に向かう。予定では20分だが、13分で空港に到着した。

ケイン「じゃ、お先に♪」

ミーサ「頼んだわよ。拓人もありがようね♪貴方のお陰で予定より早く着いたわ♪」  
拓人「よかった。で、二人とも、もう着いたぞ？大丈夫か？」

俺は茉莉香とグリユーエルに声をかける。二人は力が抜けたらしく、俺に寄り添って  
いた。

グリユーエル「移動中が、こんなにも厳しいものだと思いますでした…」

茉莉香「話なんか、出来ないに決まってるじゃない…」

グリユーエル「私が、浅はかでした。すみません」

茉莉香「いやいや」

グリユーエル「で、お話は… シャトルの中で宜しいでしょうか？」

茉莉香「OK… OK」

茉&グ「があ…」

何故茉莉香達がこうなったかと言うと、ミーサが高速に入ったと同時に、アクセルを思いきり踏んだ為である。普通なら、だいたい時速120Kmが普通だが、グレードアップ液をかけている為、時速200以上は出ていた筈だ。と言うか、グレードアップした車を普通に運転するミーサは凄いなと思います。取り敢えず、俺は茉莉香を背中に背負いグリユーエルをお姫様抱っこでシャトルに乗り込んだ。シャトルに乗り、弁天丸にいる百眼に通信を繋ぐ。

百眼『改めて、護衛艦隊司令部からの依頼を説明する。予測座標は省略するが、たう星系外円ギリギリに所属不明の艦が出現が予測されるので、招待を調査するようにこの事だ』

茉莉香『プリンセスは、それがセレニティ星系軍の軍艦だって言ってるわ。王宮から、黄金の幽霊船の情報を持ってきたって』

百眼『なるほどね。仮想的でも、敵対関係でもないとは言え、作戦行動中の他の軍隊の船が、予告もなしに乗り込んだとしたら、護衛艦隊としては対応せざるおえない。：：大事にはしたくない』

茉莉香「海賊の出番ね」

百眼『問題は、出現する船が一隻じゃない。：：しかも戦闘状態にあると言うことを視察している。つまり、弁天丸は偵察だけじゃなく！戦闘にも巻き込まれる可能性がある

と言うわけだ」

茉莉香「… 戦闘」

戦闘があるかもと聞いて茉莉香が、真剣な顔になる。そして弁天丸に到着し、茉莉香と一緒に着替えてブリッジに向かう。ブリッジに着くと、皆が楽しそうにグリューエルと話している。

茉莉香「ここでも一緒か…」

百眼「取り敢えず、プリンセスから色々と言明を聞いてた」

拓人「その割には楽しそうだな♪一人を覗いて…」

ケイン「はは… 仕方ないさ」

茉莉香「で、何処まで説明してもらったの？」

クーリエ「簡単に言うと、どうやら黄金の幽霊船捕獲の為の調査データが足りなさそうだなと思つたプリンセスが、王宮に連絡メッセージを送つたとこまで」

茉莉香「えっ!?! 王宮に!! 直接ですか？」

グリューエル「はい♪セレニティの王族に伝わる、秘密の方法を使って」

茉莉香「秘密の!?! まく弁天丸に密航出来ちゃう位だから… なんでもありか」

拓人「さすがのクーリエも、王族には勝てないみたいだな」

クーリエ「うう〜副船長意地悪だよ〜」

拓人「で、何を王宮にお願いしたんだ？」

グリユーエル「黄金の幽霊船に関する追跡資料を王宮から持ってくるように言付けました。本来なら私が持つてくるべき情報でした。準備不足をお詫びいたします」  
そう言うのとグリユーエルは俺達に頭を下げる。

茉莉香「いやいや！寧ろありがたいと言うか、本気が利くねグリユーエル♪」

グリユーエル「あゝ／＼／＼その船長服と副船長服... 素敵です」

茉莉香「えっ!?!これ!?!」

拓人「そうか？」

グリユーエル「はい！とつてもお似合いです！私も着てみたい... です」

一同「おゝ!?!」

百眼「よかつたな♪船長、副船長!!」

拓人「へいへい、さっさと持ち場に戻れ」

俺は適当にあしらい、皆を持ち場に戻す。すると！ルカから情報が入る。

ルカ「いつもより... 風が荒れている。そろそろ来るわよ？」

茉莉香「弃天丸、戦闘体制」

ミーサ「心配ね、船の事。」

グリユーエル「えっ?」

ミーサ「戦闘状態のまま現れるなんて聞かされちゃうね」

グリユーエル「私は：：セレニティを信じています」

ミーサ「あの二人も信じてあげて」

拓人「そろそろか：：」

クーリエ「来ましたよ！前方に空間微動をキャッチ。出てくるよ」

百眼「動力な軍用級のタッチダウンだ！パターン一致。この間お相手したセレニティ  
防衛艦隊のコーバック級!!」

茉莉香「!?」

百眼「ちよつと待て。エネルギー放射がちよつと多い。損傷してる？レーダー波確  
認」

グリユーエル「!?」

茉莉香「やっぱり：：戦闘」

クーリエ「周辺宙域に多数の微動キャッチ」

拓人「やっぱりか」

グリユーエル「そんな！セレニティの宇宙船が何と戦っているのですか!?!」

茉莉香「いま：：分かります」

百眼「軍艦級多数!!」

損傷したセレニティの船の後ろから続々と出てくる他の船…

拓人「何処の船だ!!」

クーリエ「識別完了。全艦セレニティの防衛軍よ。戦艦1、護衛艦4」

グリューエル「どうして…」

百眼「船長、副船長どうする!!」

クーリエ「五隻とも、高エネルギー反応と戦闘用レーダービシビシ放射中。皆ヤル気満々よ」

ミーサ「本気ね♪」

拓人「トランスポンダー発信!」

ケ&百「ん?」

クーリエ「トランスポンダー発信開始します。それからどうするの?」

茉莉香「レーダーもセンサーも総動員。今の状況を出来るだけ記録。どういう訳か分からないけど、ここに弃天丸がいるってことを教えてあげて!」

百眼「へっ♪了解、戦闘記録開始。念のためバックアップもしとくか」pipipi

クーリエ「正解♪セレニティ防衛軍から、強力な電子妨害」pipipi

百眼「やつぱりな」

茉莉香「真っ先に出てきたコーバック級は?」

百眼「そつちに出すぜ」

百眼からデータを貰う。

百眼「たう星側に高加速開始。海明星に向けて最短距離の方向」

拓人「逃げるコーバック級。追うのが五隻。戦艦が1、護衛艦4」

拓人「目撃者がいるとなったら、次に来るのは妨害、そして口封じだな」

ミーサ「どつちにつくの？」

拓&茉「宇宙海賊は正義の味方♪」

茉莉香「グリユーエル！」

グリユーエル「は、はい!？」

茉莉香「さつき私の船長服着てみたいって言つてたよね？」

グリユーエル「えっ?」

拓人「海賊つてな、軍隊に準じるって事で制服を着て任務をしなくちゃいけない。」

茉莉香「だから貴方には、制服を着てお仕事をしたらもらいます♪」

三代目「いよ!海賊皇女♪」

茶々を入れるな三代目:..

グリユーエル「そ、それはどういう:..」

茉莉香「ほら♪セレニティの船とは通信可能?」

クーリエ「・・・」ピクピク

クーリエが、茉莉香の言葉に耳をピクピク動かす。

拓人「出来なくても出来るだろ？優秀なクーリエさん♪」

クーリエ「当たり前だよ！思考線のビームを狙い打ちすれば、耳元でガミガミOKよ♪よし、準備できた」

茉莉香「さくお姫様♪」

拓人「お前の兵隊に言つてやれ」

グリュエール「・・・はい♪」

クーリエ「通信ビーム狙い打ち」

シュニツァー「六隻全てロツクオン・・・発射」

通信ビームを全艦隊に発射する。

グリュエール「貴女方は、ここで何をしているのです！セレニティ王家の正当な継承者である、グリュエール・セレニティの名において命令します!! 栄光あるセレニティ！ 栄光あるセレニティ防衛軍宇宙艦隊は、今すぐにこの戦闘を中止しなさい!! さもなければ、王家に対する反乱とみなします!! 以上!!」

クーリエ「以上つと」 p i

拓人「・・・お疲れ」ポン

俺はグリユーエルの頭を撫でてやる。

グリユーエル「ちよつと……ドキドキしました」

茉莉香「上等♪状況は？」

クーリエ「電子妨害止んだわ」ポキッ

百眼「各艦のエネルギー値も下がってる。戦闘機能はことごとく停止。まさに恭順の意ってヤツだな♪」

ミーサ「しつけないいい軍隊で助かったわ」

クーリエ「交信要請が二件」

茉莉香「二件？」 pipi

クーリエ「一件は戦艦から。もう一件は、最初のこうばく級から。戦艦からの交信は艦長命令みただけ…… 枢密院侍従長？」

グリユーエル「オートフです……」

茉莉香「枢密院侍従長、オートフ・シフ・シドー。ご注文のドレスが仕立て上がりしましたので、お届けにあがりました。ご試着を願います…… どうすればいい？」

グリユーエル「オートフの船に着けていただけますか？ セレニテイの船に対する説明と要請は、正統王家に対するこの私が行います。通信回線を開いてください！」

ミーサ「それはあまり上手くないわね」

拓人「だな。セレニティ艦隊は、身内の戦闘とは言え、他所の星系の絶対防衛圏内まで殴り込んで来てる。こっちから、余計な情報を与えるよりは、勝手に相手に解釈される方が…」

茉莉香「こっちが有利になる！」

ミーサ「そう言うこと♪」

拓人「向こうも事態をハッキリさせたくないだろう」

茉莉香「高度な政治的判断ってやつか。と言うわけで、ゴメンねグリューエル。ここから先は、うちの乗組員に任せてくれるかな？」

グリューエル「お願いします。私も、決して外交に手だてに明るい訳ではありませんので」

拓人「なら… 戦艦の方にはプリンセス名義で、そのまま待機するように伝えろ。」

クーリエ「了解〜！」アム

拓人「で、最初のこうばく級の侍従長には、プリンセスがドレスを受け取りに行くから、準備するように伝えてくれ」

クーリエ「ふぁ〜い」モグモグ

拓人「ケイン、コースは大丈夫か？」

ケイン「はい、迅速に向かっています」

俺は指示を出す。

茉莉香「そう言えば…ゴメンね。あんまり船長らしいところ見せれなくて。どちらかと言えば、拓兄の方が船長っぽいんだよね」

グリューエル「そんなことありません！二代に渡って海賊の船長とお知り合いになれるなんて♪これからお願ひします」

茉莉香「こちらこそ」

そして、ヨートフが乗っている船に近づきドッキングする。

拓人「さて、付き添いは俺だけでいい。シュニツツアー以降戦闘員は、弁天丸の護衛についてくれ」

シュニツツアー「了解した」

素晴らしい残して、俺と茉莉香、そしてグリューエルはドッキングコントロールに向かった。

グリューエル「ヨートフ…」

ドッキングコントロールにモニターが映る。やって来たのは二人

茉莉香「誰だか確認できる？」

グリューエル「侍従長のヨートフです。間違いありません。後ろは、近衛隊のキャサリン小隊長…まさか。！あの二人船を強奪して…」

茉莉香「あの二人、そんなに強いのか!」

グリユーエル「はい... かなり」

拓人「へー、モニター越しだからハッキリとは分からないが、ま、勝てるだろ。それより...」ゴソゴソ

俺は四次元ポーチを探る。

拓人「ポケット信号機!」

グリユーエル「なんですかそれは?」

拓人「すぐに分かるよ」

クリーエ『いらっしやっただわよ?』

茉莉香「扉を開けて差し上げて」

茉莉香が指示し、扉を開ける。

ヨートフ「セレニティ正統王家枢密院侍従長、ヨートフ・シフ・シドーです」

茉莉香「船長の加藤茉莉香です」

拓人「副船長の加藤拓人だ。悪いけど、一応それなりの対応をさせてもらう」ポチツ

俺は、ポケット信号機を押し相手の動きを止める

ヨートフ「これは...」

拓人「悪いね。グリユーエルが言うから心配はしてないけど、一応ね」

ヨートフ「なるほど……あなた方なら、姫をお任せできます」

グリユーエル「あなた方が来たと言うことは……」

ヨートフ「王宮は平穩です。姫が留学されてから、王宮は平穩なので、一番役立たずな二人がやって来た次第です。」

グリユーエル「そうですか……」

ヨートフ「それでは、姫を頼みます」

ヨートフから荷物を受け取り、引き上げていく。そして、グリユーエルから黄金の幽霊船の情報が入っているチップ？らしき物を受けとる。

拓人「さて……百眼！データの解析にどれくらいかかる？」

百眼「そうだな……1週間位か？」

拓人「1週間か……なら、明後日から始まるキャンプは問題なさそうだな」

茉莉香「忘れてた！明後日から全学年で、一泊二日のキャンプがあるんだった！」

ミーサ「そうね……ま、解析が終わったら連絡するわ♪」

拓人「頼んだぞ百眼」

百眼「分かった！」

取り敢えず、俺達は明後日から始まるキャンプの準備をしに帰るのであった

## キャンプに出発

グリユーエルの依頼を受けてから2日後、今日は全学年で一泊二日のキャンプが始まる。

教頭「えーそれでは、学院長からのお話です」

学院長「オホン！本日は天候にも恵まれて、素晴らしいキャンプ日和となりました。今回のキャンプは、全生徒が協力し自然の中で過ごすと言うことです。ゆえに・・・」

学院長の話はまだ続く。

拓人「毎回学院長の話は長いな」

リン「だな。早く終わらないかな？」

拓人「そう言えば、班分けはどうなってるんだ？」

リン「拓人は海賊業務でいなかったよな？班は、アタシとジェニー、そして茉莉香とチアキとお姫様の計6人だ」

拓人「班も全学年合同なんだな」

リン「ああ」

拓人「ん？ちよっと待って・・・確か班のメンバーは、テントに泊まるメンバーだった

ような・・・」

リン「そうだぞ？」

拓人「マジか!？」

俺は頭を抱えた。なんでこの学院は普通に男女を同じテントに泊まらせるのを許可するかね・・・

拓人「おい陽介」

陽介「なんだ拓人？」

拓人「なんで俺をそっちに入れなかったんだ！」

陽介「いや・・・最初は俺達もお前を誘うつもりだったんだが」チラッ

そう言いながら、陽介はリンを見る。

陽介「ランブレッタの奴に、物凄い剣幕でお前を取られたんだよ！」ヒソヒソ

拓人「なんと言うか・・・すまん」

陽介「いや・・・俺も粘れなかったから」

リン「おっ！もう出発だぞ!!」

拓人「じゃあな」

陽介「ああ」

俺は陽介と別れて、自分の班に向かう。

ガイド「それでは、班ごとにバスに乗ってください」

拓人「班ごとだと!？」

この世界では、班ごとにバスに乗り込むらしい。俺がいた前の世界ではあり得ないぞ？

茉莉香「拓兄〜！早く早く！」

拓人「落ち着け茉莉香。叫ばなくても聞こえてるから」

ジェニー「これから2日間、宜しくね♪」

チアキ「よ、宜しくお願いします！」

拓人「挨拶もそこそこに、早く乗り込むぞ」

5人「は〜い！」

俺達はバスに乗り込む。余談だが、誰が俺の隣に座るかで揉めたのは言うまでもない。公平にじゃん拳で勝負を決める事にしたらしい。行きはジェニーで帰りがチアキに決まった。

ジェニー「それじゃあ、隣失礼するわね♪」

拓人「ああ。ところで、向こうに着いてからなにするんだ？」

ジェニー「え〜つと、向こうに着いたら目的地まで歩いて、その後はアスレチックをするみたいよ？で、翌朝はラフティング」

拓人「普通だな」

ジェニー「それはそうよ。あくまでもこれは、全学年の交流みたいなものよ」

拓人「そうだったな。食事は各自自分で作るんだろ？」

ジェニー「ええ」

拓人「材料とか？」

ジェニー「それなら、私達が買っておいたわ」

拓人「それは助かる」

俺はそこで、疑問に思う。

拓人「ところで・・・お前ら誰か料理出来るのか？」

ジェニー「任せなさい♪夕食は私達女性陣が作るから。拓人は休んでいいわよ？」

拓人「なら、そうさせてもらおうよ」

茉莉香は、料理出来ないのは知ってるけど、他の四人は・・・

拓人（ジェニーとグリユーエルは、お嬢様だから料理はしないだろう。となると、リオンとチアキの腕前に期待するしかないな）

俺はこの時は、そんな甘い考えをしていたのであった。目的地に到着し、荷物を置いてテントを張りアスレチックを楽しむ。そして、運命の夕食の時間がやって来た・・・

拓人「本当に手伝わなくていいのか？」

リン「任せとけって！」

茉莉香「美味しいカレー作るからね」

グリユーエル「私も、微力ながらお手伝いいたします！」

こうして料理に取りかかる女性陣。

拓人「……………」

陽介「おい拓人」

拓人「…………陽介か」

陽介「お前羨ましいな！あのお姫様だけじゃなく、ジエニー先輩にクリハラの手料理だぞ!!もつと喜べよ!!」

拓人「なんなら、味見していくか？」

陽介「いいのか？やっぱ持つべきは友達だな♪」

陽介は嬉しそうに俺の隣に座る。しかし何故だ？嫌な予感しかないのは…

茉莉香「お待たせく♪」

暫くすると、茉莉香達がカレーを持ってやって来る。

リン「あれ？砂無意じゃないか？」

拓人「ああ、流石に男が俺一人は辛いから、飯だけでも一緒にと思っとな」

陽介「どもつす」

ジェニー「別にいいわよ？ 沢山作ったから、遠慮なく食べてね♪」

目の前に置かれるカレー。見た目は普通だが… 何故か胃が受け付けない。

陽介「んじや、いっただつきまゝす♪」パクツ

陽介は躊躇なくカレーを口に含む。しかし、それが間違いだった

陽介「グハツ!!」

陽介は倒れた。

チアキ「ちよっ!!?」

茉莉香「えっ!!?なに!!?」

拓人（マジか!!）

陽介「なんじやこりやゝ!!」

思わず叫ぶ陽介。

リン「ど、どうしたんだよ砂無意!!」

陽介「なんだこのカレー!! ジャリジャリして、それでいて生煮えの野菜や肉!! 俺達は

野生の動物じゃねゝ!!」

リン「そこまで言わなくていいだろ!!」

ジェニー「少し失礼ではなくて?」

拓人「いや… 悪いけど、陽介の言う通りだ。そもそも、お前達味見したか?」

一同「してない(ませんわ)」

声を揃えて言う。

拓人「・・・最悪だな。自分達で食ってみる」

俺がそう言うと、チアキがカレー？を口に含む。

チアキ「・・・すみません」

すぐに謝るチアキであった。

拓人「はく・・・俺が作る。材料はまだあるのか？」

グリユーエル「それが・・・明日の分しか残っていないのです」

拓人「仕方ない・・・」

俺は四次元ポーチから道具を出す。

拓人「えくつと、確かこの辺に・・・あったあった♪グルメテーブルかけ♪」

俺は、グルメテーブルかけを木のテーブルに敷く。

拓人「好きな物を言え。そうしたら出てくる」

茉莉香「そうなの？」

拓人「ああ。例えば・・・カツ丼」

俺が言うのと、カツ丼が出てくる。

グリユーエル「凄いですわ!!」

ジェニー「相変わらず驚かされるわね」

リン「じゃあアタシは、ステーキ♪」

茉莉香「私はミートスパゲッティ」

チアキ「焼き魚定食とパフエ」

拓人「パフエ好きだな♪」

チアキ「／／／」

グリユーエル「私は、オムライスと言うものを」

ジェニー「私は・・・カルボナーラで」

全員が言い終わり、出てきた物を食べる。そして後片付けは女性陣に任せる。失敗したカレーも含めて。因みに、陽介はミーサの所に行つて胃薬を貰つていた。それを見たミーサが、かなり同情していたの言うまでもない。えっ？前の話でジェニーが弁当を作つてきてるだつて？あれは、専属のシェフに作つてもらつたんだつてさ・・・

拓人「後の予定は・・・肝試し？」

リン「先生を含めた全員でやるんだつてさ」

拓人（すると、ケインやミーサも入るのか・・・ミーサ大丈夫か？）

以前、俺が怪談を茉莉香達に話していたら、耳を塞いでるミーサがいたのだ。どうやら、ミーサはお化けが苦手らしい。

拓人（やっぱり…… 顔に出してないつもりみたいだが、思いつきり顔引きつってるし……）

生徒会長「はい、それでは生徒の皆さんと職員の方と先生の先生方はこの箱に入ったクジを引いてください。それで、同じ番号の方とペアを組んで下さい」

俺達は、クジの入っている箱に手を入れて引く。

拓人「俺は…… 25番か。相手は……」

茉莉香「拓兄〜！」

ジェニー「拓人は何番なの？」

拓人「俺は25番だ」

リン「あちやく…… 今回はアタシはハズレか」

ジェニー「残念ながら私もハズレね」

茉莉香「私もだよ〜」

グリューエル「私もです」

チアキ「……」

チアキだけは黙っているが、どうやらハズレたらしい。

拓人「そつかくお前らじゃないか。じゃあ俺の相手は誰だ？」

俺が相手を探していると、ミーサが声をかけてきた。

ミーサ「あ、あら… 皆集まってるわね…」

ミーサさん、思いきり顔が真っ青なんですけど…

拓人「ミーサか。いや、皆で番号の確認をしたんだが、皆違ってな」

ミーサ「そうなの。因みにアタシは25番よ」

拓人「なら俺の相手はミーサか」

ミーサ「拓人がペアなのね…」

5人「…」

なんだろう… 俺のペアがミーサと分かった瞬間に、茉莉香達から物凄い殺気らしきものを感じるのだが…

生徒『番号25番の方は、スタートしてください』

拓人「俺達の番か。じゃあな、ゴールで会おうな」

俺とミーサは、出発する。

拓人「結構暗いな。それに、思ったよりトラップも本格的だな」

俺は、意外と本格的な脅かすトラップの完成度に驚いていた。しかし、それ以上に驚いたのは…

ミーサ「ちよ、ちよつと拓人！もう少しゆっくり歩きなさいよ!!」

普段は凛々しく指示を出したりしている姿しか見てないミーサ。今の姿を見たら誰

がそれを思うのか……

ミーサ「それにしても、随分と暗いわね……」

拓人「じゃないと、肝試しにならないだろ？」

俺がミーサにツツコミをしてると、突然草むらから物音がする。

ミーサ「!?」ビクッ

ミーサが俺に抱き付いてくる。

拓人「ど、どうしたんだよ？」

俺は、ミーサの以外な行動にドキドキしていた。

ミーサ「い、今……草むらから、変な音が……」

ミーサが震えながら、草むらを指差す。すると、草むらから学院が仕掛けたトラップが発動し、お化けの人形が飛び出る。

ミーサ「きゃああああああああ!!!」

拓人「落ち着けミーサ!!」

ミーサ「もういや〜!!」

拓人「大丈夫だ。な?よく見ろ、人形だ」ナデナデ

ミーサ「ふえ?……グスッ」

俺は、ミーサの頭を撫でながら説明する。恐る恐る人形を確認するミーサ。

ミーサ「… 本当ね」

拓人「だろ？で、少しは落ち着いたか？」

ミーサ「ええ／＼／＼」

ミーサは、顔を真つ赤にして答える。… さて、これまでこの話を読んでいる方ならお分かりだろうが、この男、加藤拓人は女性の頭を撫でると、何故かフラグが建設され、そして回収するのである。つまり、頭を撫でられたミーサは、拓人に惚れてしまうのであった。

拓人「怖いなら、俺に掴まれ。なにかあれば守ってやるよ」

出ました！決め台詞!!定番過ぎますが、これでミーサも茉莉香達側に来てしまいました。

ミーサ「… お願いね／＼／＼」

拓人「任された」

ミーサは俺の腕に抱きつき一緒にゴールを目指したのであった。ゴールにつくと、既に他の生徒や先生が到着していた。その中にはケインの姿があった。

ケイン「お疲れ♪」

拓人「なになが『お疲れ♪』だ!!」

ケイン「いや〜♪ミーサがお前に腕を絡めてやって来た時は、さすがに驚くだろう♪な、

ミーサ？」

ミーサ「…。」バチーン

ミーサは、ケインの頬に思いきり張り手を打ち込む。

ケイン「ごはっ!？」

ミーサ「行きましょう拓人」

俺はミーサに腕を引つ張られながらその場を後にした。ケインをそのままにして…

拓人（すまんケイン…。けど、あれはお前が悪い。自業自得だ）

俺は、少しだけケインに同情するが、結局は自業自得なのでそのまま放置する。そして、なんとか無事に肝試しは終了し、各々のテントに戻った。しかし、何故か俺はテントの中で正座をさせられていた。

ジェニー「さて拓人、何か言い分はあるかしら？」

ジェニーが拓人に問い掛ける。その後ろに、何故か不機嫌な茉莉香達がいたのであった。

拓人（5人の後ろに阿修羅が見える…。）

茉莉香「拓兄？話を聞いているのかな？」

拓人「ああ…。」

チアキ「何でミーサ先生と腕を組んでいたか、説明してください…。」

拓人「いや…それは…その…」

リン「まゝ、拓人の事だ、ミーサ先生が怖がっていた時に、甘い言葉をかけながら頭でも撫でたんだろ？」

おつしやる通りです。と云うかリンさん、貴方はエスパーですか…

グリユーエル「とにかく、どうなさいますか？」

ジェニー「そうね…」

俺は、死刑執行を待っている死刑囚の気持ちがかかった気がした…

ジェニー「それじゃあ、拓人を囲んで皆で寝ましよう♪」

4人「さんせく！」

拓人「ちよっ!？」

ジェニー「無論、拓人に意見する権利はないわよ？」

こうして、俺は何も意見できずにいたのであった。

テントでの配置

ジェリ俺グチ

茉

こういう配置になっている。因みに、茉莉香が俺の下に名前があるが、正確には俺の

上に寝るらしい。で、両サイドは俺の腕枕。

拓人（あく、明日絶対に両腕痺れてるわ…）

こうして、俺の1日は終わっていく。しかし、皆が寝静まった後、拓人は一人起きてテントを出る。そして人気のない場所に行く。

拓人「さて、そろそろ出てこい！」

「よく俺達に気づいたな？」

拓人「それだけ殺気を出せば気がつくさ。で、お前達何者だ？」

「へへへ。今から死ぬ奴に名乗る名前なんてないさ」

拓人「目的は茉莉香か？それともグリユーエルか？」

「両方だ。それにドリトルの女を人質にすれば、莫大な金が入るよ」

拓人「なるほど。それを聞いて安心した。心置きなくお前達を殺れるってな！」

「この人数で余裕だな？」

男がそう言う通り、拓人の周りには20人くらいの男達で囲まれていた。

拓人「これくらいで意気がるなよ？」

「舐めやがって！お前ら、ソイツをやっちまえ！」

一同『おおっ!!』

拓人「ここから先は行かせるかよ！」

拓人は、この先にある茉莉香達へのテントへ絶対に行かせないようにしていた。

「おら〜！」

拓人「クソが！」ドゴ

拓人は男達を次々と倒していく。その間当然拓人も怪我をする。しかし、拓人は男達を茉莉香達の所へは絶対に通さなかった。そして…

拓人「ハア…ハア…お前で…最後…だ！」

「ば、馬鹿な!?あれだけいた連中を、一人で倒しちゃいやがった…」

拓人「お前だけは…許さん！」

拓人は男に詰め寄る。すると男は拳銃をとりだす。

「く、来るんじゃないか!こいつが目に入らないのか!!」

拓人「知るか」

拓人はそのまま歩みを止めない。すると、男が拓人に向かって発砲した。

拓人「…」

「あわわわ…」

しかし拓人はそのまま男に歩み寄り、そしてこう言った。

拓人「ぶつばなす気が元々ないから外れるんだ。そのまま永遠に寝てろ！」

拓人は今までにないくらいに、思いつき男を蹴飛ばしたのであった。そして、よう

やく駆除が終わるとミーサとケインがやって来た。

ケイン「これは：：」

ミーサ「拓人！」

ミーサは拓人に駆け寄る。

拓人「コイツらは、茉莉香以外にジェニーやグリユーエルを狙っていた」

ケイン「そうか：： 後は俺達がやっておきますので、副船長は早く戻ってください」

拓人「ああ、そうす：：グッ！」

拓人は戻ろうとして、途中で膝まづく

ミーサ「拓人!？」

拓人「慌てるなミーサ。少しかすただけだ」

ミーサ「でも：： 待ってて！すぐに治療するわ！」

ミーサは急いで拓人の治療を始めた。見ると、拓人の左足に銃弾が貫通していた。

ミーサ「!？」

拓人「貫通してたか：：」

ミーサ「：：」

ミーサは拓人に文句を言いたかったが、まずは治療が最優先だった。そして治療が終わると、ミーサは拓人に抱きついた。

拓人「ミーサ？」

拓人からは、ミーサが自分の胸に顔を埋めてるので、表情が分からない。

ミーサ「無理しないで」

拓人「ミーサ：。」

ミーサ「貴方にもしもの事が起きたら：。」

拓人「悪かったな」

ミーサ「反省してよね？」

拓人「ああ：。」

拓人はミーサの頭を撫でる。そしてお互いいい雰囲気になり、徐々に唇が近づく。しかし、ここでケインが声をかける。

ケイン「おおい：。」

拓&ミ「!？」

ケイン「後始末は終わったが、俺はお邪魔みたいだな：。」

ケインはそう言って拓人達から離れていった。

ミーサ「ケインく！」

拓人「ま、仕方ないさ。これで我慢しろ」チュツ

そう言って拓人はミーサのおでこにキスをして、自分のテントに戻っていった。テン

トに戻って寝る拓人。しかし、拓人は知らなかった。皆が起きていて、自分が戦っていたところを見られていたなど…。そして翌朝・・・

拓人「ううん…。(重い)…。つて、茉莉香が俺の上で寝てるのか。そして両腕も痛い」

俺はジェニー達から腕をそつと抜き、茉莉香を下ろす。そして表に出て空気を吸う。

拓人「んゝ：： 空気が旨いな」

ケイン「おや？ 副船長？ 起床までまだ時間ありますよ？」

拓人「ケインか」

ケイン「全く、昨日副船長が余計な事してくれたお陰で大変でしたよ。あの後ミーサにどれだけ副船長のノロケ話を聞かされたと思ってるんですか」

拓人「知るか。此方だつて色々あつたんだよ！」

ケイン「・・・それもそうですね」

拓人「ああ、あいつら俺を囲むように寝やがって：： お陰で両腕が痺れてるんだよ」

ケイン「うわゝ：： 普通なら嬉しい状況なんでしょうが、あのお嬢様方の相手はごめんですね♪」

拓人「うるせく。んで、ミーサは？」

ケイン「まだ寝てる筈ですよ。何です？ もう既に彼氏気分ですか？」 ニヤニヤ

拓人「・・・」 イラッ

取り敢えず、ケインの顔面に蹴りをいれておく。

ケイン「いつてゝ!!」

拓人「なんなら、もう一発お見舞いしようか？」

ケイン「じよ、冗談だよ冗談!! つか、副船長の蹴りは普通の連中と違うんだから、少

しは加減をしろ!!!」

拓人「これでも加減をした方だぞ? そろそろ戻るよ」

ケイン「ああ、お嬢様方のお守り頑張って下さい」

拓人「うるせく!!」

俺はケインに文句を言いながら、自分のテントに戻るのであった。それから2時間後、起床時間になり朝食の準備をする。今朝は俺が作る。女性陣に作らせると、昨日みたいになりかねないからな。

拓人「米はある。それに味噌と卵に野菜に肉か。殆ど昨日のカレーの材料か…ん、野菜は味噌汁に入れるとして、問題は肉だな。朝からあまり脂っこいのはキツイだろう」となると、さっぱりとした牛肉のしゃぶしゃぶだな。幸いゴマドレはあるし♪」

献立が決まってるから早かった。ご飯は飯盒炊飯なので多少時間はかかったが、無事に朝食の準備が完了する。

拓人「メシ出来たぞ? 皆座れ!」

俺はテーブルに朝食を置く。

拓人「メニューは、野菜の味噌汁と牛しゃぶだ。このゴマドレをかけて食べてくれ」

『いただきま〜す』

皆が俺の作った朝食に手を伸ばす。

チアキ「美味しい」

ジェニー「驚いたわ」

リン「これは、其処らの店より旨いぞ!!」

グリューエル「王家の料理人達より美味しいです♪」

茉莉香「さすが拓兄♪」

拓人「沢山あるからな」

ミーサ「なら、私もお呼ばれてもいいかしら？」

拓人「ミーサにケイン」

ケイン「いや、此方から美味しそうな匂いがしまして♪」

拓人「ま、まだあるし食べてけよ」

ミーサ「ありがと♪」

ミーサが微笑む。俺は少しだけドキツとした。だって、昨日のミーサを見てたらそうなるぞ? しかも、あの上目遣いは迫力半端ない!!

拓人「俺も食うか」

俺も席につき、朝食を食べる。後片付けも終わり、残るはラフティングのみ。

ケイン「え、それでは今からラフティングを行います。係りの人の言うことをしっかりと守ってください。いいですね？」

生徒達 「は〜い!!」

ケイン 「各ポートには、必ず先生が1人一緒に乗り込みます」

拓人 「誰が来るんだ？」

ミーサ 「私よ♪」

茉莉香 「私達のところは、ミーサが来るのね」

拓人 「?」

何故俺が黙っているかお分かりだろうか？ミーサがやって来た瞬間に、茉莉香達から黒いオーラが出ているからである。

作者 『皆さん拓人君に恋する乙女達ですからね〜♪』

拓人 「?」

何やら、変な電波を受信したみたいだが、気にせずラフティングに集中しよう

係員 「それでは皆さん、足元に注意して乗り込んでください」

係員が茉莉香達に手を差し伸べてポートに乗せる。しかし、何故か俺にだけ態度が違  
う気がする。

係員 「それではまず、オールで攻撃《水かけ》の練習をします。こういった感じに、水を弾く要領で行って下さい」

そう言いながら手本を見せる係員。しかし、その攻撃は俺に向けられていた。

係員「次に、川に落ちた場合ですが、慌てずにボートに張ってるロープを掴んでください。それじゃあ……その君、一回落ちてみて」

拓人「は？」

係員「彼女達に手本を見せてあげて（コイツを落としてさっさと行けば、この時間は俺のハーレムタイムだ）」

この係員、最悪な事を考えていた。

拓人「じゃあ、取り敢えず……」

俺はわざと川に落ちる。すると、ボートは突然動き出した。

係員（今だ!!）

係員の思惑通りにボートを出そうとする。しかし、ボートは進まない。

係員「何で進まねくんだ!!」

拓人「ほう……俺を置いて何処に行くつもりだったんだ？係員さん」

係員「!？」

川に落ちていた筈の拓人が、係員の後ろにいたことに驚く係員

係員「うるせく!!お前ばかりいい思いしてるんだ！ラフティングの間だけでも、野郎は要らないんだよ!!」

拓人「本音が出たな。やっぱりお前はそういう奴だったか。茉莉香達を見る視線がや

らしかったからな。反省してろ!! 羊肉《ムートン》ショット!!」

俺は思いきり係員に大技を繰り出す。船の上だから、多少は威力が落ちるが問題ない。

ミーサ「ねえ拓人、アイツをやっつけてくれたのは嬉しいけど…」

ジェニー「ここから先、誰が操縦するの? このボート」

拓人「俺がする」

リン「なら安心だな」

こうして俺達は、無事? にラフティングを終了し、学院に帰ったのであった。

## いぎ、幽霊船捜査へ

キャンプが終了してから三日後、百眼から連絡がありデータの解析が無事出来たらしい。そして今日、全員を集めて話をするらしい。場所は…

拓人「ん？この場所って、親父さんの店だよな？」

俺は場所を知ってるから1人でも行けるけど、茉莉香は…ま、梨理香さんが連れていってくれるだろと思い、俺はそのまま部活に向かう。

拓人「久々の部活だな」

俺はそのまま入ろうとしたら、突然ドアが開いた。

リリイ「加藤先輩ども♪」

1年生「こんにちは!!」

拓人「おう。で、グリユーエルを担いで何処に行くんだ？」

ハラマキ「今からグリユーエルをシユミレーシヨンルームに連れて行くんです♪」

拓人「そうか…頑張れよ」

俺は、ハラマキ達と別れて部室に入る。

拓人「よう」

リン「拓人」

チアキ「拓人さん」

拓人「チアキも来てたのか？あの後、転校していったから驚いたぞ？」

チアキ「スミマセン：。」

拓人「謝るな。そっちにも都合があるんだろうし」

ジェニー「そうね：。そう言えば、茉莉香さん最近テストの成績がよろしくないようですね？」

リン「ああ、見た見た。段々上り傾向だと言つても」

茉莉香「先輩！ハツキングしたんですか!？」

ジェニー「頑張りましょうね茉莉香さん♪勉強にクラブに海賊に♪」

茉莉香「はい：。頑張ります」

チアキ「本当に頑張つてよ」

拓人「だな」

俺は茉莉香に一声かけてから先に家に帰る。

拓人「ただいま」

梨理香「お帰り」

拓人「多分、梨理香さんにも連絡が来てると思うけど：。」

梨理香「ああ、ミーサから来たよ」

拓人「なら、茉莉香と一緒に行ってください。俺は少し寄るところがあるんで先に出ます」

梨理香「ああ！親父さんのところで」

俺は部屋に戻り私服に着替えて先に出る。

拓人「そう言えば、出掛ける私服は、皆に見せたことなかったな」

俺は街に出てから気が付く。何故かつて？すれ違う人が全員俺を見るんだよ。何が悪いんだ？服装？

作者『服装もですが、絶対にそのサングラスだと思えます。其処らのチンピラより恐いですよ。…ってか、マジでヤ○ザじゃん!!サングラス取ればイケメンなんだから、か  
けなければいいのに…』

拓人「ん？」

また何か変な電波を受信した気がする。

拓人「取り敢えず、親父さんの好きな日本酒を買ってから向かうか」

俺は親父さんの好きな日本酒『二〇堂』を土産にする。そして、空港の地下街に入り店に向かう。

拓人「久し振りだな…。3ヶ月前だっけ？この間行つたのは」

昔風の路地を歩き、親父さんの店に到着する。

拓人「こんにちは親父さん」

親父さん「…。拓人か」

拓人「これ、親父さんの好きな日本酒」

親父さん「悪いな。もう皆揃つてるぞ」

拓人「あんがと」

俺は奥の部屋に行く。扉を開けると、何故かさつきまで話していた全員が黙って俺を見る。

百眼「だだ、誰だお前!!」

ミーサ「ここは今、私達が使っているんだけど?」

ケイン「だから、悪いけどお取り引き願えますか?」

梨理香「プツ…クククツ」

梨理香さんが、滅茶滅茶笑いを我慢してる。よく見ると、茉莉香とグリューエルがお互いを抱き合いなから震えていた。と言うか茉莉香!お前はさすがに分かつてくれよ…

梨理香「あはははは!!あく可笑しい!!」

茉莉香「梨理香さん？」

梨理香「いや、他の連中が気が付かないのは分かるけど茉莉香、アンタだけは気付いてやりなよ？」

茉莉香「私!？」

そう言われた茉莉香は、ゆっくりと俺を見つめる

茉莉香「もしかして… 拓兄!？」

梨理香以外「えゝ!？」

拓人「さすが茉莉香！と言つてやりたいが、もう少し早く気付いてくれ」  
俺はそう言いながらサングラスを外す。

百眼「おいおいおい!! 完璧にモノホンじゃないか!!」

ケイン「さすがにビビったぜ」

拓人「悪いな。普段の私服はこんななんだ」

クーリエ「なんと言うか…」

ミーサ「初見で見ると驚くわね」

拓人「悪かったな。取り敢えず俺も座らせてくれ」

俺は、茉莉香とクーリエの間に座る

ミーサ「さて、念のために三代目は弁天丸に残ってもらってるから、これで全員よ」

百眼「んじや始めるか」

茉莉香「データ、解析出来たの？」

百眼「ようやくな♪さすが王族のデータはセキュリティが複雑なうえに量も膨大だ。優しくコンパクトに情報を整理するには随分苦労したぜ♪」

百眼は、そう言いながら自分のコンピュータを起動する。

百眼「セレニティの黄金の幽霊船！その正体は、最初の民を運んだ移民宇宙船だ！作られたのは、管制制御だの超光速だの、現代技術が存在しない大昔だからな。光年間航行は楽に年単位の時間がかかる。だから cold sleep が必須になる。世代が変わるような長期間、何光年もの長距離を航行する為に、色々改造もしたんだろ？これが、調査団が最後に接触に成功した時の外形だ」

中央のモニターに、巨大な黄金船が映る。

茉莉香「これが幽霊船なんだ」

ケイン「デカイな。街がいくつ入るんだ？」

百眼「これは、最近200年の黄金の幽霊船の目撃談をプロットしたものだ。そこから推測される幽霊船の予想起動は…これだ」 p i

モニターに映る起動は、お世辞にもいい軌道とは言えなかった。

ケイン「おおい」

ミーサ「あら酷い」

ルカ「暗黒宇に多重ブラックホールに歪正暖に原子系。難点の難所ばかりね」

クーリエ「そう！だから誰もが目撃できるわけじゃないと言うわけ。そんな軌道を設定した理由は不明。分からない…」

拓人「ふむ…」

皆が考えてると、茉莉香がテーブルの中央を回す。《中華店にあるテーブルです》

百眼「ああ!!何すんだ！」

茉莉香「どうして幽霊船になっちゃったなんて、どうでもいいでしょ？依頼主が来て集められるだけの情報は集めた。後は行動するだけ！」

拓人「だな。親父さんの飯も待たしてるし」

茉莉香「グリユーエル、もし出掛けて行っても幽霊船が見つからないかも知れない。それでもいい？」

グリユーエル「信じています。茉莉香さんと拓人さんを。そして黄金の幽霊船も…」  
話がまとまり、丁度扉が叩かれる。

親父さん「話はまとまったか？そろそろ料理を出したいんだが？」

茉莉香「お願いします」

親父さん「分かった…拓人、少しだけ手伝ってくれ」

拓人「分かりました」

茉莉香「拓兄親父さんと知り合いなの？」

拓人「俺の料理の師匠だな」

一同「なるほど…」

俺は親父さんの手伝いを少しだけして、食事を楽しむ。

梨理香「さ〜！酒だ酒だ♪しっかし、海賊船がお姫様を乗せて幽霊船捜しかい。アタシの時と違って、ロマンチックな仕事してるんだね♪ングング」

茉莉香「このまま、アクション大作や大スペクタクルにならないでくれるといいんだけど…」

茉莉香がそんなことを呟いていた。食事を全員で楽しみ今日は解散する。出発は翌日、2日後にはジェニーが言っていた特別演習があるし、話しておかないとな。

拓人「…」 pururururur

ジェニー『モシモシ？』

拓人「ジェニーか？」

ジェニー『あら拓人、こんな時間に珍しいわね？』

拓人「実は、お姫様の依頼だけど明日出発になったからその連絡をと思つてな。茉莉香から話は聞いたから、直接連絡したんだ」

♪  
 ジェニー『随分急ね。でも、分かったわ。こっちの事は私やリンに任せてちょうだい』

拓人「感謝するよ」

ジェニー『感謝は要らないわよ。そうね〜。今度、私のところでパーティーがあるんだけど、私とリンのボディーガードとして来て欲しいな♪』

拓人「分かったよ」

ジェニー『因みに、貴方は私とリンのフィアンセでもあるからね♪』

拓人「は？フィアンセ？ちよつと待て、それはどういう〜。』

ジェニー『それじゃあ、日にちはまた連絡するわ。お休み〜♪』 p i

拓人「もしもし？ジェニー！もしもし!!」

電話を切られて唾然とする俺。

拓人「やられた〜！ってか、女性二人のフィアンセが俺1人っておかしいだろ!!」

と叫ぶが、既に後の祭りであった。俺はそのまま弁天丸に向かい、茉莉香達を待った。そして翌日、茉莉香とグリユーエルもやって来て、いよいよ黄金の幽霊船の捜査が始まるのであった。

茉莉香「さ〜皆!!行くわよ!目標、黄金の幽霊船!!」

幽霊船調査の為に、超光速跳躍に入る。そして、超光速跳躍から出ると、とても宇宙

空間とは思えない場所に出た。

拓人「酷いなこれは…」

茉莉香「そうだね。それよりチアキちゃん、上手くやってるかな？」

ミーサ「人の事より、自分の船の心配をなさい」

拓人「と言うか、よくチアキが引き受けたな」

茉莉香「チアキちゃん、以外とノリノリでやってたりして♪それで、状況は？」

ルカ「相も変わらず！ダストは濃いし重力波は粗いし、最大出力にしたレーダーがこれだけ!?宇宙船で飛ばうなんて空間じゃないのは確かだから!!」 p i p i p i p i p i

茉莉香「あはは…」

グリューエル「すみません…」

ケイン「いかにも幽霊船が出てきそうってか？」

ルカ「前方マイナス3分2秒！秒隔プラス1度2歩に晴れ間!!早く飛び込んで!!」

三代目「出力安定。行けるぜ！」

ケイン「了解!!」

ルカが言った晴れ間に飛び込む。しかし、あまり状況は変わらない。と言うか、全く変化なし!!

三代目「これで晴れ間かよ!!」

百眼「大体がマトモな空間じゃないんだ!! エアメタル狙いの炭鉱屋か、なんとか探検隊でもなきや、こんな宇宙《うみ》にやって来る奴はいねーよ」

クーリエ「偵察用プロローブ投射」

ルカ「風が強くなる! 進路を揺らされない様気を付けて!」

ケイン「あいよ!! 出力上昇!」

クーリエが、偵察用プロローブを発車する。

拓人「この状況じゃ、回収は厳しいな」

クーリエ「勿体ないけど」

茉莉香「ポッドの在庫なんて惜しんでられないわ!! とにかく情報を集めて!!」

グリュエール「…あの! 必要経費は… セレニティ王宮が、責任を持ってお支払いします!!」

拓人「そんなのは後だ! 在庫が無くなれば、捜査の効率がガクンと落ちるんだ」

茉莉香「その前に見つかるといいわね…」

グリュエール「大丈夫です! もしそれが必要ならば、幽霊船は必ずや、私の元にあらわれてくれる筈です!」

茉莉香「必要ならば… か」

シュニツァー「そろそろ時間だ」

ミーサ「そうね」

茉&グ「？」

拓人「時間か？お疲れ」

俺は先にブリッジを出る。続いて、茉莉香とグリューエルも出される。

ミーサ「はい、それじゃあ3人ともお疲れ様」

茉莉香「な、なんなの？」

ミーサ「未成年の就業時間はもうおしまい。3人とも、とつとと食事をしてお休みな

さい♪」

茉莉香「え〜！」

グリューエル「私もですか!？」

拓人「白鳳学院の校則にあるぞ？当校のバイト及び副業の就業時間は八時間だ」

ミーサ「そう言うこと♪さすが拓人ね♪」

拓人「んじゃ、食堂に行くか？」

俺は茉莉香達を連れて食堂に行く。

拓人「宇宙食は、あんまり好きになれないんだよな」

茉莉香「私は好きだけどな。ゴメンね、お付きの料理人特製の料理って訳にはいかな

いけど、結構いけるよ？」

グリユーエル「お食事の事ではありません。私がこのように寛いでる間に、皆さんは幽霊船捜しに励んでくださる。それが…」

茉莉香「心苦しい？」

グリユーエル「うん…」

茉莉香「確かにね…」

拓人「俺も茉莉香も、船長や副船長って言ってるけど、結局大人の皆に守られている。その事にかんしては、グリユーエルも俺達も同じだ」

グリユーエル「え!？」

拓人「ん？嫌だったか？」

グリユーエル「いえ…嬉しいです。私と同じと言ってくれる方がいる…それが嬉しいんです♪」

茉莉香「フフツ…チアキちゃん、今頃どうしてるかな？」

茉莉香がそう言った時、バルバルーサの自分の部屋で、盛大にくしやみをしていたのであった。食事を終えて茉莉香とグリユーエルは部屋に戻る。俺はというと…

拓人「さて、ミーサ達に夜食の差し入れを作るか。材料は昨日買ってきたし♪ラーメンでいいだろ？」

俺は、買ってきたし材料を調理する。味のベースは醤油味。麺はスーパーで買った麺

だけど、スープは俺の特製♪

拓人「チャーシューも、前に作った残りを持ってきたし…よし！これで完成だ♪」  
ラーメンを完成させた俺は、ミーサには悪いと思いつながらブリッジに向かった。

拓人「ミーサ！」

ミーサ「拓人!? 貴方まだ寝てなかったの？」

拓人「ああ、悪かったな。少しだけ入れてくれ」

ミーサ「もう…少しだけよ？」

ミーサに許可をもらい、ブリッジに入る。

百眼「副船長？」

拓人「そのままでもいい。悪いな…皆にラーメンを作ったから、一段落ついたら食べてくれ。スープと麺は別々に置いてるから。スープは温めてくれ♪」

ケイン「サンキュー副船長」

三代目「あんがとさん」

ルカ「…ありがとう」

クーリエ「助かるわ♪」

百眼「副船長は、親父さんの弟子だし楽しみだな♪」

拓人「味は保証するぞ？ シュニツツアも食えるよな？」

シュニツツァー「問題ない。助かる」

拓人「んじや、悪いけど休ませてもらうな」

一同「お疲れ様」

俺はブリツジを出て船長室に戻る。船長室に戻ると、既に茉莉香は寝ていた。俺も、ソファアで寝ようとしたら、茉莉香が起きた。

茉莉香「んく…拓兄？」

拓人「悪い、起こしたか？」

茉莉香「大丈夫だよ…ところで、こつちこないの？」

拓人「毎回言ってるけど、それはまずいだろ？」

茉莉香「別にいいじゃん♪前も一緒に寝たんだし」

そうなのである。船長室にはベットが1つしか無いため、俺は基本ソファアで寝ていたのだが、茉莉香に告白されて以降、よく一緒に寝ようと言われる。毎回断るんだが、その度に涙目の上目遣いで見られたら、さすがに断れません。

拓人「…は、分かったよ。」

茉莉香「やった♪」

こうして俺はまた、茉莉香と一緒に寝るのであった…そして翌日————

拓人「んんん……時間か。茉莉香、おい茉莉香起きろ」

茉莉香「うん……後5分……」

拓人「またか……ま、俺が先に行くか」

俺は茉莉香をそのまま寝かせてブリッジに向かう。

拓人「うっす！ん？……パンの匂い？」

クーリエ「ご免なさいね、ちよつと生活臭させちゃってますが、長期戦オールナイト営業に入ってます」

拓人「オールナイト？」

クーリエ「拓人は初めてよね？ちよつと手の離せない状況が続くような時は、ブリッジに泊まり込みするの」

クーリエが説明してくれる。そして、皆様お気づきか？クーリエが、何故副船長に事を名前で呼んでいるか。理由は、今現在二人つきりだからである。クーリエは恥ずかしがつて普段は言わないが、こうして二人つきりになった時は、名前で呼ぶのであった。

拓人「大丈夫なのか？俺達もいた方がよかつたんじゃない？」

クーリエ「ん？未成年の拓人達に、徹夜仕事をさせる程弁天丸は落ちぶれてません！

拓人達は、いざと言う時に判断決断してくれればいいんです！楽をするのも仕事です」

拓人「分かったよ。で、現在状況は？」

クーリエ「結論だけを言います。この一帯には、かつてのセレニティ調査団がばら蒔いた観測ぶいがかかりに数で健在です。第一次から第十七次までの調査団によって、観測ネットワークはかなり広範囲に。」

茉莉香「それって凄くラッキーなんじゃない？」

拓人「起きたのか」

いつの間にか、俺の後ろにいた茉莉香とグリューエル。

グリューエル「認証は？王家の者の認証が必要な筈。どうして起こしてくれなかったのです？」

クーリエ「それがね〜：。突発出来ちやったんだな。あっさり」と

グリューエル「なんですって!？」

グリューエル「ああ、勿論細々とした確認や、膨大な設定は必要だったわ。第一、こんな嵐の中だしね。お陰で、シユニツアアと百眼には無理かけちやったけど、さつきようやく寝てもらったの」

茉莉香「それでいいんだ」

クーリエ「ただ不思議なのよね。第十七次調査団が15年前…プリンセスは今…」  
グリュエール「13歳です… あっ!？」

拓人「なるほど、生まれる前のネットワークにグリュエールの認証は意味がない筈だ」  
クーリエ「その通り。だけど一応入れてみた。プリンセスのフルネームと生体データ」

茉莉香「そしたら通つちやつたんだ」

クーリエ「うん、意図もあつさりね。名前と遺伝子パターンが、過去から未来にかけて通用する。王族つてやつぱり特別なのかな？生まれの違い？」

グリュエール「恐らく… だからこそ私達王家の人間は、セレニティの独立を維持できたのだと思います」

グリュエールが拳を強く握る。それを見た俺や茉莉香が話をかえる。

拓人「で、その使えるネットワークはどうだ？」

茉莉香「幽霊船についてのデータは？」

クーリエ「これ迄に比べれば、格段の差。ほら♪こんなにハッキリ」 p i

茉莉香「うわく!?!あれ？これは何？」

クーリエ「確実じゃないけど、複数の宇宙船、しかも戦艦クラス」

グリュエール「!？」

拓人「目的は一緒か」

茉莉香「チアキちゃんに頼んで、身代わり頼んでこつそり抜け駆けしようと思っただけ、やっぱ無理か」

クーリエ「どうする？追跡する？」

拓人「別にほっとけ。目的が同じなら、嫌でもかち合う筈だ」

クーリエ「それならば、引き続き観測データを解析します」

茉莉香「ヨロシク」

拓人「さてと・・・」

俺が話そうとしたら、突然警報がなる。

百眼「どうした？何があった？」

百眼が丁度いいタイミングであらわれる。

クーリエ「只今確認中・・・ p i p i p i p i

警報がなると、次々皆がやって来る。

クーリエ「15―78の観測部位が大規模な空間異常を補足」

拓人「でかいな・・・」

茉莉香「6光年先か・・・ 行きましよう!!」

ケイン「即断即決♪いい船長ぶりだ」

三代目「あく待て待て待て!!のわっ!!」ドテッ

慌てて入ってきた三代目が、足を躓き転げる。

拓人「こんな空間で、正確なジャンプ出来るか？」

ケイン「多少の誤差は？」

拓人「構わない」

クーリエ「分かっているとと思うけど、さっきの戦艦も気付いてるわよ？」

拓人「戦闘準備も頼む」

シュニツツアー「了解」

茉莉香「それじゃあ、超光速跳躍準備!!幽霊船、追っかけるわよ!!」

ケイン「弁天丸、超光速跳躍に入る。」

シュニツツアー「ミサイルも発射する」

超光速跳躍に入ると同時に、シュニツツアーがミサイルを発射する。そして、跳躍から出たと同時に、爆発が起こる。

ケイン「あらよつと!!しっかし、良くもまゝ、こんな荒れた空間に無事に降りられたもんだな♪」

三代目「無事じゃね〜!無事じゃね〜から警報鳴ってんだろぅが!!船体表面で極小規模だが、融合爆発の反応が出ている!船の中に喰らってたら只じゃすまないぞ!!」 p i

p i p i p i

シユニツツアー「先行させたミサイルの爆発が、弁天丸のタッチダウンの地点で少しずれた。次は大丈夫だ。習性用のデータを取った」

三代目「次は別のポイントでしよう!?!」

シユニツツアー「今更慌てる程の危機ではないだろ? ジタバタ騒ぐな...」

三代目「くうく」

シユニツツアーの一言に、泣き出す三代目。

遅れてミーサがやって来た。

ミーサ「どしたのいったい?」

茉莉香「スターダスト避けに、ターン物質ミサイルを撃ち込んでからタッチダウンしたんだけど、ちよいずれた」

ミーサ「ふくん...で、お宝の反応は?」

百眼「爆発の余波が修まってない。ちよつと待ってくれ」

ミーサ「酷いわね」

拓人「嵐の宇宙...ね。と言うかミーサ、抱き付くな」

ミーサ「別にいいじゃない♪」

百眼「待てよ...この空間異常、震源地はこの宇宙じゃない。何処か別の空間からの

干渉だ！」 p i p i p i p i

ケイン「別の空間？ソコへ行くのか？」

三代目「えく!?」

クーリエ「震源地、移動してるわ！震源地が移動しながら、空間異常その物はどんどんおさまっています！」

茉莉香「追える？」

クーリエ「無駄です。通常空間からは、追いつけません」 p i p i p i p i

茉莉香「あつちやく。無駄か」

百眼「そうでもない！今取ったデータと、観測ネットワークのデータを付け合わせれば、次の空間異常の予測はできる筈だ。先回りは無理だが、もっと早く追いつけられる」

p i p i p i p i

そして再び警報が響く

グリューエル「今度は何が？」

拓人「やっぱり来たか…」

百眼「別口のエネルギー反応！」

クーリエ「レーダー反応来ました！」

拓人「全てに戦闘配備!!」

全員に戦闘配備を指示する

茉莉香「見つかった？」

クーリエ「遠いから多分まだ……」

百眼「エネルギー反応多分2つ。うちのセンサーは目一杯敏感に調整してあるから、引つ掛かつてが……弁天丸は観測体制で、エネルギー放射を抑えてた。まだ向こうには気付かれていない筈だ。しかし……」

茉莉香「向こうが策的を開始したら見付かるわね……やり過ぎせる？」

拓人「無理だな」

クーリエ「新手のレーダー反応二つ目。ごめん逃げられない、クロスフィールドを確保」

グリユーエル「クロスフィールド？」

拓人「二方向からレーダーをかけて空間を捜査することだ」

茉莉香「要するに、レーダーの挟み撃ち」

シュニツツアー「デコイ、発射する」

茉莉香「お願い」

シュニツツアーがデコイを発射する。

シュニツツアー「引つ掻き回すように、ランダムパターンでコースを設定したが、ク

ロスフィールドを使うような奴等に、囹が通用するか？」

クーリエ「レーダー反応三つ目！多分これ、予め艦隊を散開させて通常空間に復帰させてたのね。数の使い方を知っている相手は手強いよ」 p i p i p i p i

茉莉香「嵐の宇宙、散開している艦隊。一番近い相手は… 2番目!!」

クーリエ「護衛艦級、多分二隻！相対速度マイナス、現在向こうが加速して接近中！」  
p i p i p i p i

拓人「… 逃げるの止め!!進路反転!!」

ケイン「りよ〜かいつ!!」

弁天丸を反転させる

茉莉香「一番近い二隻に挨拶してから逃げましょう」

シユニツツアー「全船、体感起動戦闘準備!!どうする？口火は此方が切らせてもらうか？それとも、相手が撃つのを待つか？」

拓人「敵が撃つかは関係ない!!射撃モードは、目一杯接近してからの拡散放射、フルチャージ!!」

ミーサ「敵艦のセンサーと装甲を傷付けて、追い掛けられなくさせるつもりね。いい判断… さすが加藤船長の血を引く子ね」

グリユーエル「船長の… 血」

ケイン「つしやあ!!何時でも行けるぜ!!」

茉莉香「弁天丸、行きましよう!!」

シュニツツアー「対艦戦闘にはあるまじき近距離戦になるな」

クーリエ「電子妨害開始!!」 p i p i p i p i

茉莉香「上手くやってよ?」

ケイン「任せとけ!!機関最大出力!!フェアの間を抜くぞ!!」

三代目「わざわざ自分から十字砲火に突っ込む真似なんかしなくても...」

拓人「突っ込むから勝てるんだ。突っ込まないと死ぬぞ?」

シュニツツアー「第一砲筒、目標右舷アルファ。第二砲筒、目標左舷ブラボー。射撃

予定は変更なし。再接近時に一斉射撃。予め射程を予定位置に合わせておけ」

クーリエ「敵艦判別!コーバツク級護衛艦、セレニティの船よ」

グリューエル「そんな!?!」

拓人「戦闘予定は変更なし。向こうが撃たなくても、此方は撃つぞ!!」

シュニツツアー「了解」

百眼「エネルギー反応増大...来るぞ!!」

ケイン「あらよつと!!」

ケインが、上手く交わす。さて、タイミングを見て...今だ!!

拓人「全速で離脱!!」

砲撃を潜り抜ける。

茉莉香「来る?」

百眼「来ないなく。敵さんも、一撃離脱しか考えてなかつたら?本格的にやり合うなら、もっと上手い手を使う筈だ」

茉莉香「了解。此方のビーム、当たったと思う?」

シユニツツア「手応えはあつた。装甲は破れないまでも、センサー並びに観測設備にはかなりのダメージを与えた筈だ」

茉莉香「OK。ふう、次に会ったときは本気で来るだろうな...」

拓人「そうだな...なら、此方もそれなりの準備をするか...」

グリユーエル「あの...今からでも、先程の護衛艦と連絡を取れないでしょうか?」

拓人「なんの為にだ?」

グリユーエル「私が弃天丸に乗っている事さえ知らせれば、セレニティの船なら私に敵対する事はない筈です。是非、私に艦隊との連絡を取らせてください」

拓人「駄目だ...」

グリユーエル「誤解なのです!!そうでなければ、セレニティの船が私に対して砲門を開くなどあり得ません!!誤解は一刻も早く解かなければ...」

茉莉香「クーリエ！弁天丸に何処からか呼び出しがかつてる？」

クーリエ「通常通信、超光速通信、いずれも呼び出しなし」

グリューエル「えっ？」

茉莉香「さっきの接触で、此方の正体が向きうにもバレてる。だけど向こうからの通信はない。分かるよね？」

グリューエル「だから誤解なのです!!この船に私が乗っている事が分れば……」

拓人「いい加減にしろ!!」

一同「!?」

拓人「よく考えてみる！本来お前は、白鳳学院のヨット部の演習航海にいる筈だ！此方も本来は別の場所で営業してる筈なんだぞ？それをわざわざ教えることはない!!」

茉莉香「た、拓兄……」ビクビク

拓人「……はっ!?わ、悪い」

グリューエル「い、いえ……私も浅はかでした」

拓人「それに、グリューエルがこの船に乗っている事実は、今後の交渉の強いカードになる」

茉莉香「だから我慢して。貴方は……プリンセス・グリューエル・セレニティでしょ？」

グリユーエル「分かりました。ありがとうございます。私はこの船にやって来て良かった♪」

拓人「そうか」

グリユーエルの一言に、周りが笑いだす。

ケイン「船長、副船長!!これからの進路の指示をお願いします♪」

茉莉香「うくん…セレニティ艦隊が、大勢で幽霊船を捜しているのが分かった以上、無駄な事は止めます!」

ミーサ「どうするの?」

拓人「決まってるだろ?」

茉莉香「海賊は海賊らしく」

拓&茉「セレニティ艦隊を追いかけて、出し抜いて、上前を跳ねる!!」

百眼「ひゅ〜♪」

三代目「カツコい〜♪あ、ゾクゾク〜♪」

俺達は声を揃えて言う。つてか三代目、それ気持ち悪い…

茉莉香「グリユーエル、いいわね?」

グリユーエル「卑怯ですわね…ですが、卑怯でもなんでも、正当化をするのは後でもいいかと?お願いします♪」

拓人「了解した♪それじゃあ、行くぞ皆!!」  
一同「了解!」

## 遂にご対面、黄金の幽霊船

セレニティ艦隊との攻防があつたが、なんとかその場を切り抜けた俺達は、百眼が出した観測データから割り出した場所に向かつていた。

ルカ「前方二分、深く20分、やや晴れ」

三代目「出力やや弱いが……よし行け!!」

ケイン「喜んで♪」

茉莉香「マラコット級戦艦一隻に、コーバック級護衛艦六隻……」

グリユーエル「クイーンセレンディティ……セレニティ防衛軍の機艦です」

クローリエ「何処までハツタリで、何処から本当の装備なんて解らないけど……戦願戦

争用に、全艦隊向けの指揮通信機持つてる。本気の戦略戦艦ね……」ポリツ

茉莉香「え〜と……セレニティの防衛軍って、戦力そんなに余裕あるの? 機艦がこんなところまで来ちゃって?」

クローリエ「分からないけど……ズズ、これだけの戦力を引き抜いたら本国が心配ね」

茉莉香「そっか、本気の本気か……勝つのは難しいわね〜」

グリユーエル「茉莉香さん?」

拓人「心配するな♪さて、俺もそろそろ準備するか…」  
茉莉香「拓兄どうするの？」

拓人「秘密兵器の出番だ♪」

俺はブリッジを後にする。

拓人「さてと…確かこの辺にあつた筈…」ゴソゴソ

俺は四次元ポーチを探る。

拓人「あつたあつた♪ザンダクロス!!と、ビッグライト!!」

俺は、格納庫に行こうとすると、弁天丸に急ぎの跳躍の警報がなる。

茉莉香『ブリッジより全潜へ、船長の茉莉香です。弁天丸は今、超光速跳躍の準備中で、データが揃い次第飛ぶ予定です。タツチダウン後に戦艦と一戦交える事になるかも知れませんが、そのつもりで準備しておいてください！繰り返します…』

拓人「超光速跳躍か…俺も、シヨックに備えるか」

俺はシヨックに備えるために急いで格納庫に行く。すると、激しい揺れが弁天丸を襲う。

拓人「くそっ!!行くぞザンダクロス!!ビッグライトとテキオー灯、グレードアップ液!!」

俺はザンダクロスに全て振りかけて宇宙に出る。

拓人「なんだ　…　あれは!？」  
驚いている俺だが、弁天丸から通信が入る

拓人「此方拓人」

茉莉香『拓兄!?! なんなのそれ!?!』

拓人「今は話してる暇はない!!」

百眼『副船長!! 今すぐそこを離れる! どでかい衝撃波が来るぞ!!』

拓人「宇宙空間で衝撃波だと!?!」

百眼『空間が裂けてるんだ! 何が起きても不思議じゃない!?!』

拓人「弁天丸は俺の後ろに來い!!」

茉莉香『拓兄どうするの!?!』

拓人「一か八かだ! ヒラリマント!! で、ビッグライト」

ヒラリマントにビッグライトを当てて、ザンダクロスサイズに合わせる。

クーリエ『出た』

拓人「!?! あれが幽霊船なのか!?!」

百眼『全長24 km、自然天体ならそれほどだが、超光速出来ない大昔の世代艦なら、特別サイズの大物だ。間違いない…　黄金の幽霊船だ』

クーリエ『幽霊船に対する、投影面積を最小に、超新星並みの衝撃波が来るわよ!』  
百眼『…来るぞ!!』

拓人「…来い!!」

構える俺。すると、物凄い衝撃波が俺達を襲う!

拓人「…つく!!」

茉莉香『拓兄!?!』

拓人「…見えた!!ケイン、エンジンをフルブースト!!」

ケイン『了解!』

ケインがブーストを点火する。そして俺は、後ろから押す!

拓人「そのまままっすぐ行け!!そうすれば出られる!!」

茉莉香『拓兄く!』

俺は弃天丸と別の方向に逃げる。

拓人「ザンダクロス、もってくれよ…」

そして、なんとか俺も衝撃波を抜ける。

拓人「なんとか抜けたか…ん?あの戦艦弃天丸を狙ってるな。させるか!!」

俺は急いで弃天丸と合流する。

拓人「弃天丸!急いで幽霊船に向かえ!!後ろは俺がなんとかする」

茉莉香『了解』

すると、幽霊船から高出力レーダーが放たれる。

拓人「なんだ？」

それが終わると、幽霊船がみるみる黄金色に変わっていく。

拓人「すげ〜:~:」

茉莉香『拓兄、今クーリエが幽霊船のデータを解析して今から、幽霊船に向かうから  
!!』

拓人「了解！俺もそのまま向かう」

茉莉香達が向かうと、護衛艦が動き出す。しかし、俺が立ちほだかる。

拓人「ここから先は行かせないぞ？って、ケイン!?!いくらなんで早すぎだ！」

ケインが物凄いスピードで幽霊船に入っていく。

拓人「なっ!?!上手く入ったな。なら俺も」

俺も急いで向かう。すると、ハッチが閉まり始めていた。

拓人「ちよつと待て〜！」

俺はなんとかギリギリで船内に入る。

拓人「よし !!」

しかし、扉に脚が引つ掛かりそのまま弁天丸に向かって突っ込む。

拓人「ちよつと待て〜！そこをどけ〜！」

茉莉香『無理だよ〜！』

拓人「ヒラリマント!!」

ヒラリマントを俺に向けて俺を弾く。そのまま壁にぶつかる。

拓人「いつて〜！」

茉莉香『大丈夫拓兄!?!』

拓人「な、なんとかな〜…」

情けない声を出す俺。すると、幽霊船全体が揺れ出す。

茉莉香『なにこれ？』

百眼『こりや〜…』

クーリエ『亜空間に戻るみたい…』

茉莉香『船体固定!!』

弁天丸から鎖が打ち込まれる。俺はそれを掴み衝撃がおさまるのを待った。衝撃がおさまり、弁天丸クルーが修理の為出てくる。

拓人「そう言えば、皆にテキオー灯当ててなかったな。ま、24時間あれば十分だろ？」

俺はザンダクロスをスモールライトで小さくして弁天丸に向かう。すると、丁度グ

リユーエルが出てきたので、驚かしてみた。

拓人「ばあ!!」

グリユーエル「キャアア!」

拓人「あははは、ビックリしたか?」

茉莉香「拓兄、あんまり驚かせちゃ駄目だよ?」

拓人「悪い悪い。」

茉莉香「私も宇宙服脱ぎたい〜!」

拓人「はいはい、じゃあ一端船内に戻るぞ?」

俺はそのまま船内に戻り中を調べる全員にテキオー灯を当てる。

百眼「おうこれは凄いな♪」

シユニツツアー「俺と一緒だな」

ミーサ「でも、普段は宇宙服を着てるから、まだ慣れないわね…:」

拓人「最初はな♪ほら!」

俺は、女性陣3人に手を差し伸べて引つ張る。

拓人「で、この扉開きそうか?」

百眼「そう複雑なロックが掛かってる訳じゃないから心配ない」

茉莉香「幽霊船と接続出来そう?」

シュニツツアー「弁天丸でクーリエがやっている。弁天丸からの電源ケーブルを接続。百眼、パワーを入れてくれ」

百眼「了解。定格200…どうする？もう少し上げてみるか？」

シュニツツアー「いや、このままでいい」

そう言うと、シュニツツアーがレバーを下げて扉を開ける。

百眼「ハッチの向こうは0.8気圧、酸素24%。今のところ有毒ガスや放射能は検出無しだ」

茉莉香が俺に、移動に使う道具を渡す。

拓人「いや、俺はいい」

俺は頭にタケコプターを取り付ける。酸素が24%もあるなら、普通にタケコプターは使用出来る。そして中に入る。その時、クーリエから通信が入る。

クーリエ『ブリッジより、茉莉香船長と拓人副船長聞こえますか？』

茉莉香「これから幽霊船に入るところ。何か分かった？」

クーリエ『はい、いくつか。幽霊船には発着デッキが2つ。その内、そことは違う別のデッキに船が侵入した形跡があります。構造上、戦艦がそのまま着艦したとは思いませんが、どれくらい規模の人数が乗り込んでいるか分かりません』

拓人「了解した。引き続き調査を頼む」

クーリエ『了解』

拓人「しつかし、物凄く広いな…。」

進めど進めど、未だにたどり着かない。

拓人「また扉か…。」

百眼「ここは簡単に開く。」

茉莉香「じゃあグリユーエル、何処へ行く?」

グリユーエル「えっ? 機関部やブリッジにまず向かうのではないのですか?」

拓人「それはセレニティ調査団に任せていいだろ?」

グリユーエル「無責任ですね」

茉莉香「そりゃくもう海賊ですから♪お宝の所へ急ぎましょう」

グリユーエル「分かりました」

そのまま機関部等には向かわず、そのまま突き進む。すると、再び扉がある。

百眼「んく…。」 Pip pip pip i

しかし、扉は開かない。

グリユーエル「駄目ですね…。」

茉莉香「また金庫破りが必要?」

百眼「大丈夫なんじゃないかな?」

シュニツツアー「任せてもらおう…」ボキボキ

拓人「待てシュニツツアー。お前はまだ体力を残しておいてくれ」

シュニツツアーを止めて前に出る。

拓人「んじゃ… オラ!!」ドゴン

俺は力を入れて、扉を蹴飛ばす。蹴飛ばした扉は、形を変形させながら奥に倒れる。

拓人「こんなもんだろ？」

一同「…」ポカーン

拓人「どうした？」

百眼「いや… どうしたって…」

シュニツツアー「さすがと言わざるおえないな」

拓人「そうか？ま、普段は力を制御してるからな。こういう時位力出さないと」

グリューエル「か… 格好いいです!!」

茉莉香「うん♪」

ミーサ「さすがだね♪」

拓人「あ、ありがとな／／／」

俺は顔を少し染めながら頬をかく

百眼「いや〜♪うちの副船長は、相変わらずモテるな〜♪」

シユニツツアー「男としても頼もしいしな」

百眼とシユニツツアーに言われる。俺は、恥ずかしくなつて先に入る。

百眼「この辺りは機関部と動力接続、それから船内大気圧維持の為のバフパータンクと、殺菌清浄成分調整の為の循環システムの元締めだ」

茉莉香「スリーパー……冷凍睡眠の区画は船体中央ね」

すると、突然船内に明かりが点る。

茉莉香「ね？向こうに任せて良かったでしょ？」

グリユーエル「はい……」

拓人「この辺りの明かりが点灯したつて事は、俺達の居場所のバレてると考えるべきだな……」

茉莉香「あつちに私達の居場所がバレてるつて訳か……ま、しょうがない」

ミーサ「そうね……そこを右よ」

グリユーエル「えっ!？」

グリユーエルは慌てて、柱を足場にして方向をかえる。すると、開けた空間に出る。

拓人「驚いたな……街がそのまま入ってる」

グリユーエル「ええ……この宇宙で、真に普遍的な価値が持つものがあるとすれば……」

何だと思いませんか？」

茉莉香「普遍的な… 価値？」

グリユーエル「かけがえのない物。貴金属は貴重ではありませんが、手間と時間さえ使えばいくらでも作り出せます」

茉莉香「芸術とか… 文化とか？」

グリユーエル「そうですね。もし遙かな未来であっても、文明が文明としての知性を持っている限り、芸術や歴史には高い価値があります」

拓人「知性ね…」

等とグリユーエルから説明を受けると、また扉にぶつかる。

グリユーエル「これは？」

百眼「随分旧式だなく。うへくこいつはスゲー!!」 p i p i p i

グリユーエル「何ですか？」

茉莉香「なんか変なモニター」

百眼「メカニカルディスプレイだ。画層一つ一つがちっこい歯車とクランクシャフトの組み合わせで出来ててな、三原色と白黒を加えた五色を高速で入れ替える事によって文字を表示する。生きてるやつは、初めて見たぜ♪どうぞ♪王族の名前が必要だそうだ！文字入力は、従来通りでOKだ」 p i p i p i p i

グリユーエル「…」 p i p i p i p i

グリユーエルが自分の名前を入力する。

グリユーエル「この先は、低重力環境で温度変化のない高温装甲：：：違いますか？」

百眼「その筈だ：：： 大気圧は保たれてるが、成分の殆どが窒素ガスだ。後不活性ガスが微量：：：」

ミーサ「長期保存にはうってつけね♪」

茉莉香「いよいよお宝と対面かしら♪」

グリユーエル「恐らくこの宇宙船の中には、皆さんが期待するような物は入っていない」

茉莉香「でも宝はあるんでしょ？」

グリユーエル「：：：扉を開けます」 pipipipi

グリユーエルが扉を開けて、俺達は中に入る。すると、中にはなにも残っていないかった。

ミーサ「宝箱にしては寂しいわね？」

茉莉香「ハズレ!？」

グリユーエル「他の倉庫も似た状況だと思います」

茉莉香「芸術品は？ 絵画は？ 窒素まで使って保存してたんじゃないの？」

グリユーエル「確かに、かつてセレニティ王宮は、超光速以前の文化遺産を黄金の幽

霊船に積み込みました。しかしそれは、過去の経済危機を克服する為に、その殆どを運び出した筈です」

拓人「その為の調査団か…」

グリユーエル「はい…」 p i p i

茉莉香「もう覚えたの？」

グリユーエル「百眼さんの操作を見て」

百眼「スゲーなやつぱり。王族の血筋ってやつかね？」

グリユーエルが扉を開ける。

百眼「ここが、スリーパー区画だ」

茉莉香「なんだろうあれ？」

拓人「ヤクトーシユトラハイムアリアス？」

グリユーエル「雪羊です。セレニティで飼われている羊の原種です」

茉莉香「へ〜！羊が寝てるんだ」

ミーサ「ここが、幽霊船の本来の役目を期待された場所ね」

グリユーエル「ここにはセレニティ星系に住む、全ての生物の遺伝子と実物のサンプル

ルがあります」

百眼「似姻バンクか」

茉莉香「凄いいじゃないグリユーエル。さすがセレニティ王宮ね。やる事が大きいわ」

グリユーエル「国民がいません…」

茉莉香「えっ？」

グリユーエル「…ここにあるのは、かつてのセレニティの自然と、移民船によつて持ち込まれた生命のバックアップでしかありません。仮に、何処かの星にセレニティの自然環境を再現しても、それだけの事です」

茉莉香「もつと大事な事があるのね」

拓人「だろうな…さて、ようやくゴールだな」

ようやく目的地に到着した。グリユーエルが扉に近付くと、なにやら花のような物が出てきた。

茉莉香「何？」

グリユーエル「昔ならば、血を一滴…と言ったところでしょうか？」

グリユーエルは、髪の毛を一本抜き、その花らしき物に入れる。それに反応して扉が開く。しかし！途中で引つ掛かる。

シュニツァー「任せてもらおう！ふん!!ぬおおおおお!!」

拓人「手伝おう」

クルー「つしや!!」

拓&シユ「ぬおおおおお!!」

男達が協力して、ようやく扉は開いた。

拓人「はあ…はあ…」

茉莉香「お疲れ拓兄」

茉莉香に励まされながら、俺はそのまま中に続く。中には、巨大な花の蕾があった。

拓人「なんだこりや!」

茉莉香「自分一人で入ったら、ハッチ閉じようと思つてた?」

グリユーエル「あの大きなハッチを開けている時に、それは諦めました」

茉莉香「これが、さつき言つてた大事なもの?」

グリユーエル「はい…」

ミーサ「あらま!?! いったい何時の時代の物? こんな大規模なプラントは始めてみたわ」

グリユーエル「なんだか分かりますか?」

ミーサ「言つていいの?」

グリユーエル「うん…」

ミーサ「人口子宮ね」

全員「!？」

拓人「なるほど：： 沢山コードが繋がっているところが、受精卵を育てる人口子宮とその維持装置」

ミーサ「真ん中のブロックは、遺伝子のコーディングやチューニングを行うシステム。そんなところかしら？」

グリューエル「見ただけでそこまで分かるとは：：」

ミーサ「半分デマカセ」

拓人「鎌をかけたんだ。これがセレニティ王家の生まれの証か：： さてと、そろそろお出ましか？」

百眼「来るぞ」

頭上の扉が開き、セレニティの兵がやって来た。

拓人「シュニツツアー、何か棒みたいなもの3本ないか？」

シュニツツアー「これでいいか？」

そう言つてシュニツツアーは俺に鉄パイプを渡す。

拓人「サンキュー♪で、茉莉香。何か考えてるんだろ？」

茉莉香「バレた？」

拓人「まくな。そっちは任せるぞ」

俺はそのまま、ヨートフとキャサリン以外の兵に襲い掛かる。

兵「撃て!!」

拓人「あまい!!」キンキン

俺は鉄パイプで銃弾を叩き落とす。

拓人「茉莉香今だ!!」

茉莉香「グリュール伏せて!!」

拓人「ヨートフさん!!」

俺はヨートフさん声をかける

グリュンヒルデ「ヨートフ!? キャサリン!?」

ヨートフ「ここにおります!」

茉莉香とヨートフさんが、いいタイミングで二人に催眠スプレーを注入する。

拓人「ふくさすがはヨートフさん♪」

ヨートフ「いえ、拓人様も素晴らしい剣術を御使いで…」

拓人「取り敢えず、二人をブリッジに連れて行こう」

眠っているグリュール達をおぶりながら、幽霊船のブリッジに向かった。

グリュール「ううくん…」

茉莉香「あつ! 起きた!! ごめんなさい! 起き抜けで悪いけど、認証をお願い!」

グリユーエルは、寝惚けながら。パスワードを打ち込む。

百眼「通った!!」

通ると、全員が歓声をあげる。

グリユーエル「貴方達! 何故一緒に!？」

茉莉香「利害関係の一致ってやつ？」

グリユーエル「何故! あのような無法をしたのですか!!」

茉莉香「あのようなって？」

グリユーエル「私におかしなガスを… いったい何の目論みがあつて!？」

拓人「平和的解決だ。セレニティの兵が、自分の国の姫に手は出せないだろ? そう言

うことは、俺達無法者の海賊の仕事だ」

グリユーエル「… はく… それで、皆さんは今何をしているのですか?」

茉莉香「幽霊船を母星に返すの」

グリユーエル「!? 幽霊船は、今セレニティ星系に向かっているのですか!？」

クーリエ「そうよ。確率的量子論と、多元宇宙理論を同元時空で計算して辻褁合わせるの、大変だったんだから」

グリユーエル「そんな!! 私か… いったいなんの為に幽霊船に乗り込んだと思っっているのですか!!」

拓人「だって、俺達に話さなかっただろ？」

グリユーエルは、少し悄気ながら妹のグリウンヒルデを見る。

茉莉香「大丈夫よ。あの生態プラント、もう打ち止めみたいだから」

グリユーエル「どういう意味です？」

拓人「あの薔薇の泉、すでに枯れていたんだ。あのプラントは、もう遺伝子サンプルも生態細胞も綺麗サツパリ無くなっていた」

グリユーエル「そんな・・・」

グリユーエルがシヨックを受けていると、扉が開く。ミーサとオートフさんが入ってくる。ミーサ手には赤ん坊を抱えて。

拓人「すまん訂正だ。最後の一人で打ち止めだ」

グリユーエル「最後の・・・一人？」

ミーサ「この宇宙船出身の、最後のセレニティ王家の系統ね。ちよつと早産だったけど大丈夫♪初めまして、御姉様」

ミーサが、抱えてた赤ん坊をグリユーエルに渡す。

グリユーエル「・・・私は、この子を殺してしまうところでした・・・」ポロポロ茉莉香「このタイミングで来たから助けられた。それでいいじゃない♪」

拓人「その子、もう少し遅ければ、蘇生不能で凍り付いていたそうだ」

茉莉香「海賊家業は結果オーライ♪ね？」

グリユーエル「ありがとうございます!!」

赤ん坊「オギャア〜！オギャア〜」

グリユーエル「わっ!？」

突然泣き出して慌てるグリユーエル。

拓人「ははは。そろそろ通常空間に復帰するぞ？」

通常空間復帰して、セレニティ星系に到着する。そして、俺達は弁天丸に戻り後はグ

リユーエル達に任せた。

茉莉香「頑張って、グリユーエル」

拓人「大丈夫さ。さて、俺達も帰るぞ！目標、海の明星!!」

一同「了解!!」

こうして、幽霊船の依頼を終了させて海の明星に帰るのであった…

## ジエニー達との約束

グリユーエルと別れて、海の明星に帰っている俺達。

茉莉香「色々あったけど、もうすぐ家か。長かったような、短かったような」

ミーサ「帰ったら、体育祭や文化祭があるわね♪」

拓人「そうだったな」

呑気な会話していると警報がなる。

クーリエ「セレニティ王宮より暗号通信！」

茉莉香「セレニティから？」

クーリエ「解析後、メッセージ回します」 p i p i p i

クーリエから解析されたメッセージを見る。

拓人「何々？ 弁天丸船長、加藤茉莉香様。副船長の加藤拓人様へ。今は母星に向けて帰路の途上かと思えます。しかし、無理を承知でお願いします。今セレニティ王宮はみぞうの危機に襲われています。助けてください、グリユーエル・セレニティ!？」

百眼「船長!!」

茉莉香「弁天丸、緊急反転!!」

ケイン「飛びますか？」

茉莉香「超光速跳躍!! 目的地、セレニティ星系青の星!!」

ルカ「行路設定。目的地、セレニティ星系青の星。青の物…」 p i p i p i p i

茉莉香「グリユーエル… 待ってて!!」

急いで俺達はセレニティ星系に戻るのであった。それから暫くたつて  
て——————

拓人「お早う梨理香さん」

梨理香「お早う拓人。ニュース見てみな」

俺は梨理香さんに言われてTVを見る。

キャスター『セレニティ王宮における、今回の動きに大きく貢献した、宇宙海賊弁天丸の船長及び副船長とそのクルー達。取り分け、船長を勤める加藤茉莉香さんと、副船長を勤める加藤拓人さんは、他宇宙星系海の明星にある、白鳳学院の生徒であり…』

梨理香「宇宙海賊が、お姫様から勲章を貰うとはね。ロマンチックを通り越してるよ。ふふ♪」

拓人「つたくグリューエルの奴、緊急の呼び出しがあったから戻ってみれば、まさか勲章を授与する為だけに呼び出したなんて…」

梨理香「明日、学校に行ったら大変なんじゃないかい？」

拓人「気が重いよ… 只でさえ今日はジェニーの頼み事があるんだから…」

梨理香「私服で行けば、誰も気付かないだろ？」

拓人「そうするか…」

俺は、ジェニーの約束事を守るために、今回はドリトル家が主催するパーティーに行くので、正装して指定された場所に向かう—————

拓人「確かにばれないけど… これはさすがに」

梨理香さんに言われた通りに、いつもつけてるサングラスを着けて、待ち合わせ場所

に待っている。しかし、それが失敗したのか周りの人から、かなりの距離を取られていた。

拓人「早く来てくれ〜」

等と俺がなげいていると、目の前にリムジンが止まる。

拓人「？」

ジェニー「お待ちませ。拓人…よね？」

拓人「ああ。悪いな、ボディガードも兼ねてるから、サングラスをかけさせもらった。」

ジェニー「そうなの？さすがに少しは驚いたけど、その姿も格好いいわよ♪」

拓人「サンキュー」

ジェニー「それじゃ、リンを迎えに行きましょう♪出してちょうだい」

ジェニーは運転手に指示し、リンが待っている場所に向けて出発した。

拓人「ん〜何だろう？リンのドレス姿が想像出来ん」

ジェニー「失礼よ拓人。リンはドレス着ても綺麗なんだから！」

拓人「分かってるよ…ん？止めてくれ」

俺は運転手に言っつて、車を止めてもらう。

拓人「あれは…リンだな？」

ジェニー「そうね。でも、誰か隣にいるわね？」

拓人「ナンパかもな？一寸行つてくる」

俺は車を降りて、リンの所に向かう—————

リン「遅いなくジェニー達……」

アタシは、ジェニーに言われてる待ち合わせ場所で待っている。

リン「しつかし、アタシにこのドレスは派手なんじゃないか？」

などと言っていると、一人の男に声をかけられた。

男「へー、姉ちゃんべっぴんさんだなく♪俺と良いことしないか？」

リン（何だコイツ？酔っぱらってるな……）

リンはそのまま無視することにした。しかし、男は未だにしつこく話しかけてくる。

男「無視すんなよ！こうなったら、力づくで…」

??「力づくで、どうするんだ？」

突然声が聞こえて、ソイツの方を見る。すると、そこにはアタシが待ち望んだ男がいた  
たーーーーーーー

俺は急いでリンのもとに向かう。どうやら、隣にいる男は酔っぱらっているみたいだ。しかも、とんでもないことを言っていた。

男「こうなったら、力づくで…」

拓人「力づくで、どうするんだ？」

リン「拓人!!」

男「なんだ？お前さん…は」

拓人「ソイツは、俺の大切な人でね？お前に何かしたのか？」

男「い、いえ……何も……お、俺はこの辺で……失礼しましたく!!」ピュー

男は叫びながら逃げていった。

拓人「……」

リン「助かったよ拓人♪」

拓人「ああ……ならよかった……。なあリン、俺ってそんなに見た目怖いかな？」

リン「アタシは平気だったけど、さすがにその格好でサングラスをかけていたら、さすがにビビると思うぞ？」

拓人「だよな……とは言っても、これを取ると絶対に周りが叫ぶ」

リン「ま、ニュースに出ればね」

拓人「取り敢えず、車にジェニーを待たせてるし、行くぞ」

リン「ああ……」

俺は、リンの手を引き車に向かう。

リン（拓人……誉めてくれなかったな）

リンは、普段着ないドレス姿を拓人に見てもらい何か言ってほしかった。

拓人「そうだ」

拓人は急に止まる。

拓人「リン、そのドレス姿…凄く似合ってるぞ♪」

リン「!!／／／」

そう言われたリンは、顔を真っ赤にしていた。そしてそのまま車に乗り込んだ。

ジェニー「お帰りなさい。あらあら、リンったら顔を真っ赤じやない♪何処かの誰かさんに褒められて、嬉しかったのね♪」

拓人「ん？」

ジェニーは、リンにだけに聞こえるように言った。そして、ようやくパーティー会場に到着する。

拓人「驚いたな…さすがは、ドリトル家が主催するパーティーだな」

ジェニー「ありがと♪さて、拓人は今から私達の護衛兼フィアンセなんだからね？確りとリードをお願いね♪」

拓人「分かつてるよ。しかし、護衛はともかく二人の女性にフィアンセが一人って…大丈夫か？」

ジェニー「大丈夫よ。誰かが何か言えば、そことは今後取引しないから♪」  
この人、笑顔で物凄い事を言いましたね…

拓人「それじゃあ、行きましようか？お姫様♪」

そう言って、俺は膝ま付いて二人に手を差し伸べる。

ジェニー「ええ♪宜しくお願いね♪」

リン「よ、宜しく：：／／／」

ジェニーは、なれた感じで俺の手を握る。リンは、まだ顔を少し赤くしながら、俺の手を握る。そしてパーティー会場に入る。

拓人「凄いな！大物政治家や、何処ぞの会社の代表各ばかりだな…」

ジェニー「ええ。でも、これで今回は少ない方よ？」

拓人「マジか!？」

これで少ない!?その言葉に、俺は驚きを隠せなかったのであった。：：取り敢えずパーティーを楽しんだ。豪華な料理に満足しながらジェニー達と一緒にいる。その間も、ジェニーに挨拶に来る人は絶えなかった。しかし、そんな中でも、うつとしい人物はいるのである。

??「お初にお目にかかりマス♪私は、チャン・リーと言いまス」

ジェニー「初めましてチャンさん。ジェニー・ドリトルです」

チャン「これは美しい!!どうですか?今からお食事デモ?」

チャンはそう言いながら、ジェニーに手を出そうとしたので、俺が止める。

チャン「何デス?貴方ハ?」

拓人「???个以上接近詹?」《これ以上ジェニーに近付かないでもらおうか?》

チャン「!? 感到吃?。你中文能? 《驚きました。貴方中国語話せるんですね?》」

拓人「功能? 明好? 快? 退? 方法! 《能書きはいいい。さつさとこの手を引つ込めな!》」

チャン「OK, 明白了。連我的部下也, 向你敵不過《OK, 分かりました。私の部下でも、貴方には敵わないですね》」

チャンはそう言つて、伸ばした手を引つ込める。

チャン「ドリトル家のお嬢さんは、素晴らしい警衛員《ガードマン》をお持ちですね」

ジェニー「ありがとうございます」

チャン「それでハ、私はこの辺デ」

チャンはそう言つて、俺達から離れていった。

ジェニー「それにしても驚いたわ。拓人、貴方中国語話せるのね?」

拓人「そうか? 別に普通だが?」

リン「周りで中国語話せる奴なんていないっての!」

ジェニー「他の国の言葉も話せるの?」

拓人「一応、殆どの国の言葉は話せるぞ?」

ジェニー「あら♪なら、今度は通訳もお願いしようかしら？」  
拓人「勘弁してくれ……」

なんて事を話していると、また別の男が俺達くらいに男を連れてやって来た。  
男「これはこれは！ドリトル家のお嬢様。ご機嫌よう♪」

ジェニー「あら？どなたかと思えば、パーパー運送の成金《なりかね》社長」

成金「いや、つい最近までこれくらいだったのに、時が過ぎるのは早いな〜!!」  
こんなって……米粒の大きさじゃんかそれ……

ジェニー「それで、私に何かご用意ですか？」

成金「おおくそうだった！実は、息子を紹介しようと思ひまして。ほら！挨拶せんか  
!!」

そう言つて、太った男の後ろから出てくる男。

??「初めまして。父から紹介されました、息子の成金毅と言ひます」

そう言つて、俺達に向けてお辞儀をする毅。

拓人（いやいや！マジで親子か？似てなさすぎだろ!!）

そう。その男は本当にこの隣にいる男の息子かと疑う位に美形であつた。

毅「私は光栄です。あのドリトル家のお嬢様と、こうしてご挨拶出来るなんて」

ジェニー「ありがとう」

成金「なははは!!とここで、そちらの男性は？」

ジェニー「こちらは私とランブレッタ嬢のボディガードを勤めてくれている方です」

成金「ほくそれはそれは。さぞドリトル家ですし、素晴らしいBGなんでしょうな♪」  
ジェニー「ええ、それはもう私達には勿体ない位ですわ♪」

何だろう、二人の間には目には見えないが、火花が散っている気がする…

成金「どうでしょう？良ければ息子と今度食事でも」

ジェニー「素敵なお誘いですが、お断りさせていただきます♪」

成金「ほう…何故ですか？」

ジェニー「私とランブレッタ嬢には、既にフィアンセがいますので」

毅「あははは、ドリトル嬢はご冗談がお上手だ。失礼ながら、その様なお話はお聞きした事ありませんが？」

ジェニー「それはそうです。何故なら正式には決まっていますけど、私が勝手に決めています」

毅「ほう、ならそのフィアンセ候補の方とお会いしてみたいですね」

ジェニー「既に、貴殿方の目の前におられますわよ？」

成金「目の前に?…まさか彼が？」

ジェニー「ええ♪拓人、サングラスを取ってちょうだい」

俺はジェニーに言われるがまま、サングラスを外す。すると、急に笑い出す成金親子。成金「なははは!!ご冗談を!確かに彼は、顔はそこそこかと思いますが、BGにする位と言うことは、ガサツと言うこと。それなら、息子の方がよっぽど素晴らしい!!見た感じ、お二人を守れるかも微妙みたいですしな」

毅「確かに、これなら僕がお二人を守った方が余程ましですよ?」

ジェ&リ「: : :」ブチッ

拓人(あちやう: : :二人ともキレたなこれは)

成金親子の言葉に、先程まで愛想笑いをしてたジェニーと、今まで黙っていたリンがキレた。しかし、俺は思った。ここにいるのがこの二人だけで。もし茉莉香達がいたら、この二人が生きている保証はないからな: : :

ジェニー「でしたら、どちらの実力が本物か試してみましよう!」

毅「いいでしょう♪」

こうして、ペーパー運送の成金毅と戦う事となった拓人であった。

毅「勝負は、どちらかが参ったと言うか戦えなくなるまで。武器の使用はあり!但し飛び道具や殺傷能力があるのは無しだ。私は、レプリカのスピアを使わせてもらう。君は?」

拓人「ん？俺は別に無くとも…。」

毅「いや、武器を持たない相手と戦うのは、卑怯だからな。悪いが武器を選んでくれたまえ。とは言つても、まともな武器はないけどね？」

見ると、俺の周りには長い木の棒だけである。それが数本そこら辺に適当に置かれている。

リン「汚いぞ!!」

成金「汚い？こちらは、普段からあれを持たせているんです。そちらが何も持っていないのですから、仕方ありませんな♪」

リン「クソ!!」

拓人「ん、それじゃあその木の棒を3本くれ」

俺は木の棒を3本受け取り、上着を脱いで構える。そう、ゾロの三刀流である。

毅「木の棒を3本。中々面白い余興ですね。ですが、手加減はしませんよ？」

拓人「能書きはいい。さっさと掛かってきな！お坊ちゃん？」

毅「!!」

俺の一言に怒りを覚えたのか、相手は突然突っ込んでくる。しかし、当然俺はそれ余裕で受け止める。

毅「そんな!?!ただの木の棒で、この私の攻撃を受け止めるなんて…。」

拓人「所詮お前の実力はその程度ってことさ。」  
毅「ふ、ふざけるな！凡人風情が!!」

拓人「やつと化けの皮が剥がれたな。やつぱりお前達は親子だよ。それじゃ、とつとと終わらせるか。三刀流奥義……三千世界!!」

俺は、ゾロ技の三千世界を放つ。当然木の棒なので！殺傷能力はないし、加減もしたから骨折等もしない。

拓人「勝負……ありだ！」

成金「そ、そんなく!! 毅、毅く!!」  
負けた息子に駆け寄る成金。

ジェニー「これでお分かり頂けましたか？」

成金「は、はい…… 申し訳ありませんでしたく!!」

そう言いながら、成金は自分の部下に息子を運ばせて、その場を後にした。

拓人「ふく……」

ジェニー「お疲れ拓人♪」

リン「いやく!! スカツとしたよ♪」

拓人「俺もだ」

ジェニー「これで、当分は私にちよつかいをかけてくる人はいないでしょう？」

リン「だな♪それじゃあ、また戻って料理を食べようぜ♪」

リンの提案に賛成した俺とジェニーは、そのまま中に戻るのだった。パーティーも無事に終了し、俺は家に帰る準備をしていた。すると、ジェニーから声をかけられた。

ジェニー「拓人、今日はありがとう♪よかったら私の家に泊まっていかない？」

拓人「どういたしまして。それはさすがにまずいだろ？」

ジェニー「でも、もう夜も遅いし…リンも泊まっていくのよ？」

拓人「大丈夫だ。まだ時間はあるし、明日は学校があるから、家に戻って準備しないと」

ジェニー「残念ね。今度は是非家に泊まって行ってね？」

拓人「ああ、約束する」

ジェニー「なんだったら、茉莉香さん達も呼んでもいいわよ？」

拓人「茉莉香達が喜びそうだな。それじゃ、俺は帰るよ。お休みジェニー」

ジェニー「お休み拓人」

こうして俺は、ジェニーの屋敷を後にして、家に帰ったのであった。しかし、翌朝の放課後にヨット部で物凄い騒ぎになることを、この時拓人は知るよしもなかったのであった…

## 体育祭開催

ジエニーのパーティーが終わり翌日、ニュースの影響か女子生徒が俺を見て歓声をあげる。

「「きゃ〜!! 拓人様よ〜♪」」

俺は、取り敢えず手を振って応えておく。休み時間の度に俺のクラスにやって来れば、ゆっくりと休めない…。そんな事が今日はずっと続いて、ようやく放課後をむかえる。すると、隣のクラスから陽介がやって来た。

陽介「よう！お疲れ有名人♪」

拓人「なんだよ陽介」

陽介「随分お疲れだな。でも仕方ないだろ？ なんとたってお前は、あのセレニティのお嬢様に勲章を貰ったんだから」

拓人「あれはグリユーエルが勝手にやったただけだ!!」

陽介「そうは言っても、ニュースにまでなったんだから、隠す事は出来ないんだから」  
拓人「他人事と思いやがって…」

陽介「他人事だしな♪」

拓人「ったく……んじゃ、俺はそろそろ部活に行くわ」

陽介「じゃくな」

陽介と別れて、俺はヨット部に向かった。

拓人「入るぞ〜!!」

一同「いらつしや〜い!!」

拓人「おわっ!?!」

扉を開けると、全員に叫ばれて少しビビる。

拓人「なんだいったい?」

ハラマキ「拓人先輩、昨日は凄かったですね♪」

サーシャ「はい!見てて凄くカッコよかったです!」

拓人「昨日?カッコよかった?何の話だ?」

リン「よう拓人!!来たな」

拓人「リンか。コイツらはさっきから何を言ってるんだ?」

ジェニー「あら?忘れたの拓人」

拓人「??」

ジェニー「この映像を見れば思い出すわ♪リン、お願い」

リン「了解♪」 p i p i p i

リンは、自分が普段使ってるパソコンを操作して、俺にモニターを見せる。すると、そこに映っていたのは、昨日のパーティーで勝負している俺の姿だった。

拓人「これって… まさか昨日の!?!」

ジェニー「ご名答♪あんな姿、私達だけ見るなんて勿体ないから、悪いとは思ってたけど映像を録らせてもらったわ」

拓人「いつの間に…」

リン「これを見たら、皆お前の姿に見惚れてたぞ?」

ジェニー「茉莉香さんや、チアキちゃんが見たらどうなるかしら♪」

等と言っていると、いいタイミングで茉莉香とチアキ、そしてグリユーエルもやって来た。

茉莉香「こんにちは♪あれ? 皆何をしてるの?」

リリイ「来たね茉莉香♪凄い映像があるから、見てみなよ♪」

茉莉香「凄い映像?」

ハラマキ「うん♪チアキちゃんもグリユーエルもこっちこっち♪」

チアキ「ちよつと引つ張られないでハラマキ! 後ちゃんじゃない!!」

ハラマキ達に引つ張られながら、リンのパソコンのモニターを覗きこむ。

リン「んじゃ再生するぞ♪」 p i

リンがモニターを起動する

茉莉香「うわく凄くカッコいいな♪」

チアキ「…確かに、素晴らしい戦い方ね」

グリューエル「はい、王宮にもこれ程美しい戦いをする者はありません。ですが、残念ながらお顔が拝見出来ませんね…」

茉莉香「そうだよね。この戦ってる人がどんな顔か見てみたいよね♪」

リン「安心しな。戦いが終わればこつちを向くから♪」

チアキ「そうですか」

リンにそう言われて、画面に目を戻す。そして、ようやく戦いが終わり、戦っていた人物の顔が移る。すると、それを見た瞬間、茉莉香達は叫んだ。

茉莉香「これって… 拓兄!!」

チアキ「間違いないわ!これは拓人さんね」

グリューエル「拓人さん、ここまで素晴らしい剣術をお使い出来たのですね」

拓人「はく… ったく、リンやジェニーは本当に悪戯好きだな」

ジェニー「フツッ、ゴメンね♪」

拓人「別にいいけど」

ハラマキ「ども、本当にカッコよかったよね♪」

サーシャ「う、うん！とても素敵でした」

拓人「ありがとうな♪」ナデナデ

俺は、駆け寄ってきた原田とサーシャに頭を撫でて答える。

「あゝ!!」

拓人「な、なんだ!？」

突然叫び出す茉莉香やジェニー達。

茉莉香「拓兄!!」

拓人「ど、どうした？」

チアキ「それをやったら駄目じゃないですか!!」

ジェニー「またなの拓人!!」

拓人「はっ？」

リン「二人を見てみる！」

リンに言われて頭を撫でて二人を見る。見ると二人とも顔を赤くしていた。

サーシャ「せ、先輩……／＼／＼」

ハラマキ「もう少し……お願いします／＼／＼」

拓人「……」

俺は黙る事にした。何故かって？茉莉香達からの視線に耐えられないからである。

茉莉香「また増えたよ…」

チアキ「これで何人目？」

ジェニー「確か… 私達を含めて合計9人ね」

リン「さすが、フラグ建設王だな。普通こんだけフラグ建てたら、どれかは折れる筈なんだけどな？」

グリューエル「そこをされないのが、拓人さんなのですけど…」

拓人「と、とにかく!!もうすぐ体育祭があるし、部活対抗のリレーなんかの話をしようぜ!!」

茉莉香「む…」

ジェニー「分かったわ。でも、後でゆっくりとお話ししましょうね♪」

茉莉香「後でミーサ達にも連絡しておこ…」

取り敢えず周りを落ち着かせて、体育祭の話始める。

リン「さて、もうじき体育祭が始まるけど、部活対抗のリレーには、各学年から二人ずつ出場してもらおう」

ジェニー「3年は、私とタルヴィツキが出るわ」

茉莉香「1年は、私とチアキちゃんが出るよ♪」

チアキ「だからちゃんじゃない!!」

リン「2年は、アタシは決まってるんだけど、後一人がね……」  
茉莉香「拓兄出ないの？」

拓人「ん？出てもいいけど、俺が出て大丈夫か？」

リン「いいんじゃないか？」

拓人「いや、イズミや小林丸とか出なくていいのか？」

小林丸「せっかく男子がいるんだし、拓人が出るべきだと思う」

リン「なら決まりだな♪問題は、順番だな」

ジェニー「そうね〜ここの部活リレーは少し変わってるからね」

茉莉香「そんなに違うんですか？」

リン「ああ、普通だったら二組に分けてやるけど、ここはまとめて計6周走る事になる」

チアキ「なるほど……となると、勝利に鍵は順番ですな」

拓人「そうだな……当然俺がアンカーだろうけど、問題は最初の走者だな」

リライ「5人の中で、誰が瞬発力があるのかな？」

拓人「チアキとかありそうだな」

リン「ならチアキで決まりだな」

チアキ「分かりました」

そんなこんなでリレーの順番が決まっていって。そして決まった結果……

チアキ↓タルヴィツキ↓リン↓ジェニー↓茉莉香↓拓人

拓人「これで決まったな」

ジェニー「そうね。それじゃあ、リレーに参加するメンバーは、放課後少し残ってバトン渡しの練習をしましょう」

リン「だな」

こうして、俺達リレーに参加するメンバーは、部活後にバトン渡しの練習をするのであった。クラスで出る競技も決まり、いよいよ当日をむかえるのであった。

委員会『それではこれより第39回、白鳳学院の体育祭を開催いたします』

拓人「始まったな」

茉莉香「うわー凄いね♪」

リン「そう言えば、1年は初めてだったな」

チアキ「はい」

拓人「体育祭でここまで驚いてたら、文化祭とか失神するんじゃないか？」

そんな事を言いながら、俺達は自分のクラスを応援する。因みに、各学年の同じ組がチームとなるので、俺達雪組は1年に茉莉香にチアキにサーシャ、そしてマミちゃん。2年は俺とリンと小林丸。3年はジェニーとタルヴィツキ先輩がいる。

ジェニー「頑張って勝つわよ！」

拓人「やるからには、負けられないな」

委員会『次の競技は棒倒しですので、男子生徒は入場門に集合してください』

拓人「呼ばれたな。それじゃ行ってくる」

茉莉香「頑張ってね拓兄く!!」

リン「怪我するなよ！」

俺は、茉莉香達に手を振りながら入場門に向かう—————

茉莉香「リン先輩、この競技って怪我するんですか？」

リン「ああ、棒倒し……別名喧嘩倒しだな」

ジェニー「この競技は、共学になったときに出来てね、去年は負傷者が多かったわ」

チアキ「だ、大丈夫なんですか!？」

リン「拓人は無事よ♪でも、今年は厳しいかもね」

小林丸「なんで？」

ジェニー「拓人は、今は海賊弁天丸の副船長。そして、あのセレニティから勲章を貰って今じゃ有名人」

リン「それに加えて、ジェニーやグリユーエルと仲がいい。だから、それを目の敵にして襲われる可能性が去年より増えている筈さ」

茉莉香「大丈夫かな…」

ジェニー達の言葉に、心配そうに見つめる茉莉香とチアキ達1年生であった――

俺は、入場門に集合し整理する。すると、陽介が声をかけてきた。

陽介「大丈夫か拓人。お前、只でさえ目立ってるのに、あのジェニー先輩やセレニティのお姫様と仲がいいから、それ面白くない奴がからんでくるかもな」

拓人「面倒だな」

陽介「それに、あの茉莉香ちゃんもかなり人気があるから、兄のカッコ悪い姿を見せようと思ってる連中が多いぞ？」

拓人「そうか……今年も手伝ってくれるよな？」

陽介「当たり前だろ？」

拓人「助かる。それに、お前も人気があるんだから、わざわざ人気落ちる様な真似はしないか」

陽介「そう言うこと♪それに、お前といた方が何かと面白いからな♪」

拓人「こいつは♪」

笛がなって、棒倒しが始まる。

拓人「行くぞ陽介!!」

陽介「OK♪」

棒倒しが……今始まる!! 開始の笛が吹かれたと同時に、敵のチームが俺達に向かって突っ込んでくる。

拓人「行くか」

陽介「あいよ、俺は左半分の連中を引き付ける。お前は右半分を頼むわ♪」

俺と陽介は、左右に別れる。すると、的も左右に別れて俺達に向かつてくる。

拓人「よくも飽きないな…」

男「うるせー!!俺達モテない男の気持ちを知れ!!ラグビー部隊、前へ!!」

ラグビー部「おー!!」ドドドドド

拓人「馬鹿の一つ覚えのタツクルか…」

俺は一人を倒し、跳ねたボールを蹴り飛ばす

拓人「ジエンガ砲改め、ラグビー砲!!《ラグビーボールなので》!!」

蹴飛ばしたボールが当たり、ドミノ倒しみたいにラグビー部が倒れていく。

男「くそー!!次!!柔道部部隊、前へ!!」

次やって来たのは、柔道部。

拓人「面倒だな…コンカツセ!!」

面倒なので、俺は一気に吹っ飛ばす。そして…

委員会『試合終了です!東方の勝利です』

俺達がいる東方が勝利をおさめる。俺にやられた奴は、山積みになっており、委員が責任をもって掃除していたのであった。競技も進み、お昼休みになる。

委員会『ただいまより、お昼休憩です。次の開始時間は、午後1時からとなります。始

めの競技は学年別借り者リレーです。次に、部活対抗リレーとなっています』

拓人「ようやく昼か」

茉莉香「拓兄く!!こつちで皆と食べようよ♪」

俺は茉莉香と一緒に、ジェニー達がいるところに向かった。

リン「お〜い拓人!こつちだこつち!!」

ジェニー「待ってたわ」

拓人「昼をしつかりと食べて、午後の競技も頑張るか♪」

一同「お〜!!」

茉莉香「へへ〜ん!今日は私がお弁当作ってきたんだ♪」

拓人「なに?」

チアキ「茉莉香なの?私も自分で作ってきたわ」

ジェニー「私もよ♪」

リン「ジェニーと一緒につくってきた」

サーシャ「拓人先輩!良かったら、私のお弁当も食べてください!」

ハラマキ「私も作ってきたよ♪」

拓人「ああ…ありがとうな」

俺は、茉莉香達が作ってきた弁当を見る。

拓人（見た目は普通なんだが…）

俺は、前のキャンプでの料理を思い出す。あの時は、とてもじゃないが食える代物ではなかった。今回は…

拓人「いただきます…」

俺は覚悟を決めて、まずは茉莉香の弁当に箸を伸ばす。

拓人「…」

茉莉香「どう…かな？」

拓人「少し塩辛いが、食えなくはない」

茉莉香「そっか。まだまだだね」

拓人「でも、嬉しいぞ？俺の為に、朝早く起きて作ってくれたんだろ？」ナデナデ

俺は茉莉香の頭を撫でる。

茉莉香「えへへへ／＼／＼」

ジェニー「おほん！まだ私達のが残っているわよ？」

拓人「分かっている。食べさせていただきます」

そんな感じで、俺は皆が作った弁当を食べていく。ただ、次に誰の弁当を食べるかで揉めたの言うまでもない。因みに、ジェニー達他のメンバーも以前よりは料理の腕があがっていた。ハラマキの料理が一番美味しかったのは秘密である。そして、午後の部

に望むのであった。

委員会『それではただいまより、午後の部を開始いたします。まずは借り者競争です。これは、物ではなく書かれたことに当てはまる人物を連れてゴールする競技です』

拓人「これは誰が出るんだ？」

サーシャ「えくと、1年は茉莉香とチアキちゃん。2年生はリン副部長。3年生はジェニー部長が出ています。最初は1年生からです」

審判「位置についてく…… ようい！」パーン

拓人「最初は…… チアキが走ってるな」

サーシャ「頑張れチアキちゃん!!」

最初はチアキが出ている。封筒を広い、中を確認するチアキ。すると、急いでこつちに来る。

拓人「こつちに来てるな？」

サーシャ「そうですね……」

チアキ「あ、あの…… 拓人さん!!一緒に来てください!」

拓人「別にいいけど、内容はなんだ？」

俺はチアキが持っていた紙を見る。そこにはこう書かれていた。

【自分と旅行に行きたい男性。家族不可。手を握ってゴールすること】

拓人「…」

チアキ「べ、別に深い意味はないですからね!!」

チアキよ、そんなに顔を真っ赤にして言っても、説得力ないぞ？

拓人「取り敢えず行くか。ほら！」

俺はチアキに手を出し、手を握るように伝える。

チアキ「お、おねがいます／＼」

チアキはそのまま拓人の手を握りゴールに向かう。結果は3位だった。

チアキ「あ、ありがとうございます／＼」

拓人「ああ、じゃあな」

俺はチアキと別れて、クラスの応援席に戻る。

サーシャ「お疲れ様です」

拓人「ただいまサーシャ。自分のクラス…って、学年は違うけど、クラスは一緒だからここについても問題ないか」

サーシャ「はい！次は茉莉香が走る見たいですよ？」

拓人「茉莉香か？」

俺は、茉莉香が走ると聞きグラウンドに目を向ける。

拓人「茉莉香く頑張れく!!」

サーシャ「今1位ですよ!!」

茉莉香は封筒を取り、中を見ると一目散に俺のところに来る。

茉莉香「拓兄!!一緒に来て!!」

拓人「今度はなんだ?」

俺は茉莉香が持っている紙を見る。

「自分が大切な人物。家族、知り合い可。男性の場合は、生徒をおぶってゴールする」と

拓人「またか…。しかも、今度はおぶるのか?」

茉莉香「あはは…」

拓人「仕方ない。ほら茉莉香、早く乗れ」

茉莉香「う、うん／＼／」

茉莉香は照れながら、拓人の背中に乗る。

茉莉香（久し振りだなく。昔私が迷子になったときに泣いてて、それを拓兄が見付けてくれて私をおぶって連れて帰ってくれたっけ…。）

茉莉香は、久し振りに乗る拓人の背中で昔の事を思い出していた。

拓人「よし、1位だ!茉莉香、1位だぞ?」

茉莉香「どうしたのお兄ちゃん?」

拓人「は？」

茉莉香「わわっ!？」

拓人「お兄ちゃん？」

茉莉香「うん：．．拓兄の背中に乗ってる時、昔の事を思い出したんだ／＼／＼」

拓人「あの時か：．．茉莉香が中々泣き止まなくて、小さいながら出来ることがあれ  
だったからな♪」

茉莉香「覚えてたの拓兄？」

拓人「当たり前だろ？」 ナデナデ

茉莉香「ふあゝ：．．」 トロロン

拓人「そろそろ俺は戻るな♪」

茉莉香「あっ：．．」

撫でた頭から手を話す。すると茉莉香は残念そうな顔で拓人を見つめていた。

拓人「ただいまゝ」

サーシャ「お帰りなさい」

拓人「やれやれ、この調子じゃリンやジェニーも俺の所に来そうだな：．．」

サーシャ「多分来ると思いますよ？」

拓人「だよねゝ」

サーシャ「次はリン副部長が走る見たいですよ？」

拓人「リンか：。」

リンもスタートし、俺の予想通り俺の所に来る。

リン「拓人!!」

拓人「分かっている。で、内容はつと？」

【自分がパートナーにしたい異性。肩車しゴールすること】

拓人「なんだか、内容がどんどん過激になつてる気が：。」

リン「た、頼む／＼／」

俺はリンを肩車すると、急いでゴールに向かう。しかし、残念ながら4位だった。

拓人「悪かったな」

リン「べべ、別にいいさ!!／＼／」

拓人「ならいいけど。んじや俺は戻るな」

リン「ああ」

拓人「ふゝ：。次はジェニーが来るだろう」

そしてジェニーもスタートし、俺のもとに来る。

拓人「内容は？」

【結婚したい男性。お姫様抱っこでゴールすること】

拓人「…」

ジェニー「ヨロシクね♪未来のパートナーさん♪」

拓人「は…」

俺はジェニーをお姫様抱っこし、ゴールに向かう。結果は1位。他の連中は相手が直ぐに見付からなかった為であった。

拓人「さすがに、4人は疲れるな」ポキポキ

サーシャ「お疲れ様です拓人先輩♪次は部活対抗リレーですけど、大丈夫ですか？」

拓人「なんとかなるだろう」

おれは、部活対抗リレーに出るために入場門に向かい、そのままグラウンドに入る。

委員会『それでは、ただいまより部活対抗リレーを始めます。』

こうして部活対抗リレーが始まり、俺達の出番が回ってきた。

委員会『最後のリレーは、ラクロス部、ヨット部、野球部、サッカー部です。それでは、位置についてよくよい、ドン!!』

第一走者のチアキがいいタイミングでスタートした。そして、タルヴィツキ先輩、リン、ジェニーと順調にバトンを繋いでいる。しかし、ここで事件が起きる。次の走者の茉莉香が、バトンを落としてしまった。順位は2位から最下位になる。そして俺にバトンが来る。

茉莉香「ごめん拓兄!!」

拓人「任せろ!!」

俺はバトンを受け取ると、力の限り走る。そして次々と順位を上げて1位と接戦になる。

委員会『これは凄い!!ヨット部アンカーの加藤さんが、物凄い追い上げだ!!果たしてサツカー部とヨット部、どちらが1位になるか!!』

デッドヒートを繰り広げる俺とサツカー部!!結果は…

委員会『ゴ~~~~ル!!1位になったのは…ヨット部だ~~~~!!』

ヨット部「やった~~~~!!」

俺はなんとか1位でゴール出来た。それを祝いに皆俺のもとに集まる。茉莉香は泣きながら俺に抱き付いてきた。

茉莉香「だぐにいく!!」

拓人「おいおい茉莉香、なにも泣くことないだろ?」

茉莉香「だつで~~~~!!私のぜいで、負けぢやうど~~~~!!」

拓人「任せろつて言っただろ?可愛い妹のミスは、俺のミスでもあるからな♪そんなのは、直ぐに無くすに決まってるだろ?」

リリイ「拓人先輩を胴上げだ~~~~!!」

一同「おー!!わーっしょい!わーっしょい!!」

俺はヨット部から胴上げされた。そして、体育祭も無事に終了し、俺達は一同ヨット部部屋に集合した。

ジェニー「皆さんお疲れ様です」

拓人「さすがに疲れたな」

茉莉香「お疲れ様拓兄♪」

拓人「こいつは、さっきまで泣いてたとは思えないな♪」

茉莉香「うう／＼／／」

一同「あははは」

拓人「皆頑張ったし、そうだな… 外食にでも行くか♪」

一同「やったく♪」

ジェニー「いいの拓人?」

拓人「たまにはな♪」

茉莉香「何処に行くの?」

拓人「そうだな…」

今日は茉莉香も含めて全員が頑張ったんだ。これくらいはいいよな♪たまにはさ♪

# 俺達以外が全員入院!?

新しい学年を迎えた俺は、心機一転の気持ちで弁天丸に行こうとしていた。すると、シャトルに乗る前にミーサから通信が入る。

拓人「もしもし?」

ミーサ『拓人：．．?』

拓人「俺だけど、いったいどうしたんだその声?」

ミーサ『実はね、船長達を除く弁天丸クルー全員が隔離中。今病院船の中』

拓人「は〜っ!?! 隔離!?!」

ミーサ『荷物の中に、猫猿の生態コンテナあったでしょ?あれが、タイマーで勝手に開いてたみたいで、あの中にいた5匹が、風邪みたいな感染症にかかってたみたいで、しかも空気感染するたちの悪い病気』

拓人「なんだと!?!」

ミーサ『取り敢えず、症状は熱と咳の風邪みたいなものなの。ゴホゴホ：。拓人は大丈夫?具合悪くない?』

ケイン『船長〜!副船長〜!大丈夫ですか〜』

百眼『俺達のような、悪い大人になるなよ』

クーリエ『百眼、発言が意味不明!』

拓人「ま、取り敢えず大丈夫みたいだな…:」

ミーサ『よかった』

拓人「茉莉香には連絡したのか?」

ミーサ『まだ…:』

拓人「分かった。それは俺から連絡しておく。後、弁天丸の仕事はどうなんだ?」

ミーサ『さすがに無理みたい。弁天丸の消毒は終わっているし、病気事態は1週間で治るみたい。でも元々怪しげな目的に使うとしていたウイルスらしくて、ワクチンが効くかどうか分からないらしいの。最低でも、完治が確認されるまで、2週間は外部との接触は禁止だって』

拓人「2週間!?マジか!」

ミーサ『でね、悪いんだけど保険会社に連絡しておいてくれない?』

拓人「分かった。皆にしっかり治すように言っといてくれ。退院したら、好きなもの作ってやるってな♪」

ミーサ『ふふ、ありがとう』

俺はミーサとの通信を切り、家に帰って茉莉香に事情を伝えた。そして、俺達は明日

ハロルド保険組合に連絡をすることになった。翌日、学院のヨット部の部室を借りてハロルド保険組合に通信をする。

シヨウ『ハロルド保険組合のエージェントのシヨウだ♪』

拓人「久し振りだなシヨウさん」

シヨウ『おく弁天丸の副船長♪久し振りだな♪』

茉莉香「拓兄、この人知ってるの？」

拓人「ああ、ミーサがたまに連絡してるところを何度か同席してるからな」

シヨウ『以前やったた、ハロルドは5年前に係りが変わったんだ！確かにハロルドは気性が荒くて、よく色んな海賊と揉めていた。特に、ブラスター梨理香とは仲が悪くて、殴り合いの喧嘩をしたとか。だがしかし私は平和主義でね♪海賊さんとは仲良くしたいのだよ』

茉莉香「はい、宜しく願います」

シヨウ『では、本題に入ろう。弁天丸の乗組員が隔離されたことは、こちらも掴んでいる。弁天丸の船体はどうしてる？』

茉莉香「ロックして、自動運航モードです。乗組員達の隔離期間は2週間。弁天丸の業務予定だった、シュバルツベルグへの届け物と、クイーンエスエメラルダへの海賊行為は、残念ながら断念せざる終えません」

シヨウ『分かった。ではその二つについては手配しよう。だが、問題はそれよりは後の問題だ!!』

茉莉香「えっ?」

シヨウ『隔離期間は2週間と聞いているが、ワクチンが効くかは未知数。合わせて病院側は、確実な試験データを取らなければならないから、1ヶ月は隔離されるだろう!』

茉莉香「1ヶ月!? そんな営業妨害だわ!!」

シヨウ『チツチツチ。いや、事態はもつと深刻だ』

茉莉香「どういうことですか?」

シヨウ『仮に1ヶ月休めば、弁天丸に海賊免許が無効になる!!』

茉莉香「えく!!」

大声を出す茉莉香の声に、俺とシヨウさんは耳を塞ぐ。

シヨウ『とは言え船長!! 君がその間に弁天丸に乗り込み、通常通り海賊業務を行いさえすれば、免許は更新される!』

茉莉香「そうかよかった…って、どうやって二人で弁天丸を動かさせて言うんですか!!」

拓人「取り敢えず大変だな。」

シヨウ『それで、3つの提案がある!』

拓人「それはこつちで説明しておくよ」

シヨウ『了解!!頼んだよ副船長♪んじゃね〜!』

シヨウさんとの通信を切る。

茉莉香「それで拓兄、シヨウさんが言ってた3つの提案って?」

拓人「1つ目は、皆が2週間で出てくるのを願う。2つ目は、2週間過ぎても出てこない場合は、忍び込んで脱走させる。で、3つ目が一時的にクルーを雇うだ」

茉莉香「んくくく無難に3つ目かな?代わりのクルーを捜すしかないね。と言うわけです、明日中継ステーション行くよ♪そこで、船乗りを探そう!!」

拓人「…了解」

俺は茉莉香にそう言い残して別れ、ある人物に連絡をいれるのであった。

拓人「後は…コピーロボット!ポチツとな♪」

俺はコピーロボットの鼻を押し、俺そっくりに出来上がる。

拓人「さて!取り敢えずお前は、ミーサ達が隔離されてる病院船に行つて様子を見てきてくれ」

ロボット「分かりました」

拓人「後これを渡してくれ」

ロボット「これは?」

拓人「これは、何か困ったときにすぐ俺に通信が出来る代物だ」

ロボット「分かりました」

俺はそのままコピーロボットと別れる。そして翌朝、茉莉香と一緒に中継ステーションに向かう。途中で、俺達の後をいついてきたグリューエルも一緒に船乗りを捜す事となった。

拓人「固まって捜しても効率が悪い。別れて捜すぞ！」

茉莉香「了解!!」

茉莉香とグリューエルは右に、俺は左に行く。

拓人「茉莉香達は行ったか。それじゃ俺は集合場所に行くか」

俺は、昨日連絡した人物との待ち合わせ場所に向かった。

??「こつちだ拓人!!」

拓人「お久し振りです!ケンジョー船長」

ケンジョー「うはははは♪な〜くに、困った時はお互い様だ♪」

拓人「チアキも悪かったな。無理言つて…」

チアキ「い、いえ…／／／」

ケンジョー「ガハハハ!!おいチアキ、よかったな♪大好きな拓人が来てくれて」

チアキ「お、親父!!」

拓人「ははは…で、茉莉香達に現実の厳しさを教えてやって下さい。乗組員は、簡単に見つからないってことを」

ケンジョー「任せておきな！」

こうして、ケンジョー船長は茉莉香達がいるバーに入っていった。

—————

茉莉香「はく… 贅沢言つてられないんだけど、一緒に船に乗る人材だしなく。皆どうしてるかな？」

ケンジョー「ねーちゃん達！すぐそこで、宇宙船乗りを捜してるって聞いたんだが、本当かい？」

茉莉香「え、ええ…」

ケンジョーさんの迫力に、少しビビってる茉莉香。

乗組員「ほく！運がいいねお嬢さん」

ケンジョー「丁度ここに宇宙船を動かして慣れてる男が揃ってるぜ！安くするから、まとめて雇ってくれねえか？」

茉莉香「あら？どんな仕事か聞かずにいきなり売り込んで来るほど、仕事に不自由してる様に見えないんですか？」

ケンジョー「説明がいろいろあるの？宇宙じゃ、技術さえあれば、細かい事は気にしないんだがな？」

茉莉香「ええ、勿論気にしませんよ！でも確かな実力がなければ困ります」

ケンジョー「お…」

茉莉香「差し支えなければ、船長さんがどんな船に乗っているか教えてください」

ケンジョー「俺っちが船長だと何故分かった？」

茉莉香「貫禄だと思います。何となくそう見えただけです?」

前半を聞こえるか聞こえないかの声で言う茉莉香であった。

ケンジヨー「ふははは! コリヤいい♪噂通りの魂だな!」

チアキ「親父!! もうそのくらいにして!」

グリユーエル「あれは?」

茉莉香「チアキちゃん!? って事は…」

ケンジヨー「海賊船、バルバルーサの船長、ケンジヨー・クリハラです」

茉&グ「えく!!」

拓人「さすがに驚き過ぎだろ?」

茉莉香「拓兄!」

拓人「ありがとうございますケンジヨーさん」

ケンジヨー「いいってことよ♪」

茉莉香「どういうこと?」

拓人「現実の厳しさを教えたくてな」

茉莉香「?」

拓人「確かに、今うちに必要なのは乗組員だ。けど、何処の馬の骨とも分からない奴を弁天丸に乗せるつもりはない」

チアキ「そう言うこと。よく考えてみれば、すぐ近くに信頼出来る人いるじゃない？」  
グリユーエル「ああ！なるほど♪」

茉莉香「??」

拓人「まだ分からないか？あゝらヨット♪」

茉莉香「まさか…」

チアキ「そのまさかよ」

拓人「既にリンには伝えてある」

茉莉香「大丈夫かな？」

拓人「何かすれば、俺の鉄拳が降るだけだ。後ケンジョーさん、これが約束の物です

♪

ケンジョー「おゝ悪いな!!」

チアキ「親父、それは？」

ケンジョー「これか？拓人が作ったツマミだ！今日はこれを片手に、日本酒を一杯♪」

チアキ「呆れた…」

拓人「さて、話はすんだしヨット部に行って説明してこい!!俺は先に弁天丸に行って、

様子を確認しておく」

茉莉香「分かった。じゃあ宜しくね拓兄♪」

俺は、ケンジョーさんに弁天丸まで送ってもらった。そして中に入る。

拓人「さて、茉莉香達が来るのは明日。俺は一眠りさせてもらうか」

俺は取り敢えず茉莉香達が来るまで寝て過ごす。一方、ロボットのの方は

――――

看護婦「すみませんが、人はここから先は立入禁止ですので」

ロボット「心配無用です」

看護婦「ですが…」

ロボット「すみませんが、少し寝てて下さい」

私は、催眠スプレーを吹き掛けて看護婦を寝かせる。そして、ミーサさん達が隔離されている病室に行く。

ロボット「失礼します」

ミーサ「拓人!？」

百眼「何で副船長が!？」

クーリエ「と言うか、ここに来たら副船長も感染しちゃうよ!？」

ロボット「いえ、私は拓人さんのコピーです」

一同「コピー!？」

ロボット「そして、ミーサさん。これを拓人さんから預かってきました」

ミーサ「これは？」

ロボット「拓人さんすぐに通信が出来るようにと」

クーリエ「へへ。こんなコンパクトなのが」

ロボット「はい。後、これも伝言何ですが、弁天丸にマニュアルを大急ぎ作って送信してほしいそうです」

ケイン「弁天丸のマニュアル？」

ロボット「はい。もうそろそろ…。」  
すると、百眼のパソコンに通信が入る。

百眼「おや？ 弁天丸にお客さんだ。画面を弁天丸側に切り替えてつと」 p i p i p i  
p i

画面には、茉莉香さんとヨット部員の皆さんが映っていました。

ケイン「白鳳学院のヨット部員!？」

クリーエ「茉莉香ちゃんかヨット部員と弁天丸に向かっているってこと?」

ロボット「はい。茉莉香さんと拓人さんが、皆様が隔離されている期間がもう2週間延びますので、お二人は、弁天丸の免許を剥奪されない様に、今回の行動に移っています」

ミーサ「なるほど。それでマニュアルが必要なのね」

ロボット「はい。拓人さんがこうも言っていました。マニュアルを作らないと、弁天丸が只じゃすまない」と

一同「…。」

私の一言に、皆さん黙ってしまいました。

ミーサ「皆、作るわよマニュアル」

一同「おう!!」

ロボット「出来次第、拓人さんに送って下さい」

一同「了解!!」

皆さんは急いで、ご自分のパソコンを取りに行きました。

|||||

ビービー

拓人「何だ？」

画面をつけると、茉莉香達ヨット部の連中が乗り込んでいた。俺もブリッジに向かうとしたその時、弁天丸の主砲が発射された。

拓人「なにやってるんだ!!」

俺は急いでブリッジに向かって走る！ブリッジには既に、ヨット部が集まっていた。

茉莉香「拓兄♪ただい……ま」

茉莉香は拓人に声をかけらるが、拓人が怒っている事に気付いて、声を小さくした。

拓人「ああ。それより、さつき主砲が発射されたけど、誰が押したんだ？」

茉莉香「ええつと……その……」

拓人「誰がやったと聞いている!!」

一同「!?」ビクッ

俺は怒鳴る。当たり前だ！ここで主砲なんかを撃てば、星系軍が黙っている筈がない。

ハラマキ「た、拓人…先輩。スイッチ押したの…わ、私です」

ハラマキが恐る恐る手を上げて話す。

拓人「バツカもくん!! 《波平風》」

ハラマキ「ヒツ!!」ビクッ

拓人「お前、何をしたか分かってるのか!! 勝手に触るなど言われてないのか!!」

ハラマキ「はい…ごめんなさい」

茉莉香「拓兄…その辺で…」

拓人「茉莉香もだ!! 最初にキチンと説明してないからこうなるんだ!!」

リン「お、おい拓人…」

拓人「リン! お前にもこの際言っておくけど、部長がキチンと後輩を見ておけばよ

かったんじゃないのか!!」

リン「…」

拓人に凶星をつかれてそのまま黙るリン。

拓人「…」ハッ

俺は、一通り怒鳴ってから気が付く。またやってしまったのだと。

チアキ「拓人さん…その…私も注意しておくべきでした。すみません」

拓人「いや、俺が悪かった。茉莉香もハラマキもリンも、悪かったな」

茉莉香「ううん。私も注意していなかったし…。それに…。私が…。」ポロポロ  
リン「アタシも悪かった」グスッ

ハラマキ「ごめんなさい」ポロポロ

俺は、女の子を泣かした罪悪感が、今になって半端ないダメージだった。俺が出来る行動は一つ。

拓人「本当に悪かったな」

俺は泣いている3人を抱き締めて、宥める事しか出来なかった。そして、ようやく泣き止んだ3人。しかし、それが大きな代償だった。

茉莉香「さて、取り敢えず発進してみましょう。転換炉の出力コントロールを低水心力で。様子を見ながら速度を上げて下さい。進路は外惑星起動。とにかく、他宇宙を離れましょう」

一同「了解!!」

拓人「あのく茉莉香さん？」

茉莉香「なに？拓兄」

拓人「何でお前ら3人は、俺が座っている膝に3人が座ってくるのでしょうか？」

リン「アタシ等を泣かせたんだ。これくらいいいだろう？」

拓人「はく…」

3人にそんな涙目で見られて、先程の事の重大さを思い知るのだった。一方、病室船のミーサ達は・・・

—————

ケイン「まずい！発進するつもりだ!!」 p i p i p i p i

三代目「ああ〜！低い推進力じや推進剤が安定しないのに！ススと不純物が燃焼系に取り付いて掃除が大変だって今書いたところだぞ!!」 p i p i p i p i

ミーサ「皆後どれくらいで出来る？」 p i p i p i p i

ルカ「5分」 p i p i p i p i

百眼「それまで弁天丸がもつといいけどな!!」 p i p i p i p i

クーリエ「2分で何とかするわよ!!」 p i p i p i p i

戦場になっていました。

茉莉香『弁天丸、発進!!』

発進するが、見事に失敗して三代目さんの心配が的中しました。

一同「は〜:。」

三代目「掃除が:。」

三代目さんは泣いていました。

—————

拓人「見事に失敗したな。と言うか、三代目すまん。止められなかった」

三代目に謝っていた。そして、ようやくマニュアルが届く。

拓人「さてと、それじゃあ弁天丸のマニュアルを皆に渡すから、その通りに入力して

くれ。ほら、リンも席に戻ってくれ。後で相手してやるから」

リン「…約束だぞ？」

リンは渋々クーリエが普段座っている席に戻る。

ヤヨイ「なるほど、こういうエンジンの作りなんだ」

リン「うお〜！電子戦やりて〜！」

アスタ「リン、また拓人に怒られるよ」

小林丸「よし、拓人〜打ち込み完了したよ？」 p i p i p i p i

リレイ「こつちもOK!!」

チアキ「こちらも完了」

リン「こつちもOK」

ベ・エ・イ「OK〜♪」

グリューエル「大丈夫です」

拓人「それじゃあ船長？」

茉莉香「それじゃあ、改めて… 発進!!」

ようやく弁天丸が発進する。発進すると、皆が歓声をあげる。一方、マニュアルを大急ぎで完成させたミーサ達はと言うと…

—————

ミーサ「間に合ってよかったわね…」  
疲れきっていました。シュニツツアーさんに限っては、オーバーヒートしたのか、頭から湯気が出てました。

クーリエ「弁天丸が蹂躪されずにすんだ ……」

百眼「俺… もう駄目…」

ケイン「これでやつと平和に花札を…」

しかし、心配はまだ続いています。

茉莉香『じゃあ、今度は超光速跳躍をやる！』

一同「え〜!？」

茉莉香『ちよつと難しいけど、海賊行為をするために、相手の船まで跳ばないといけないの。今の内に練習しといた方がいいと思うの』

百眼「おいおい、超光速跳躍なんてマニユアルに入れてないぞ!!」

三代目「下手したらエンジンがいつちまう!!」

クーリエ「どうするの!？」

皆さん大変ですねぇ。

—————

拓人「練習して暇はないぞ？」

茉莉香「えっ？」

すると、艦内に警報が鳴り響く。

拓人「お出ました。星系軍がこっちに気付いたな」

茉莉香「……………」

拓人「どうする茉莉香？」

茉莉香「跳ぼう!!」

拓人「了解!!超光速跳躍準備!!(三代目、悪いけど帰ったら即効エンジン掃除が待つぞ♪)」

三代目が叫んでるのを想像しながら謝っておく。

茉莉香「超光速跳躍の準備は、まず正確な現在地と座標を知ること。設定さえ出来れば、後はコンピューターが自動で計算してくれはまずです。次にフライトプランの設定。こちらも自動化されてるはずですよ。」

拓人「問題は、動力エンジンだ。弁天丸には阿号と咩号と言う2機の転換炉がある。三代目の話だと、それがかなり古くて運転状態にムラがあつてな。特に咩号は、出力を安定させにくい」

ヤヨイ「なるほど」

チアキ「ただでさえ転換炉は複雑で厄介なのに、寿命切れのまま使ってるなんて…」

茉莉香「まうちはスタッフが優秀ですから♪」

ヤヨイ「エンジンの事は分かりました。取り敢えず今回は急ぎですし、阿号だけ使用して跳ぶのが得策だと思います」

拓人「そうだな」

取り敢えず準備は出来た。

百眼「さすが船長と副船長!! マニュアル無くてもいけるじゃねえか♪」

ミーサ「普段見てるんだから当然よ♪」

ケイン「むしろ発進出来なかった方が不思議だよ」

三代目「頼むよ阿号! いつも通り動いてくれよ!!」

ルカ「クーリエ。星系軍へ通信妨害、まだ?」

クーリエ「今やってるく!!」 p i p i p i p i

ケイン「来たぞ!!」

まだこちらは落ち着けないみたいですね。そして弁天丸は、無事に超光速跳躍出来た  
そうです。

ロボット「皆さんお疲れ様でした」

ミーサ「疲れたわ:.:」

百眼「あつ!!」

百眼さんが叫び出す。

ロボット「どうしました?」

百眼「弁天丸に仕掛けたカメラの1つがバレた」

クリーリエ「さすがお姫様と海賊の娘ね」

ミーサ「ま、この調子なら大丈夫でしょ？」パタン

ルカ「それにしても…」

ケイン「どうした？」

ルカ「さっきの副船長、少しビツクリしたわ」

百眼「ああゝあれな」

シュニツツアー「あれは、普段中々見れないな」

三代目「取り敢えず、副船長は怒らせるべからずだな」

ミーサ「普段は優しいんだけどね」

クリーリエ「そうだよねゝ」

ケイン「ま、茉莉香お嬢様やヨット部員達には、いい葉なんじゃないか？」

百眼「かもな。俺達がないから、副船長は危機感を持たせるためにあそこまでキレ

たのかもな？」

ミーサ「フフツ、さすが拓人ね♪」

こうして、何とか無事に超光速跳躍をすることが出来た弁天丸。これかどうなるのか？

## そんなこんなで、海賊業務へ

弁天丸が超光速跳躍に入っている間に、俺達は夕食を食べていた。

拓人「さすがハラマキ。旨いな」

ハラマキ「へへ♪ありがとうございます。でも、先輩の作ったスープも美味しいですよ?」

拓人「ありがとう」

茉莉香「さて、何とか超光速跳躍も出来たし、これで一安心ね♪」

チアキ「まだよ」

茉莉香「えっ? まだ何かあった?」

チアキ「部屋割り。皆何処で寝るのよ?」

茉莉香「忘れてた! モグモグ…ご馳走さま!!」

茉莉香は急いで食べ終わり、部屋割りを決めるために食堂を出た。

リン「相変わらず厳しいなチアキ」

チアキ「そうですか?」

グリユーエル「チアキさんは、同じ海賊として茉莉香さんに早くお仕事に慣れてほし

「いんですよね？」

チアキ「別にそうじゃないわ。皆も寝られないと困るでしょ？アン…」  
そう言いながら、チアキはカレーを食べる。しかし、それが罠だった。

チアキ「ん!? ああゝ!!」

リリイ「情熱の味、カプサイシン♪」

拓人「食べ物で遊ぶな！」

リリイ「はい…」

さすがにさっきの後だから、聞き分けがいいな。そして茉莉香が急いで振り分けた部屋  
の巡回をする。

拓人「問題なさそうだな」

サーシャ「大丈夫です♪」

拓人「んじや、明日も早いんだしさっさと寝ろよ」

一同「お休みなさい」

俺はリンの様子を見に行くために、ブリッジに向かった。すると、リンが何処かと通  
信している会話が聞こえた。

リン「そんなに早く!?! どうして… うん、そうか… 分かった。またおつて連絡する。  
ああ、必ず何とかする」 p i

リンは通信を切る。

拓人「… お疲れリン」

リン「あ、ああ拓人か。お疲れ」

拓人「ああ… で、何処に通信してたんだ？」

リン「!?聞いてたのか？」

拓人「まあな。それに、外部に通信した時に俺の端末に連絡が来るようになってい

で、相手は誰だ？」

俺は、リンに詰め寄りながら聞いたです。

リン「…」

拓人「言えないか… なら、悪いけど実力行使に出ざるおえないな」ヒュン

俺はリンに動きをさせないために、顔の目の前に足をむける。リンは驚いたが、そのまま話す。

リン「… 分かった。本当は茉莉香に報告してからと思っただけ。実は、さっきの通信は…」

拓人「待て。取り敢えずここを出てから話すぞ。誰かが聞き耳を立てている」ヒソヒソ

リン「分かった」

俺がそう言うと、グリユンヒルデが交代のためブリッジにやって来る。

グリユンヒルデ「リン先輩、交代の時間です」

リン「ああ、分かった」

拓人「後は頼むな」

俺とリンは、グリユンヒルデに後を任せてブリッジを出る。

拓人「さて、さっきの続きだ。」

リン「ああ、さっきのはジェニーなんだ」

拓人「ジェニー？なんでまた？」

リン「実は、ジェニーの叔父がジェニーを政治家の息子と政略結婚をさせるつもりなんだ」

拓人「ジェニーの叔父って言えば、あのヒュー&ドリトル星間運輸の取締役のロバート・ドリトルか」

リン「そうだ」

拓人「聞いたことがある。確かジェニーの婚約者が確か……」  
pipipipi  
俺は端末を弄る。

拓人「あつたあつた。コイツだろ？ジュナイ・クールフ。星間運輸商長官の大物政治家、セオドア・クールフの長男だろ？しかも、将来選挙に出馬するボンボンだ。てか、顔

やその他色々の経歴が微妙だな……」

リン「さすがだな♪私達が惚れた男は違うな」

拓人「茶化すな！そうだな……ジェニーの件に関しては此方で調べておく」

リン「いいのか？これはアタシ達の問題だぞ？」

拓人「お前達の問題俺の問題だ。俺に惚れてくれたんだろ♪」ナデナデ

リン「ああ／＼／」

拓人「んじや、そろそろ休めよ！」

リン「た、拓人！」

俺は部屋に戻ろうとした時に、リンに呼び止められた。そして……

リン「ん……!!」

拓人「!?」

俺は思考が追い付かなかった。それはそうだろ？今俺はリンにキスをされていた。

拓人「お、おい……」

リン「じゃ、じゃあな／＼／」

リンは顔を赤くしながら部屋に戻っていった。

拓人「あくあ。茉莉香達にバレたらなんて言われるか……取り敢えず、ミーサ達に連絡を入れるか」

俺はブリッジに行き、グリユンヒルデと交代する。そしてグリユンヒルデが離れたことを確認すると、ミーサに連絡を入れる。

ミーサ『あら？どうしたのた拓人』

拓人「調子はどうだ？」

ミーサ『皆既にピンピンしてるわ♪』

拓人「ならよかった。で、頼み事があるんだ」

ミーサ『どうしたの？』

拓人「ジェニーの叔父の、ロバート・ドリトルとセオドア・クールフについての事を調べてほしい」

ミーサ『何やら、事情がありそうね』

拓人「まあな。どうせリンから依頼があると思うし、手札が必要になる」

ミーサ『分かったわ。報酬は頂くけどね♪』

拓人「それは、退院してからだ。茉莉香に送るのは、シヨウさん経由で送ってくれ」

ミーサ『分かったわ』

拓人「切り札になる情報は、此方に回してくれ。茉莉香に渡した情報で済めばいいがな」

ミーサ『了解副船長』

通信を切る。

拓人「取り敢えずこれで一安心だな。後は明日の海賊業務だな」

そして翌朝、いよいよ海賊業務の時間だ!!

拓人「なんだけど、船長が起きてこないぞ?」

チアキ「すみません拓人さん。私やグリューエルが起こしに行っただんですけど」

グリューエル「茉莉香さん、お疲れのようでして…」

拓人「つたく」

すると、慌てて茉莉香が入ってくる

茉莉香「チアキちゃん!! 起こしてくれてもよかったのに!」

チアキ「よく寝てたから。それに、グリューエルも起こしに行っただのよ?」

グリューエル「それはもう。叩いたりつねったりと色々致しましたわ♪」

茉莉香「いやゝ… 普段は拓兄におこしてもらってるから♪」

拓人「はいはい。ほら、さっさと着替えてこい」

茉莉香「はゝい」

拓人「んじや、俺も準備するか」

俺は、海賊業務を茉莉香に任せて、ジェニーがいる船にむけてザンダクロスを飛ばして、途中で待っているバルバルーサ行く手順だ。そして、俺もそろそろ行くこうとすると、

皆がブリッジに集まっていた。

拓人「な、なんだその格好は？」

ハラマキ「拓人先輩、似合ってますか？」

拓人「似合ってるけど…これで、海賊業務をするのか？てか、誰が用意したんだ？」  
グリユーエル「マミさんです♪」

拓人「アイツか…」

サーシャ「でも、さすがにこれは恥ずかしいです／＼」

拓人「バニーの姿って…」

サーシャ「に、似合いませんか？」

拓人「いや、似合ってると思うよ／＼」

サーシャ「エヘヘ／＼」

拓人「ファミリー」じく…」

拓人「ま、まゝ海賊業務頑張ってこい」

一同「はい!!」

茉莉香達は、海賊業務に向かった。

拓人「さて、俺は行くか」

チアキ「拓人さん何処に？」

拓人「ちよつと別の用事だ。すぐ戻るつもりだけだな」

チアキ「…分かりました」

俺はチアキに伝えて、バルバルーサが待っている場所に向かう。

拓人「度々すみませんケンジョーさん」

ケンジョー「いいってことよ♪また頼むぜ♪」

拓人「またチアキに渡しておきます」

ケンジョー「んじや野郎ども!!目標、アルティメット・フェアリーにむけて発進!!」

バルバルーサは、ジェニーが乗っているアルティメット・フェアリーに向けて出発する。超光速跳躍で向かえばすぐに到着する。

ケンジョー「バルバルーサが行けるのはここまでだ!」

拓人「ありがとうございます。それじゃ俺はこの辺で」

ケンジョー「しつかりやれよ!!」

拓人「ありがとうございます」

俺はバルバルーサを降りてアルティメット・フェアリー乗り込む。

拓人「さて、ジェニーの所に向かうか」

俺がジェニーのいる部屋に行こうとしたとき、黒服の男達がジェニーがいるであろう部屋に向かっていた。

拓人「取り敢えず、悪いけどお前気絶しておいてくれ」ガン  
俺は、一人の男を気絶させて男が着ていた服を着て紛れ込む。そして、ある部屋にたどり着く。

拓人（ここにジェニーいるのか…）

男達は、部屋の扉を開ける。すると中にジェニーがいた。

ジェニー「あなた達…」

男達「へへへへ…」

拓人（ジェニーが、あの言葉を覚えているか。しかし、やってみるか）

そして俺はジェニーに向けて叫ぶ。

拓人「伏下!!」

ジェニー「!?」

俺の言葉にジェニーが反応して、床に伏せる。

拓人「悪いけど、気絶してくれ!!」

俺は周りにいた男達を蹴り飛ばして気絶させる。

ジェニー「拓人!! 来てくれたのね♪」

拓人「リンから話を聞いてな。多分今頃茉莉香に説明して、この船に向かっている筈だけど…このままここで待ってても意味がない。なので、小型船を盗んで弁天丸向か

う

ジェニー「了解、副船長♪後… チュツ」

ジェニーは俺に口づけをする。

拓人「お前といいリンといい、突然過ぎるぞ」

ジェニー「私とリンだしね♪」

拓人「行くぞ!!」

俺達は急いで格納庫に向かう。すると、気絶していた連中が目を覚まし銃を撃つてくる。

ジェニー「これで逃げるわよ!!」

拓人「これって… サイレント・ウイスパークじゃないか!?!」

ジェニー「これ以上ない逃走船でしょ?」

拓人「つたく、末恐ろしいな♪んじや、急いで出るぞ!!」

俺はサイレント・ウイスパークに乗り込む。しかし…

拓人「これ、一人乗りだな… 仕方ない、ジェニー!俺の膝に座れ」

ジェニー「勿論♪」

こうして、俺達は弁天丸に向けて飛ぶ。この小型船には超光速ブーストがついてるから、すぐに弁天丸に向かえる。そして、弁天丸がいる場所に到着する。

拓人「後は、茉莉香が気が付いてくれるはずだからな」

ジェニー「そうね」

拓人「まったく、勝手に依頼しやがって。此方に手札がなかったらどうするんだ？」

ジェニー「それは、後で考えればいいでしょ？」

拓人「やれやれ」

そんな会話をしていると、弁天丸の格納庫が開きイズミ達が搬入してくれる。

拓人「ほら、行つてこい♪」

ジェニー「ええ♪」

ジェニーは急いでブリッジにいるリンの所に走っていった。その後が続いて俺もブリッジに向かった。ブリッジに近付くにつれて歓声が聞こえる。

拓人「やれやれ：：皆の前でキスでのしたんだろ？」

俺は少したつてからブリッジに入る。

リン「ところで、どうやってここまで来れたんだ？怪我はないのか？」

ジェニー「大丈夫よ♪私達のナイト様が来てくれたから♪」

リリー「ナイト様？」

拓人「誰がナイトだ誰が!!」

茉莉香「拓兄!?!」

リン「拓人!!もしかして、お前がジェニーを」

拓人「俺は、一般人としてジェニーを助けただけだ」

リン「ありがとう!!」

拓人「別に気にするな」

すると、保険組合から通信が入る。

シヨウ『おくい!毎度お馴染みハロルド保険組合のシヨウです♪』

茉莉香「そろそろ、連絡しようと思いました」

シヨウ『色々と確認したい事がある。今そこに、ヒュー&ドリトル星間運輸のジェ

ニー・ドリトル嬢はいるかい?』

拓人「いるけど?」

シヨウ『なんてこつたい!いんのかよ!?!』

茉莉香「あの：：何かあったんですか?」

シヨウ『それはこつちが聞きたい!先程ヒュー&ドリトル星間運輸の会社から、弁天丸によりジェニー・ドリトル嬢を誘拐されたとの情報が流されてきた!』

茉莉香「ええ!?!」

拓人「さすがロバート・ドリトルだな」

ジェニー「それは叔父の仕業ですわ」

シヨウ『なるほど……あなたがジェニー・ドリトル嬢ですね？』

ジェニー「ええ、初めまして。その誘拐の情報はデマですわ！」

シヨウ『と、言うとは？』

ジェニー「今回の事の発端は、私と叔父の確執が原因です。この件はあくまでも、私自ら依頼し、弁天丸に身柄を保護してもらったと言うことです」

シヨウ『そうか……。ま、もし海賊行為としての誘拐をするともりだったら、先に船長達から此方に話があるはずだからな』

茉莉香「すみません。色々後手に回っちゃって」

シヨウ『さて、そこでだ。君の叔父さんのロバート・ドリトル氏は、君の即時解放を求めている。さもなければ、うちの会社との取引を見送ると』

ジェニー「まく叔父が考えそうな陰険な提案ですこと。オホホホホホ♪」

拓人「おいジェニー、目が笑ってないぞ？」

ジェニー「あら失礼♪」

茉莉香「シヨウさん。まだ私達はジェニー先輩と報酬の交渉をしてないんです」

拓人「だから、ジェニーを先方に引き渡すのは、俺達の取引を見てからでも遅くないだろ？」

シヨウ『ふん……。いいだろう』

茉莉香「ま、そう言うわけで、先輩にこんな話をするのも悪いんですけど、此方も仕事なんです」

ジェニー「構わないわ。私もその方が気が楽だし♪」

茉莉香「では早速伺います。この件に関しての報酬は、何になりますか？」

ジェニー「サイレント・ウイスパアの投機書類。まずは前金だと思って受け取って。好きに名前を書いて」

拓人「ほう…」

ジェニー「それから、私が起業した星間旅行会社、フェアリー・ジェーンの資産。今後10年の粗利益1割分。これが報酬よ」

ショウ『フェアリー・ジェーンと言えば、今急成長中に旅行会社か』

グリューエル「年商50兆…その1割」

グリウンヒルデ「我が王宮予算のほぼ半分に対応しますね」

チアキ「保険会社に流れる手数料も、かなり額になるはずよ？」

拓人「つてか50兆の1割。かける10年分だろ？いいの？」

ジェニー「ええ♪」

リン「他にも、私が持っているデータの1部。顧客名簿や海賊船の情報、星間企業の一部を提供できる」

茉莉香「なるほど… 将来的にフェアリー・ジェーンは、ヒュー&ドリトルを追い抜く事も考えられるわね」

ジェニー「一応はグループ会社ですが、独立すれば…」

拓人「弁天丸にとつては、陰險な圧力に屈するより魅力的な報酬だな♪」

シヨウ『つたく、末恐ろしいお嬢様達だな』

拓人「まくな」

シヨウ『私個人としての意見を言おう…。 弁天丸が依頼を受けるのを許可したいと思おう』

茉莉香「ホントですか!？」

一同「やったく!」

ジェニー「ありがとうございます」

シヨウ『要求に従わないと、契約を切るつつ陰險な提案は、私も嫌いなんだ。だが、組織に属してる限り、その状態は避けたいのも事実だ』

茉莉香「じゃあやっちゃいましょうか？」

シヨウ『はあ?』

茉莉香「そうすれば、ジェニー先輩の政略結婚も、保険会社の圧力も、一気にかたがつてしょ?」

シヨウ『本当に、末恐ろしいお嬢様達だよ』

拓人「ホントだな」

シヨウ『副船長も大変だな』

拓人「頑張ってるよ。そろそろ、ドリトルの戦艦が此方を見つかる。後ミーサ達に例の件急いでくれと言ってくれ」

シヨウ『了解!!』

シヨウとの通信が切れたと同時に、警報が鳴り響く。

拓人「来たか・・・」

一同「きゃく〜!」

チアキ「後方500kmにヒュー&ドリトルの艦隊が接近!!」

茉莉香「ギリギリまで引き付けて跳びましょう! アイちゃん頼んだわよ!」

アイ「なんとかやってみます!」

茉莉香「航跡を追われない様に短距離で跳びます。出来るだけ紛れ込みやすいような航路対の中央を狙って」

グリューエル「座標を送ります!」

アイ「頂きました!」

拓人「転換炉は?」

ヤヨイ「エネルギー供給、大丈夫です。超光速跳躍もいけます!!」

茉莉香「よし!じゃあ跳ぼう!超光速跳躍!!」

そして、超光速跳躍に入るのであった。しかし、すぐに追い付かれる。

茉莉香「巻いたと思っただけどなく」

チアキ「最後の戦艦、ジャボウオツキ…」

拓人「本命の登場か」

すると弁天丸が大きく揺れる。

拓人「どうした!!」

グリユーエル「4ヶ所から砲撃です!!」

茉莉香「エネルギー反応は?」

グリユーエル「8つ!今攻撃予測を計算中!!」

拓人「ほく…」

未だに続く砲撃に、俺は怒りを覚えてた。しかし、その怒りはすぐにキレた。

チアキ「弁天丸、損傷!!未だ攻撃中!!」

プチツ

茉莉香「プチツ?」

拓人「茉莉香…」

茉莉香「は、はい!!」

俺は、今まで聞かせたことのない声で茉莉香を呼ぶ。

拓人「ブリッジは……俺に任せておけ。ジェニーと一緒に今後の話し合いをしてこい」

茉莉香「わ、分かりました!!」

拓人「ジェニーも……いいな？」

ジェニー「え、ええ……」

茉莉香達はそのままブリッジを出ていく。すると、丁度ミーサから通信が入る。

拓人「ミーサか？」

ミーサ『拓人!! 大丈夫なの!!』

拓人「大丈夫じゃないな。弁天丸が損傷してな……これは後でたつぷりとお仕置きが必要だな♪クツクツク……」

ミーサ『えつと……』

百眼『ミーサ……今は止めとけ。あれはマジでキレてる。触らぬ神に祟りなしだぞ?』

ミーサ『そ、そうね……取り敢えず、言われてた情報を送ったから』

拓人「助かるよ♪リン、前に練習航海でやったやつ、準備出来てるよな♪」

リン「了解!!」 p i p i p i p i

拓人「跳ぶぞ。目標は、グロリア・スクールフ号だ」

一同「りよ、了解です!」

茉莉香「お待たせ!!皆今から…」

拓人「既に伝えてる。どうせ、ジェニーの婚約者の船に行くんだろ?」

茉莉香「さすが拓兄♪」

リン「拓人!!保険組合のシヨウさんからだ」

シヨウ『や♪様子はどうだい? 派手にレーザーを撃たれてたみたいだが、なんか方策は見つかったのかい?』

茉莉香「取り敢えず今から、ジュナイ・クールフさんの船に乗り込むつもりです」

シヨウ『なるほど… 中々いい案だが、本丸は叔父さんだろ?ここに、ロバート・ドリトル氏に関する有力な情報がある!!』

茉莉香「えっ!?!これですか?」 p i

シヨウ『ヒュー&ドリトルの帳簿だ♪』

茉莉香「えっ!?!」

ジェニー「相変わらずセキリテイあまいわね… いつも言ってるのに」

茉莉香「でも、こんな情報誰から?」

シヨウ『フツ：…聞かぬが花♪とは言ってもお隣にいるがな♪』  
茉莉香「…拓兄」

拓人「さて、何の事か？」

シヨウ『んじや頑張って♪』

拓人「さて、情報も手に入れたし乗り込むぞ！」

一同「了解!!」

拓人「茉莉香」

茉莉香「なに？」

拓人「俺は今回はブリッジに残る。しっかりとやれよ？」

茉莉香「勿論♪」

アイ「弁天丸、グロリア・スクールフ号に、ドッキング完了」

茉莉香『了解♪部長、無線は？』

リン「いつでもOK♪しっかりとやれよ？」

俺は、リン達にバレないように、グロリア・スクールフ号に乗り込む。

拓人「茉莉香達より先についたけど…」

すると、チアキがジュナイ・クールフの後ろに行き、銃をぶっぱなす

チアキ「革命だかなんだか知らないけど!!目先の海賊船に気付かない、揃いも揃って

大馬鹿者が!!全員並べオラツ!!さっさと並べコラツ!!チンタラすんなオラツ!!」

チアキが次々と膝ま付かす。と言うかチアキ、やり過ぎだ…

ジュナイ「ちちち、違う!!僕らは趣味でやっているだけだ!!革命とかクーデターとかどうでもいいんだよ!!だから…命だけは助けて!!ヒツ!」

チアキ「うるさい黙れ…」

拓人(だからチアキ…銃を突き付けるな)

茉莉香「確かに微妙…」

ジェニー「はくい♪こちらジェニー・ドリトルです!!結婚前に婚約者に会おうと思つたら、こんなことになつちやいました♪」

ジュナイ「違う…違うんだ僕は…お父さくん!!」

ジェニー「政治家の息子が革命万歳だなんて、結構なスキャンダルですよ。以上、

ジェニー・ドリトルでした♪」

すると、後ろの扉が開かれる。

拓人(来たか…)

俺は、ロバート・ドリトル達の上に待機する。

ロバート「茶番は終わりだ…」

ジェニーとロバートが睨み合う。

ロバート「逆らっても無駄だ。来い」

ジェニー「嫌です」

ロバート「お前が騒ぎを起こしたところで、ヒュー&ドリトルは何も変わらない」

ロバートがそう言うのと、茉莉香達がジェニーの前に出る。ロバートの兵が銃を構えるが、それを静止させる。

ロバート「海賊はショーの営業でもしている！」

茉莉香「これも仕事の 일환なんですよね。ジェニー先輩を宇宙大学にお送りする…」

ロバート「小細工したところで、状況は変わらない」

そういつて茉莉香達に近付こうとする。すると、茉莉香は持ってきたパソコンを起動させる。

ロバート「ん？」

茉莉香「この中に、ヒュー&ドリトル社のデータが入っています。これによると、定期的に市と不明金がありますね？」

ロバート「それがどうした？会社の内情をとやかく言われる筋合いはない」

茉莉香「…サイレント・ウィスパー」

ロバート「!?」

チアキ「シャウト・ブルー」

ハラマキ「ヨルムン・ガンド」

サーシャ「フェイザー・アロー」

ジェニー「そこにいるボンボンの父親、運輸商長官セオドア・クールフに横流ししてた武器や戦闘機の名前ですわね？」

茉莉香「海賊が免許制であると同時に、武器の所有についても厳しい制限があります。言うまでもないですが、特定の政治家が軍備を扱うのは禁止されています。でも、一企業が自社の警備を厚くすると言う理由なら、言い訳はたちます」

ジェニー「セオドア・クールフに軍備を横流し、その見返りにキックバックとして現金を受けとる。それって立派な犯罪ですよね？♪叔父様？」

ロバート「幼稚な憶測に過ぎん」

茉莉香「…」

これ以上反論出来ない茉莉香。そこに出てきたのは…

拓人「そうかな？」

ロバート「？」

茉莉香「た…拓兄!!」

現れたのは拓人。

ロバート「ふん。これ以上増えたところで、この状況はなにも変わらん」

拓人「なら、これを聞いても平然でいれるかな？」 pi

俺は持っていた端末で音声を流す。

ロバート『対艦隊ミサイルヨルムン・ガンド。ちよつと今回は一苦労かも知れません』

ロバート「!?」

拓人「しつかりと残ってるぞ？通信記録♪」

ロバート「貴様・・・」

拓人「あく後、ここから一個人としての話だ」

ロバート「なに？」

拓人「弁天丸の損害賠償・・・しつかりと払えやコラッ！」ドゴン

ロバート「グハッ!!」

俺はロバートをおもいつきり蹴り跳ばす！

一同「えっ!？」

拓人「領収書はハロルド保険組合を通して、弁天丸に送つとけ!!ボケが!!」

俺は気絶しているロバートに向けて、請求書を放り投げた。

拓人「帰るぞ!!」

一同「は、はい!!」

こうして色々あったが、俺達の海賊業務は終了した。その後ミーサから連絡があり、来週には全員出てこれるみたいだ。そして、あれが生放送であったこともあり、ミーサにちよつとやり過ぎと注意された。だって弁天丸が損傷だぞ？そして翌朝、ヨット部の部室に向かう。

拓人「お疲れ〜」

リン「拓人、今日は今からオデット二世のメンテナンスに行くぞ!!」

拓人「急だな？ま、俺達は弁天丸の片付けもあるから、元々宇宙に行く予定だったしな」

リン「それじゃ、チャツチャと終わらせるぞ!!」

一同「了解〜!」

俺達は、中継ステーションに停めているオデット二世に向かい、掃除を開始する。そしてあつという間に今日の分が終了。

リン「ツてなわけで、あつという間だったけど、第1日目終了♪」

拓人「リン、俺と茉莉香は今から弁天丸に行くてくる」

リン「分かった。でもいいのか？二人だけで」

拓人「ま、ある程度キリがいたら手伝ってもらうさ」

こうして俺達二人は弁天丸に向かい掃除を開始するのであった。しかし…

拓人「これ全部が、ヨット部の連中が持ち込んだものか、クルーの持ち物か分からんな?」

茉莉香「取り敢えず、分からない物はヨット部の倉庫に置いておこ♪」

拓人「んじや、始めるか!」

俺達はそれぞれ掃除に取りかかる。

拓人「しっかし多いな…」

茉莉香「拓兄く!そろそろ重力切るよ?」

拓人「おっ!」

茉莉香「よし!おりやく!名付けて、ダストG大作戦!!」

拓人「何言ってるんだ?」

茉莉香「エヘヘ♪」

すると、最終便のアラームになる

茉莉香「ヤバイ!?!」

拓人「急ぐぞ茉莉香!!」

俺達は急いで、中継ステーションに戻る。途中でミーサから連絡があり、急だが明日全員退院出来るそうだ。翌朝には弁天丸の掃除も一段落するし、なんとかなるだろ?そして翌朝、オデット二世の大掃除も終わり弁天丸に向かおうとしたとき、ミーサから連

絡がくる。

茉莉香「もしもしミーサ？今終わったから、今からそつちに…」

ミーサ『今からじゃなくて今すぐ!!』

拓人「偉い怒ってたな？」

茉莉香「私、何かしたかな？」

拓人「取り敢えず向かうぞ!!」

俺達は急いで弁天丸に向かった。

拓人「あれ？弁天丸が起動してないな？」

茉莉香「なんでだろう？」

拓人「ブリッジに行くぞ」

ブリッジにつくと、皆が集まっていた。

茉莉香「皆々久し振り♪」

三代目「船長、副船長」

ミーサ「お帰りはいいいから、早くマスターロックを解除して」

茉莉香「え？ロック？そう言えば、重力きてないね？どうして？」

クーリエ「ブリッジのシステムにロックがかかってますからね」

ケイン「ハッチからブリッジ迄はあっさりと来られましたか」

ミーサ「早く解除してちょうだい。戸締まりの不用心さはその後話すとして。ったく、昨日の通信最後まで聞いてた？」

拓人「茉莉香、さっさと起動させてくれ」

茉莉香「は〜い♪… あれ？」

拓人「どうした？」

茉莉香「… あ〜なんだ！部活のパーカーに入れてたんだ。幸か不幸か、危ない危ない♪」

茉莉香はそういって、ヨット部のパーカーを探る。

茉莉香「あれ… あれ？」

拓人「… 茉莉香、俺前から言っているよな？」

茉莉香「うっ…」

拓人「指輪は普段からしておけと。で、大きければ俺に預けておけと？」

茉莉香「はい…」

拓人「なんで普段からそう言ってるか分かってたか？こういう事態にならないようにするためだ」

ケイン「おい、ミーサ…」ヒソヒソ

ミーサ「ええ…」ヒソヒソ

百眼「副船長、怒ってるな」ヒソヒソ

ミーサ「拓人は、周りに迷惑をかけてる人物には、物凄く厳しいのよ。それが身内でもね」ヒソヒソ

拓人「どうするつもりだ？」

茉莉香「えっと……その……」

拓人「……」

弁天丸ブリッジに気まずい空気が流れる。

茉莉香「ごめんなさい……」

拓人「俺に謝っても意味無いだろ？」

茉莉香「うん……皆ごめんなさい！出来れば、一緒に探してほし……です」

拓人「俺からも頼む。今回は俺にも責任がある。弁天丸を預かっている副船長として、そして茉莉香の兄として謝罪する。すまなかった」

俺も茉莉香と一緒にミーサ達に頭を下げる。

ミーサ「副船長!?頭をあげてください!」

拓人「いや、今回は完全にこっちのミスだ。もう少し俺がしっかりと茉莉香に言っておくべきだった!」

百眼「分かったから!俺達も一緒に探すから頭をあげてくれ船長に副船長!!」

拓人「すまない」

茉莉香「皆……ありがとう」

拓人「茉莉香、今回は皆が一緒に探してくれる。でも、もう二度とこんなこと無いようにしないとな？」

茉莉香「うん……うん！」

茉莉香は泣きながら俺の胸に顔を埋めていた。俺はそれをそつと優しく頭を撫でてやる。その様子をみた百眼達は、俺達を置いて弁天丸の中を探しに行った。しかし……

拓人「で、ミーサとクーリエはなんで残ってるんだ？」

ミーサ「随分な言い方ね。久し振りに会ったつていうのに」

クーリエ「そうそう♪私達も久し振りに副船長にね」

拓人「ふ……」

俺は、大体察しがついたので、ミーサ達を迎える。

ミーサ「それじゃあ、失礼して……久し振りねこの感触♪」

クーリエ「そうね。随分と久し振りだわ」

拓人「つたく、茉莉香の手前控えてただけどな？」

茉莉香「別にいいよ？私達ファミリィは、平等につて話をしてたしね♪」

拓人「ファミリィ？なんだそれ？」

ミーサ「そう言えば拓人には言つてなかつたわね。貴方が自然に建てたフラグにより、貴方に惚れた人物の集まりよ？」

クーリエ「私達もそれ含まれるしね」

拓人「そんな話になつてたのかよ……」

ミーサ「そうよ？覚悟してね拓人♪」

拓人「先が思いやられるよ……」

ミーサ「取り敢えず……チュツ」

拓人「!？」

茉莉香「ミ、ミーサ!？」

ミーサ「あら？何か問題でも？」

茉莉香「だったら……拓兄!!」

拓人「ん？」

茉莉香「ん……」

茉莉香も俺に向けてキスをする。

クーリエ「それじゃあ私も……チュツ」

クーリエも眼鏡を取つて俺にキスをする。

拓人「……」

ルカ「貴方達、何をしてるの？」

四人「!?」ビクッ

拓人「ル、ルカ!?いつからそこに…。」

ルカ「最初からいたわよ？」

茉莉香「と言うことは…もしかして最初から？」

ルカ「…」コクン

頷くルカ。そして俺に近付いてくる。

ルカ「それじゃあ、私も失礼して… チュツ」

茉莉香「ええ〜!?」

ミーサ「ル、ルカ!?」

クーリエ「ほえ〜!?」

拓人「な!？」

ルカ「これから宜しく」

拓人「あ、ああ…。」

一件落着?

茉莉香「落着じゃない!!」

ミーサ「そうよ!!」

クーリエ「ルカは、拓人君に何もされてないじゃない!!」

拓人「なにもって…」

ルカ「あら？拓人の魅力は他にもあるわよ？」

茉莉香「そうだけど…」

ルカ「特に、あの怒ったら表情ね」

四人「えっ？」

茉莉香「もしかしてルカ、前グリユーエルに怒ってた拓兄に…」

ルカ「…ええ／＼」

ミーサ「ルカって、もしかしてM…」

拓人「おい、ストレートに言うな！」

茉莉香「仕方ないか。これからルカもライバルだね♪」

拓人「話を勝手に進めるな!!」

すると、今度は男性陣がやって来る。

百眼「あのく、そろそろ船長達も探してもらっていいですか？」

拓人「あく百眼、いいタイミングで来てくれた。この状況をどうにかしてくれ…」

今の俺の状況。弁天丸の女性陣に抱き付かれています。

百眼「無理だ。俺はまだ死にたくない」

拓人「ケイン!!」

ケイン「悪いですが、パスします」

拓人「三代目!!」

三代目「俺も無理」

拓人「シュニツツアー!!」

シュニツツアー「無理だ」

拓人「役にたたねえ!」

## 文化祭

「もうじき文化祭が始まります。そこで、クラスの出し物を決めたいと思います」

「無難にお化け屋敷！」

「折角拓人君がいるんだし、他のクラスには出来ない事をしたいね」

「そう言えば、拓人君って料理が上手なんだよね？」

リン「そうだぞ！前のキャンプの時に食べたけど、凄く旨かったんだ」

「だったらさ、拓人君の料理が食べれるお店を出せばいいじゃん♪」

『賛成く!!』

拓人「本人の意見も聞け！」

勝手に決めていくクラスの連中に言う。

リン「別にいいだろ？」

拓人「流石に、俺一人で調理はキツイ。料理出来る奴は手を挙げてくれ」

俺がそう言うのと、手を挙げたのは4〜5人程度だった。

拓人「だったら、手を挙げた連中は俺と一緒に料理を作ってくれ」

『は〜い』

「では決まったので、これで以上となります」

こうして、俺達のクラスは飲食店に決まったのであった。そして放課後、俺とリンは部室に向かう。既に皆が揃っており、文化祭の出し物の話をしている。

拓人「お疲れ」

茉莉香「お疲れ拓兄。拓兄のクラスは、何の出し物をするの？」

リン「アタシ等は、飲食店に決まった。今年は稼がせてもらうよ」

リリイ「随分自信满满々ですね部長」

リン「当たり前だろ♪ウチのクラスには拓人がいるんだぞ」

ハラマキ「そうだった！拓人先輩の料理の腕は凄かったんだった!!」

茉莉香「あちやく。今年は厳しいかな」

サーシャ「そうだね。拓人先輩が作るご飯は美味しいからね」

グリューエル「キャンプの時に頂きましたけど、素晴らしいお料理でしたわ」

ウルスラ「今年は諦めよう」

ヤヨイ「あの〜」

すると、1年生が手を挙げた。

茉莉香「どうしたの？」

ヤヨイ「拓人先輩のお料理は、そこまで美味しいんですか？」

リン「そうか。1年は、スープしか食べたことなかったな  
アイ「はい」

ナタリア「アタシも食べてみたいです！」

拓人「なら、文化祭当日に食べに来い」

ナタリア「はい♪」

そんな会話をしていたのであった。文化祭準備期間中は部活もないので、作業に集中できた。そして文化祭当日……

『ただいまより、第25回白鳳学院の文化祭を開催致します』

放送でそう言い終わったと同時に、開催の花火が打ち上がった。それを合図に、待っていた客が入ってくる。

拓人「さて、客も入ったし気合い入れていくぞ!!」

『おっ!!』

そして、ここでも戦場の火が切つて落とされた。始まってあつという間に教室の席は全て埋まる。

「オーダー入ります。オムライス2つにチャーハン1つです！」

「此方は、サンドウィッチにチョコレートパフェです！」

拓人「了解!!」

外は当然忙しいが、厨房も戦場と化していた。女性はサンドウィッチやパフェ等を任せて、俺は中華鍋やフライパンを振る。

拓人「オムライス2つとチャーハン出来たぞ!!」

「次のオーダー! ナポリタンにカレーライス!」

「此方は・・・」

休む間もなく、次から次へとオーダーが来る。

拓人「簡単な作業は任せたぞ!!」

『は、はい!!』

料理中の俺は、一切容赦しない為少しビビっている女性達であった。

拓人「まずいな・・・誰か、外にいる奴に買い出しをお願いしてくれ。かなり用意したけど、全然足りそうにない」

「分かりました!!」

材料がなくなりそうなので、買い出しを頼む。そして、お昼の時間になり忙しさはピークになる。

拓人「オムレツにナポリタン出来たぞ!!早く持っていけ!!後ろがつかえてるんだよ!!」

料理の出来上がるスピードが、運ぶスピードを上回る為厨房には、出来上がった料理

が並んでいた。そしてようやくピークも過ぎて、客足も落ち着いた。

拓人「ふっっ!!」

リン「お疲れ拓人」

リンがジューズを差し入れてくれた。

拓人「サンキュー。・・・プハーッ！生き返るっ!!」

リン「アハハ！それにしても、まさかここまでとは思わなかったな」

拓人「俺だつて同じだ。まさか、あれだけ用意した材料が足りなくなるとは思つてなかった」

「いらっしやいませ〜」

リン「また来たみたいだな。アタシは戻るよ」

拓人「ああ。ジューズサンキューな」

リンは外に戻っていく。しかし、直ぐに戻ってきた。

拓人「どうしたんだ？」

リン「客が拓人を呼んでくれた」

拓人「??」

俺は首を傾げながら厨房を出る。すると、そこにいた連中に驚く。

拓人「来たのかジェニー」

ジェニー「あら？来たらずかつたかしら♪」

拓人「そうは言っていないだろ？それより、珍しい組み合わせだな。梨理香さんやクリエに百眼達まで来たのかよ」

梨理香「随分な言い草だね」

百眼「ミーサから、このチケツト貰つてな♪」

クリエ「折角だし、拓人君の料理を食べに来たの」

三代目「前は食えなかつたしな」

ルカ「そうね」

拓人「つたく。それで、ご注文は？」

俺はため息をしながら、注文を取る。

梨理香「そうだね。それじゃあ、オムライスを頼むよ」

ジェニー「私はナポリタン」

クリエ「んく・・イチゴパフェ」

百眼「俺は焼きそば」

三代目「カレーライスで」

ルカ「オムレツ」

拓人「了解。少々お待ちを」

俺は厨房に戻り、注文された料理を作つてリンと一緒に持つていく。すると、今度はヨット部の連中がやつて来た。

ナタリア「拓人先輩！約束通り食べに来ました♪」

ヤヨイ「お邪魔します」

アイ「失礼します」

茉莉香「あれ？梨理香さん!?それにクーリエヤルカ達まで」

チアキ「これは、凄い人数ね」

サーシャ「そうだね」

マミ「結構賑わつてるね」

拓人「食べるなら、テーブル座れ」

『は〜い』

茉莉香達は、それぞれ席に座りリンが注文を受ける。そして、茉莉香達の料理も作り終わり、俺も席に座る。一息いれる。

茉莉香「ん〜♪美味しい」

チアキ「やっぱり、拓人さんが作るパフェは違うわね」

サーシャ「このオムレツ、フワフワトロトロで美味しい♪」

ナタリア「先輩、凄く美味しいです!!」

アイ「こんな美味しいの、初めて食べました♪」

ヤヨイ「はい♪」

梨理香「流石だね」

クーリエ「美味しい♪」

ジェニー「本当に、ウチの専属料理人にしたいわ」

ルカ「・・・♪」

百眼「ホント、副船長の飯を食うと、舌が肥えるよな」

三代目「だな」

『けど・・・』

(女性として、負けた感じがする)

男性陣『??』

何故か落ち込む女性陣の姿に、男性陣は首を傾げるのであった。そして皆帰っていた。文化祭も終了になり、本日は終了になったのであった。因みに、文化祭3日間の総売上は、500万円以上になっていた。当然、拓人とリンのクラスがトップだったのは言うまでもない。

## 5年ぶりのレースへ

あれから、女性陣のアピールが積極的になっていった。ミーサは以前より俺に抱き付く回数が増えたり、茉莉香はよく俺の膝に座る。その度に顔を真つ赤にしているがね。それ以外では、平和な日々を過ごしていた。そんな平和な数日を過ごしていた俺は、今茉莉香と一緒に部屋に向かっていた。すると、廊下まで大きな声が聞こえた。

アイ「私、出たいです!!」

拓人「なんだ?」

茉莉香「何々?廊下まで聞こえてきたよ?」

アイ「す、すみません…」

茉莉香「どうしたのいったい?」

ハラマキ「これこれ♪」

茉莉香「ん?」

ハラマキが画面を俺達に向ける。

拓人「第19回ネビュラカップって…」

茉莉香「いいじゃない♪出場しようよ!!この間ディングーも出てきたし。楽しそう

じゃない♪」

アイ「ですよねですよね♪私前から出たいって思ってたんです!」

リリイ「何々?」

エイプリル「私達も混ぜてよ?」

茉莉香「あつ!!それって開催いつ?」

ハラマキ「2週間後だけど、どうしたの?」

拓人「弁天丸との仕事为重ならないとは限らないからな」

ハラマキ「そっか。茉莉香達はそれがあつたか?」

リン「うくん… 出場するのはいいんだけどな…」

グリユーエル「何か問題でもありませんの?」

リン「実際にディングーに乗ったことある人挙手!」

アイ「はい♪」

手を挙げたのは、俺とホシミヤだけだった。

エイプリル「アハハハ…」

ウルスラ「シユミレーターは散々やってるんだけどね?」

拓人「つつくか、よくそれで大会に出ようとか言い出したな」

??「その通り!!」

大声で叫びながら入ってきた人物。それは…

茉莉香「ケイン!？」

拓人（ん？あいつは似てるけど…違うな）

茉莉香達は気が付いてないが、俺だけはすぐに偽物だと理解した。

拓人（茉莉香で気が付かないなら、もしかしたらミーサ達も…）

取り敢えず俺も気が付かないふりをしておく。

ケイン「時間もなくて実戦経験もない。ないない尽くしのこの状況。俺がやらねば…」

ケインは竹刀を投げ飛ばしてキャッチする。

ケイン「誰がやる!!」

茉莉香「話を聞きなさいよ！やるって何を？」

ケイン「ふん!!顧問が必要だろ？」

リン「へ!?あ、ああ…確かに顧問は空席だけど」

ケイン「その話、俺が引き受けた!!」

茉莉香「ケイン!!何勝手に…」

ケイン「たゝ!!」

ケインは茉莉香に向けて何かを見せている。

茉莉香「!?教員…資格書？」

ケイン「教員資格は更新した！今のこの俺は…体育教師だ!!」

茉莉香「体育教師!？」

拓人「やれやれ。偽物は何をするつもりなんだか」

ケイン達はシュミレーションルームに行った。俺はそこから離れて外に出る。

拓人「つたく、普通気が付くだろ？」

作者『いやいや!!普通は気が付かないよ!』

拓人「ん?…まあいいか。それより、誰もディングーに乗ったことないって…調べてみ…ん?あれは」

俺は、ホシミヤを除く1年とグリウンヒルデがいた。

拓人「何してるんだお前ら？」

ヤヨイ「拓人先輩」

グリウンヒルデ「実は今、ネビユラカップの公式データベースに記録が無いかを調べていました」

拓人「ほう…で!あったのか？」

グリウンヒルデ「はい。こちらです」

グリウンヒルデが俺に画面を見せる。

拓人「何々：： 白鳳女学院。前の名前だな。ネビュラカップ第13回大会において、運営妨害行為及び安全規約違反により、5年間の出場停止処分だど!!」

ナタリア「ええく!!」

拓人「はく：： 多分原因は分かる」

ヤヨイ「本当ですか!?!」

拓人「ま、いつかは説明があるから、今は控えておくよ。んじゃ、俺はこのまま帰るからまた明日な♪」

3人「お疲れ様です!!」

俺はそのまま家に帰る。今日は特に予定もないし、家でのんびり過ごした。そして翌朝、俺達ヨット部は浜辺に来ていた：：

ケイン「よし!!全員揃ったな!」

子供1「何あれ?」

子供2「知らなくい。行こ行こ♪」

周りの子供達にそんな風に言われていた。

拓人（たまらんあく：：）

アスタ「あのくケイン先生。何でビーチなんですか?」

ケイン「先生ではない!!コーチと呼べ!!」

リリイ「はいく？」

ケイン「コーチだ!!」

リリイ「は、はい!!」

ハラマキ「茉莉香、あのさ…」

茉莉香「言わないで。頭痛くなってきた…」

拓人「確かに…」

ナタリア「はいコーチ!!何でビーチなんですか？」

ケイン「いいノリだナタリア君♪…今日は、ネビュラカップに出場する選手の選抜を行う!!」

一同「えく!?!」

アイ「あ、あのコーチ!!どうやってですか？」

ケイン「知りたいか？自分達が水着でこんな所に集められている訳が!!」

アイ「は、はい!!」

ケイン「それは…」

ケインは海に浮かんでいるヨットに乗る

ケイン「これだ!!」

拓人「マジかよ…」

ケイン「参加する奴!!位置につけ!!」

ケインの一言で、ネビュラカップに参加する連中が海に行く。

ケイン「実戦で必要なのは操船技術ではなく、それを発揮する為の体力と集中力だ!!  
沖のブイを回って戻ってきた上位3名を、ネビュラカップの出場者とする!!」

アイ「え!?本当に!!」

ウルスラ「ディングー関係ない!!」

リリイ「私達、マリンスポーツの授業でちよつとやっただけです!!」

ケイン「充分だ!!」

ヤヨイ「1年生は、まだそれをやっていません」

茉莉香「ケイン!!本当にこれで決めるつもりなの!?!」

ケイン「コーチだ!!冗談だと思うか?実戦で技術に体がついてこなければ、危険なのはお前達だぞ!!」

茉莉香「うっ:・:・ もう分かったわよ!!やってやろうじゃない!!」

茉莉香の負けん気が出た。さすがにそこは梨理香に似ている。

ケイン「:・: スタート!!」

ケインの掛け声で一斉にスタートする。しかし、スタートした直後に脱落者が出る。しかし、そこで問題が起きる。

ヤヨイ「う、うあゝ!!」

グリューエル「きやあ!？」

拓人「おい、あいつら溺れてないか？」

ハラマキ「大変だゝ!!」

拓人「ツチ!!」

俺は急いで海に飛び込み、ヨシトミとグリューエルを助けに行く。

拓人「大丈夫か!!」

グリューエル「拓人さん……」

ヤヨイ「拓人先輩……」

拓人「つたく、泳げないなら参加するなよな」

ヤヨイ「すみません……」

グリューエル「面目ありません」

俺は二人を抱えたまま浜辺に戻る。戻ると、ケインがリン達に何か叫んでいた。

ケイン「ビーチ往復50周!!」

リン「えゝ!？」

拓人「おい、さすがにやりすぎだ!!」

ケイン「……仕方ない」

俺の一言で、50周は中止になった。そして、全員が沖のブイを回るとケインがケイン「そろそろか：：」

拓人「なに？」

ケインがそう言うと、上空から何か放たれた。

拓人「まさか：： 弁天丸か!？」

ケイン「さすがだな♪」

ケインは満足そうな表情で言う。しかし、発射した弁天丸では――――

シュニツツア「なあ、本当にいいのか？」

クーリエ「いいんじゃない？ケインがやれって言ってるんだし」

ミーサ「やるならさっさとして!!慣れないことやらされてるんだから!!」

三代目「ミーサは器用だな」

ミーサ「ほら早く!!」

シユニツツアー「… 照準よし! 発射」 p i

茉莉香達がいる海に向けて発射する。

シユニツツアー「なあ、絶対に後で副船長から苦情が来るぞ」

一同「… しまった!!」

撃ち終わってから、事の重大さに気が付くのであつた――――

拓人「… ケイン? 後で話がある。ミーサ達も含めてな…」

ケイン(ヤバツ!! 兄貴にも言われてたんだ。副船長は絶対に怒らせないように言われてたんだ!!)

ケイン「副船長… これには色々事情が…」

拓人「ほう… どんな事情かキチンと説明してもらおうか?」 ニツコリ

ケイン「あ、あははは…」

俺がケインに怒っている間に、レースは決着していた。一位はナタリア、二位はグリコンヒルデ、三位は茉莉香とホシミヤが争っていたそうだが、ホシミヤが三位で茉莉香が四位だそうさ。

拓人「皆お疲れ。頑張った皆にケインコーチからランプ館でパフェを奢ってくれるさうだ♪な、ケインコーチ？」

ケイン「あ、ああ。皆頑張ったし、俺が奢るぞ!! (トホホ….)」

こうして、半ば脅して俺はケインにパフェを全員に奢らせた。レース開催は約一週間。果たして選ばれたメンバーは優勝できるのかな？

拓人「ま、大丈夫だろ？それより…」

俺は、上にいるであろう弁天丸を見上げていた。そして翌日、俺と茉莉香は弁天丸に向かった。茉莉香には、ゆっくりブリッジに来るように伝えていた。

拓人「さてと… 取り敢えず全員正座♪」

一同「はい…」

ミーサ達は観念したかのように正座する。すると、百眼とルカと茉莉香がブリッジに入ってきた。

百眼「なんだ？」

拓人「百眼か」

百眼「副船長、これはいったい？」

拓人「昨日ここに居るメンバーが、ちよつとオイタをしてな。今から俺のお説教♪」

百眼「あゝ……」

百眼は、ミーサ達にかなり同情していた。

拓人「さて、なんで正座させられてるか分かつてるよな♪」

ミーサ「え、ええ……」

拓人「なら、なんで俺が怒つてるか分かつてるなクーリエ」

クーリエ「はい。船長や副船長に許可をとらずに、弁天丸の主砲を撃つた事です」

拓人「正解♪なら……どう落とし前つけんだおい？」

一同「!!」ビクッ

拓人「ヨット部の連中に怪我がなかったからいいが、もしあれで怪我人が出てたらど

うするつもりだったんだ？」

三代目「それは……」

拓人「それは？」

ミーサ「……考えていませんでした」

拓人「なるほど……茉莉香!!こつちに来い」

茉莉香「えっ!?う、うん」

拓人に呼ばれて、船長席に行く。

茉莉香「どうしたの拓兄？」

拓人「取り敢えず茉莉香、ここに座れ」

茉莉香「ええ!?!ここに：：／／／」

俺が茉莉香に言ったのは、俺の膝の上だ。茉莉香は顔を真っ赤にしながら俺の膝に座る。

拓人「よし♪」ナデナデ

茉莉香「ふあく：：」

俺は茉莉香の頭を撫でて、顎を猫のように撫でる。

茉莉香「うにやく♪」

拓人「こらこら。甘えん坊だな♪」

俺が何故このような事をやっているのか？ミーサとクীরリエにわざと見せ付けている。

ミーサ「あ、あの拓人？」

拓人「なんだ？」

ミーサ「あの：：その：：私も：：」

拓人「駄目だ。ミーサは、1週間俺に近付いたりするのは禁止だ」

ミーサ「そ、そんな〜!!」

拓人「今回は、それくらい大きな事をしたんだ！因みに、三代目は1週間ブリッジに縫いぐるみ持ち込み禁止だ」

三代目「え〜!!」

拓人「クリーエは、1週間お菓子禁止かミーサと一緒に1週間俺に近付かないかだ」

クリーエ「うう〜!!究極の選択だよ〜!!」

拓人「ケインは、1週間の減俸だ」

ケイン「ちよつと副船長!!（兄貴に怒られるだろうな…）」

拓人「シュニツツアーは…最初に止めようとしたらしいな？だったら、今回はおとがめ無しだ」

シュニツツアー「いいのか?」

拓人「ああ。結果は押しただけど、最初に止めようとしたからな」

シュニツツアーは、発射前に何度も確認していたから許す事にした。

拓人「取り敢えず、俺からは以上だ。十分反省しろ！茉莉香、起きろ！」

茉莉香「うにゅ〜…」

拓人「やり過ぎたな。ま〜いいか♪俺が抱いていく」

俺と百眼達は、ミーサ達を置いてブリッジを出ていく。そして家に帰り夕飯の準備を

する。昨日から梨理香さんが仕事でいないから、茉莉香と二人つきりである。夕飯も済ませて風呂に入る。

茉莉香「拓兄、今日は先に入っていいよ♪」

拓人「いいのか？んじやお言葉に甘えさせてもらおうかな♪」

俺は、久々に一番風呂だったので、少し上機嫌に風呂場に向かった。しかし、この後起きる出来事に俺はまだ気付く筈もなかったのだった…

カポーン

拓人「いい湯だな♪風呂は命の洗濯だな！」

俺はのんびりと湯船に浸かっていた。すると、脱衣場から茉莉香の声が聞こえてきた。

茉莉香「拓兄、タオルここに置いてくよ？」

拓人「悪いな茉莉香」

茉莉香「いいよ別に。お礼は今から貰うから♪」

拓人「今から？」

俺は少し疑問に思ったが、声をかけても茉莉香から返事が無かったため、もう脱衣場にはいないのだろうと勝手に思っていた。しかし!!それがそもそも間違いだった。

拓人「なんだいったい？ま、後で風呂出てから聞けばいいか」

俺はそう思い、腕を目一杯伸ばす。すると、風呂場の扉が開かれた？

拓人「？」

茉莉香「拓兄、入るよ？」

拓人「ま、茉莉香!!」

何と風呂場に入ってきたのは茉莉香であった。俺は慌てて壁に振り替える。

拓人「何考えてるんだ！さつきと出る!!」

茉莉香「えく！だってもう入っちゃったし、それにもう濡れてるから風邪引いちゃうよ。だから拓兄、ちよつとそっちに入るね♪」

拓人「ちよつ!? 待て!!」

茉莉香は俺の静止も無視し、湯船に入ってきた。そして、今現在の体勢。茉莉香が俺にもたれ掛かっている状態である。

拓人「…」

茉莉香「ふ〜♪やっぱりお風呂は気持ち〜ね」

拓人「…」

茉莉香「それに、拓兄とお風呂一緒に入るの小学校以来だね♪」

拓人「…おい」

茉莉香「ん? どうしたの拓兄?」

拓人「どうしたの？じやない！何平然と俺にもたれ掛かりながら湯船に入ってるんだ！」

茉莉香「だって～：～」

拓人「だってじやない!!こんな所誰かに見られたらどうするんだ!」

茉莉香「～：～ こうでもしないと、皆に一步リード出来ないから」

拓人「リードって」

茉莉香「だって拓兄、自分が無意識の間に女の子を落としてるし～：～」

拓人「いや～：～ それは～：～」

茉莉香「一番最初に好きになつたのは私なのに～：～」ボソツ

茉莉香は拓人に聞こえないように呟く。しかし、風呂場は茉莉香が思っているより声が響くので、拓人にも聞こえていたのであつた。

拓人「～：～」

しかし拓人は、何も言えずにいた。それに痺れを切らしたのか、茉莉香が拓人の方に振り向く。

拓人「ま、待て茉莉香!!さすがにそれはまずい!!」

拓人の叫びも空しく、茉莉香は拓人に抱き付く。

拓人「○×△□～ッ!?」

俺は声にならない叫び声を出す。

拓人（落ち着くんだ加藤拓人!! 血は繋がってなくても、茉莉香は妹だ!! 絶対に駄目だ!）

俺は自分の欲望を必死に抑えていた! しかし、それでも欲望は出てくる。

欲望拓人（別に妹だからって、血は繋がってないんだしいいだろ? 本人も望んでる筈）

拓人（黙れ!! 大切な妹に手を出すなんて…）

欲望拓人（ふくん… ま、精々頑張りな♪ どうせ男の欲望には勝てないさ。クククククツ）

そうして欲望h消え去った。俺は混乱していて残りは殆ど記憶が無かった。そして

翌日

拓人「… ツハ!？」

俺は飛び起きる。窓を見ると既に朝を向かえていた。

拓人「何も… 無かったのか？」

俺は周りを確認する。汗の量は尋常じゃないが、それ以外は特に変わった様子はない。

拓人「ふ… よかった… ムニユ

その時、俺の右手に柔らかな感触がする。

拓人「ムニユ？俺何か柔らかい物でも枕にしたか？」

俺はそれの感触を確認するかのように揉む。

?? 「んっ…」

拓人「!？」

俺の右手から、何やら甘い声が聞こえたような…

拓人「ま…まさか」

俺は慌てて布団を捲る。すると、そこにいたのは…

茉莉香「んもく。朝からエツチだよ拓兄／／」

拓人「ま、茉莉香!？」

何と俺の横にいたのは、茉莉香だった。そして、俺の右手は茉莉香の胸を触っていた。

茉莉香「昨日もあんなにしたのに、まだするの？別に拓兄がしたいならいいけど／／

／

拓人「…」

天国から一気に地獄に落ちた気分である。俺は等々取り返しの付かない事をしてしまった。

拓人「茉莉香…もしかして俺…」

茉莉香「責任、取ってね♪拓兄♪」

拓人「やっぱりく!!」

こうして加藤拓人は、主人公である加藤茉莉香の初めてを頂いてしまったのでありま  
した。

拓人「とと、とにかくまずは服を着ろ!そろそろ時間もない!」

茉莉香「は〜い♪」

茉莉香はそう言いながら、シーツを巻き付けて部屋を出ていった。

拓人「しまった!!茉莉香にこの事を話すなど言ってなかった!!」

俺は急いで茉莉香の部屋に行く。しかし、もう遅かった。丁度いいタイミングでミー  
サから通信があったのだった。

拓人（俺、今日無事に過ごせるのであろうか？）

作者『分かりません!!』

取り敢えず、ミーサの通信に出るのが恐かったので、俺は茉莉香を置いて先に学院に  
向かうのであった。今日の心配をしながら過ごし、やって来ました放課後。

拓人「どうしよう…。こんな時は」ゴソゴソ

こういう時こそ使う秘密道具。

拓人「透明マントとタケコプター!!」

俺は急いで透明マントを着る。すると同時に、俺のクラスにリン達がやって来た。通

称 拓人フアミリー。

拓人（危なかった。つてかよく見ればジエニー迄いるじゃね〜かよ!?）

リン「あれ？確かにさっきまで拓人の奴いたんだけど」

チアキ「まだ遠くには行つてない筈です！」

ジエニー「追いかけるわよ!!」

俺はバレないようにジエニー達の横を通り過ぎる。すると、何故か急に突風が吹き透明マントが吹き飛ぶ。

拓人「あつ…」

ジエニー「あらあら？これは加藤拓人さんじゃありませんか♪」

チアキ「いったい何処に行こうとしたんですか？」

拓人「ええつと…」

リン「取り敢えず、話を聞かせてもらおうか？」

ミーサ「そうね♪何やら朝から船長が物凄くご機嫌な訳を」

拓人「… チーターローション!!」

俺は取り出したチーターローションを足にかけける。そして走り出す。足の速さはチーター並になるので追い付けない。途中で空も飛ぶし。

拓人「ふ〜！ここまで来れば…」

ジエニー「どうなのかしら？」

拓人「!?」

俺は慌てて振り替える。すると、俺の背中にジエニーが抱き付いていた。

拓人「ジエニー!?!」

ジエニー「はい♪貴方のパートナーのジエニーです。さて拓人、茉莉香さんとなにがあつたのか詳しく話してもらおうわよ？」

拓人「…はい」

俺は思った。今日で人生が終わると。

チアキ「さて、それでは今から拓人さんの尋問を行います!」

拓人（もう既に尋問とか言ってる時点で、隠す気ないな…）

と言うか、既に拷問だろ…

ジエニー「拓人、話してもらおうわよ？なんで茉莉香さんはあんなに機嫌がいいのかしら？」

拓人「それは…その…」

リン「ま、茉莉香を見ていれば予想はつくけどな…」

ミーサ「茉莉香の事だし、拓人と一緒に眠ったとかそんな程度でしょ？」

拓人（あっているけど、一緒に眠るじゃなくて寝たんだけどな…）

俺は絶対にその事を言つてはならないと、沈黙を守つていた。しかし、それはすぐに打ち砕かれた。その原因は茉莉香であつた。

茉莉香「そんなく／＼／＼一緒に寝ただなんて… 確かに拓兄には、私の… ねく／＼

フアミリー「!？」

拓人（終わった。今度こそ絶対に…）

チアキ「まま、茉莉香!?!まさか… 貴方!？」

茉莉香「エへへ／＼／＼」

ジェニー「へく… 拓人」

拓人「な、なんだ…」

リン「茉莉香だけって訳ないよな♪」

拓人「えつと… その…」

ミーサ「そうね。今回の仕事が終われば、暫くは海賊業もないし… フアミリーで旅行にでも行きましょうか♪」

フアミリー「賛成く!!」

グリユーエル「でしたら、私が場所を提供致しますわ!」

ジェニー「だったら、私が経営しているフェアリー・ジェーンが船を提供するわ!」

リン「よつし!!レースが終わった次の休みは、皆で旅行だ!!」  
ファミリィ「おっ!!」

拓人「・・・俺の意見は？」

ファミリィ「ない!!」

拓人「だよな〜」

ジェニー「向こうに行ったら、私達も茉莉香と同じことをお願いね♪」

拓人「・・・」

俺は啞然としていた。ジェニーの一言は、つまり全員の初めてをもらってくれと言っているのだから。取り敢えず話は終わり、俺は無事に解放されたのであった。と言うか、この数分だが生きた心地がしなかったのは言うまでもない。

拓人「取り敢えず無事にすんだか。しかし、ネビュラカップ終了後が怖いな・・・」  
等と考えていたが、取り敢えず今はネビュラカップの警備に精を出すのであった。そしてネビュラカップ当日。

拓人「まさかジェニーからリン達の護衛が依頼されるとはな」

俺はスーツ姿でサングラスをつけていた。完全に周りから見ればヤクザだな・・・

拓人「取り敢えずリン達と合流するか」

俺はリン達を探していた。すると途中でチアキと出会った。

チアキ「もしかして拓人さん？」

拓人「チアキか。後俺は今、ジエニーのから依頼されたケビンだ。皆にバレては意味無いからな」

チアキ「分かりました。それにしても、似合ってます／＼」

拓人「サンキュー。それよりリン達は…いた」

リン達はすぐに見つかった。と言うより、周りから孤立してるからすぐに分かった。するとナタリアが他の学校に近付いていた。

ナタリア「ちよつといいですか？」

チアキ「そこまで!!」

ナタリア「チアキ先輩？それと…」

拓人「ジエニーさんから君達の護衛を任されたケビンだ」

チアキ「取り敢えず何処か喫茶店にも入るわよ！」

チアキがそう言い、喫茶店に入る。

チアキ「全くもくヒヤヒヤしたわ」

ナタリア「ぶく…」

ハラマキ「チアキちゃん、海の森星チームの選手だったんだ」

チアキ「助っ人よ。そちらみたいに人材豊富なチームばっかじゃないのよ」

リン「確かに海賊が出来るほどいるからな」

チアキ「自分達の立場分かってるの？」

グリユンヒルデ「…あれ、ですわね」

ナタリア「ああ〜そっか」

ヤヨイ「白鳳学院は、5年間出場停止でしたね」

リン「え？そうなの!？」

一同「だ〜!!」

リン「あれ？」

ハラマキ「何で部長が知らないんですか!!」

リン「いや〜。道理で今まで招待状が来なかった訳だ」

グリユンヒルデ「でも、6年前でしたらリン部長は中等部ですわよね？」

リン「それがさ、当時の先輩達が発表前のレース情報を手に入れてね。それでアタシ

が頼まれて、運営委員会のデータを書き換えたんだけ」

一同「え〜!!」

ナタリア「クラッキングしたんですか!？」

チアキ「運営側も驚いたでしょうね。いざ当日になったら、違うコース設定に

なっていたんだから。で、結果はこうよ」

チアキはモニターを全員に見せる。

チアキ「通称悪夢の第13回大会。出場者142名…完走者2名」

ハラマキ「あ、あはは…」

ナタリア「はた迷惑な」

チアキ「その原因が復帰してきたとなったら、それはね…」

リン「いや～そんな事になってたとは。照れるな／／」

拓人「…」

俺は無言のままリンの頭を殴る。

リン「いって～!!何すんだよ!!」

拓人「昔とはいえ、やったのはお前だ」

リン「しかしたく…」

拓人「ケビンだ」

リン「…」

リンは膨れっ面になる。

拓人「…」

しかし俺は別の人物を見ていた。

??「あの集団のターゲットはいない。引き続き監視する」

拓人「…」

その人物はケインに気が付きその場を離れる。そして、ヨット部はレース為に自分のデインギーに向かう。俺はケインと会う。

拓人「何やら怪しい連中がうろついている」

ケイン「ああ。」

拓人「俺は引き続きアイツを追う」

俺はリン達と離れてそっきの奴を追う。そして、ネビユラカップが始まる。先程通信で茉莉香も一緒にデインギーで降りるそうだ。

?? 「先程加藤茉莉香がデインギーで降りる事を確認した。すぐに追撃しろ」

?? 『了解』

?? 「ふふ… 終りだ加藤茉莉香…」

拓人「終わるのはお前だ!!」

?? 「何… グハツ!!」

俺は男を気絶させる。

拓人「コイツ… ビスク・カンパニー？」

俺はケインに通信する。

拓人「ケイン!! すぐに弁天丸に戻れ!! ビスク・カンパニーって言う連中が茉莉香を

狙ってる！」

ケイン『ビスク・カンパニー!?』

拓人「話は後だ！」

俺は通信を切り弁天丸に急いで戻る。途中でケインと合流し弁天丸のブリッジへ急ぐ！

拓人「弁天丸緊急発信だ!! 茉莉香が狙われてる!!」

一同「了解!!」

拓人「ケイン!! 無理は承知だ。大気圏に降りろ！」

ケイン「了解!!」

俺はケインに指示し、茉莉香の近くに降りるように伝える。すると、ビスク・カンパニーの連中に撃たれている茉莉香を見つける。そして茉莉香に通信を入れる。

拓人「茉莉香!!」

茉莉香『弁天丸!!』

茉莉香に近付くとアラートが響き渡る。

シュニツツアー「無茶苦茶だ副船長!! これは大気圏内を飛ぶように出来てない!!」

三代目「緊急出力132%!! サブスラスター異常加熱!! 15分持たないぞ!!」

拓人「茉莉香、急いで乗り込め!!」

茉莉香『了解!!』

ミーサ「無茶するわね!」

拓人「船長以前に、自分の家族を守れないなんて意味ない!後、俺がディングーで相手の船に乗り込む。俺が出たら弁天丸は上昇しろ!」

俺はそう言い残して、格納庫に向かう。

茉莉香「拓兄!!」

拓人「茉莉香、急いでブリッジに行け!!」

茉莉香「わかった」

茉莉香は急いでブリッジに走る。俺は茉莉香が乗ってきたディングーに乗り、相手の船に向かう。

拓人「さて、俺の家族に手を出してただですむと思わないよ!!」

俺はディングーで飛び出す。そして、バレないように近付き船に乗り込む。

拓人「さて:・ 弁天丸!あいつら浮上しろって言ったのに!!:・ 茉莉香か」

俺は茉莉香の指示を予想していた。そして、頬を少し吊り上げて相手の操縦室に向かう。

??「ここで弁天丸を落とせば:・:」

拓人「落とせば何だ?」

?? 「だ、誰だお前!!」

拓人「弁天丸副船長加藤茉莉香の兄の加藤拓人だ!!」

俺は名乗りながら一人を蹴り飛ばす。しかし、もう一人に蹴りかかろうしたとき…  
パーン!!

拓人「つく…」

?? 「ガキが調子にのるな!!」

拓人「くそ…」

俺はどう状況を巻き返すか考えていた。すると、弁天丸の先端が開く。

拓人（あれは…そうか!!なら、後はこの船を先端に近付ければ…）

その時、ホシミヤから緊急通信が入る。

アイ『コーチ、8秒後南東から真つ直ぐな風が来ます!』

?? 「なに!？」

男は俺から聞こえたら通信に驚き操縦席に戻る。その時…

拓人「今だ!!」

?? 「しまった…がはっ」

俺は最後の力を振り絞り男を蹴り飛ばす。そして急いで茉莉香に通信する。

拓人「茉莉香、そのままあれを撃て!!」

茉莉香『待つて拓兄!!それだと拓兄も……』

拓人「俺はいい!!ここでコイツらを逃がす訳にはいかない!!撃て!!」

茉莉香『……出来ないよ』

拓人「……」

茉莉香は命令出来なかった。それはそうだ。大好きな人を撃てなんて言えない。

拓人「キャプテン茉莉香!!お前は弁天丸の船長だろ!!一人の命より、乗組員の命を大切にしろ!!だから撃て!!」

茉莉香『……ギョッ』

拓人「大丈夫だ。生きて帰るさ」

茉莉香『……シユニツツアー。撃つて……』

シユニツツアー『……了解した』

拓人「それでいい。それでいいんだ」

そこで茉莉香との通信が途切れる――

私は今、苦渋の決断をする。自分の大好きな人を撃つなんて…

拓人『大丈夫だ。生きて帰るさ』

茉莉香「… シュニツツアー、撃って」

シュニツツアー「… 了解した」

拓人『それでいい。それで… いい… ん… だ』

拓兄との通信が途切れる。

茉莉香「拓兄… 拓兄く!!」

私が叫ぶと同時に、シュニツツアーが撃つ。そして見事に命中する。

茉莉香「…」

ミーサ「茉莉香…」

茉莉香「…」

シュニツツアー「ケイン。急いで宇宙にあがるぞ…」

ケイン「… 了解だ」

ケインは舵をとり、弁天丸は宇宙に向かった。撃墜した船には、拓兄は乗っていない。かかったようだ。そして、それを皆に伝えると、リン部長は驚きを隠せなかった。チアキ

ちゃんも泣きそうな顔だった。

ヨツト部は、レースを準優勝したけど、誰も喜ばなかった。皆暗い、お通夜みたいなヨツト部室。すると、突然扉が開く。皆は開いた扉を見る。するとそこに立っていたのは……

拓人「よっ！」

茉莉香「拓……兄」

拓人「ああ。ちゃんと約束通り帰ってきたる？」

茉莉香「拓兄く!!」

私は拓兄に駆け寄りそして抱き付いた。今までにない位に泣いた。

茉莉香「本当に……本当に拓兄だよね！」

拓人「ああそうだ。心配させたな」

茉莉香「う……うわああああああん!!」

茉莉香は、不安が解消されたのか、決壊したダムの用に涙を流したのであった。

## 修学旅行（前編）

今日は修学旅行だ。何でも今年は予算削減の為、3年と2年をまとめて行うそうだな。学院長「えく・・・それでは、安全で楽しい修学旅行にしましょう」

「それじゃあ、クラスごとにバスに乗り込め」

担任に言われて、俺達は各クラスのバスに乗り込んでいく。

拓人「ふうっ」

リン「隣座るぞ」

リンが隣に座る。

拓人「行き先は何処になるんだ？」

リン「まだ発表されてないからな。けど、噂じゃ食べ物美味しい星系らしいぞ」

拓人「なるほど。楽しみだな♪」

バスは新興浜空港に到着し、船に乗ってその星に向かった。空港に到着すると、かなり賑わっていた。

拓人「かなり賑わってるな」

リン「そうだな。他の星系からも来てるな」

空港には、他の星系から来た観光客や、俺達みたいな修学旅行生がいた。

「それじゃあ、ホテルまでの地図を各自の端末に送った。それを見て午後7時までにチェックインするように」

そして、俺達はそれぞれのグループになり、街を見て回るのである。今現在の時間は11時だ。

拓人「さてと、どうする？一回ホテルに行つてチェックインしてから回るか？」

リン「そうだな」

考えていると、茉莉香達ヨット部2年がやつて来た。

茉莉香「拓兄！」

サーシャ「お疲れ様です」

拓人「そう言えば、2年も一緒だったな。お前達はどうするんだ？」

茉莉香「ん、荷物が邪魔だし、1度ホテルに行つてチェックインしてから回ろうと思つてるの」

拓人「俺達と一緒だな。なら、折角だしヨット部の連中と一緒に回るか」

リン「決まりだな。なら、まずはホテルに向かう」

俺達は、先生から貰った地図を頼りにホテルに向かった。チェックインすると、部屋に荷物を置いてロビーに集合する。

茉莉香「お待たせ拓兄」

リン「悪い」

拓人「いや、俺も今来たところだ」

チアキ「だったたら、行きましようか」

拓人「だな」

俺達はホテルを出て、何処に行くか決める。

サーシャ「ところで拓人先輩」

拓人「なんだ？」

ハラマキ「何で刀を3本持つてるんですか？」

小林丸「捕まるよ？」

拓人「それについては心配ない」

そう言つて、首にぶら下げているカードを見せる。

拓人「これがあれば、どの星系に行つても武器の所持を認められるんだ」

茉莉香「あく！そう言えば、この前更新してたね」

拓人「そう言うことだ。それより、そろそろ昼の時間だし、何処か昼飯にしよう」

『賛成♪』

俺達は、繁華街に行き何処で食べるか考える。

リン「食べ歩きでもいいかもな」  
ウルスラ「いいかも♪」

拓人「なら決まりだ」

屋台もたくさんあるため、食べ歩きにはもってこいである。それぞれ食べたい物を  
買って歩く。

拓人「悪い。少し待っていてくれないか？トイレに行ってくる」

茉莉香「分かったよ拓兄」

リン「早くしろよ」

俺は、コンビニに入りトイレを済ませる。出てくると、茉莉香達が複数の男達に囲ま  
れていた。

—————

茉莉香「遅いな拓兄」

リン「さつき行つたばかりだろ？」

そんな話をしてると、チャライ男達が話しかけてきた。

「彼女達〜♪今暇？」

「だったら、俺達と一緒に遊ばない♪」

「いいね〜♪人数もぴったしじゃん♪」

小林丸「悪いけど、私達今人を待つてるから」

手を掴もうとする男をあしらう。

「いって〜♪暴力された」

「あらか〜♪これは、慰謝料を請求しないとな〜♪」

「つてな訳で、君達を強制連行〜♪」

男達は、私達を捕まえようとする。

「ウチの連れに何か用か？」

「あん？誰だお前？」

茉莉香「拓兄!!」

拓人「ウチの連れに何か用か？」

「あん？誰だお前？」

茉莉香「拓兄!!」

俺は急いで茉莉香達の所に行くのと、男がそう言つたので声をかける。

拓人「俺はコイツらのクラスメイトだ。妹もいるがな」

「んなの知るかよ。邪魔するなら容赦しね〜ぞ!!」

「そうそう。痛い目に遭いたくなきやさつさとききな」

拓人「・・・コイツら、これが見えてないのか？」

リン「だろうな」

俺は刀に手を掛けて、少しだけ刃を見せる。

拓人「斬られたくなけりや、さつさと何処かに消えな」

俺は、少し殺気を出すと男達は蜘蛛の子を散らすように逃げていった。

拓人「口だけかよ」

『いやいや。拓人（先輩）（さん）（拓兄）が恐すぎるから』

拓人「そうか？」

その言葉に、全員が頷くのであつた。繁華街を色々と見て回り、時間も経つたのでホテルに戻るのであつた。

拓人「じゃあな」

茉莉香「じゃあ拓兄、後でね」

皆それぞれ部屋に帰っていく。俺達男は人数が少ないため、一人部屋である。

拓人「あく！今日は色々あつて疲れたな。取り合えず、刀の手入れをするか」

俺は刀の手入れを始める。それに没頭していると、あつという間に時間が経っていた。

拓人「もうこんな時間か。そろそろ風呂に入るか」

このホテルは、24時間いつでも風呂に入る事が出来る。風呂の道具を持って温泉に向かった。中に入ると、脱衣所には誰もいない。おそらく時間も遅いため、全員が先に入ったのであろう。

拓人「のんびりとできそうだな」

戸を開けると、見晴らしのいい露天風呂だった。

拓人「中々な絶景だな。風呂も広いし町明かりも綺麗だな」

かけ湯をして湯船に浸かる。

拓人「あく・・・いい湯だな♪」

のんびりとしてると、戸が開く音が聞こえた。

拓人（誰か入ってきたな）

別に気にしていなかったが、声を聞いて拓人は固まった。

「うわ〜♪凄いい眺めだね」

「本当ね」

「お風呂も広いよ〜♪」

「走ると危ないよ」

「ん？先客か？」

拓人は慌てて振り返ると、そこにはヨット部のメンバーがいたのであった。

『拓人（先輩）（さん）（拓兄）!?!』

拓人「なっ!?!」

果たして、どうなるのか？

## 修学旅行（後編）

拓人「なっ!?」

俺は驚きを隠せなかった。普通に風呂に入ってたなら、茉莉香達が入ってきたからである。

チアキ「な、何で拓人さんが!？」

拓人「俺に聞くな!ここは男湯の筈だぞ!？」

茉莉香「で、でも私達も女湯から入ってきたんだよ!？」

拓人「まさか・・・」

俺は嫌な予感がした。

リン「恐らく、混浴なんだろうな」

リンは落ち着いて説明した。

拓人「と、とにかく!俺は上がるから、お前らはゆつくりと入れ」

小林丸「それじゃ拓人に悪い」

サーシャ「そ、そうですよ!!拓人先輩も、今来たばかりですよね?」

ハラマキ「そうだね。まだ頭も洗ってないみたいだし」

チアキ「わ、私達は気にしませんから」

拓人「いや・・・」

リン「諦めな拓人。ちゃんとタオルを巻いてるから心配するな♪」

そして拓人は、等々折れたのであった。そのまま湯船に浸かる。茉莉香達も入ってくる。

拓人「つたく、何でこんな時間なんだ？」

リン「それは拓人もだろ？」

拓人「俺は、刀の手入れをしてたらこんな時間になった」

茉莉香「そうなんだ。私達は、トランプや話をしてたらこんな時間になったの」

拓人「自業自得だろうが!!」

理由を聞いて、思わず叫んでしまった。まさか、そんな事とは思ってなかったからである。

リン「まあまあ拓人、別にいいじゃないか。役得だろ？」

拓人「ノーコメントで」

俺は皆に背を向けてそう言うのであった。上を見上げると、綺麗な星空が広がっていた。俺に釣られて皆も上を見上げる。

茉莉香「うわ〜♪」

チアキ「凄いわね」

リン「ああ」

サーシャ「地上で、こんな星空初めて見た」

拓人「露天風呂の醍醐味だな」

湯に浸かりながら、星を眺めるのであった。のんびりとした俺達は皆でゲームをしに行く。

茉莉香「うー・・・」

チアキ「全然獲れないわね」

茉莉香は、UFOキャッチャーに苦戦している。

リン「なんの！」

ハラマキ「ああー!! 抜かれた!!」

レーシングゲームをしたり

リリイ「そこ!!」

ウルスラ「また負けたく!!」

サーシャ「強いねリリイ」

エアーホッケーをしたりと、それぞれ楽しそうに過ごしている。因みに俺は格ゲーをしており、ステージをオールクリアしていた。すると、教師がやって来た。

「白鳳学院の生徒は、そろそろ自分の部屋に戻れ〜」

『は〜い』

拓人「俺達もそろそろ戻るか」

リン「そうだな」

チアキ「ほら茉莉香、戻るわよ」

茉莉香「結局獲れなかつた〜!!」

サーシャ「残念だったね」

リリイ「よし！私が仇を!!」

拓人「早く戻れ」

俺が止めたので、リリイは渋々茉莉香達と戻っていくのであった。俺も部屋に戻り布団を敷く。部屋の大きさは、他と一緒に5人ほど寝れる広さに俺一人。普通別のクラス  
の男子と一緒にするだろう……

拓人「……諦めて寝るか」

電気を消して、布団に入り眠りにつくのであった。暫くして、目が覚める。

拓人「……トイレ」

俺はトイレに行きスッキリする。出てきて手を洗い、再び布団に戻り中に入ると、何やら柔らかな感触がした。

拓人（……ん？この布団こんなに柔らかかったか？）

その部分を揉んでみる。確かに柔らかいが、凄く弾力もある。すると、明らかに俺以外の声が聞こえた。

「んっ！」

拓人「!?誰だ!!」

慌てて布団を捲る。そこにいたのは……

拓人「……何でここにいるんだ。リン」

リン「あ、あはは……」

布団の中にいたのはリンだった。

拓人「『あはは』じゃねーよ。何で俺の部屋に、しかも布団の中にいるんだよ」

リン「いや〜♪どうにかして、茉莉香に追い付きたいからな」

拓人「おいおい……」

俺は呆れてしまった。

リン「つて訳で、アタシから来たんだよ」

拓人「……いいんだな？」

リン「ああ。ジエニーには悪いけど、少しでも他の皆よりリードしたいからね」

拓人「……分かった」

俺は電気を消して、リンを押し倒すのであった。翌朝、目が覚めると既にリンはいなかった。

拓人「……／＼／＼」

昨日の事を思い出し、顔を赤くする拓人。

拓人「暫くリンと会うのは避けた方がいいな」

恐らく、お互い暫くは気まずいだろうしな。案の定、自由行動の時には、お互い顔を赤くしながら、ぎこちない会話をしていたのであった。それを見た茉莉香達は、俺とリンと何があつたかすぐに理解したのであった。

## 海賊狩りあらわる

あの事件から無事に帰って来た。そしてヨット部や弁天丸の連中からも手洗い祝福を受けた。しかし、これとはまた別の事件が起きていた。俺達は今親父さんの店に集まっている。

茉莉香「海賊狩り？」

ミーサ「そっ！海賊狩り。さ、まずは何処から話をしましょうか？」

ケイン「取り敢えず最新情報？」

百眼「あいよ」 pipipi

百眼が中央にモニターを映す。

百眼「3日前に襲われたのは、海賊船シルバーフォックス。三連装の主砲が三門に、迎撃用の二連装機関門が18門。その他対連想のミサイル…海賊船としちゃ大した武装だ」

シュニツツアー「軍の重巡洋艦クラスだ」

茉莉香「で、そんなに凄い船を沈めちゃったのが、海賊狩りなの？」

ケイン「少なくとも、保険組合ではそう呼んでるようですよ」

ミーサ「保険組合のシヨウさんが送ってきてくれたデータによれば、同様な事件は今月に入って2件。先月は5件。週に1回は必ず海賊船が狙われ沈められているわ」

拓人「…」

茉莉香「あ！根本的な質問いいかな？」

ミーサ「なに？」

茉莉香「海賊狩り海賊狩りって言うけどさ、この界内で宇宙海賊って、狩られちゃう程いるの？」

シュニツツアー「ふん…」

ミーサ「は〜」

百眼「う〜ん」

拓人「ふ〜…」

茉莉香の一言に、少しだけ呆れる。

茉莉香「いや… ほら！同業の海賊って、チアキちゃんのところのバルバルーサしか知らないから、他にどのくらい宇宙海賊がいるのかわらな〜って」

ミーサ「海賊艦隊。その数まさに2000よ」

茉莉香「えっ!!2000隻!?!」

ミーサ「それは独立戦争の時。それに、海賊船が皆が皆弁天丸みたいな武装船じゃな

いのよ？」

茉莉香「？」

拓人「例えばオデット二世だ」

茉莉香「あつ！そうか…」

ミーサ「お古の軍艦から太陽帆船まで。宇宙海賊と言つても、元々はろくでなしの集まりだしね」

茉莉香「ろくでなし…」

ミーサ「政府の構文集を見れば、どの船の免許が更新されて、どの免許が失効になつたか見れば分かるわ」

拓人「ま、ざつと3分の1位には減つただろう？」

茉莉香「6、70か…」

百眼「現在残つてるのは、間違いなく軍用艦クラスだな」

茉莉香「うん…」

拓人「超光速跳躍が出来て、軍とも撃ち合える武装…」

シュニツツアー「最低、弁天丸並みじゃないと、私掠船免状の維持は出来ないだろう」  
茉莉香「うち、最低ライン？」

ミーサ「クルーは最高でしょ？だから…」

茉莉香「お釣りが来る!!」

ミーサ「よろしい♪」

茉莉香とミーサがそんな事を言っている。

拓人「呑気に言ってるけど、茉莉香はどう対処するつもりだ？」

俺の一言で、皆が茉莉香を見る。

茉莉香「じゃ〜言うね。まずは3つ!」

百眼「ほ〜。3つもあるんだ」

茉莉香「1つ、これは弁天丸の事情。私掠船免状の失効まで後20日しかない。当然それまでには海賊のお仕事をしなければならぬ」

百眼「ま〜、そうだろうな」

茉莉香「2つ目、これは私達の事情。来月末に大切な学年末テストがあります。出来れば試験前に免許の失効をクリアして、試験後に本格的に対処するのがいいんですけどね」

ケイン「もう1つは？」

茉莉香「3つ目!この無限の海賊が狙われてるとしても、弁天丸が狙われると限らない。次の仕事の時には案外無事かもしれない。そう思いたいけど、襲われた海賊船の位置を見ると、どんどんこの他宇宙星系に近づいている」

ミーサ「狙われてもおかしくないわね。弁天丸が」

茉莉香「運を天に任せて仕事をする。そんな事はしたくない。結果的に海賊狩りに会ってしまうかも知れないけど、あやふやなまま、なすがままってのは悔しいじゃない？ やれることはやっておかないと♪」

シユニツツアー「武装の強化か？ あるいは出力系の強化とか…。」

茉莉香「うんうん。ちよつとしたズル」

ケイン「ズル？」

百眼「どんなズルだ？」

茉莉香「ふっふっふん♪恐らく依頼する方も助かると思うんだよね♪」

拓人「ま、案があるならいいさ。俺は先に戻ってるぞ」

俺は先に親父さんの店を出て家に帰って寝る。まだ前の傷が治っていないのである。そして翌朝、学院の授業も終わり俺はある場所に向かう。俺達3年はもう部活を引退してるから、それ以来あまり部活に出ていない。

拓人「さて、合格してるか…。」

俺がやって来たのは、シャトルの免許を取得しに来ていた。そして今日は合格発表。

拓人「えーつと…7536つと」

俺は自分の番号を探す。

拓人「…… あった！合格だ〜!!」

俺は無事にシャトルの免許を獲得した。これで明日からケイン無しで宇宙に出れる。俺は明日に備えて家に帰り早めに寝る。翌朝、茉莉香と空港で合流するようにメールを送る。俺は一足先に空港に行く。

拓人「どこでもドア」

秘密道具のどこでもドアを使って、俺達のシャトルに出る。それが一時間後、茉莉香がやって来た。

茉莉香「お待たせ拓兄」

拓人「やつと来たか。なら、そろそろ行くぞ」

茉莉香「あれ？ケインは？」

拓人「弁天丸にいるぞ？」

茉莉香「ならどうやって弁天丸まで行くの？」

拓人「俺が操縦する」

茉莉香「拓兄免許持っていないよね？」

拓人「昨日取得した」

俺はそう言っただけで免許を茉莉香に見せる。

茉莉香「へ〜凄いね」

拓人「さつさと行くぞ」

俺達は、弁天丸に向けて発進する。

拓人「なあ茉莉香…」

茉莉香「なに拓兄？」

拓人「お前、高校を卒業したらどうするんだ？」

茉莉香「…」

拓人「俺は卒業したら、やりたいことをする」

茉莉香「やりたいこと？」

茉莉香「ま、弁天丸の副船長を辞めるかまだ考え中だがな」

茉莉香「えっ!? 拓兄弁天丸降りるの？」

拓人「まだ考え中だ。俺がやりたいのは…」

茉莉香「やりたいのは？」

拓人「ま、まだ秘密だ」

茉莉香「えく! 教えてよく!!」

拓人「駄目だ」

茉莉香「ぶく…」

そんな話をしていると、弁天丸から通信が入る。

クーリエ 『シャトル確認。回収します』

拓人 「頼むよクーリエ」

クーリエ 『了解♪でも拓人君、初めての割りには上手く運転してるよね?』

拓人 「サンキュー」

弁天丸に回収されて、先に茉莉香をブリッジにやる。

拓人 「さて：：茉莉香にこれを置いておくか：：」

俺はそう言いながら、船長室を出ていく。ブリッジに行くと、茉莉香が強面の男と通信をしている。

?? 『貴様か：：保険組合のシヨウにこんな仕切りをさせたのは』

茉莉香 「会えて光栄です。キャプテン・ストーン。弁天丸船長の加藤茉莉香です。私、他の海賊の方々となかなかお会い出来ること無かったので」

?? 『ふん!!』

拓人 「：：」

何やら向こうは気に入らないみたいだが、茉莉香は上手かわす。梨理香さんの娘だな：：すると、警報が鳴り響く。目の前にタッチダウンしてくる船があらわれる。

クーリエ 「タッチダウン一隻!」

拓人 「この辺に出てくる船あるか?」

百眼「そんな物はね〜！」

茉莉香「敵が通常空間に復帰したところで、トランスポンダーの確認と電子戦の発進」

クーリエ「了解!!」

百眼「船長!!副船長!!」

百眼が叫ぶと、弁天丸の真上をビツクキャッチが通つていく。

拓人「ばか野郎が!!」

茉莉香「クーリエ通信!!」

拓人「無駄だ!どうせ無視する!」

茉莉香「そんな…」

すると、敵はタツチダウンと同時に電子戦を放射する。

クーリエ「す、凄いわ〜!通常空間に復帰するかしないかのタイミングで電子戦!」 p

i p i p i

百眼「敵さんの姿が見られる!高幕センサーの映像を回すぜ!!」

そこに映し出されたのは…

拓人「こいつは…グランドクロス!」

俺は思わず声を出して驚く。俺が前世で見てたモーレッツのアニメそのままだったか

らである。すると百眼が声を出す。

百眼 「おんや〜?」

茉莉香 「どうしたの?」

百眼 「敵さんのエネルギー反応が低下。弾切れか?」

拓人 「まずい!! ビックキヤツチに緊急通信!! 急いで超光速跳躍をしろと!!」

茉莉香 「どうしたの拓兄!!」

拓人 「あれは敵の作戦だ!」

茉莉香 「作戦!?!」

拓人 「ああ! 相手に油断させて逃げさせる。そして…」

俺が説明していると、ビックキヤツチに向かって変則的な動きをして詰め寄るグラウンド

クロス。

拓人 「ジグザグに近付いて、逃げてる相手を集中砲火だ…」

茉莉香 「そんな…」

クーリエ 「もう一隻、タッチダウンしてくるわ!!」

百眼 「モニターに出すぞ!!」

百眼がモニターを映す。そこには弁天丸の10倍はありそうな戦艦がタッチダウンしてきた。

?? 『時は… 来た!!』

茉莉香「なに…あれ？」

拓人「銀河定刻の海賊船。パラベラム号…」

一同「パラベラム号？」

拓人「そうだ」

俺はそのままミーサの側に行く。

拓人「あれはお前が思っている人物だ」

ミーサ「!?」

驚きを隠せないミーサ。すると、パラベラム号が主砲を発射する。しかし…

ドーン!!!

拓人「つち!!」

三代目「効果音にしては迫力ありすぎだろ!!」

クーリエ「重低音聞いているわ！敵艦、エネルギー反応急増!!」

拓人「ほつとけ。どうせ離脱する。それより…」

俺はパラベラム号の男を見る。

クーリエ「通信来ました。海賊船、パラベラム号からです」

拓人「廻せ」

俺は通信にでる。

??『我が名は：：』

拓人「鉄の髭。そしてお前の船、パラベラム号。銀河帝国の海賊が何のようだ？」

鉄の髭『!?汝等に危機来る!』

拓人「危機か：：。確かにそうだな。だが、あんたとは話すつもりはない!!そして伝えとけ、そこにいる操舵手とその隣にいる奴に伝えておけ!!帰ったら覚えとけと：：。」

俺がそう言うと、パラベラム号は消えていった。

茉莉香「拓兄：：。」

拓人「ビックキヤツチの回収を急げ!!負傷者の手当てを急げ!!」

俺は急いでビックキヤツチ号の救助に向かう。

拓人「ミーサ!!すぐに治療をしろ!俺も手伝う!!」

ミーサ「分かったわ!でも拓人治療出来るの?」

拓人「任せろ!お医者さん靴!!」

俺は秘密道具のお医者さん靴を出して、負傷者の治療に向かう。そこはまさに野戦病院だった。俺とミーサはそれぞれ治療にあたる――

その頃茉莉香はビツクキャッチ号のキャプテンストーンと話していた。

ストーン「ふん、ざま〜ね〜な」

茉莉香「残念です。キャプテンストーン。貴方の船を守ることが出来ませんでした」

シユニツツアー「一旦は鎮火したのですが、誘爆を抑えきれませんでした」

ストーン「∴∴ これで海賊家業もおしめ〜か。うちのクルー達は？」

茉莉香「ビツクキャッチ号の乗組員は全員無事です。怪我人はおおせいですが∴∴ 絶  
対助けて見せるって、うちのドクターと副船長が言っています」

ストーン「ブラッティミーサか。なら心配ない」

ストーンはそう言って安心する。そこにやって来たのは∴∴

拓人「入るぞ？」

茉莉香「拓兄？ああ！紹介します。弁天丸副船長の加藤拓人です」

拓人「拓人だ。取り敢えず、乗組員は全員無事だ」

ストーン「そうか：。」

ストーンは拓人の一言に安心する。

拓人「さて、今回は全てあんたのせいだぞ？」

ストーン「：。」

拓人「今回は全員助かったが、もし一人でも死者が出たらどうするつもりだ？」

茉莉香「拓兄、それはさすがに：。」

拓人「茉莉香は黙ってる。確かに海賊をやっている連中は覚悟はしている。けど、その家族や恋人にはなんて説明するんだ？」

ストーン「：。」

拓人「茉莉香、お前も覚えとけと。船長と言うのは、乗組員の命以外にもそういうのがあると言うことを」

茉莉香「：。」

拓人「俺からはそれだけだ」

俺はそれだけ言うとブリッジに戻る。その翌日、俺は既に弁天丸に来ていた。すると、何処からか歌が聞こえてきた。

拓人「なんだこの歌は？」

クーリエ「さく？この通信機から流れてるね」

拓人「それって確か昔からあるよな？」

クーリエ「あれ？なんか作動始めた」

拓人「解析出来るか？」

クーリエ「もくやつてるよ」

すると、茉莉香がチアキを連れてやって来た。

茉莉香「お疲れ」

拓人「よっ。チアキも久し振りだな」

チアキ「お久し振りです」

拓人「クーリエ、解析出来たか？」

クーリエ「もうちよつと待って。この通信ユニット、昔から弄るな捨てるなつて言わ

れてたけど、この為だったのね。アム…出たわよ？」 p i p i p i

拓人「これは…」

百眼「小惑星やガス雲。生還物質に阻まれたまさに隠れ家。海賊の巣つて訳だ」

ミーサ「この歌を聞いた海賊達は、この目的地にやって来るかもしれないし、やって

来ないかもしれない。それでも行くのね？」

チアキ「少なくとも、バルバルーサは向かっているはず。いいえ、向かっています！」

拓人「取り敢えず向かうぞ！」

一同「了解!!」

すると警報が鳴り響く。

クーリエ「前方にタツチダウン反応!! えっこの質量は… アイツよ!!」

拓人「来たか… チアキ、お前はここ座れ」

チアキ「拓人さんは？」

拓人「俺はあれで出る!!」

茉莉香「あれって… あれ!？」

拓人「ああ」

茉莉香「でもあれって、超光速跳躍出来ないよね？」

拓人「そこは心配するな。一緒についていける道具を取り付けてから行く」

因みにその道具とは、ただ自分の意思で伸び縮みするマジックハンドを改良して、ザンダクロスに取り付けた。パツと見は、エヴァン○オンだ。俺はそのまま格納庫から弃天丸の横に待機する。—————

茉莉香「拓兄：。」

チアキ「ねえ茉莉香。拓人さんが言ってたあれって何なの？」

茉莉香「ん、口で説明するより実際に見てもらった方がいいかな？」

チアキ「？」

チアキは茉莉香の訳の分からない説明に疑問に思っていた。しかし、その疑問はすぐに理解できた。

拓人『弁天丸聞こえてるか？』

茉莉香「此方弁天丸。聞こえてるよ拓兄」

チアキ「えっ：。な、何なのよあれは!？」

突然モニターに出てくればさすがに誰でも驚く。

拓人『チアキ、驚きすぎだろ？』

チアキ「驚くなど言う方が無理です!!」

拓人『確かに。これはザンダクロスという名前だ』

チアキ「ザンダクロス？って言うか、つくづく拓人さんには驚かされます」

チアキは微笑みながら、拓人にむかってそう言う。

百眼「お話中申し訳ないが、そろそろ敵さんが動くぞ！」

グランドクロスは、最初に出会ったように電子戦を放つ。

クーリエ「すっごいプレッシャー。これ戦艦一隻から出てるの？」

クーリエが頑張つて電子戦を応戦する。

クーリエ「ごめん、優位に立てない。ギリギリで堪えてる！」

拓人『ツチ：：』

茉莉香「敵の攻撃が当たらないだけマシ!!現状維持でよろしく!!」

拓人『こんな展開、帝国の第七かんたいに出たときくらいだな：：。茉莉香、どうする

！』

茉莉香「：：超光速跳躍に移行するため、距離を稼ぎます！今のままではにらみ合い

のまま。チャンスは、敵が重力盛儀で急接近してきた時!!」

拓人『了解!!弁天丸の護衛は任せろ！ヒラリマント!!』

シュニツツァー「主砲発射!!」

弁天丸がグランドクロスに向けて応戦する。

チアキ「こないの：：。」

茉莉香「来ないのならば誘ってあげましょう。進路反転!!弁天丸は尻尾を巻いて逃げ

ます！」

拓人『なるほど』

俺は茉莉香の提案を理解した。弁天丸は反転し、グランドクロスから離れる。

拓人「行かせるかよ!!」

俺はグランドクロスが弁天丸を追い掛けようとしたが、すぐに進路を塞ぐ。すると、グランドクロスから高エネルギー反応が出る！

拓人『茉莉香、そっちに行くぞ!』

茉莉香「了解!!」

拓人『敵に上を取らせるな!!』

ケイン「やるだけやってみる!!」

茉莉香「攪乱幕、蒔けるだけばら蒔け!!」

拓人『上は任せろ!』

俺は弁天丸の上に着地して、ヒラリマントで攻撃を防ぐ。しかし、こっちは1体しかないなので、弾くのもいっぱい。すると、攪乱幕も消えたので、ザンダクロスにビームが直撃する。

拓人『ぐあっ!!』

茉莉香「拓兄!!」

チアキ「拓人さん!!」

拓人『心配ない：． かすただけだ!!それより弁天丸、急加速だ!!』

ケイン「了解!!」

弁天丸は加速してグラウンドクロスの間をすり抜けていく。

クーリエ「敵艦、減速してるけど進路はそのまま。弁天丸から離れてます」

茉莉香「重力派は？」

百眼「反応微弱。もう大丈夫だ」

一同「ふく．．」

茉莉香「ダメージは？跳躍出来そう？」

三代目「破損箇所は取り敢えず処理中」

拓人『心配ない』

茉莉香「拓兄？」

拓人『こつちで修復しておく。復元光線!!』

俺は復元光線を弁天丸に当てる。すると穴や傷が次々直っていく。

三代目「すっげ〜！」

拓人『あくまで元に戻るだけだ。キチンと修理はしろよ』

俺はそう言うのと、弁天丸に入っていく。

拓人「ふく：：ツク、傷が開いたか：：ミーサにまたとやかく言われるんだろな」  
俺はそう思いながらブリッジに戻っていった。そして超光速跳躍も無事に出来て、海賊の巣に到着した。

拓人「取り敢えず、ケンジョーさんと合流してこい」

茉莉香「はくい」

チアキ「こつちよ」

拓人「クーリエ、後は頼むぞ♪」

クーリエ「はくい：：」

拓人「凄く似合ってるぞ♪」

クーリエ「／／」

俺はそのままミーサの所に向かう。

ミーサ「はい、終了!!」

拓人「いって〜!」

ミーサ「自業自得よ!!心配したんだからね!」

拓人「悪かったな」

ミーサは俺にもたれ掛かってくる。

拓人「ミーサ、ケインとルカには気を付けろよ」

俺はそう言いながら医務室を出ていく。

拓人「さて、コピーロボットにケイン達を尾行させるか」

俺はコピーロボットを取り出してボタンを押しケイン達の後を追わず。

拓人「さて、茉莉香は……いた。ん？アイツは……」

俺は茉莉香と話している人物の会話を聞く。

拓人「糸無し糸電話」

俺は糸電話の片方を茉莉香達に向けて飛ばす。

茉莉香「宇宙戦艦、グランドクロス……」

??「正式には起動戦艦グランドクロス。施策アルファ号、艦長のクオーツ・クリス

ティ」

茉莉香「何処の艦長？銀河帝国？」

クオーツ「何処かの実験戦艦。そう言うことにしておいて」

茉莉香「新兵器？」

クオーツ「ノーコメント」

茉莉香「ふくん……」

クオーツ「なるほど、報告通りね。わざわざやって来たかいたわ。初めてグランドクロスから逃れた海賊船。弁天丸の船長、加藤茉莉香」

茉莉香「何で海賊を狙うの？」

クオーツ「なんとなく。いい実験相手」

拓人「ふざけてんのか？」

クオーツ「!？」

俺は我慢できなくて、クオーツに詰め寄る。持っていたナイフを首もとにつける。

クオーツ「貴方は…。」

拓人「弁天丸副船長で茉莉香の兄の、加藤拓人だ」

クオーツ「そう… 貴方が…。」

拓人「で、それ以上可愛い妹をバカにすると…。」

クオーツ「ふふっ… ま、せいぜい頑張つて、私に沈められなさい…。」

拓人「ツチ、ステルスか…。」

クオーツは消えていった。

茉莉香「拓兄、さつき報告通りって言ってたけど…。」

拓人「それについては、もう一人の俺が対処してる」

俺は茉莉香にそう言って頭を撫でる。――

一方、コピーの方は…

ケイン「そろそろ、いいんじゃないか？」

ルカ「いつから気付いていたの？」

ケイン「最初からだよ。たく、君はバレバレだ」

ルカ「ミーサ!!」

物陰からミーサが出てくる。

ケイン「おいおい、なんの真似だ？」

ミーサ「なんか変だと思ってたの」

コピー「全くだ」

ミーサ「拓人…」

丁度いいタイミングで拓人のコピーがあらわれる。

コピー「お前… 覚悟は出来てるよな？ オラツ!!」

コピーは、ルカの姿をしたアンドロイドを蹴り飛ばす。

コピー「ルカに何かあったら、ただじゃいかないからな!!」

コピーはそう言いながら、アンドロイドの頭を潰す。

コピー「で、ケイン。いつ入れ替わった？」

ケイン「なんの事です？」

コピー「惚けるならいい。本物に後で説教をしてもらって下さい」

ミーサ「本物？」

コピー「ええ。すみませんが鼻を押ししてください」

コピーはそう言つて、ミーサに鼻を押ししてもらう。そして元の小さな人形に戻る。

ケイン「またか……と言うか、副船長には最初からバレていたのか……」

ミーサ「あまり理解出来ないけど、ケイン……貴方生きて帰つてきてね」

ケイン「おいおい!!副船長相手にその言葉は冗談に聞こえないぜ!!」

ミーサ「ま、貴方が悪いんだから仕方ないわ。さて、私は本物の拓人に会つてくる

わ♪」

ミーサはケインをそのまま残して、拓人のところに向かった。

ケイン「ミーサ!!助けてくれよ!!」

ケインも叫びながらミーサを追いかけていった。そして、ルカに化けていたアンドロイドを回収して、百眼に解析させている。

百眼「うん……」

茉莉香「どう？」

百眼「駄目だな。やられたら初期化するようにプログラムされている」

茉莉香「そっか〜。〜」

ミーサ「それじゃあ仕方ないわね」

拓人「…おい、いい加減に離れる二人とも」

茉莉香「嫌!!」

ミーサ「同じく♪」

拓人「は〜。〜」

現在拓人は、茉莉香とミーサに挟まれていた。左右にはない。前後にだ。

茉莉香「けど、ルカがアンドロイドになってたなんて分からなかったわ」

百眼「ま〜普段からいるんだかいけないんだか分からない奴だったからな」 p i p i p

i p i

百眼が確認しながら呟く。

百眼「あく！駄目だよつぱり。メインコンピュータは生きてたが、機能を停止したと同時に初期化されてる。コイツの主の手懸かりは掴めなかったよ」

ミーサ「このアンドロイド何処の何製？」

百眼「銀河帝国ヒューマン当地者製の特注品だ。恐らく帝国軍の特殊人形だ。どう

やってウチの情報を漏らしてたんだか…」

茉莉香「えっと…本物のルカ、どうなっちゃったんだろ？」

ミーサ「ルカも海賊よ。どんな時でも、覚悟は出来てる筈よ？」

百眼「変わった奴だったけど、寂しくなるな…」

拓人「おいおい、勝手に殺してやるなよ。ルカが簡単にはくたばるかよ」

ルカ「そうよ」

そう言いながら部屋の扉が開かれた。

ルカ「はくい♪」

茉&百「えく!!」

百眼「ル…ル…ルルルルル!?」

ルカ「失礼ね。あるわよ？足…」

拓人「やつと帰ってきたか」

ルカ「ええ、楽しませてもらったわ♪」

拓人「それはよかった♪」ナデナデ

俺はルカに近づき頭を撫でた。

ルカ「はい、お土産」

拓人「サンキュー」

ミーサ「で、今まで何処にいたの？」

ルカ「副船長に言ってオーロラを観に行こうと思ってたの。でも、前のヨットレースで見ちゃったし、急遽変更して暖かい所に行ったの」

茉莉香「襲われなかったの？誘拐とか？」

ルカ「誘いをかける男達は一杯。引く手あまただったわ。楽しい日々だったわ。でも、どれも拓人には敵わないわ♪」

茉莉香「うんうん」

ミーサ「それはそうね」

茉莉香「で、本当に貰っていいの？」

ルカ「ええ、充分楽しい思いをさせてもらったから」

拓人「そうか・・・」

俺はそのまま部屋を出ていった。廊下を歩いていると、バルバルーサの乗組員が来た。た。

乗組員「た、拓人さん!! すぐに来てください!! 変な女が・・・」

拓人「あいつか・・・分かった」

俺はそのままホールに向かった。到着すると、あいつが中央の椅子に座っていた。そして、ドラムが鳴り響く。

おやつさん「席に着け海賊ども！ここは海賊の巢。海賊だけが入れる、海賊だけの場所だ!!銃を納めよ。殺し合いはご法度だ！」

??「コイツはどうなんだ！ここ最近、小娘で海賊になったのは、その弁天丸だけだろ!!」

若い船長が茉莉香を指差す。

茉莉香「あははは……どうも……」

おやつさん「お前さんのような若造が知らんのは無理がない」

??「なに〜!!」

おやつさん「恐らく、ここにいる殆どの奴が知らないだろうから教えてやろう」

茉莉香「はは……」

ケンジョー「驚いたな。本当にいやがったのか……」

拓人「ええ、俺も実物は初めて見ましたがね」

チアキ「親父？」

茉莉香「拓兄？」

再びドラムが響く。

おやつさん「私掠船免許を持つ者だけが海賊にあらず！肩口に輝くドクロを見よ!!これこそ、銀河帝国が認めた帝国お墨付きの宇宙海賊の証だ！」

一同「おっ!!」

おやつさんの言葉に驚く一同。

茉莉香「伝説の…海賊!？」

ミーサ「子供の頃は、おとぎ話だと思ってたのにね」

??「そもそも私掠船免状が発行されたのもな、銀河帝国に海賊ありと言うのを、当時の政府がパクったのじゃよ」

茉莉香「パクリ?」

??「背に腹はかえられない…とな♪」

??「独立政府の戦力になる代わりに、此方も商売ガツポガツポ♪ま、それに引かれてワシも海賊のなったようなもんじゃがの」

??「ヒツヒ、ちげくね♪」

茉莉香「えっと…皆さんは?」

??「わしらはオリジナル…ひくふく…何番目じゃったかの?」

??「ワシは10番目じゃ!お前さんは8番!」

??「ワシは9番目。言わばわしらはオリジナルセブンになり損ねたつちゆう訳じゃ」

茉莉香「あはは…」

なんて会話をしていたら、クオーツが叫ぶ。

クオーツ「我はクオーツ・クリスティア！未踏の宇宙を旅する、帝国の先駆けの一人！」

ケンジョー「その先駆けが、何でこんな所にやって来た？」

拓人「そうだな。ここは帝国の第7艦隊も滅多に來ない辺境の星系だぞ？お前がわざわざやって来る事もないだろ？」

クオーツ「その加藤茉莉香に聞いているであろう？今、私は故あつて起動戦艦グランドクロスに乗っている。目的は、海賊狩りだ！」

クオーツがそう言うと、海賊一同が一斉に銃口を向ける。

茉莉香「だったら戦いましょう！」

チアキ「へ？」

茉莉香「この人は私達を舐めています。だからここまで一人ノコノコとやって来た」  
??「だったら尚更だ！」

拓&茉「海賊の巣では人殺しは(ぞ)法度!!」

茉莉香「ですよね？」

おやつさん「うむ♪そうじゃ」

おやつさんがいいタイミングで出てきた。

茉莉香「正々堂々と闘う。こそこそとスパイをよこしたり、待ち伏せするよりよつぽ

ど合理的です。そう思ったから、貴方はここに来たんじゃないですか？」

クオーツ「勝つてしまっわよ？ いいの？」

拓人「それは此方の台詞だ」

一同は納得していたが、一人だけそうはいかない。

??「納得いかねー!! 何で正々堂々と闘う流れになってるんだよ!! お前ら海賊か!!」

男は刀を取り出してクオーツに詰め寄る。

拓人「悪いけど、邪魔するなら海賊でも相手になるぞ？」

??「お前、邪魔する気か!!」

すると、後ろの扉が開く。

鉄の髭「クオーツ！ 迎えに来た!!」

??「ふざけんな！ 誰だテメエは!!」

鉄の髭「我は鉄の髭。ここより遙か離れた海をかけるもの。女王陛下のご依頼により、貴方を迎えに来た」

クオーツ「そうですか…」

鉄の髭「久し振りだなおやつさん」

おやつさん「おー、待ちくたびれたぞ。お前さんも食べてくかい？ 今日スペシャルメニューだ!!」

鉄の髭「いや、今日はこのじやじや馬な娘を迎えに来た」

鉄の髭はそう言つてクオーツを連れて出ていった。俺はすぐに後を追いかける。

俺は急いで鉄の髭を追い掛ける。すると、目の前に先程文句を言つていた海賊船長が立ち塞がつていた。

??「へへへ。お前さえ殺せば俺が安泰だ!!」

拓人「はく……ここでは殺しはご法度だ!!」

??「何!」

拓人「反省しろ! バース・コート《肩ロース》、ロンジュ《腰肉》、タンドロン《後バラ肉》、フランシエ《腹肉》、カジ《上部もも肉》、クー《尾肉》、ジゴ《もも肉》、ジャレ《すね肉》、ヴォー《仔牛肉》シヨット!! 舐めんなよ、海賊をよ……」

船員達「船長く!!」

梨理香「お出迎えのお出迎えかい?」

拓人「さてと、ミーサにケイン!」

俺が叫ぶと二人が出てくる。

ケイン「すみません、バレました」

鉄の髭「そうか……」

拓人「さて、ウチのケインが厄介になつたみたいだな? 後、梨理香さん? いや、梨理

香……」

梨理香「な、なんだい？」

拓人「帰ってからゆつくりと話をしような？」ニッコリ

梨理香「いや……それは……」

拓人「何か文句でも？後、取り敢えず一ヶ月酒とお小遣い無しな」

梨理香「そ、そんなく！そこをなんとかく！」

拓人「駄目だ!!後、ケインは一ヶ月50%の減俸な」

ケイン「ええく!!」

拓人「弟には、弁天丸の主砲を勝手に使った分と、無断に弁天丸に乗船したペナルティを支払ってもらおう！」

ケイン弟「ゲツ!!」

拓人「請求はパラベラム号に送るからな。最後に……よくその面を俺達の前に出せたな!!」

一同「!？」

俺は今までに無いくらいの覇気を出す。

鉄の髭「うむく……」

拓人「取り敢えず、これは茉莉香の分だ」

俺は鉄の髭を思いつきり蹴り飛ばす！

拓人「2度と俺や茉莉香に近づくな!! あんたは親でも何でもない!! 梨理香もこれ以上関わるなら、親子の縁を切らせてもらう！」

俺はそう言つて鉄の髭の横を通り過ぎる。その時の、クオーツの頭を撫でた。

拓人「悪かつたな」ナデナデ

クオーツ「!?」

クオーツは驚いたまま俺をそのまま見詰めていた。

拓人「さてと、取り敢えず弁天丸に戻るか」

俺は弁天丸に戻った。既にブリツジには茉莉香達が帰っていた。

茉莉香「おつかしいな? 外回りの格好の方が、絶対男受けいいのに:」

拓人「そうか? 普段のクーリエも可愛いぞ?」

クーリエ「〃〃〃〃」

茉莉香「相変わらずだね拓兄:」

拓人「そうか? で、弁天丸はどうだ?」

クーリエ「は、はい: : 以前よりもレーダーセンサーを2割ほど強化。出力系もスラストターの性能を中心にかなり強化してるから、ケインならかなりヤンチャな飛び方出来ると思います」 p i p i p i p i p i

茉莉香「ヤンチャな？」

ケイン「こうご期待ですな……アハハ」

茉莉香「どうしたの？」

拓人「ちよつとな……なあケイン？」

ケイン「はい……ちよつとです……」

茉莉香「?？」

クーリエ「そう言えばそろそろ通信始まる時間じゃないですか？」

茉莉香「アハハ……それもちよつとな……」

拓人「通信？」

クーリエ「聞いてれば分かりますよ」

クーリエがそう言っていると、古い通信機から歌が流れ出す。

『声をあつげろく時のく声を♪俺達や誰のく助けもく借りくぬが♪食えねく奴らにや摘んではかんでく♪勝ったく後の酒は旨いく♪男も女も海賊は強いく♪酒も喧嘩も海賊魂く♪声をあつげろく時のく声を♪俺達や誰のく助けもく借りぬが♪……』

拓人「……」

茉莉香「うんうん♪チアキちゃん可愛いなく。データ確認！歌だけ聞いてても意味ないでしょ？」

クーリエ「そうですね」

拓人「と言うか、チアキの奴がよくこんなやつたな？今頃バルバルーサでは、大音量で流してそうだな…」

茉莉香『果たし状！起動戦艦グランドクロスに告げる。』

チアキ『時間は午後零時、場所は地図参照。よろしく！』

茉莉香『海賊船弁天丸船長、加藤茉莉香』

チアキ『そして、私掠船免状をいただく海賊一同…』

茉&チ『よろしく！』

拓人「やれやれ… おっ？」

クーリエ「彼方からの返事のようにですね。解析します」 p i p i p i p i

茉莉香「お願い」

クオーツ『声を潜めろ！隠れる消えろ！私はお前らを見つけりや…』

クーリエ「了解した。こちらこそ楽しみにしておる。楽しすぎてさつきから大笑い。グランドクロス艦長、クオーツ…」

茉莉香「うわー！やっぱり人悪。でも、そうでなくっちゃね♪」

そして、集まった海賊船が目的地に向けて発信する。

三代目「出力安定。まさに絶好調♪」

百眼「センサーも好調」

シュニツツアー「戦闘システムも問題なし」

茉莉香「海賊の魂、見せてやりましょう！」

一同「おう！」

いよいよグランドクロスとの、最終決戦が始まるのであった。

## グランドクロスと最終決戦！そして…

百眼「しかし、闘いの場所が黄金の幽霊船が出現した場所とはな」  
pipipipi  
クーリエ「今じゃ暗黒雲どころか、デブリも何もない。綺麗サツパリした所よ」

ルカ「戦いには最適な場所ね」

クーリエ「ん？ホットライン」

画面に映るのはチアキだった。

茉莉香「チアキちゃん♪どうしたのいったい？」

チアキ『信じてるから。あんたと、私達の未来…』

拓人「まかせな♪」

通信を切ると同時に警報が鳴る。

クーリエ「前方にタツチダウン反応」

百眼「船影は3つ！しかも同型!!」

茉莉香「!？」

シュニツツアー「グランドクロスが3つ…」

三代目「おいおいマジかよ!!」

拓人「茉莉香、ここは頼んだぞ」

茉莉香「了解! 拓兄も気を付けてね」

俺は格納庫に行き、ザンダクロスで出撃する。

拓人「相変わらず凄まじい電子戦だな...」

すると、グランドクロス3隻から攻撃がくる。

百眼『うひゃく! 情け容赦ねくな!!』

拓人「ホントだよ!! ヒラリマント!!」

ヒラリマントで攻撃をかわしていると、相手から重力波反応が出る。

百眼『副船長!! 例のジグザグが来るぞ!!』

拓人「分かった!」

茉莉香『ねえ拓兄... あの3隻、一人で動かしてない?』

拓人「多分な」

1隻のグランドクロスが攻撃をする。すると、こちらの囀の船を自爆させ、攪乱幕を放つ。それを確認すると、海賊船が一齐に狙撃を開始する。

拓人「1隻は沈んだな♪」

茉莉香『残り2隻ね』

拓人「敵の増援は?」

百眼『今のところなしだ』

クーリエ『船長副船長、シヤングリラから通信です。何時でもOKだつて』

拓人「分かった。俺も今から向かう」

俺は1隻の海賊船、シヤングリラに向かった。2隻目をバルバルーサが撃墜する。

拓人「それじゃあ乗り込みぞ!!」

一同「おっ!!」

シヤングリラはそのまあグランドクロスに突っ込む。

茉莉香「ふむ……皆さん、いいですか？」

一同「うむ」

茉莉香「さく海賊の時間だ!!」

一同「おっ!!」

俺達はブリッジに向けて進み。当然簡単にはいかず、ロボット兵が待ち伏せをしていた。が、そこは海賊の船長達だ。ロボット兵をもともしない。

??「あ、あれは!?!村上丸の墨釘船長く!」

墨釘船長がロボット兵に飛び蹴りをかます。ロボットは見事にボーリングのピンの用に弾き飛ぶ。

拓人「すげえな。つてか、アイツ変なタスキをぶら下げてるな。一からやり直しつ

て...」

百眼「成る程く。検討を着けた通りだ。基本はオートマチック、操作は一人で行われている。目的地の場所はく...」 p i p i p i p i

茉莉香「場所は？」

百眼「ここだ」

拓人「なら、向かうか」

俺達は百眼が出したルートを頼り、グランドクロスのブリッジに向かった。

拓人「ここか...下がってる。オラツ！」

扉を蹴り破る。

茉莉香「クオーツ！クオーツ・クリスティア!!」

クオーツ『ようこそ、茉莉香』

茉莉香「!？」

すると目に前にクオーツがあらわれる。

クオーツ「ようこそグランドクロスへ」

茉莉香「てつきりもぬけのからかと思っただわ」

クオーツ「逃げも隠れもしないわ。それにしても... ホント派手ね」

茉莉香「海賊だもん♪当たり前よ。こないだの話の続きしたかったの」

クオーツ「…」

茉莉香「確かに海賊のシヨールはどうかと思うよ？でもね、私は今ここにいる。弁天丸船長加藤茉莉香は、この宇宙に…今この時に存在している。何故私が海賊なのか？それは私が加藤茉莉香だから」

クオーツ「…」

拓人「答えになってないか？そつちは問題にもなっていないからな？おあいこだよ」

クオーツ「おあいこ？」

シュニツツアー「両手を上げてコツチへ来い。捕虜の扱いは、帝国軍義にのつとつて…」

シュニツツアーそう言つてると、クオーツが脱出した。

拓人「やつぱりか…」

そして脱出した場所から声が聞こえる。

クオーツ「お逃げなさい。まもなくこの艦は爆発します」

百眼「ああ、やつぱり…」

クオーツ「茉莉香…」

茉莉香「なに？」

クオーツ「お出でなさい。より広い海に。それを望む人もいる…」

拓人「取り敢えず脱出だ！」

俺達は急いでグランドクロスを脱出する。しかし、思っていたより早く爆発が起こる。すると、茉莉香の頭上に瓦礫が落ちてくる。

茉莉香「きゃく!!」

拓人「茉莉香!!」

俺は茉莉香を吹き飛ばす。

拓人「ぐあつ!？」

茉莉香「拓兄!!」

百眼「副船長!!」

シュニッツァー「今瓦礫をどける！」

シュニッツァーが俺にのし掛かった瓦礫をどかそうとしたが、俺がシュニッツァーに言う。

拓人「シュニッツァー!もういい!茉莉香を連れて早く脱出しろ！」

シュニッツァー「しかし...」

拓人「最後の副船長命令だ!!」

シュニッツァー「...了解した」

シュニッツァーは茉莉香を抱き上げて俺から離れていく。

茉莉香「離してシュニツツアー!!」

シュニツツアー「すまん……」

シュニツツアーはそう言うと、茉莉香を気絶させた。

拓人「百眼、悪いけどこれから茉莉香の事を頼み。そして、これを渡してくれ」

俺は、普段から着けていたサングラスを渡す。

百眼「副船長……」

拓人「俺は爆発ギリギリまで通信を入れておく。弁天丸の皆にはせめてな……早く行け!!」

百眼は苦い顔をしながら、シュニツツアー達の後を追い掛けた。

拓人「ったく……まさかこうなるとはな……一応奇跡を信じて宇宙クリームとテキ

オー灯を当てておくか……」

そして、俺は弁天丸に通信を入れた。――

シュニッツァー達が弁天丸に到着する。

ミーサ「お帰りつて、茉莉香!?!それに、拓人は?」

シュニッツァー「...」

百眼「...」

クーリエ「百眼?」

シュニッツァー「... すまん」

シュニッツァーはそれだけ呟く。

ミーサ「嘘でしょ?」

すると、茉莉香が目を覚ました。

茉莉香「ここは... 拓兄! シュニッツァー、拓兄は!!」

シュニッツァー「...」

茉莉香「嘘でしょ? 何とか言つてよ」

百眼「船長... 副船長からだ」

百眼は、拓人から預かったサングラスを茉莉香に渡す。

茉莉香「これって……拓兄がいつも着けてたサングラス……」  
百眼「そうだ……」

クーリエ「船長……通信です。相手は……拓人君!？」

茉莉香「!?急いで繋いで!!」

通信を繋ぐと、映ったのは瓦礫に挟まれた拓人の姿だった。

茉莉香「拓兄!!」

拓人『なんだよ茉莉香、情けない声を出すなよ』

茉莉香「だって……拓兄……」

拓兄『悪かったな。約束守れなくて……』

茉莉香「嫌だ……嫌だよ……」

拓人『皆も、出来ればこれからも茉莉香を支えてやってほしい……ケイン、百眼、三

代目、ルカ、クーリエ、ミーサ、シュニツァー……頼んだぞ?』

一同「副船長!」

皆が叫ぶ。すると、拓人の周りでも爆発が始まる。

拓人『へへ……そろそろ時間みたいだな?茉莉香、最後だ!……船長室の机の引き出

しを開けてみる』

茉莉香「……えっ?」

拓人『いいな? 机の引き出しをだぞ? 後... 自分が後悔しないように生きろ。生きて... 自分の好きな用にしろ...』

茉莉香「拓兄...」

拓人『大丈夫! お前ならやれるさ♪ 頑張れよ。後、告... 白... の返... 事...』プツン

そこで拓人との通信が途絶えた。そして爆発するグランドクロス。

茉莉香「拓... 兄... 拓兄く!!」

ミーサ「そんな...」

クーリエ「あんまりだよ...」

ルカ「...」

シユニツツアー「...」

ケイン「... 弁天丸、ここから離脱する」

百眼「... ああ」

三代目「...」

グランドクロスから離れる弁天丸。グランドクロスには勝利した。しかし、その代償は余りにも大きすぎるのであった。拓人の訃報はすぐに伝えられた。チアキはその場で泣き崩れてしまい、ヨット部のメンバーも泣くものや気絶するもの。リンはすぐに

ジェニーに連絡した。それを聞いたジェニーは、すぐに海の明星

にやって来た。梨理香も初めて人前で泣いた。そして拓人の葬式が行われた。参列者には、共に戦った海賊船の船長達や、ヨット部のメンバー、ハロルド保険組合のショウや、親父さんやおやつさんも来てくれた。

ショウ「その……何て言えばいいのか……」

茉莉香「ありがとう…… ショウさん」

ショウ「元気をだしな」

茉莉香「うん……」

次は親父さんが来てくれた。

親父さん「梨理香……」

梨理香「親父さん……」

親父さん「……辛かったな」

そう言つて離れていく。次はケンジョー船長

ケンジョー「キャプテン茉莉香……そしてブラスタ―梨理香。この度は、誠に残念だ……」

茉莉香「ケンジョーさん……チアキちゃんは？」

ケンジョー「あれ以来、元気がなくてな。ま、無理もないがな……」

こうして、拓人の葬式は終了した。翌日、茉莉香は一人でいたくなかったので、ヨツト部にやって来た。しかし、全員まだ元気はなかった。

茉莉香「...」

グリューエル「茉莉香さん...」

茉莉香「グリューエル...」

グリューエル「それは... 拓人さんが普段身に付けていた物ですね?」

茉莉香「うん... 今はこうして私の頭に着けてるんだ」

グリューエル「そうですか...」

すると、弁天丸から緊急通信が入る。

茉莉香「... もしもし」

ミーサ『茉莉香? どこ?』

茉莉香「ミーサ? 今は部屋にいるけど...」

ミーサ『なら丁度よかった。今すぐに弁天丸に通信を開いて頂戴!!』

茉莉香「どうしたの?」

ミーサ『副船長の遺言を思い出してね。で、船長室の机の引き出しを調べてみたら、

チップが出てきたの。恐らくなにかが映ってる筈よ?』

茉莉香「本当に!? 分かった! 関係者呼ぶから少しだけ待って!!」

通信を切り、茉莉香は皆に説明する。

リン「分かった。急いでジェニーを呼ぶよ」

リンはジェニーに連絡を入れる。

茉莉香「私はママに連絡しないと…」

茉莉香もママに連絡を入れる。そして二人ともヨット部の部室に集まる。

茉莉香「ミーサ、これで全員集まったよ？」

ミーサ『なら、今から再生するわよ？百眼！』

百眼『ああ…』 pipipipi

そして弁天丸とヨット部のモニターに映し出されたのは、拓人であった。

茉莉香「拓兄!!」

拓人『え〜と… これで映ってるか？さて、茉莉香や弁天丸、もしかしたらヨット部の連中もいるかもしれないかな？お前達が見ているって事は、俺はもう死んだんだろうな？』

チアキ「拓人さん…」

拓人『まく俺が死んで、茉莉香がメソメソ泣いてるかもしれないが、ヨット部の連中や弁天丸の皆、茉莉香を支えてやってくれ。俺がいたらいいんだけどな…』

ミーサ『…』

拓人『後、俺に告白してくれた皆、返事を出来なくて悪かったな』

リン「拓人：…」

拓人『ま、相変わらず俺は返事を出せなかった。それは皆が大切だからだ。優柔不断って言われるかもな♪』

ジェニー「本当にそうよ…。」

ルカ『全くね…。』

拓人『どうせこの台詞を聞いたとき、ジェニー辺りが何か文句言っただがな♪』  
グリユーエル「拓人さんらしいですわ…。」

拓人『色々長かったが、そろそろ完全にお別れだな。最後に茉莉香、俺の部屋に俺が使っていたポーチのスペアがある。お前ならちゃんと使ってくれると信じてるからな♪』

茉莉香「拓兄：…」

拓人『安心しろ。俺は一同死の淵から戻ったことがあるんだ。今度も大丈夫さ。じゃあな♪』  
弁天丸副船長で茉莉香の兄。そして、白鳳学院ヨット部員の加藤拓人より。このチップは、自動的に消去される…。」

その言葉を最後にチップのデータは消去された。

茉莉香「…。」

チアキ「茉莉香…」

マミ「…」

ミーサ『船長、帰ったら拓人の部屋を見ておきなさい』

茉莉香「うん…」

ジェニー「今日は、解散しましょう」

ジェニーの一言で、全員が解散する。そして茉莉香は家に帰り拓人の部屋に入る。

茉莉香「これか…」

茉莉香は、拓人の机に置いてあったポーチを取る。すると、そこから一枚の手紙が出てきた。そこには、茉莉香と梨理香へと書かれていた。

茉莉香「私と、梨理香さんに？」

茉莉香はポーチと手紙を持ってリビングに下りる。

茉莉香「梨理香さん！」

梨理香「どうしたんだい。そんなに慌てて…」

茉莉香「拓兄の部屋から、私と梨理香さん宛に手紙が見つかったの！」

梨理香「なんだって！早く中身を確認するよ！」

茉莉香「うん！」

茉莉香は梨理香の横に座り、手紙を開けて読み始める。

『茉莉香と梨理香さん... いや、梨理香へ。この手紙を見つけたって事は、俺が船長室に置いていたチップを見つけて観たんだろう。あのチップにはこの話は出来ないからな。茉莉香と梨理香には本当の事を話そうと思う』

茉莉香「本当の事?」

『俺がさつきから梨理香と書いているけど、俺は昔拾われた時の記憶が完全にあつたんだ。』

梨理香「!?!」

梨理香は驚きを隠せなかった。あの時、自分が拓人を拾った時は確かに赤ん坊だったからだ。

『おそらく梨理香は驚いてると思うけど、事実なんだ。なにせ俺は元々この世界の人間じゃないんだ。俺は一度死んでいる。そして、この世界にやって来た』

茉莉香「どういう事?」

『不思議に思わなかったか?茉莉香に渡しているポーチから、いつも出す道具に?普通はそんな道具はこの世界にはない』

梨理香「確かにね。自分の息子にしては驚きを隠せなかった事は多いね」

梨理香も納得する。

『だから俺はあの時に家族と言ってくれた茉莉香と梨理香にこの話をすることに決めた

んだ。俺は二人が大好きだからな♪』

茉莉香「もう……拓兄ったら／＼／＼」

梨理香「ホントにね／＼／＼」

二人は拓人の言葉に顔を赤くしていた。

『だから二人とも心配するな。俺は必ず帰ってくる。大切な人が待っている場所にな。だから、梨理香と二人で俺の帰りを待っていてくれ』

茉莉香「……」

梨理香「……」

二人は手紙を読み終わって黙っていた。

茉莉香「私信じてるよ！拓兄の言葉を……」

梨理香「そうだね……アタシももう少し若く魅せなきゃね♪」

茉莉香「えっ？まさか梨理香さん……」

梨理香「茉莉香にも負けないよ？」

茉莉香「こつちこそ！海賊は奪わなきゃね」

何故か親子の間で、拓人争奪戦が繰り広げられていたのであった。

今度は映画の話へ…

新たな冒険へ

あの事件から時が経ち、私は、高校2年生最後の春休みを満喫していた。今現在も拓兄は見付かっていない。それでも、私は信じている。拓兄はまだ何処かで生きていると…そして、私は今ヨット部で新入生歓迎の準備に追われていた。

—————

ピピピピピピ

目覚ましが鳴り響く。それを止めた茉莉香

茉莉香「んゝゝよし！」

茉莉香は起きて着替えてリビングに下りる。

梨理香「どうしたんだい？春休みだろ？」

茉莉香「そうだけだね。今新入生歓迎会の準備があつてね。昼まで寝ていたいのはやまやまなんだけど。これから新歓の準備をして、夕方から弁天丸でおし、ご、と♪ハム…最近不景気っぽくてね。しっかりやらないと」

梨理香「大変だね。ま、しっかりと頑張りな」

茉莉香「それじゃあ行ってくるね」

梨理香「いつてらっしゃい」

茉莉香「うん♪拓兄、行ってくるね」

茉莉香は写真に写っている拓人に声をかけて出ていく。そして白鳳学院のヨット部に到着する。中では既に部員と引退した3年生が集まっていた。

リン「さてと…どうやって新しい部員を勧誘出来るか。んゝ折角オデット二世があるし、あれは戦艦並の電子戦やレーダーがあるしな。なんせオデット二世の電子戦は戦

艦並だ！これ使ってなんにか出来ないかな？」

ハラマキ「何かって、なんですか？」

リン「例えば、行方不明になった船を捜して、宝探し！！ヨット部にいながらトレジャーハントも出来る！！」

茉莉香「何を言ってるんですか！！って言うか、何で新入生の勧誘の話がオデット二世の話になるんですか？それに先輩達……」

リン「大丈夫だ。宇宙大学の入学式は夏だから、まだ余裕だ！」

アスタ「私達は近いし」

茉莉香「全く……」

グリュール「リン先輩達も他の皆様も、心配してくださっているんですよ。このヨット部を」

グリュールが茉莉香に説明する。

茉莉香「そうけど……っと、そろそろ行かないと！後はホームページの更新と、オデット君のクリーニング。それに模型も完成させといてね。後は……」

リリイ「大丈夫だよ茉莉香♪」

ハラマキ「後の事は、私達に任せて！！」

茉莉香「それじゃあ、お願いね♪」

一同「いつてらっしゃい」

茉莉香は、ヨット部を後にして弁天丸に向かった。

茉莉香は何時ものように船長服に着替えてから、ブリッジに向かう。

茉莉香「皆おはよ〜」

ミーサ「お早う茉莉香。そうそう、ついさつきだけど、保険組合から仕事のキャンセルが来たわ」

茉莉香「えく!?なんで!!どうして!!」

ミーサ「詳しい事は、シヨウさんから聞いて」

ミーサは、保険組合のシヨウに通信を繋ぐ。

シヨウ『こんちはく♪いやくホントに申し訳ない!先方が一方的にキャンセルしてきてさ』

茉莉香「そんなく…前までは、迅速快速な弁天丸だつて言つて下さつてたじゃないですか」

シヨウ『それがさ、今亜空間が危険な状態で、超光速跳躍が出来ないからさく。やつぱりすぐに運んでくれる所に移つちやうんだ。はつきり言つて、運が悪い!!』

茉莉香「えく!?…何か納得いかないく」

シヨウ『その仕事はキャンセルになったが、代わりの仕事を用意した。その仕事は、君の得意な営業シヨウだ!そんなじや頑張つてね♪』

ミーサ「保険組合から詳しい情報が来たわ。えくつと、今回営業する船は、豪華客船ビギン・ザ・ビギン号」

茉莉香「…ぶく!やつぱり納得いかないく。何でキャンセル?今週だけで3件キャンセルよ?」

ミーサ「その代わりに、別の仕事を回してもらったじゃない？」

茉莉香「なによ：：私抜きで勝手に話を進めてた癖に：：クルーの迅速な判断に感謝」

茉莉香はミーサからもらったデータを確認する。

茉莉香「あつ！このツアー、ジェニー先輩の会社が主催してるんだ♪」

茉莉香はそのまま、乗っている顧客名簿を確認する。すると、一人の名前に目を止める。

茉莉香「これって：：」

ピーピー

クーリエ「その先輩から通信入ってます」カタカタ

茉莉香「こつちに廻して」

茉莉香はクーリエから、通信を受けとる。

ジェニー『お久しぶりね茉莉香さん。そろそろ頃合いだと思つて連絡させてもらったわ』

茉莉香「お久しぶりですジェニー先輩。今回はありがとうございます♪」

ジェニー『仕方ないわ。今はうちも保険組合も不景気ですしね。お互い助け合わないと。だから今回の営業は貴方達にお願いするわ』

茉莉香「お願いします。」

ジェニー『ええ♪』

茉莉香「おほん：．それでジェニー先輩、少しオプションを変更したいんですが」

ジェニー『オプション？』

茉莉香「はい！オプションです!!」

茉莉香はいつたい何をしたいんだとか：．．．そうこうしている間に、ビギン・ザ・ビギン号に到着する。

—————

一方、豪華客船ビギン・ザ・ビギン内では、一人の少年がスーツを着た男達に追われていた。その男達は、少年が泊まっている部屋に入る。

男1 「いないぞ？」

男2 「勘づいて逃げたか……」

男3 「次はパーティーホールだ。行くぞ」

男達はパーティーホールに向かう。そこには既に先程逃げてた少年が紛れ込んでいた。

?? 「ここまで来れば…… あっ!？」

パーティーホールにやって来た男達を見つけて、更に人混みに紛れる。しかし、男達は連携し少年を取り囲む。すると、パーティーホールの明かりが消える。そこから館内放送が流れる。

茉莉香『こちら弁天丸。その船はもう既に我々の支配下にあります。無駄な抵抗は止めて貢ぎ物を用意して待っていて下さい♪』

それを聞いた観客は歓声を上げる。男達は動き回る観客が邪魔をして、少年に近付け

ずりにいた。少年はそれを見て、更に奥に進んでいく。すると、一人の男が少年に声をかける。

?? 「少年、弁天丸はあの扉から出てくるぞ」

?? 「えっ!?! 貴方は?」

?? 「今は気にするな。それよりも、早く向こうに行くんだ」

?? 「は、はい! どなたか知りませんが、ありがとうございます!」

少年は男に礼を言い走っていく。

?? 「後は茉莉香が何とかするだろ?」

男はそう言うのと、扉が開いた方を見詰める。

茉莉香「乗客の皆様、弁天丸船長の、キャプテン茉莉香です。この船は、既に弁天丸が乗っ取っていますので、手荒な真似は控えてください。大人しくしていれば、皆様の安全な体と、海賊に教われたと言う自慢話を持ってお帰りいただけます♪」

茉莉香が何時もの様に海賊業務を進める。すると、証明が先程に少年を照らす。

茉莉香「亜空の流れ。その果ては何色か:..」

?? 「!?!」

茉莉香「海賊が来たのに騒がないこの少年:.. なんと面白くない」

茉莉香はそう言いながら、少年に近づく。それに気づいた少年も話にのる。

彼方「やい海賊！周りの人に手を出すな！どうしても出さなら…：僕を人質にしろ！」

茉莉香「いいだろう！この少年に免じて、皆さんの持ち物は奪わない事にしましょう。ですが、この人質になった少年への貢ぎ物でしたら、ありがたく頂戴致します♪少年、名前は何？」

彼方「無限彼方…：」

男1「クソツ！余計な事しやがって…：」

??「余計な事か」

男2「だ、誰だお前!？」

??「悪いけど、悪人に名乗る名前は生憎持ち合わせてない。」

男はそう言うと、男達を気絶させた。

??「取り敢えずこれでひとまず安心か。後はしっかりとやりやれよ?」

男はそう言うと、パーティーホールを後にした。

—————

その頃弁天丸は…

クーリエ「弁天丸後方にタッチダウン反応確認!!今所属艦を調べてる!」

百眼「敵艦から高エネルギー反応!!」

クーリエ「敵艦の所属を確認。後、その船から緊急通信」

茉莉香「繋いで」

茉莉香が通信に出ると、軍服を着た男が映る。

艦長『こちらは、ミラ星系軍のギルバート・ネツケル大佐である。君達のやっている行為は、犯罪に加担しているのだ!!今すぐ停戦し、そこにいる人質を開放しろ!』

クーリエ「識別完了。アークミスト社製の軍艦。ミラ星系軍よ」

茉莉香「ミラ星系軍の艦長さんが、わざわざこんな所まで来られるなんて」

艦長『能書きはいい、そこにいる少年は無事なんだな?』

茉莉香「はい、無事ですすよ?」

茉莉香が、艦長との話を長引かせてる間に、クーリエがミラ星系軍の艦長を調べてくれた。

クーリエ「出たわ。ギルバート・ネッケル艦長。でも残念ながら本人は只今休暇中。ホームページに載っている写真とは大違いね」

偽艦長「つく…」

茉莉香「あら? あらあら? ミラ星系軍の艦長さんが、宇宙海賊をご存知無い? 我々は、軍にのっとり海賊業務を行っている! 私掠船免状を押し頂いて! 宇宙海賊船弁天丸、海賊絶賛営業中!! 偽者の言葉は聞きません。それでは♪」

茉莉香はそう言い放ち、通信を切る。

茉莉香「そのまま超光速跳躍!!」

一同「了解!!」

弁天丸は見事偽物のミラ星系軍から逃げた。

百眼「亜空間に今のところ異常なし」

茉莉香「ふく… なんとかあったか」

彼方「あの…」

彼方が茉莉香に質問しようとした時、警報が鳴り響く。

茉莉香「どうしたの!？」

百眼「亜空間に異常発生!!」カタカタ

クーリエ「なんだか分からないけど、進路を塞ぐように爆発が起きてる!」

弁天丸の周りで爆発が起きて、小さい柱や塗装が剥がれる

茉莉香「状況は?」

三代目「まだ今のところ細いアンテナが何本か折れたり塗装が所々剥がれてる!!」

ど、これ以上ダメージを受ければまずい!!」 p i p i p i

ケイン「ルカ、別のルートは?」

ルカ「ここより200潜れば、今は使われてない別の空間に移動出来るわ」 p i p i

p i

茉莉香「よし：． それじゃあ潜りましょう!!」

ケイン「了解!!」

百眼「ルカ!!もう少し詳しい座標と速度をくれ!!」カタカタ

ルカ「もう送ってる」 p i p i p i

シュニツツァー「全艦に通達。これより別の亜空間に入る。総員直ちに隔壁の厚い所

に避難せよ」

百眼「再計算終了！ケインいいぞ！！」

茉莉香「船内対衝撃防御！！行くわよ皆！！」

一同「了解！！」

弁天丸は亜空間の下に潜り込む。

百眼「速度2000…4000…跳躍速度の5600に到達！」

一同「ふ…」

彼方「あつ…うっ…」

茉莉香「彼方君!?!」カチャカチャ

茉莉香が慌てて彼方に近寄る。

茉莉香「もう安心して。そろそろ終わりだから」

彼方「終わり？」

するとアラームがなる。

ミーサ「は…い！今日のお仕事は終わり」

茉莉香「ふ…、何とか間に合ったか」

彼方「あの…」

茉莉香「私は海賊の前に学生♪後のお仕事は、君をベットまでつれていくこと」

そうやって茉莉香が彼方に手を伸ばす。それを彼方は払い除ける。

彼方「馬鹿にするな！お前達もあいつらと一緒にだ！結局は僕を…」

彼方はそう叫んでたが、途中で気を失う。

ミーサ「疲労ね。それに宇宙酔いも少し。随分と気を張っていたみたいね」

茉莉香「そっか…」

そして茉莉香は彼方を背負い、そのままベットに連れていったのであった。翌日、彼方は目を覚ます。

彼方「…ここは？」

知らない天井を見上げて手を伸ばす。すると、横から声が聞こえる。

茉莉香「ううくん…」

彼方「…え!?うわく!!」

彼方は慌ててベットから飛び出る。すると、クリントが叫ぶ。

クリント「カナタク!!オハヨウ!カナタク!!オハヨウ!」

茉莉香「ああ、お早う。眠れた？」

彼方「はい…あの、ここは？」

茉莉香「あくここ?海の明星に着いても彼方君中々起きなくてね、そのまま連れて来ちゃった」

彼方「いえ、ですからここは…」

もう一度同じ質問をしようとする、部屋の扉が開かれる。やって来たのはグリユーエルだった。

グリユーエル「お早うございますお二人とも。よく眠れましたか？」

茉莉香「お早うグリユーエル。いい目覚ましのお陰でね♪」

クリント「カナタ〜!!オハヨウ！」

グリユーエル「ふふっ、朝食の準備が出来ますのでどうぞ」

茉莉香「やった〜♪」

茉莉香は着替えてグリユーエルの後を追い掛ける。当然その時は、彼方は別の部屋にいました。

## 真打ち登場!?

チアキが茉莉香の元に向かってから5分後。男は新奥浜空港に降りていた。

?? 「さて、まずは保険組合に連絡を入れるか」

男はそう言って、側にあつた公衆通信機で連絡する。

シヨウ 『こちらハロルド保険組合のシヨウです!』

?? 「ハロルド保険組合に仕事の依頼をしたい」

シヨウ 『そう言うのは大歓迎です♪で、仕事の内容は?』

?? 「弁天丸のボディガードをお願いしたい。ブラスター梨理香に…」

シヨウ 『ほく… あのブラスターに仕事を依頼ね。それも弁天丸のボディガード

に』

?? 「無理か?」

シヨウ 『いや、今はブラスターは何でも屋だからな。最近不景気だし、快く引き受

けると思うぜ?』

?? 「なら頼む」

シヨウ 『依頼内容は確認した。後は… お前さんが誰かだが…』

?? 「…」

男はシヨウの一言で黙る。

シヨウ『さすがに名前を聞かないと、依頼は受けられないな』

?? 「… そうだな。なら、こう伝えてくれ。弁天丸副船長と縁があると…」

シヨウ『!?!』

?? 「頼んだぞ」 p i

男はそう言って通信を終える。

?? 「さて、次は…」

男は鞆を持って空港を出ていった。所変わって白鳳学院のヨット部。ここでは、ヨット部がチアキに対して抗議していた。

アイ「何で茉莉香先輩に連絡したら駄目なんですか？」

チアキ「茉莉香の事だし、こうなる事も見込んでいる筈よ」

アイ「で、でも！私は何かしたいです!!」

ヤヨイ「私もです。お邪魔でなければ…」

小林丸「私は茉莉香の先輩だ…」

リリイ「私はタメだ！」

ウルスラ「タメタメ♪」

ナタリア「私は、可愛い後輩でっす!!」

一同「あははは♪」

ナタリアの一言で周りに笑いが起きる。それをチアキが黙らせる。

チアキ「何も無い!! 貴方達が出来る事は、もうないわ。ここからは……海賊の仕事よ」  
チアキが皆にそう言い放つ。すると、グリユンヒルデが言う。

グリユンヒルデ「それでも……私は、私達は茉莉香達が心配なんです!」

アイ「わ、私もです!」

それを皮切りに、皆が自分もと言い出す。

チアキ「ふく分かった。そう言えば、貴方達は既に海賊だったわね」

リリイ「それじゃあ……」

チアキ「ええ、準備して行くわよ!」

一同「おっ!」

チアキの一言で全員に気合いが入る。そして弁天丸を追い掛ける準備をするのだ  
た—————

一方弁天丸は、無限博士がいた彗星に接近していた。

茉莉香「何あれ!？」

クーリエ「戦艦ね。微弱だけどトランスポンダーが発信されてる。船名……無限工房」

彼方「父さんの船だ！僕も住んでいました」

三代目「これに近づくのか？」

茉莉香「近づかないと、お宝にはありつけないわよ」

ルカ「遠くから見れば美しい。でも、近づけば……」

百眼「強風予想出来た。予想外な事が起きなければ……これで行ける筈だ！」カチツ

三代目「駄目じゃん!!」

茉莉香「弁天丸、エアポートを見つけてドッキング！乗り込むわよ！」

茉莉香達は、ドッキングして無限工房に乗り込む。茉莉香達が乗り込むのを確認する

と、弁天丸は通信が出来るギリギリで待機する。

茉莉香「それにしても、彼方君凄いに住んでたんだね」

彼方「よく父さんに色々な所に連れていかれました。この場所は潜りやすいとか」

茉莉香「潜りやすい?」

百眼「なるほどなく。この場所は船乗りには向かないが、ダイバーには最適だな」  
p  
i p i p i

百眼は話ながらルートを確認する。そして一番奥に到着する。そこにはランプ館で会ったスカレットと、イグドラシルグループの護衛と出会った。

茉莉香「やつぱり会いましたね」

スカレット「…これが無限博士が作った、そして最後の作品…」

茉莉香達の横にある巨大なロボット。

茉莉香「貴方達の目的はなんですか?」

スカレット「それはこれよ?」

茉莉香「いいえ、貴方達はこれをどうするつもりなんですか?」

スカレット「知らないわ。初戦私は何でも屋ですもの。それより、また撃ち合う? 海賊は危険な事はするけども、無駄に命の危険性が起きる事はしないはずよね?」

茉莉香「…ツク」

茉莉香は、味方を見る。すると一人が茉莉香に向かって親指を立てる。それを見た茉莉香と彼方。

彼方「あなたの… あなたの名前を教えてください!!」

スカーレット「聞いてどうするの？」

彼方「父さんの仲間に、一人だけ女性がいました！」

スカーレット「!?」

彼方の言葉に動揺するスカーレット。すると、靴からフリントが飛び出す。

フリント「カーリー！カーリー！」

フリントはそう叫びながらスカーレットの上を通過して、ロボットの所に飛ぶ。近づ

くとフリントがロボットに吸い込まれる。

彼方「フリント！」

すると、ロボットを支えていたのが外れて船が大きく揺れる。

茉莉香「いたたた…」

彼方「…!!」

隙を見て彼方がロボットを指して走る。茉莉香も追い掛けようとしたが、敵に発砲されて近づけない。スカーレットが後を追う。すると、上から誰かが降りてきた。

??「ここから先は行かせないよ！」

あらわれたのはなんと梨理香であった。

茉莉香「梨理香さん!？」

梨理香「保険組合から依頼があつて助けに来たよ! 弁天丸のボディガードとしてね

♪

茉莉香「え〜!？」

茉莉香は驚きを隠せなかった。しかし、スカーレットは銃を撃ってくる梨理香に対して突っ込んでいく。

梨理香「肉弾戦かい。相手しようじゃないか!」

梨理香も銃を捨てて肉弾戦で対抗する。お互い一步も譲らない。

茉莉香「梨理香さんって、あんなに強いんだ…。」

梨理香の戦いを見て呆気にとられる茉莉香。すると、無限工房が崩れ始める。

茉莉香「彼方君!!」

百眼「船長! あれは亜空間でも壊れない! 寧ろ俺達がヤバイ!!」

シュニツツアー「早くゲートに行くぞ!」

シュニツツアー達に言われ茉莉香はその場を離れる。一方、外で待機してる弁天丸

は—————

ミーサ「ケイン、なんとか工房に近づけない？」

ケイン「無理だ！相手が下手くそ過ぎて逆に近づけない！」

クーリエ「差し詰、子供のグルグルパンチね。ん？敵艦から何か出てくる！」

クーリエが言う何か。それはスカーレット達が乗っているフラウウエンという機体だった。

スカーレット「フラウウエン隊、今から博士の機体を追うわよ！」

スカーレットがそう言って、無限彼方を追い掛ける。

クーリエ「三隻とも亜空間に入ったわ。： また!?!今度は弁天丸後方にタッチダウン  
反応！」カタカタ

ミーサ「今度は何！」

クーリエ「これは… ええ!？」

ミーサ「どうしたの？」

ルカ「白と青が入り交じる…。」

クーリエ「あらわれたのは… オデット二世とバルブルーサ!? いや、バルブルーサオデット二世?」

ケイン「おいおい」

すると、オデット二世は電子戦を開始する。それと同時にバルブルーサから主砲が発射される。

リン「相手にとって不足なし!! 行くぞ!」

一同「お〜!」

チアキ「出力を7割に維持。バルブルーサとの接続も確認」

ヤヨイ「出力安定してます」

チアキ「オヤジ! エンジンと主砲は任せたわよ!! 私達は電子戦に専念するから!」

ケンジョー『おう! 今のバルブルーサは、オデット二世のブースターだ! 船長はチアキ、お前だ! だからしつかりやりな!!』

チアキ「喜んで!!」

ケンジョー『ハハハ! いいね〜。楽しいね〜! オラ〜!!』

チアキ「オラ〜!!」

ケンジョーとチアキが叫ぶ。そんな光景を見ている人物。

??「つくづく思うぜ。やっぱり親子だな…」

そう言っていた。――

私達は弁天丸に戻り、急いでブリッジに向かう。

茉莉香「お待たせ!! って言うか、オデット二世とバルバルーサ!?」

クーリエ「正確には、オデット二世とバルバルーサが合体したものよ」

茉莉香「あはは…」

梨理香「茉莉香の友達も、中々個性的だな♪」

茉莉香は苦笑いしか出来なかつた。すると、オデット二世から通信が入る。

茉莉香「チアキちゃん？」

チアキ『ちゃんはいい! こっちは引き受けるから、急いで追いかけて!!』

グリユンヒルデ『茉莉香さんお願いします!』

リリイ『茉莉香ごめんね』

チアキ『こら！通信中だ!!』

茉莉香「皆ありがとう：：」

茉莉香は嬉しくて微笑んだ。

クーリエ「船長！再び弁天丸の後方からタッチダウン反応!!」

リン『此方でも確認した!』

茉莉香「今度はなんなの？」

クーリエ「ただいま解析中：：えっ!?これって：：」カタカタ

リン『クーリエさん：：この反応って』

クーリエ「ええ：：」

クーリエとリンは驚きを隠せなかった。

茉莉香「どうしたのクーリエ？」

チアキ『先輩どうしました?』

リン『何て説明したらいいんだか：：』

クーリエ「見てもらった方がいいかもね。百眼!」カタカタ

百眼「あいよ。モニターを出すぜ」カタカタ

百眼がメインモニターを映す。そこに映っていたのは：：

茉莉香「あれって!？」

チアキ『あの機体は…』

茉莉香とチアキは、その機体に見覚えがあった。茉莉香だけではない。弁天丸の全員は勿論、リンやヨット部のメンバーも知っていた。

茉莉香「間違いない！あれは拓兄が乗ってた機体だよ!!」

チアキ『でも、よく見ると似てるけど少し違うわ』

ミーサ「そうね…」

茉莉香達がそう言っていると、弁天丸とオデット二世に通信が届く。

クーリエ「船長、その機体から通信が来てるわ」

リン『こつちにもだ』

茉莉香「…」

チアキ『…』

茉莉香とチアキはどうするか悩んでいた。確かにあの機体は拓人が乗っていたのに似ている。しかし、似ているだけで実際には別の人物が乗っているかもしれない…

茉莉香「…とにかく回線開いて」

クーリエ「了解」カタカタ

クーリエとリンが、全員に聞こえるように回線を開く。

??『弁天丸聞こえるか?』

茉莉香「こちら弁天丸。貴方は誰ですか？」

??「おっと、モニター切つてたままだった。すぐに映す！」

相手がそう言つてモニターをオンにする。すると、そこに映っていたのは、帽子を被つてサングラスをかけている男性だった。

茉莉香「貴方は？」

??「おいおい、忘れたのか？」

チアキ『すみませんが、貴方とお会いしたことはない筈です』

チアキの言う通りである。皆それぞれこの人物は知らなかった。

??「そうか。なら、これはどうだ？」

男はそう言つて端末を取り出す。そこから音が流れてきた。それは、チアキには恥ずかしいものであった。

『声つをあつげろ〜♪時の〜声を♪俺達やく誰の〜助けも〜かり〜ぬが♪食えね〜奴等にや〜。』

チアキ『ぎやく〜止めろ〜!／／／』

??『ハハハハッ!チアキ顔真つ赤だぞ?』

チアキ『お前〜!』

茉莉香「あははははは。でも、何故貴方がそれを持っているんですか？」

?? 『まだ分からないか…』と云うかこの姿じゃ分からないか』

男はそう言つて、被つている帽子を取りサングラスを外す。そして顔を上げると、一同は驚きを隠せなかつた。その人物とは…

?? 『これで分かるだろ？ 久し振りだな皆』

茉莉香 「えつ…」

ミーサ 「嘘…」

クリエ 「…」

ルカ 「… 幽霊？」

チアキ 『本当に…』

リン 『夢じゃないよな？』

サーシャ 『… ギューッ』

ハラマキ 『サーファ… いふあい《サーシャ… 痛い》』

ヤヨイ 『… グスッ』

?? 『おいおい驚き過ぎだろ？ 後ルカ！ 聞こえてるぞ！』

梨理香 「本当に… お前なのかい？」

?? 『ああ。んっん、弁天丸副船長で茉莉香の兄で加藤梨理香の息子、加藤拓人だ』

その正体は行方不明になっていた、加藤拓人であつた。少し大人っぽくなつてはいた

が、間違いなく本人だった。

茉莉香「本当に……」ポロポロ

チアキ『拓人さん……』ポロポロ

リン『生きて…… たんだな…… グスッ』

ミーサ「お帰りなさい……」ポロ

茉莉香達は涙を流していた。今まで自分達が、ずっと…… ずっと待ち続けた人物。

拓人『ああ、ただいま。心配かけて悪かったな』

茉莉香「…… うん！」

チアキ『いいんです！』

リン『ああ！お前さえ生きてたなら……』

拓人『ミーサ、ルカ、クーリエ、百眼、ケイン、三代目、シュニツァー、それにヨツ

ト部の皆も心配かけたな』

一同「副船長!!」

ヨツト部『拓人《先輩》!!』

拓人『さて、再会はこの件が終わってからだ！急いで追い掛けるぞ!!』

一同『了解!!』

拓人が全員に命令する。皆それが嬉しかった。元に戻った事が何より嬉しかった。

茉莉香「拓兄、亜空間に入るから弁天丸に掴まって!!」

拓人『心配ない。ザンダクロスを改造して亜空間も跳べる用にした。そのままついていく』

茉莉香「分かった!さく皆、行きましよう!!」

俺達は亜空間に入り彼方を追い掛ける。前方に発見し茉莉香が通信する。

茉莉香「彼方君!!聞こえる? 弁天丸はアドヴァジールの後方にいるわ! 進路は彼方君から10度ずれた所よ!」

彼方『アドヴァジール、上げれる?』

茉莉香「えっ?」

彼方がそう言うと、アドヴァジールが弁天丸に向かってくる。

拓人『よう少年久し振りだな?あの客船以来だな?』

彼方『あの客船以来って、もしかしてあの時僕を助けてくれた...』

拓人『覚えてたか。俺は加藤拓人、茉莉香の兄だ』

彼方『あの時はありがとうございます!本当に助かりました拓人さん!!』

拓人『別にいいさ。お前はそのまま弁天丸を通りすぎる!』

彼方『分かりました!』

彼方はそう言うと、そのまま弁天丸を通り過ぎる。それと入れ替わり、茉莉香が合図

する。

茉莉香 「全主砲発射!! てく!!」

弁天丸から主砲ミサイルが容赦なく発射される。

拓人 『こつちも行くぞ! 全弾持っていけく!!』 ガガガガガ

俺も負けじと、ザンダクロスXに備え付けてる銃を撃つ。見事に2体命中し撃破するが、スカレットが乗っている機体は回避していた。

拓人 『逃がしたか!!』

茉莉香 「いいよ拓兄。それより彼方君!!」

彼方 『茉莉香さん、僕はこのまま潜っていきます。父さんが見せたかったものを見に行きます』

茉莉香 「決めたのね」

彼方 『はい...』

茉莉香 「行つてらっしゃい。自分で決めたなら...」

彼&茉 『自分で進んでいく!!』

彼方はそう言うのと、さらに亜空間潜っていく。俺は弁天丸に戻る。

拓人 「ただいま茉莉香...」

茉莉香 「拓兄!!」

茉莉香は俺に勢いよく抱きつく。俺も優しく抱き締める。その空気を三代目が破る。

三代目「もう無理だ！ケイン!!」

ケイン「弁天丸、上昇する!!」

ケインが弁天丸を上昇させる。よく見ると、エンジンモニターに《さあ、逝こうか》と出していた。漢字が違う！

拓人「悪かったな。ミーサもクーリエもルカもな」

俺がそう言うのと、女性陣が俺に集まる。

梨理香「けど、よく無事だったね♪それに、少し背も伸びたかい？」

拓人「実はさ、俺がいた惑星なんだが、食べ物だらけの惑星と地球と言う惑星でな。そこはこの辺りと違って、時間の流れが違うんだ。此方では大胆半年だが、向こうでは2年たっている。だから俺は現在二十歳なんだ。そして、その惑星で食べた物が俺の身体を変化させて、前より背は伸びて多少筋肉がついたんだ。それに、面白い技もたくさん取得出来たしな♪後変な青い狸にも会ったぞ？」

茉莉香「そうなんだ。それじゃあ今拓兄はジェニー先輩より年上なんだ」

拓人「そう言う事だ。シヨウさんも梨理香に伝えてくれたみたいだしな」

梨理香「あんただだったのかい。シヨウから『依頼人は、副船長と縁がある人物』とか言ってたからな。お前なら納得だ♪縁処か、本人なんだからな」

そんな会話をしていると、亜空間が次々と航路が開かれている。

百眼「すげ〜：．．．なんだこりゃ。差し詰、亜空間の新装開店ってか？」カタカタ  
そしてオデット二世から通信が入る。

百眼「オデット二世から通信。アドヴァジーレからも通信が入ってる。」

茉莉香「繋いで」

グリユンヒルデ『彼方さん。聞こえますか？ヒルデです』

彼方『こちら彼方。亜空間の底は綺麗ですけど、助けてもらえると助かります』

茉莉香「こちら弁天丸！もう向かってるよ♪」

彼方『うわ！もう来た!?!』

こうして亜空間が色々と開放された。彼方は俺達に出ると言って姿を消した。  
そして、ジェニーとグリユールがイグドラシルを買収した。

拓人「やれやれ：．．．二人は相変わらず恐ろしいな」

茉莉香「あはは：．．．ま、拓兄も帰ってきてなにもかも元に戻ったし。もうじき3年生  
になります、これからも学生と海賊を掛け持ちさせていただきます！さく皆、行くわ  
よ！」

一同「海賊の時間だ〜!!」

## 番外・タイムマシン 皆で未来の世界へ！

拓人「ん〜！たまにはタイムマシンも整備しないとな」

拓人はそう言って机の中に入っていった。そして整備も終わり机から出てくる。すると丁度机から顔を出した時に茉莉香が珈琲を持ってきた。

茉莉香「拓兄〜、珈琲はいったよ」

拓人「サンキュー茉莉香」

茉莉香「拓兄、何で机から顔だけ出てるの？」

茉莉香は質問する。

拓人「茉莉香は知らなかったな。この机の引き出しの中には、タイムマシンがあるんだ。その整備をしてんだ」

茉莉香「タイムマシン!? 凄い！本当にあるんだ！」

拓人「まあな。最近約10人前後乗れるタイプに買い換えてな。それで整備をしてんだ」

茉莉香「へ〜」

拓人「ま、暫くは乗ることもないし、整備しとかないとな」

拓人は珈琲を持って部屋を出ていった。

茉莉香「タイムマシン……」

茉莉香はそう呟いていた。茉莉香がそう言う時は、何かしら悪いことを考えているのだ。そして翌朝、それが現実になる。

茉莉香「……もしもしミーサ？」

ミーサ『どうしたの茉莉香？今日は仕事は休みよ？』

茉莉香「ちよつと面白いことがあつてね。至急にファミリーを呼んで私の家に集まって。勿論拓兄には内緒で」

ミーサ『一体何を考えてるの？』

茉莉香「着いてからのお楽しみ♪」

ミーサ『分かったわ』

ミーサはそう言つて通信を切る。そして夕方、ファミリーが加藤家に集まる。

茉莉香「ところで拓兄は？」

ミーサ「拓人には、買い物頼んでるの♪だから帰ってくるのはもう少しかかるわ」

茉莉香「そっか」

チアキ「それで茉莉香、皆を集めてどうしたの？」

チアキが今回集まった理由を聞く。

茉莉香「実はね、昨日拓兄から聞いたんだけど、この机の引き出しの中にタイムマシンがあるんだ♪」

グリューエル「タイムマシンですか？」

茉莉香「うん♪」

ジェニー「そのタイムマシンがどうかしたの？」

茉莉香「えへへ♪そのタイムマシンで10年後の未来へ行ってみない？拓兄や私達を見に行きたいんだ」

リン「面白そうだな♪」

茉莉香「それじゃあ出発！」

茉莉香達はそう言って、拓人のタイムマシンで未来へ向かう。

チアキ「でも、どうやってコレ動かすの？」

茉莉香「ええっと…」

茉莉香は困っていた。いざ出発しようとしたが、動かし方が分からなかった。すると、突然モニターが動きだす。

『行き先をお答えください』

茉莉香「えっと…今から10年後の未来！」

『確認しました。行き先は、現在の世界から10年後の未来へ』

茉莉香「何だか知らないけど、上手くいったしね」

チアキ「ま、結果オーライね」

こうして茉莉香達ファミリーは10年後未来の世界へと向かったのであった。

『到着しました。此方が10年後の未来の世界です』

茉莉香「それじゃあ降りようか」

タイムマシンから降りると、そこにあつたのは10年後の海の明星に到着した。

茉莉香「うわゝ…」

チアキ「10年後と言っても、かなり変わってるわね」

リン「そうだな。さて、それじゃあまずどうするか」

ジェニー「取り敢えず…」

何処かに行こうとすると、ジェニーにぶつかる女の子

??「うわゝ!」

ジェニー「ご免なさいね。大丈夫?」

??「うん♪大丈夫♪」

リン「ならよかった」

すると、その女の子の母親らしき人物がやって来た。

?? 「すみません!うちの娘がご迷惑を」

ジェニー「いいえ、大丈夫ですよ♪」

しかし、ジェニーは母親に顔を見て驚いた。それは相手も同じであろう。

?? 「あなた…もしかして…」

?? 「ジェニーママ、どうしたの？」

一同「ええ〜!」

驚く一同。しかし、更に驚く人物がやって来た。

?? 「おいジェニー、見つかったのか？」

ジェニー(大人)「ああリン、見つかったわ。でも、それより面白いこと人と会ったわ

♪

?? 「面白い？」

ジェニー(大人)「ええ♪」

大人のジェニーが、別の女性に話しかける。すると、先程の女の子がこう言う。

女の子「リンママ、このお姉ちゃん達とお知り合い？」

一同「ええ〜!!」

更に驚く一同。

リン(大人)「あん？」

リン（大人）は、茉莉香達を見る。

リン（大人）「おいおい、昔のアタシ達じゃないか!？」

ジェニー（大人）「そうなのよ♪そう言えば、この時期に皆で行ったわね♪」

リン（大人）「そう言えばそうだったな」

チアキ「あ、あの…」

リン（大人）「どうした？」

チアキ「もしかして、リン先輩達って…」

チアキがリン（大人）達にたずねる。

ジェニー（大人）「チアキさんが思ってる通りよ♪けど安心して、そこにいる全員が、

拓人のお嫁さんだから」

リン（大人）「そうそう♪」

一同「…」

一同は、その言葉に驚きが隠せなかった。

リン（大人）「取り敢えず、家に来いよ。その目で見れば納得するさ」

そう言つて、茉莉香達を自分達が住んでる家に案内するのであった。

ジェニー（大人）「ついたわよ♪」

着くと、そこにあったのは豪邸であつた。すると、中から人が出てきた。

?? 「お帰りなさいジエニーさん、リンさん」

リン（大人）「ただいまグリユール」

グリユール（大人）「そちらの方達は、もしかして…」

ジエニー（大人）「ええ、10年前の私達よ」

グリユール（大人）「やっぱり♪懐かしいです♪ささ、中に入って下さい」

そう言われて中に入る。中はとても広かった。

リン（大人）「取り敢えず、拓人は仕事だし… それ以外の全員を呼ぶか」

リン（大人）はスマホで連絡を入れる。そして10分後、ファミリーが集合した。

茉莉香（大人）「うわ〜♪昔の私ってこんななんだっただ〜♪」

チアキ（大人）「昔の私って、こんなにツンツンしてたかしら？」

ミーサ（大人）「昔は若かったわね〜」

クーリエ（大人）「そうね〜」

ルカ（大人）「ふふっ…」

一同（いやいや、今と全然変わってないから！）

ファミリー最年長の3人の姿を見て、10年前の茉莉香達は全員そう思っていた。

サーシャ（大人）「でも、改めて見るとこうだったね〜」

ハラマキ（大人）「だよね〜」

大人の茉莉香達が、過去の自分達をまじまじと見る。

チアキ「と、ところで拓人さんは？」

チアキ（大人）「拓人さんか。懐かしい呼び方ね」

茉莉香（大人）「だよね。今は私達と一緒に拓人かあなただもんね♪」

チアキ（大人）「ばっ!?!?///」

チアキ「あ、あなた...///」

大人の茉莉香の言葉に、ダブルチアキは顔を真っ赤にしていた。

茉莉香「あはは...ところで、未来の拓兄は？」

茉莉香（大人）「拓人は仕事よ。もうそろそろ帰ってくる筈よ。」

リン「早く見てみたいぜ♪」

リン（大人）「まく慌てるな♪」

それぞれ会話をしていると、別の女の子が慌てて入ってくる。

女の子「ママ〜！」

見た目はミーサそっくりだった。

ミーサ（大）「どうしたの？そんなに慌てて」

女の子「こ、これ！」

女の子は未来のミーサに手紙を渡す。

ミーサ（大）「手紙？」

中を確認する。するとこう書かれていた。

『お前の子供は預かった。返してほしければ、私掠船免状を譲れ！』

一同「!?」

チアキ（大）「子供達をここに集めましょう！誰が拐われたか分かるわ！」

チアキ（大）が叫ぶと、今いる子供達が全員集まった。確かに1人足りない。

茉莉香（大）「そんな…… 亜里香が拐われたわ」

茉莉香「亜里香って？」

ジェニー（大）「茉莉香の娘よ」

サーシャ「そんな……」

茉莉香「助けに行こう！」

チアキ「そうよ！」

ジェニー「茉莉香（大）さんの娘は」

リン「私達の娘でもある！」

茉莉香（大）「皆……」

サーシャ（大）「そう言えば私達はこう言うんだったわね」

リン（大）「よくし！亜里香を救出に行くぞ！！」

一同「おろ!!」

こうして私達は亜里香の救出に向かうのであった。

リン(大)「拓人(大)には連絡を入れてる」

茉莉香(大)「ありがとう」

ジェニー(大)「…ここが指定された場所ね」

茉莉香達は、手紙に書かれていた場所に到着する。そこは、街から少し離れた場所にある工場だった。

茉莉香(大)「亜里香! いるの!!」

亜里香「茉莉香ママ〜!」

犯人「遅かったな。例の物は持ってきたんだろうな?」

茉莉香(大)「ここに入ってるわ。亜里香を話して!!」

犯人「駄目だ。まずはその私掠船免状を渡せ」

チアキ(大)「クツ! 卑怯な…」

茉莉香(大)「…分かったわ」

茉莉香(大)は犯人にむけて歩き出す。

茉莉香(大)「これがそうよ」

犯人「確かに受け取った。なら、お前達全員消えてもらおうか」

男が手を上げると、周りからゾロゾロと男達が出てくる。

リン「汚いぞ！」

犯人「俺は無事に返す筈ないだろ？ハハハハハ！」

高笑いをあげる犯人。しかし、それが運のつきだった。

??「ほく、それが聞けただけで十分だな？」

??「そうだな。これで気にせず殺れる」

犯人「だ、誰だお前達!!」

犯人の言葉に全員が入り口を見る。そこに立っていたのは…

大人組「拓人！」

茉莉香達「拓兄（拓人さん）！」

拓人（大）「待たせたな」

拓人「遅くなった」

チアキ「でも、どうして拓人さんまで？」

拓人「10年後の俺が迎えに来たんだ」

拓人（大）「お前達がこの日に来るのを思い出してな」

サーシャ「そうなんですか」

拓人「さて、役者は揃ったしもう逃げられないぞ！」

拓人達は犯人に詰め寄る。しかし、犯人は驚くべき行動にでた!果たして、その行動とは!次回に続く!!

## 皆で未来の世界へ！後編

拓人達がやって来て追い詰められた犯人は、人質にしていた亜里香の膝を銃で撃ち抜いた。

亜里香「痛いよ〜！」

「ヒヤハハハ！いいぞその叫び声！何て聞き心地がいいんだ！」

茉莉香（大）「亜里香！」

リン（大）「テメエ！あたし等の娘に何しやがる!!」

「何って？拳銃で膝を撃ち抜いたけど？別に死なないんだしいいだろ♪」

犯人はそう言い放つ。しかし、それを聞いた2名の堪堪忍袋の緒が切れた。

ブチッ!!

一同「ブチッ？」

拓人（大）「なく俺、今物凄く秘密道具で誰かを凝らしめたいんだが？」

拓人「奇遇だな♪俺もそう思っていたところだ♪」

拓人（大）「それじゃあ…。」

拓人「やるか！」

拓人(大)「まずは… ウルトラストップウオッチ!」カチッ

それを押すと、両拓人以外は全員的时间が止まった。

拓人(大)「まずは亜里香を茉莉香達の所へ連れていく」

拓人「こいつに相手ストッパーをかけておくぞ?」

そしてウルトラストップウオッチを解除する。

「あれ? 一つの間にか人質がないぞ?」

茉莉香(大)「亜里香!」

亜里香「お母さん!」

「別にいいや♪このままトonzラ… あれ? 動けないぞ?」

拓人「当たり前だ」

拓人(大)「さて、覚悟は出来てるんだろうな♪」

ダブル拓人は物凄くいい笑顔で犯人に詰め寄る。

「あ、あははは… ほんの冗談だよ。だからね、助けてほしいな♪」

拓人「却下だ!」

そのまま犯人を奥の部屋に引きずっていく。そして暫くすると…

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!」

一同「!?」ビクッ

!!!

そこに響いたのは、犯人の叫び声だった。叫び声がなくなると、奥から拓人達が出てくる。

拓人「さて、帰るぞ」

茉莉香「た、拓兄？犯人は……」

拓人（大）「もう二度とこの世界には来れないぞ？」

拓人「だな♪この地平線ロープを着けない限り永遠にあそこから出れないよな？」

一同「……」

その時の顔は、今まで見た悪人より怖かったと茉莉香達は語っていたのであった。そしてこの世界の拓人達の家に戻る。

拓人「さて、お医者さんかばんで亜里香の治療は終わった」

拓人（大）「助かったよ」

拓人「さて、今度がコイツらの説教だな。悪いが俺、部屋を借りるぞ？」

拓人（大）「ああ、俺もコイツらに話を聞かないとな？」

二人の拓人は、それぞれのファミリィを説教するためにそれぞれ部屋に入る。

拓人 side

拓人「さて、言い訳を聞こうか？」

拓人はベッドに腰かけて、正座してる茉莉香達に問い掛ける。

茉莉香「えっと・・・」

拓人「勝手にタイムマシンを使って10年後の世界に来たんだ?」

チアキ「それは・・・その・・・」

拓人「そして挙げ句のはてに、お前らが来て子供も怪我をする事件に発展。どう責任を取るんだ?ん?」

リン「それはだな・・・」

拓人「それは?」

一同「・・・ごめんなさい!」

茉莉香達は一斉に、拓人に向かって土下座をした。

ミーサ「私も軽率だったわ」

ジェニー「ごめんなさい拓人」

それぞれ謝ってくる。

拓人「・・・分かった。お前達はキチンと反省してるようだし、今回の説教はこの辺で終わる。全く、未来の俺が呼びに来なきやどうするんだよ・・・」

すると、部屋の扉がノックされた。入ってきたのは未来の俺だった。

拓人(大)「そっちの説教も終わったか?」

拓人「ああ、どうやらそっちも終わったみたいだな」

拓人（大）「まあな。さて、説教も終わった事だし飯食って帰れよ」

拓人「なら俺も手伝うぞ？」

拓人（大）「なら頼む。調理場はこつちだ」

そして俺達は調理場に行き、料理を作るのであった。暫くして、食卓には物凄い数で豪華な料理が並べられていた。

子供達「すごーい!!」

大人達「久々に本気出したわね・・・」

茉莉香達「だよね〜」

拓人「流石俺だな。腕は鈍る処か上がってるな♪」

拓人（大）「当たり前だ。俺はお前だぞ♪さく食ってくれ」

一同「いただきます♪」

そして皆で楽しく食事をするのであった。何故か、現在と未来の俺の周りに、子供達が集まってまともに食事が出来なかつたのは余談である。そして食事もおわり、いよいよお別れの時。

拓人「んじゃ、そろそろ帰るか」

茉莉香「そうだね」

チアキ「帰りましょうか」

リン「だな」

ジエニー「そうね」

拓人（大）「娘達が世話になったな。また来いよ俺」

茉莉香（大）「また遊びに来てね♪」

チアキ（大）「待ってるわ」

リン（大）「またな♪」

そして俺達はタイムマシンに乗り込んで、元のいた時代に帰ったのであった。

拓人（大）「行ったか」

茉莉香（大）「そうだね」

チアキ（大）「けど、とつても懐かしかったですね」

リン（大）「ああ」

ミーサ（大）「そろそろ戻りましょう」

クーリエ（大）「子供達も待ってるよ」

そして、未来の拓人達も自分の帰る場所に帰っていったのであった。そして、元の時代に帰ってきた拓人達。

拓人「あちやく、定員オーバーか・・・」

タイムマシンが壊れていたのであった。

拓人「しゃあない。無理矢理乗ったしな。丁度いいから更にパワーアップするか」  
茉莉香「ゴメンね拓兄」

拓人「当然、支払いはお前等持ちな♪」

一同「そ、そんな〜！」

拓人「勝手に使ったんだ。自業自得だ」

最後の最後で、茉莉香達は拓人の怖さを身に染みた瞬間であった・・・

## 新たな物語りへ

## のんびりとした1日？

海賊狩りの件から数カ月。4月になり、学生や社会人の新しい旅立ちの日である。

拓人「おい茉莉香！いい加減に起きろ!!」

茉莉香「うう〜ん。後5分・・・Zzzz」

この加藤茉莉香も、3年になり新しい生活が始まるんだが・・・

拓人「・・・俺は起こしたからな。起きないお前が悪いんだぞ」

俺は前もって昨日の晩に言った事を実行するため、ポーチからカラオケマイクを取り出す。

拓人「それでは・・・パクリ」

飴を舐めて準備完了。







あつた。

拓人「ヨシツ！3連は大丈夫みたいだな」

これが俺が新しく覚えた技の1つである。

拓人「けど、まだまだあの人には遠く及ばないな」

俺の師匠である人物の事を思い出していた。すると、上着に入れてた携帯が鳴る。

拓人「おっと！そろそろ時間か」

俺は上着を持つと、どこでもドアで空港に向かった。そこから、シャトル乗り込み弁天丸に向かうのであつた。

拓人「おはよう」

『おはようございます』

拓人「今日の依頼は？」

俺は、今日の仕事内容を確認する。

ミーサ「今日は、森の明星に荷物を届けて、そこから副船長の料理講座ね」

俺達は海賊だが、何で俺の料理講座が仕事になるんだ？それで金は貰えるからいいけ

どさ……

拓人「了解だ。なら、夜7時には帰れそうだな」

ミーサ「そうね」

拓人「なら、まずは積み荷を森の明星に届けるぞ！」

『了解!』

そして弁天丸は、超高速跳躍に入るのであった。積み荷も順調に目的地に運び、俺の料理講座も終了した。家に帰ると、既に茉莉香が帰ってきていた。

茉莉香「お帰り拓兄」

梨理香「帰ったかい」

拓人「ただいま茉莉香、梨理香さん」

梨理香「もうすぐ出来るから、先に着替えてきな」

茉莉香「今日のポトフは、私が作ったんだよ」

拓人「それは楽しみな」

俺は1度部屋に戻って着替え、すぐに下りてくるのであった。

拓人「それじゃあ、この世の全ての食材に感謝を込めて・・・いただきます」  
「いただきます」

久々の家族揃っての夕食だ。

拓人「おっ♪いい具合にダシが染み込んでるな♪」

茉莉香「よかった♪」

梨理香「ポトフの作り方も、随分と上達したじゃないかい」

茉莉香「エヘヘ♪でも、まだ梨理香さんや拓兄には敵わないよ」

梨理香「だろうね。アタシはともかく、拓人には届かないさ」

拓人「それでもないでしょうに」

会話をしながら楽しく食事をする。食べ終わり、食後の珈琲を飲む。

拓人「それでどうなんだ？ 部員は集まりそうなのか？」

茉莉香「どうかなく？ ウルスラが、無駄に頑張っちゃったからね」

拓人「オデット君着てか？」

茉莉香「うん」

俺は、オデット君を着たウルスラを思い浮かべるのであった。

拓人「まくなんだ、頑張れ」

茉莉香「アハハ・・・」

俺の言葉に、苦笑いする茉莉香であった。だって、そう言うしかないだろ！

拓人「チアキも、完全に白鳳学院に転入したんだろ？」

茉莉香「うん♪卒業も一緒に出来るからね♪」

物凄く嬉しそうに話す茉莉香。

拓人「なら、よかったじゃないか」

珈琲を飲みながら、俺も素直に喜んだ。時計を見ると、22時を過ぎていた。

拓人「そろそろ寝ないと、また起きれなくなるぞ？」

茉莉香「はくい」

返事をして、椅子から立ち上がる。

茉莉香「それじゃあ拓兄、梨理香さん、お休みなさい」

梨理香「ああ、おやすみ」

拓人「おやすみ茉莉香」

そして自分の部屋に戻っていった。

拓人「さてと、俺も部屋に戻ってやることやって寝るかな」

梨理香「そうだね」

拓人「じゃあおやすみ、梨理香さん」

梨理香「お休み拓人」

そして俺も、自分の部屋に戻り書類を整理して眠りにつくのであった。

## 夢を現実

桜が散り緑になり始めた頃、俺は今不動産に来ている。

拓人「ん、ここもいいな。けど、こつちも」

「そうですね。今この二店舗は、通りに面しており、お店をするにはもってこいだと思います」

拓人「だよな（それに、自宅と白鳳学院、更には空港からの距離が全部同じだ）」

「いかなされますか？」

拓人「此方の建物は広いしな。それに、駐車場や住居スペースも十分な広さだ。よし！此方にする!!」

「ありがとうございます」

拓人「じゃあ、これが購入代金」

俺は鞆から、札束を出して店員に渡す。流石の店員も、その場でこんな大金を出すとは思っていなかった為、驚いていた。

「それでは、こちらがその鍵でございます」

拓人「ありがとう」

「またお越しく下さいませ」

俺は鍵を受け取り、不動産を後にした。次は、車を買いにいく。

「いらつしやいませ」

拓人「車を見たいんですけど」

「どんな車をお探しですか？」

拓人「店をやるから、荷物とかを積めるのがいいけど、数人乗れる車でもあつてほしい」

「ふむふむなるほど」

店員は、端末を操作しながら頷く。

「でしたら、ピックアップトラック等が宜しいかと」

そう言つて、俺にフォログラムを見せてくれた。

「このタイプなら、自転車等も積めて5人乗りです」

拓人「へー、いいなこれ。色は何があるんだ？」

「少々お待ちを」 p i p p i p p i

そして、今現在ある色を出す。

「今すぐにご用意出来るのが黒、シルバー、深緑、水色、赤の五種類ですね」

拓人「五種類か・・・」

どの色にするか考える。赤はないしなく。

拓人「・・・無難に黒色にするかな」

「かしこまりました」 pipipipi

再び端末を操作する店員。そして床が開き、俺が注文した車が上がってきた。

「如何でございましょう?」

拓人「意外と中は広くて、荷台もそこそこ広いな♪気に入ったよ」

「ありがとうございます。お支払方法は如何なさいますか?」

拓人「一括の現金払いだ」

値段は、予め見ていたので200万を店員に渡す。当然ここでも、驚かれるのである。

拓人「いつ頃納車出来るんだ?ナンバーや、保険なども色々かかるだろ?」

「それについてはご安心下さい。半日程で納車は可能です」

拓人「そうか。なら、この場所に運んでくれるか?」

俺は先程購入した家の地図を渡す。そして、俺は店を後にしたのであった。早速、購入した店舗に向かう。到着すると、貰った鍵でロックを解除する。中に入ると、カウンターと6席程テーブル等が置けるスペースがあった。

拓人「実物で見ても、中々広いな。キッチンも広い、料理のやりがいがあるな♪」

続いて俺は、2階の住居スペースに行く。部屋は3部屋あり、そしてリビングがある。

3LDKだ。

拓人「ここも住むにはもってこいだな。車が納車されたら、引越するか」

俺は、いつでも引越せるように、ガス、電気、水道業者に連絡して、すぐに使えるようにした。日が赤くなった夕方、車が納車された。

「それでは、こちらがキーとスペアキーです」

拓人「ご苦労様です」

俺は早速、新しく納車された車に乗り込む。

拓人「茉莉香が、仕事から帰ってくる時間だな。慣らす為に迎えに行くか」

キーを差し込み、エンジンを動かして空港に向けて走り出す。車を走らせる事一時間、駐車場に車を止めて空港に入っていく。茉莉香は仕事のため、専用の入り口から出て来るはずだ。

茉莉香「あれ？拓兄？」

拓人「お帰り茉莉香」

茉莉香「何で拓兄が？」

拓人「ちよつとな。鞆持ってやる」

俺は茉莉香から鞆を受け取り、駐車場に向かって歩きだす。当然、見知らぬ車を見て茉莉香は驚いていた。

茉莉香「どうしたの？この車」

拓人「買ったんだよ。新車でな」

茉莉香「ええっ!?!いつ!!」

拓人「今日だ。詳しい事は、帰ってから梨理香さんと一緒に説明するよ」

そして俺達は、家に帰るのであった。当然停めれる駐車場がないので、家の横に停めている。

梨理香「さて、説明してもらおうかい？」

茉莉香「そうだよ！何で急に車なんか」

拓人「実はさ、俺家を出て店をやりたいんだよ」

梨理香「店を？」

拓人「喫茶店みたいなもんだけど、昔からの夢だったし」

俺は、小さいときから自分の店を持つのが夢だった。だから、サンジや小松達等の料理技術を持ちながら、おやっさんの所で修行していたのだ。

拓人「もう既に、店は購入しているんだ。家と学院からは車で30分、空港は店から1時間の距離の場所なんだ」

梨理香「既に準備は完了済みってワケかい」

拓人「勝手に決めたのは悪いと思ってるけど・・・」

すると梨理香さんは、ワインを一口飲んだ。

梨理香「・・・やるからには、しっかりとやるんだよ?」

拓人「!?ありがとう!!」

茉莉香「けど、それじゃあ拓兄は、弁天丸から降りるの?家も引越すの?」

拓人「家は引越すが、弁天丸の仕事は続けるつもりだ。茉莉香が白鳳学院を卒業するまではな」

茉莉香「そっか・・・」

取り合えず、今すぐに弁天丸は降りないと聞いたので、少し安心する茉莉香であった。

梨理香「それで、いつ店を開くんさい?」

拓人「予定では、1週間後って考えてる。これから引越しや、業者との契約もあるしね。おやつさんとも相談したいし」

梨理香「そうかい」

茉莉香「お店が開店する日、絶対に行くからね♪」

拓人「ああ。ヨット部や弁天丸の連中も招待するつもりだからな」

梨理香「なら、明日からまた頑張りな」

茉莉香「応援するよ♪拓兄」

拓人「ありがとう。二人とも」

さてさて、これから忙しくなるな。